

2018 年度

日本とモンゴルに伝承された説話の比較対照研究  
—動物説話・仏教説話・継母説話を中心に—

千葉大学大学院

人文社会科学研究科

博士後期課程

**Tsedev Khishigjargal**

ツェデウ ヒシゲジャルガル

## 目次

|  |    |
|--|----|
| 凡例 .....   | 3  |
| 序章 .....   | 4  |
| <b>第1節 日本とモンゴルの説話研究の概要</b> .....                   | 4  |
| 0.1-1. 日本における説話研究について .....                        | 4  |
| 0.1-2. モンゴルにおける説話研究について .....                      | 8  |
| 0.1-3. 日本における説話比較研究について .....                      | 12 |
| 0.1-4. モンゴルにおける説話比較研究について .....                    | 14 |
| 0.1-5. 日本におけるモンゴル説話研究について .....                    | 15 |
| <b>第2節 日本とモンゴルの説話比較研究における問題の所在</b> .....           | 16 |
| 本論文構成.....   | 19 |
| <b>第1章 日本とモンゴルの動物説話の仏教経典から世俗説話までの展開と変容</b> .....   | 21 |
| <b>第1節 日本とモンゴルにおける動物譚説話と先行研究の概要</b> .....          | 22 |
| <b>第2節 仏教経典から世俗説話までの展開</b> .....                   | 24 |
| 1.2-1. 日本とモンゴルに共通して伝わった「鹿王」説話の比較対照研究で取り扱う説話資料..... | 24 |
| 1.2-2. 「鹿王」説話の文献成立・翻訳年代表.....                      | 28 |
| 1.2-3. 仏教文献でみる「ルル鹿本生」説話の比較考察.....                  | 30 |
| 1.2-4. 日本とモンゴルにおける「鹿王」説話の比較考察 .....                | 37 |
| 1.2-5. まとめ .....                                   | 48 |
| 1.2-6. チベットとモンゴルの「鹿王」説話の日本語訳.....                  | 49 |

|        |   |     |
|--------|---|-----|
| 第2章    | 日本とモンゴルに共通して伝わった動物説話の文献伝の展開と変容の特徴               | 57  |
| 第1節    | 「猿の生き胆」説話に関する先行研究の検討                            | 59  |
| 2.1-1. | 日本の「猿の生き胆」説話とその先行研究                             | 59  |
| 2.1-2. | モンゴルの「猿の生き胆」説話とその先行研究                           | 67  |
| 2.1-3. | 本章で取り扱う各地域の「猿の生き胆」説話の資料について                     | 70  |
| 2.1-4. | 「猿の生き胆」説話の比較対照表による考察                            | 82  |
| 2.1-5. | まとめ   | 87  |
| 2.1-6. | 「猿の生き胆」説話の日本語訳                                  | 90  |
| 第3章    | 日本とモンゴルに共通して伝わったインド起源の仏教経典所収説話について、その周囲の説話集への展開 | 102 |
| 第1節    | 日本とモンゴルにおける布施譚説話と先行研究の概要                        | 103 |
| 3.1-1. | 日本における布施譚説話の先行研究の検討                             | 103 |
| 3.1-2. | モンゴルの布施譚説話について（“Üligerün dalai sudur” を中心に）     | 105 |
| 第2節    | 日本とモンゴルの布施譚説話の比較研究                              | 110 |
| 3.2-1. | 日本とモンゴルに共通して伝承された「捨身飼虎」説話の比較対照研究で取り扱う説話資料について   | 111 |
| 3.2-2. | 「捨身飼虎」説話の文献成立・翻訳年代表                             | 114 |
| 3.2-3. | 「捨身飼虎」説話の比較対照                                   | 116 |
| 3.2-5. | 「捨身飼虎」説話資料とその日本語訳                               | 139 |
| 第4章    | 日本とモンゴルの継母説話の比較対照研究                             | 164 |
| 第1節    | 継母説話とその先行研究の概要エラー! ブックマークが定義されていません。            |     |
| 4.1-1. | 日本の継母説話とその先行研究の検討                               | 165 |

|  |                        |
|--|------------------------|
| 4.1-2. モンゴルにおける継母説話、その先行研究の検討 .....                | 167                    |
| <b>第2節 日本の「手無し娘」とモンゴルの Gargui huuhen 説話の比較対照研究</b> | <b>168</b>             |
| 4.2-1. 先行研究の検討 .....                               | 169                    |
| 4.2-2. 日本の「手無し娘」とモンゴルの Gargui huuhen 説話の比較考察       | 170                    |
| 4.2-3. まとめ .....                                   | エラー! ブックマークが定義されていません。 |
| <b>結章</b> .....                                    | <b>182</b>             |
| <b>謝辞</b> .....                                    | <b>186</b>             |
| <b>参考文献一覧</b> .....                                | <b>187</b>             |
| <b>一次資料一覧</b> .....                                | <b>193</b>             |

## 凡例

1. 本論文は4章から成り、本文中の脚注はページごとに付ける。
2. 参考文献は、章ごとに、日本語文献とモンゴル語文献とロシア語文献に分けて最後にまとめた。
3. 『大正新修大蔵経』(大修館)に所収された漢訳仏典については、次のような略号を用いる。T3 no.152,12b29-13a04  
これは『大正新修大蔵経』の第3巻、典籍番号152、巻12、12頁中29行～13頁上4行を意味する。
4. 本論文の基盤をなす作業として、私が行ったモンゴルの説話の日本語訳について  
なお、“Üligerün dalai sudur”と“Altan gerel sudur” (“Алтангэрэл судар”) の場合は、漢訳文献と日本語訳文献そしてチベット語のテキストそれぞれにおける主人公の名称と仏教専用名称と比較しながら、翻訳をした。モンゴルのテキストの場合、サンスクリット語の名称であったのを日本語訳にはそのまま使用した。
5. チベットの説話とサンスクリット語説話の日本語訳について  
日本の『国訳一切経』のテキストにおける主人公の名称と仏教専用名称と比較しながら、チベット語の名称とサンスクリット語の名称をそのまま使用した。
6. パーリ語の説話は、中村元監修・補注『Jātaka 全集 1』春秋社 1984 と中村元監修・補注『Jātaka 全集 3』春秋社 2008 の日本語訳をそのまま使用した。

## 序章

### 第1節 日本とモンゴルの説話研究の概要

#### 0.1-1. 日本における説話研究について

説話文学は、いわゆる古典文学といわれる文献群の中でも独特の位置づけがなされている。それは比較的平易な内容であり、一般庶民の間に口承によって伝承されているという性格を有しており、洋の東西を越えて親しまれる説話も多く見出せる<sup>1</sup>。

日本の説話文学研究で特に貢献を挙げ、決定的な影響を与えたのは、柳田国男、益田勝実、三谷邦明、藤井貞和、森正人、西尾光一等の文学研究者といえる。

日本における説話研究について、小峯和明氏は、「戦後、説話集のテキスト論を中心に飛躍的に展開し、近年さらにテキスト論から言説論へ大きく転換してきている」<sup>2</sup>と述べている。

日本では1962年1月に説話文学会が創立されて以来、年一回の大会において研究発表、講演、シンポジウムなどが行われ、また、各種の研究会や新著、新資料などの紹介を含む会報を随時発行している。当初の説話研究傾向としては、説話、説話文学の索引作成、書目解題、資料の翻刻などの仕事をどう進めるか、そのための基本的な共同研究を行うこと<sup>3</sup>が説話研究方針の出発点であった。日本の説話研究の概要のまとめとしては、創立30周年の1993年6月に『説話文学会 会報』の23号をまとめた『説話文学会報』と、2013年に創立50周年記念の『説話から世界をどう解き明かすのか』が出版されている。

小峯氏が『説話の言説——中世の表現と歴史叙述』（2002）において、日本説話研究史を1960年代・1970年代・1980年代・1990年代とした10年単位で区切って、それぞれの説話研究の傾向、特徴を測っているのを以下に中略して引用する。

1960年代；益田勝実『説話文学と絵巻』（1960）、国東文麿『今昔物語集成立孝考』（1962）、西尾光一『中世説話文学論』（1963）、1961年に設立された伝承文学研究会の学会誌「説話文学研究」（1968創刊）などが刊行され、研究の多くは、説

<sup>1</sup> 石波洋『説話と説話文学（古代から現代まで）』1991

<sup>2</sup> 小峯和明『説話の言説——中世の表現と歴史叙述』2002、p.87

<sup>3</sup> 説話文学会『説話から世界をどう解き明かすのか』2013、p.17

話という新しい文芸ジャンルの認知と評価、そしてその意義を物語文芸などほかの文芸ジャンルにつがえるかたちで提起された。

1970年代；中世の仏教系説話に焦点が集まる傾向がみられ、「説話文学研究」の『発心集』特集等をはじめとする研究書が増える一方、この年代を象徴するのは、講座『日本の説話』全7巻、東京美術（1973-1976）が刊行されたことで説話研究が市民権を獲得し、この講座を契機に説話の持つ広がりや奥深さが一般に認識されるようになった。

1980年代；池上洵一『今昔物語集の世界』（1983）、小峯和明『今昔物語集の成立と構造』（1985）、森正人『今昔物語集の生成』（1986）等説話研究が進展しつつ、新たな分野も次々に開拓され、黒田彰『中世説話の文学史的環境』（1987）、『中世説話の文学的環境』（1995）、三浦佑之『村落伝承論』（1987）等注釈研究と、美濃部重克『中世伝承文学の研究』（1988）、徳田和夫『御伽草子研究』、『絵語りと物語り』（1990）など絵解きや絵画、語り物や芸能、御伽草子などのかかわりから説話を相対化する研究が出た。

1990年代；説話の学問、注釈研究はより精度を増し、牧野和夫『中世の説話と学問』（1991）、三谷邦明・小峯編『中世の知と学』（1997）が続き、中世の文芸よりも学問や〈知〉の体系そのものに焦点が移った。（中略）また、田中貴子『悪女論』（1992）、『外法と愛法の中世』（1993）、山本ひろ子『変成譜』（1993）、『異神——中世日本の密教的世界』（1998）、『中世神話』（1998）等も新しい成果である。1991年から複数の随筆者を結集した論集である、説話と説話文学の会編『説話論集』や本田義憲他編『説話の講座』等が刊行された<sup>4</sup>。

説話全集といわれる江戸時代以前の諸書本文の公刊や注釈書としては、岩波書店から1957-1967年に高木市之助・西尾実・久松潜一・麻生磯次・時枝誠記監修『日本古典文学大系』全100巻）に『今昔物語集』（1～5、5冊、山田孝雄等校注）と『宇治拾遺物語』（1冊、渡辺綱也校注）が収録され、さらに1989-2005年に佐竹昭広・大曾根章介・久保田淳・中野三敏編集『新日本古典文学大系』全100巻にも『今昔物語集』（佐竹昭広校注）とその索引（計6冊）ならびに『宇治拾遺物語・古本説話集』（三木紀人等校注）が刊行された。また1994-2002年に日本の古典文学の注釈と、現代語訳と本文からなる『新編日本古典文学全集』全88巻には『今昔物語集』（馬淵和夫等翻訳、4冊）と『宇治拾遺物語』

<sup>4</sup> 小峯和明『説話の言説——中世の表現と歴史叙述』2002、pp.87-90

(小林保治、他、訳)が小学館出版によって刊行された。

説話文学関係の索引については『三宝絵』、『今昔物語集』、『打聞集』、『古本説話集』、『宇治拾遺物語』、『発心集』、『閑居友』、『十訓抄』、『唐物語』、『沙石集』などが出版されている。校本や諸本対照を施したものとしては、『三宝絵』、『中外抄』、『富家語』、『閑居友』、『撰集抄』、『唐物語』等の書名を挙げることができる。

さらに、説話文学関係の辞書類としては『説話文学辞典』東京堂出版(1969)、『日本伝記伝説大辞典』角川書店(1986)、『日本架空伝承人名事典』平凡社(1986)、(2000)が刊行されている。

説話文学の参考書資料としては『説話文学必携』東京美術(1976)があり、1943年と1964年には『日本説話文学索引』が刊行された。

近年、説話文学研究の中で古注釈研究が発展しており、この古注釈書が中世後期の文学に影響を及ぼしている<sup>5</sup>。

日本の仏教説話研究に関する概要を、西沢正史編『日本古典文学研究史大辞典』、勉誠社、1997に次のようにまとめているので以下に引用する。

仏教説話研究史に関して、昭和45～55年代を盛期と位置付けて、それ以前、それ以降(現代まで)との3期に分けて見ている。昭和45年代までの成果としては、西尾光一の『中世説話文学論』が第一に挙げられ、そのほか、『三宝絵詞』に関する岡田希雄の「源為憲伝攷」(『国語と国文学』昭和17年1月)をはじめ、橋本進吉「慶政上人伝考」(『伝記伝籍研究』岩波書店)、『大日本仏教全書』所収)などがある。この時期には、国文学研究分野では高い位置を考えられていなかったこともあって、散発的な資料紹介に終わった時期でもある。

昭和45～55年には説話研究が一気に花開いた感があり、仏教説話集研究においても同様である。その時期『日本の説話』が刊行され、『説話・物語論集』によって原田行造、藤田徳明、青山克弥、藤島秀隆等の『発心集』、『閑居友』の研究がなされ、この時期には重要な成果を得ている。また『三宝絵詞』に関する研究が進み、森正人の「三宝絵の成立と法苑珠林」(『愛知県立大学文学部論集』26、昭和52)、『本朝法華験記』においては大曾根章介の「『法華験記』の原型について」(『中央大学文学部紀要』39、昭和52)などがある。また、菊池良一『中世説話の研究』(桜楓社、昭和47)、藤本徳明『中世仏教説話論』(笠間書院、昭和52)が刊行されて

<sup>5</sup> 浅見和彦『今昔物語集宇治拾遺物語必携』1988年1月、p.82



いる。

昭和 45～55 年以降は、説話集の研究は退潮に向かい、説話研究は説話そのものの意味や文化史の中で説話を捉え直すなど、集の研究よりも説話そのものの研究が中心に行われた。また、原田行造『中世説話文学の研究』（桜楓社、昭和 57）、黒田彰『中世説話の文学史的環境』（和泉書院、昭和 62）などが刊行されている。

以上のように、日本の仏教説話研究においても、1970-1980 年代は説話集論が盛んに行われ、更に、研究傾向も説話集の研究から説話そのものの研究に移り、これらからも仏教説話研究は、説話の表現、叙述、個性等細部の視点からみた研究傾向がみられるといえる。

また、関敬吾・他編『日本昔話大成』全 12 巻 角川書店（1979-1980）年において、日本の民間説話を①動物昔話②本格昔話③笑話<sup>6</sup>の三つに分類し、世界昔話類型分類である AT 分類（Aarne,A.&Thompson,S.1961）に従って、番号を付けている。AT 分類というのは、フィンランドの民俗学者 Aarne Antte とアメリカの Thompson Stith による世界昔話類型分類目録であり、このように日本の民間説話を分類別に番号を付けたことは、世界の諸国の民間説話との比較研究をするのに重要な貢献をした。

---

<sup>6</sup> 関敬吾『日本昔話集成』第 1 巻、1979 年、p.3

## 0.1-2. モンゴルにおける説話研究について

モンゴルの説話文学は、遊牧文化を基にし、シャーマニズムと仏教の影響を受けて展開してきた。

今までモンゴルでは、説話研究と研究方法に関する研究が数多くなされてきた。すなわち、モンゴルではロシアの研究者が説話研究の端緒を開いたとされるが、基本的にはチベット仏教を通じて伝承されてきた説話についての研究であった。

モンゴルにおける説話研究の概略と説話文献を以下に紹介しよう。

モンゴルにおいては 1921 年以前、すなわち人民革命前と、1921 年から 1990 年までの社会主義時代と大きく分けてみる事ができる。

まず、「19 世紀には Sh.Agvaanhaidav 氏 (1779-1838) によって “The Siddhi Kur” (Tales of the Bewitched Vampire, the Vetalapancavimsatika (『シッディ・クール物語』)) に関して興味深い研究が報告されている」<sup>7</sup>とあるが、本研究報告をまだ手に入れられていないため、ここで具体的な研究成果の情報を述べられない。また、ロシアにおける研究も早くからなされていた。まず 1838 年にカザニ大学でモンゴル語学部が設立されたことから、ロシアにおけるモンゴル説話研究は始まったと言われている。またドイツの学者 B.Lauffer 氏 (1874-1934) の “Funf indische Fabeln aus dem mongolischen” ZDMG Vol L II, 1898 (『モンゴルにおけるインドの Pañcatantra』) をはじめ、モンゴルの説話、教訓詩、叙事詩に関するいくつかの論説を書いた。

1800 年の始めごろロシアの “Журнал новостей” (『ニュースの雑誌』)、“Сибирский вестник” (『シベリアの新聞』)、“Журнал министерства внутренних дел” (『政府と国内広報の雑誌』) などの定期刊行物にモンゴルのブリアド族の説話が掲載された。このようにモンゴル説話の主な種類を含めた民話集が出版されるきっかけとなったと言える。

さらに、ロシアの科学者の G.N.Potanin (1835-1920) が 1876-1880 年にモンゴルを旅行したときモンゴル民謡と物語、説話を集め “Очерки Северо-западной Монголий” (1881-1883) を出版した。その第 2 巻と第 4 巻にモンゴル民族の習慣と口承文芸に関する情報や研究が載っている。ここでモンゴルの 187 話をロシア語に訳しているが、説話のモンゴル語の原本が添付されていないことから、科学的な価値が低くなったといわれる。

---

<sup>7</sup> МШУА “Монголын уран зохиолын тойм II” 1977, х.589 (『モンゴル文学概念』1977)

ロシアの文学者 A.P.Benigson の “Легенды и сказки центральной Азии” 1912 においてハルハモンゴルに分布している 40 種類の説話や物語を収録したのは、当時のモンゴル人の考え方を表した有意義な書類でありながら、モンゴル説話をロシアの読者に紹介したものであった。

さらにフィンランドのモンゴル学者 G.J.Ramstedt 氏 (1873-1940) は、1900 年ごろモンゴルを巡検し、口承文芸の資料を収集し、収録した文集の中に、“Mongol ardiin baatarlag tuuliin tuhai” 1902 (『モンゴル叙事詩について』) が入っている。

モンゴル説話の研究を行った代表的な研究者としては、B.Ya.Vladimirtsov (1884-1931) と A.V.Burdukov (1883-1943) 等 (“Ойратские и калмыцкие сказки” Улан-Батор, 1966) で、特に B.Ya.Vladimirtsov 氏がパンチャタントラのモンゴルバージョンの話を編集<sup>8</sup>したことは、モンゴルの説話研究に大きく貢献した。

モンゴル説話研究者としてモンゴルの研究者 Sh.Agvaanhaidav、J.Tseveen、Ts.Damdinsuren、D.Tserensodnom、S.Luvsanvandan、D.Tsend、Ch.Bilegsaihan、ドイツの V.Haissig、B.Lauffer、フィンランドの G.J.Ramstedt、ロシアの G.I.Mihailov、L.Gerasimovich、内モンゴルの B.Bayar、T.Mansan 等がいる。

1921 年の人民革命以前に、ロシア人研究者だけでなく、モンゴル人研究者としては、ブリアド族の J.Tseveen 氏 (1881-1942) が、モンゴルの説話と民話を集録し、それらの分析と整理をし、文学的な研究をはじめて行った。J.Tseveen とロシアの文学学者 A.D.Rudnyov と共著の Руднев А.Д, Жамцарано Ц “Образцы монгольской народной литературы” Вып.1.СПб, 1908 (『モンゴル民衆文学の模範』) には、モンゴル口承伝の物語、英雄叙事詩等極めて貴重な資料が入っている。また、1909-1912 年に内モンゴルから北のブリアドまでモンゴルの広い地域を探検し、数多くの民話、英雄叙事詩、物語を集録し、整理したものは、現在ロシア科学アカデミー、モンゴル科学アカデミー、モンゴル国立図書館に保管されている<sup>9</sup>。

社会主義時代に入ると、その初期からロシア人によるモンゴル説話研究が盛んに行われている。特に貢献したのは、G.Potanin (1835-1920)、B.Ya.Vladimirtsov (1884-1931) である。

<sup>8</sup> Б.Я.Владимирцов “Работы по литературе монгольских народов” 2003, p.608

<sup>9</sup> Ж.Цэцэгмаа “Монгол оронд Жамсрангийн Цэвээний өрнүүлсэн эрдэм шинжилгээ, соён гэгээрүүлэлт нийгэм улс төрийн үйл ажиллагаа 1911-1931” 2008, p.25

B.Ya.Vladimirtsov 氏はモンゴル口承文芸、説話研究の発達に重要な役割を果たしており、1900年代にモンゴルの地方を巡検し、遊牧民に語ってもらった物語や説話を収録し、“Монгольский сборник рассказов из Рајсатантра” (Mongolskii sbornik rasskazov iz Raјsatantra) 1921 (『パンチャタントラからのモンゴルの物語』)などを編集した。

モンゴル国内では、1921年の人民革命前は“Dorjzodov”、“Altangerel” (『金光明経』)、“Taravchenbo”等をはじめ、何百何千冊もの仏教の経典が出版されていたが、モンゴル民族の説話、叙事詩などのモンゴル文字で書かれた書物が禁泊されていた時期もある。

わが国では、民族口承文学を科学的に探検し、研究資料を集め始めたのは1921年革命以降である。革命の始期にモンゴル人民共和国書籍研究所にて、まず民族口承文学と書籍、古典的価値をもつ歴史書を探検し集め、記録し始めた。1961年に科学アカデミーが創立されたとき、言語・文学研究所で音声研究室と口承文学収蔵ができたことは口承文学の研究にいい影響を与えた。当研究所は1955-1967年と1968-1974年にモンゴルの各地方で語られている物語や民話を記録し、1959年にウランバートルでの国際モンゴル研究学者学問会議の際にモンゴル言語・文学研究所が“Studia Folclorica”シリーズを出版し始め、1982年からモンゴル言語・文学研究所による“Mongol ardiin aman zohioliin chuulgan” (『モンゴル口承文学集』)を出版し始めた。

1921年革命の初期にモンゴル国のSudar bichgiin hureelen (スダル文書研究所)より、モンゴル文学研究に必要とする説話集を収集し、研究者の参考書にするために刊行され始めた。例えば1928年に“The Siddhi Kur” (『シッディ・クール物語』)と“Ardschi-Bordschi chan” (『アージ・ボージハーン物語』)を出版している。

1950年代からモンゴル説話、民話の編集、出版と学問的な研究が盛んになり、特にモンゴル説話文学研究に貢献したのが、Ts.Damdinsuren氏(1908-1986)で、1959年にCE.Damdinsürüng “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai” (『モンゴル古典文学100選』)を編集し、チベット Raјsatantraの研究をしている。また1959年には旧ソ連でЦ.Дамдинсүрэн “Рамајана в Монголии” 1979 (『モンゴルに流布したラーマヤナ』)を編集した。Ts.Damdinsuren氏の研究は、モンゴル国内におけるモンゴル説話文学研究の出発になっているといえる。

1977年モンゴル科学アカデミー出版のМШУА “Монголын уран зохиолын тойм” 1977 (『モンゴル文学概要』)において17世紀から18世紀のモンゴル説話に関する研究がなされている。特に第3章において西モンゴルのオイラド族の昔話、説話に関する研究、

第5章と第6章においてインドとチベット文学関連の説話についての研究がなされているのは、モンゴルの説話文学の研究の参考の基本になっている。

近年、D.Tserensodnom氏は説話文学研究に貢献し、特にモンゴル説話文学研究の参考書として使用されるのはД.Цэрэнсодном “Монголын уранзохиол 13-20 зуун” 1987 (『モンゴル文学 (13-20世紀初期)』) とД.Цэрэнсодном “Монголын бурхны шашны уранзохиол” 2007 (『モンゴルの仏教文学』) とД.Цэрэнсодном “Монгол ардын үлгэр домог” 2009 (『モンゴル説話集』) である。D.Tserensodnom氏は、モンゴルの説話を①神話、②動物譚、③魔法と英雄譚、④人生譚、⑤滑稽譚に分けている。

以上をまとめてみると、モンゴルにおける説話文学研究は、1900年代からロシア人とモンゴル人の研究者がモンゴルの各地域に探検し、物語、民話、叙事詩等を集録し、それらの分析と整理を中心にする研究が行われ、初めてのモンゴル説話集やモンゴル文学撰集等の口承伝の説話、民話集が出版されていた、つまりモンゴル説話、民話資料の集録、編集の段階であったといえる。その次の時代としては、1950年代から1990年代までは、Ts.Damdinsuren と、P.Khorloo、B.Rinchin、D.Tserensodnom、S.Dulam等による説話研究が説話の分析と整理、解説等をはじめ、比較研究等が行われてきた。

社会主義の解体と共に文学研究における政治的な影響と制限がなくなったことで、1990年以降は、モンゴルの説話研究では、世俗説話だけでなく、仏教説話の研究も盛んになっている。

### 0.1-3. 日本における説話比較研究について

日本では、説話比較研究について多くの研究がなされてきた。例えば、伊藤清司『昔話・伝説の系譜—東アジアの比較説話学』第一書房、1991、繁原央『日中説話の比較研究』汲古書院、2004 と、日向一雅・神鷹徳治・渡浩一「仏教説話の比較研究—日本・韓国・中国を中心に」『明治大学人文科学研究所紀要』59号、2006年3月、pp.61-152、立石展大『日中民間説話の比較研究』汲古書院、2013 等がある。以上に述べている研究は、主に日本の説話と、中国、韓国あるいは朝鮮半島の説話との比較研究になっている。

立石展大氏の『日中民間説話の比較研究』においては、日本と中国に伝承されているいくつかの民間説話の比較対照をしている中、「猿の生き胆」説話の比較研究がなされている。

立石氏は、日本では「海月骨なし」と称される「猿の生き胆」の口承伝の145話と中国の少数民族の話と比較したうえで、口承伝の「猿の生き胆」の伝承が文献による伝承と関係なく、新しい伝承がみえてくることを確認している。中国の少数民族の中で伝えられてきた「猿の生き胆」の27話を取り上げ、「中国の沿海部で語られていた話が日本へ伝播したとみて、日本においても肝を食べる習俗と相まってごく自然に受け入れられた」と論じている。立石氏の比較研究の対象としてモンゴルの話も扱われているが、地域と地理的な範囲と、話の構造からみた比較考察を通して、日本に伝わったこの話の口承伝の特徴を明らかにしている。そこで、日本における肝を食べる習俗が、この話を受け入れる理由になっているとみているが、そもそもインドで「心臓」を狙われているという話が、中国に伝わったときに、「生き肝」になっている理由について触れていない。

私は本研究で、日本とモンゴルに文献によって伝わった「猿の生き胆」説話の比較考察をすることで、両国の民族文化と習慣、地域的な特徴による説話の変容、伝承の展開について明らかにしていきたい。

また、廣田収氏は『説話比較の方法論』において、「継子虐め」昔話の日本・韓国・中国に共有する話型を取り上げ、日韓比較研究と、韓中比較研究をすることで比較文学研究の方法について定義している。比較文学研究における研究方法論により、昔話の本文の構成的事項と、表現の次元の差異を見出し、文学の伝播について「様々な国の物語や説話、小説や芸能等の基層に、それぞれの国に共有されている話型が存在する。よく似た伝承が全く違う地域に残るのは、物語、説話、昔話そのものが伝播したものではなくて、結果的には話型が伝播され、共有されたからである」と論じている。

最近の説話の比較研究方法としては、コロンビア大学の教授ハルオ・シラネ氏は、日本古典文学を西ヨーロッパ文学の類似テキストと比較し、重要な共通点や相違点を「世界文学」という観点から「深層比較 (Deep comparison)」のアプローチで検討している。(2013年の日本説話文学会 50 周年記念大会において発表。) この深層比較アプローチについてシラネ氏は、「深層比較」とは、「歴史的には直接関連しないが、テキストそのものや文化の成立・発展のプロセスなどの構造的なレベルで多くの共通点を持つ文学現象・文化現象を比較するアプローチ」<sup>10</sup>と提示して、この観点から中世の説話や説話集は、11 世紀から 16 世紀にかけて、中世西ヨーロッパ文化圏の宗教・民話ジャンル (聖人伝・物語など) を含む、より広範囲の世界文学現象の一部として考えることができる」と述べている。ここで、「模範的な生涯」を描いた『日本往生極楽記』(986 年頃成立) は、中世ヨーロッパの聖人伝と類似しているとして、この日本の往生伝と聖人伝との比較考察を通して、「両者の決定的な相違点は、聖人伝の主人公はまだ決定していないキリスト教のために他教徒と戦って、自らの命を挙げたことは聖人性のしるしとなっているが、日本の往生伝の主人公は、ある特定の仏や宗派のために死ぬことはなく、仏教の熱心な信仰と勤行によって聖人性を得られる良い報いについて語られている。また、徳の高い僧侶の話を中心に描いている往生伝に比べて、『黄金伝説』はより多様な人々の話を網羅し、あらゆる人々の生涯を描いている点は、日本の『日本霊異記』、『今昔物語集』などの仏教説話と同様の、より幅広い人々に通じる魅力を持っている」と述べている。一方、「主人公は死後、聖人化されることによって生が約束され、現世にさえも奇蹟をもたらす聖人は効果的に生き続けることができる」点を両者の共通点としている<sup>11</sup>。

この深層比較 (Deep comparison) の方法は、歴史的な関連性を超えて、両説話における文学現象・文化現象を比較するものであり、このようなアプローチは、私の研究で扱っている日本とモンゴルの世俗説話の比較研究に有益なアプローチではないかと思われる。

---

<sup>10</sup> 説話文学会『説話から世界をどう解き明かすのか』2013、p.25

<sup>11</sup> 説話文学会『説話から世界をどう解き明かすのか』2013、p.33

#### 0.1-4. モンゴルにおける説話比較研究について

モンゴルでは、説話の比較研究といえは、モンゴルとチベットの説話比較研究とインド文献との比較研究がなされている。その代表的な研究として、Ts.Damdinsuren 氏の“Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai” 1959 があり、これはモンゴルとチベットの説話の比較研究である。また本書には、モンゴルの説話をインドの Pañcatantra とインド叙事 Ramayana との比較研究をしている。チベット・モンゴル・インドの“The Siddhi Kur” (Tales of the Bewitched Vampire, the Vetalapancavimsatika (『シッディ・クール物語』)) 説話の比較研究を Ts.Damdinsuren 氏が行ったのが、МШУА “Монголын уран зохиолын тойм”, Улаанбаатар, 1977, pp.522-559 において “Төвд, Монгол, Энэтхэг Шидэт хүүрийн үлгэрүүд” という題目で編集されている。

上述のように、チベットとインドの説話をモンゴルの説話と比較する研究はモンゴルになされてきたが、同じアジアの国である日本とモンゴルの説話の比較研究は未だになされていない。



#### 0.1-5. 日本におけるモンゴル説話研究について

日本におけるモンゴル説話研究といえば、仏教経典に関する文献研究と英雄叙事詩に関する研究が主になされているが、以下のような説話集に関する研究がある。

田中克彦「Subhasitaratnanidhi のモンゴル訳について：モンゴル文献史におけるその位置」（1961）<sup>12</sup>と、金岡秀郎「モンゴル語訳『賢愚経』について——その成立に関する基礎的研究」1987、満達「モンゴル版 Pañcatantra について」2004 等がある。

モンゴルの“Üligerün dalai sudur”に関する研究である、金岡秀郎氏の「モンゴル語訳『賢愚経』について——その成立に関する基礎的研究」1987において、金岡氏がモンゴル大蔵経 Kanjur の『賢愚経』とレニングラード写本の『賢愚経』をとりあげ、両者の比較検証とコロフォン試訳の考察から、特にモンゴル語訳『賢愚経』の成立について、「リグデン・ハーンのカンジョール編纂以前に、既にシレート・ゲーシ等によって主な経典が訳了していたのみならず、カンジョールという経典集成として完成していた可能性が高い」<sup>13</sup>と述べている。

---

<sup>12</sup> 田中克彦『一橋論叢』1961、pp.87-96

<sup>13</sup> 金岡秀郎『モンゴル研究』1987、p.62

## 第2節 日本とモンゴルの説話比較研究における問題の所在

本論文は、これらの説話の中で、特にインド起源で、仏教の伝承とともに日本とモンゴルに伝承された説話について比較対照研究するものである。本研究では、日本とモンゴルにおける仏教の布施譚と動物譚の説話、また世俗説話として伝承されている継母説話、動物説話を取扱い、これらを比較対照することで、それぞれの国の文化、民族習慣、あるいは人びとの世界観等の特徴を明らかにしたい。

ところですでに冒頭に示したように説話文学の特質として、口承による伝承が挙げられるが、すべての説話資料が口承によって伝承されたとは限らない。少なくとも本論文で扱う文献は、インドの仏教経典や中国・チベット・日本などの文献資料であり、特に仏典は訳者名が明らかである場合も多く、口承文献であるとはいえない。

いわゆる仏教説話の場合、まず仏典の訳経という作業によって、アジア各地域に文献としてまず伝わり、これがコアとなって、僧侶などの説教などを通じて民衆に広められ、語り継がれ、さまざまなバリエーションが生じていったということが予想されるであろう。

本研究ではこうした口承という視点からの研究には立ち入らず、アジアに残された文献資料（コアの文献）に基づいて考察するものである。

というのも、後述する「猿の生き胆」説話のように、インド・中国・日本に文献として残される一方、日本各地にそのさまざまな変容を遂げた無数の伝承がフィールドワークを通じて『日本説話民話体系』に収録されており、これら日本の口承資料を検討することは十分可能である。しかしながらインド・中国・チベット・モンゴルにおいては、こうした網羅的な口承資料の研究は見出されず、口承によって伝承された説話資料をアジア各地に亘って調査することは不可能である。

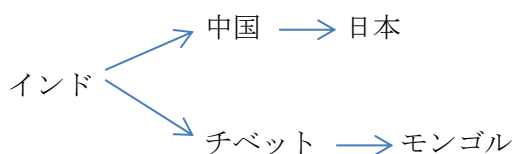
しかし訳経によって成立した文献によるコアの伝承について比較についても実は十分であるとはいえない。たとえば日本ではサンスクリット・パーリ語の *Jātaka* 聖典をはじめとする仏典の説話研究とともに漢訳の経典、さらに日本の『今昔物語集』などの説話集が基本的な素材となって研究されてきたが、モンゴル・チベット系の説話との比較研究はほとんどなされていなかったのである。

しかし近年、山口周子氏は『<仏の物語>の伝承と変容——草原の国と日出ずる国へ』を著し、その中で、ニコラス・ポッペが著した『仏の12の行い』（副題はモンゴル語版『ラリタヴィスタラ』）という本を取り上げて、仏伝が解釈翻訳を経てモンゴルにまで伝わった

一つの事例として、仏教經典翻訳史におけるモンゴル仏教テキストの位置づけについて論じている。山口氏は、この研究の前半では、インドからチベットを経てモンゴルに伝わった物語である「仏の12の行い」を取り上げて仏教經典翻訳史におけるモンゴル仏教テキストの位置づけについて考察しており、後半では、日本の『今昔物語集』の「天竺部」に見られる「僧迦羅五百商人、共至羅刹国語第一」と『宇治拾遺物語』の「僧迦多、行羅刹国事」を事例として取り上げ、原典のインド仏教説話との比較をしている。この研究では、日本とモンゴルの説話を扱ってはいるものの、同じ説話についてモンゴルと日本の文献を比較しているわけではない。したがって、日本とモンゴルに共通して伝わっている同じモチーフの両説話の比較研究とはいえない。

これまで日本とモンゴルの説話比較について試みた研究は日本でも、モンゴルでもほとんどなされていないのが現状である。日本では、これまでインドから中国、中国から日本といった経路の流伝の比較研究があったが、基本的には『今昔物語集』などの日本の説話文学の出典研究に終始していたといえるであろう。モンゴルにおいては、Ts.Damdinsuren氏と D.Tserensodnom氏がインドからチベット、チベットからモンゴルに流伝した説話について比較研究を行っているが、漢文資料や日本の説話文献に言及することはなかったのである。

本論文では、下図のように二つの流伝形態について、それぞれ文献を考証し比較対照するという新たな視点によって、アジアに広く流布する仏教起源の説話を研究するものである。



すなわちインド起源の仏教説話がそれぞれ中国とチベットを経由して日本とモンゴルに伝わるまで、インドのオリジナルの説話がどのように変容を遂げているか、どの部分が共有されているのかを明らかにするものであり、これによってアジアの地域、文化、言語の壁を越えて伝承した両国の説話の位置づけを解明することができる。

なお本論文で取り扱う説話には、仏教的色彩が強い内容のものと、仏教的、宗教的な要素が希薄なものがある。たとえば捨身飼虎のように“The Jātaka-mālā”や『金光明経』といった經典に所収されたり、日本の『三宝絵』に所収される説話は、自らの身体を犠牲にする（捨身）というモチーフはあくまで無限の布施を讃嘆することが強調されているの

であり、仏教的実践を強調するために作成された説話といえ、いわゆる庶民に口承され親しまれる説話とは異なるものといえよう。これに対し、猿の生き胆などは、本来は仏教から成立したものの、そのストーリーは仏教の枠組みを超えた普遍的な内容であり、これは広く人々によって語られ、口承されてきたのである。

ここで世俗説話として日本の『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』やモンゴルの“Sain nomlolt Erdeniin san Subashidiin tailbar Chandmaniin tulhuur”<sup>14</sup>等の説話集を対象資料として本研究で取り扱っている。

世俗説話の場合は、仏教思想、その展開と共に仏教経典を架け橋にしてインドから伝承されてきた仏教説話と違って、遠い昔の原始時代からの人間の世界観、自然と社会への志向は、口承伝の民話、昔話として伝承され、さらに書承伝の説話集まで受け継がれてきているものは、世俗説話だと考えられる。この世俗説話の中では、歴史的な文学的な直接関係がないのに、同じモチーフで語られているものが数多くみられる。その中から、本研究では日本とモンゴルで共通のモチーフで語られてきた「猿の生き胆」説話と「継母」説話の比較考察をする。ここで、説話の比較を通して両説話の文学性と変容の特徴、説話への民族文化的、社会的、仏教的な影響について明らかにしていく。

また、説話の変容について考えるとき、それぞれの国に到着してから変容しているか、それとも伝承の経路の地域（中国あるいはチベット）での変容をそのまま受け入れているかは、日本とモンゴルの説話の比較背景について考察を通して確認したい。

---

<sup>14</sup> Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав “Сажа Бандид Гунгаажалцаны зохиол “Erdeniin san Subhashid”, 1990

## 本論文構成

本論文は、序章と第1章、第2章、第3章、第4章そして結章からなっている。また、研究で扱っているモンゴルとチベット説話の日本語訳、参考文献一覧と一次資料一覧が添付されている。

序章においては、日本とモンゴルにおける説話文学の概要と、両国における説話研究と比較説研究に関する先行研究について述べ、先行研究の結果を踏まえて、日本とモンゴルの説話の比較研究がなされていないことを、これからの両国の説話研究で明らかにする問題の所在点として挙げた。

第1章では、日本とモンゴルの動物説話の仏教経典から世俗説話までの展開と変容についての比較考察をしている。ここで、日本の「五色の鹿の事」とモンゴルの“Sain nomlolt Erdeniin san Subhashidiin tailbar Chandmaniin tulhuur”, 182 dugaar badgiin tailbar 説話を中心に、それぞれの話の原典とされるインドの“The Jātaka”と“The Jātaka-mālā”そして漢訳仏典とチベットの“Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo”、“legs par bshad pa rin po che'I gter”に収録されている「鹿王」あるいは「ルル鹿本生」説話を併せて、比較対照表による考察をしている。

第2章では、日本とモンゴルに共通のモチーフで伝承されている「猿の生き肝」説話の比較対照考察をしている。

古代インドの Jātaka 本生話と Pañcatantra 寓話を原典にしてアジア、ヨーロッパまで文献で広く伝承されているこの説話は、日本では文献の「猿の生き肝」説話、口承でくらげ・亀等動物の体形の由来を説く「くらげ骨なし」の話で広く流布している。

文献の「猿の生き肝」説話をモンゴルの文献伝の同じモチーフの説話と比較考察をすることで、それぞれの共通点と相違点からみえる両者の伝承の展開、変容の特徴、そして両国の文献上における本説話の位置付けについて確認する。

第3章では、日本とモンゴルで共通して伝わっている仏教の本生話の中で語られる布施譚の説話である「捨身飼虎」説話を取り上げ、それらの比較考察をすることで、日本とモンゴルに伝わったこの話の流伝の特徴と展開、変容そして両国の説話集への影響について確認している。

第4章では、日本とモンゴルに共通して語られてきた「手無し娘」物語を比較の対象として取り扱っている。流伝の直接関係が全くないのに、日本とモンゴルで同じモチーフで

語られてきたこの継母譚説話の比較対照をすることで、両国における「継母」説話の文学性と、民族文化と地域的な特徴、社会的、宗教的な影響について確認する。

## 第1章 日本とモンゴルの動物説話の仏教経典から世俗説話までの展開と変容 —日本とモンゴルに共通して伝わった「鹿王」説話を中心に—

古代から動物は人間にきわめて近い存在であり、世界中の民話、神話、昔話、叙事詩には数多くの動物が登場してきた。

篠田知和基氏が『世界動物神話』2008において「動物は、家畜として人間の文化に取り込まれる前に神として、またトリックスターとして人間に関わってきた。」<sup>15</sup>と指摘しているように、古来人々は、動物を日々の生活の中で狩猟する対象として語る一方、人々を守る存在としたり、神のお使いとしたり、自分たちの部族の祖先（トーテム）として物語に語ってきた。

---

<sup>15</sup> 篠田知和基『世界動物神話』2008、p.9

## 第1節 日本とモンゴルにおける動物譚説話と先行研究の概要

まず、日本においては動物譚説話研究がすでに数多くなされている。例えば『国文学 解釈と教材の研究——古典文学動物誌——』（1956）<sup>16</sup>において、日本の古典文学に登場する実在の動物や想像上の動物のうち、代表的な125種を取り上げ、実在の動物を「獣・介・鳥・虫・魚」といった分類に分け、さらに想像の動物として「龍・獅子・鳳凰（ほうおう）加陵頻伽（かりようびんが）金翅鳥（こんじちょう）・寒苦鳥（かんくちょう）・善知鳥（うとう）・猫股・鶴（ぬえ）・人魚・河童・天狗・鬼」を取り上げて紹介解説されている。

モンゴル文学者の D.Tserensodnom 氏が Д.Цэрэнсодном “Монгол ардын домог үлгэр”, Улаанбаатар 1989（『モンゴル民話集』）において、次のように述べている。

近代、単なる物語や説話だけでなく、それぞれの解説、そして説話集が多く出版されている。モンゴルの説話は次のようにいくつかの部分に分けられるようになっている。例えば P.Khorloo 氏はモンゴル説話を、解説・動物譚・魔法譚・生活譚と分析したことがある。ここから、主にモンゴル説話を動物譚・魔法と英雄譚・生活譚といった三つに分析することができる。

D.Tserensodnom 氏のこの分析を参照して、モンゴルの動物説話について以下に紹介する。

モンゴル説話にも、動物についてのテーマが登場することが多い。動物についての説話の起源は非常に古く、人間と自然・動物とがかかわるようになった原始時代から始まったと見られる。

B.Shirendev 氏は、“БНМАУ-ын түүх” 1966（『モンゴル人民共和国史』）において次のように述べている。

中央アジアの遊牧族、その中のモンゴル族は狩りと遊牧を中心にして生活してきた。

さらに、モンゴル族は「森の族」と「草原の族」とした二つの部族に分けられた。

この『モンゴル人民国史』に指摘されるように、モンゴル説話、特に動物譚話は、狩を中心とする日常生活の中ではじめてできて、さらに家畜を飼育するようになった遊牧生活の中で色々なバリエーションで展開してきたといえる。

モンゴルの動物話には、動物の性格と性質が詳しく表現されており、その動物を通して人間の性格と物事の起源、民族の起源話を語られることが多い。

一番多く語られるのは、狼やカラスや狐、ライオンなどであり、これらの動物は欲張り

<sup>16</sup>『国文学 解釈と教材の研究——古典文学動物誌——』第39巻第12号、1956年10月



で、ずる賢く、そして意地悪な性格といった、マイナスの意味の動物として登場するのが多い。しかし、狼は優しくて、よい動物になっている例もある。例えば東ハルハで語る「狼の子」という物語には、草原に捨てられた孤児の赤ちゃんが狼の乳を飲んで、子狼と兄弟になって育った話がある。これと同じように、『元朝秘史』に語られる **Бөртэ чоно**（「ボルテ・チョノ」）と、ブリヤート族の説話の **Шоно баатар**（「ショノ・バートル」）など、古代モンゴル種族のトーテムの考え方も残されている。

また、熊や魚、**тарваган**（タルバガン）などの動物は元来人間であったという話もモンゴルの説話にまれに見られ、これは当種族のトーテム崇拝といえる。例えば、ウリアンハイ族とトルグード族の説話には「昔、**мангас**（マンガス）が人間を全て食べて、残ったのはあるおじいさんとおばあさんだった。**Мангас**（マンガス）はその二人を食べに行ったら、二人は逃げて、おじいさんは森に行って熊になった。おばあさんは川に入って魚になった。そのときから熊が人間のように両足に立って歩けるようになった」<sup>17</sup>という。

モンゴル説話には、昔から遊牧民の日常生活に欠かせない大事な家畜である馬・ラクダ・牛・羊・山羊が登場するが、その中でも、馬が主に登場することが多い。またツバメやすずめ、ウサギ、鹿などの動物は賢くて、よい意味で登場し、狐、狼、はりねずみ、カラス、うさぎ、鹿、熊、すずめなどモンゴルに生息している動物だけでなく、モンゴルで生息していないが、仏教とインドの説話の影響を受けてライオン、象、サルなどの動物も登場する。これは、いわゆる **Melhi bich hoyoriin nuhurlusun tuhai ulger** と言われる「猿の生き胆」の話についてもいえる。

上述したように、モンゴル民族の話にも実在の動物だけでなく、想像上の生き物の登場も多い。日本の話で語られる龍（**luu**）・獅子（**arслан**）・加陵頻伽（**Galbinga**）金翅鳥（**garuda, garid**）・鬼等の動物はモンゴルの話にも登場するが、この点について比較研究する必要があると思われる。

---

<sup>17</sup> Д.Цэрэнсодном “Монгол ардын домог үлгэр” 1989

## 第2節 仏教経典から世俗説話までの展開

—日本の「五色の鹿の事」とモンゴルの“Sain nomlolt Erdeniin san Subhashidiin tailbar Chandmaniin tulhuur”, 182 dugaar badgiin tailbar 説話の比較対照

1.2-1. 日本とモンゴルに共通して伝わった「鹿王」説話の比較対照研究で取り扱う説話資料

まず、本節で取り扱っている「鹿王」説話資料を本研究で扱う略称を含めて（表 1-2a）でまとめてみる。

表（1-2a）「鹿王」説話資料一覧

| 国    | 資料  |
|------|---|
| 日本   | 「鹿王」『三宝絵』 <sup>18</sup>   |
|      | 「身の色九色の鹿、住山で河道助人語」『今昔物語集』 <sup>19</sup>   |
|      | 「五色鹿事」『宇治拾遺物語』 <sup>20</sup>  |
| モンゴル | Gūnda görögesün bey-e-ben öggügsen-ü jüyil, Mongolian Kanjur Vol.90, “Üligerün dalai sudur”                   |
|      | Arātu gūnda beyēn ögligü ögöqsen bölöq, Oirat “Üligiriin dalai” <sup>21</sup>                                 |
|      | 182 dugaar bulgiin tailbar, “Sain nomlolt Erdeniin san Subashidiin tailbar Chandmaniin tulhuur” <sup>22</sup> |
| インド  | Rurujataka, “The Jātaka” <sup>23</sup>  |
|      | Rurujataka, “The Jātaka-mālā” <sup>24</sup>   |

<sup>18</sup> 馬淵和夫・小泉弘・今野達校注『三宝絵』新日本古典文学大系 31、岩波書店 1997、上巻 9

<sup>19</sup> 今野達校注『今昔物語集』新日本古典文学大系 33、岩波書店 1999、巻第 5 の第 18

<sup>20</sup> 三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注『宇治拾遺物語 古本説話集』新日本古典文学大系 42、岩波書店 1990、上 92

<sup>21</sup> Redigit B.Rincen “Oirat version of Damamūkonāmasūtra” (Corpus scriptorum mongolorum : Instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum publicae Populi Mongolici, Tomus. X VI, ШУАХ 1970, bölöq 4, 58b-61b

<sup>22</sup> Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав “Сажа Бандид Гунгаажалцаны зохиол “Erdeniin san Subhashid”, Улаанбаатар, 1990, p.156-157

<sup>23</sup> ed by V.Fausboll “The Jātaka” Vol IV, London 1963, pp.255-262

<sup>24</sup> ed by H.Kern “The Jātaka-mālā” Harvard Oriental Series, Masachusetts 1943, pp.167-175

|      |  |
|------|--|
| 中国   | 『六度集経』 (T3 no.152,12b29-13a04)   |
|      | 『六度集経』 (T3 no.152,32c11-33b23)   |
|      | 『賢愚経』 (T4 no.202,366a17-367a18)  |
|      | 『九色鹿経』 (T3 no.181,452b27-453c29)   |
|      | 『菩薩本縁経』 (T3 no.153,66c02-68b25)  |
|      | 『法苑珠林』 (T53 no.2122,666b23-667a01)   |
|      | 『大智度論』 (T25 no.1509,178b06-0178c20)  |
| チベット | Gcan gzan kun tas lus sibyan pa byas pa'i se'u, "Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo" |
|      | "legs par bshad pa rin po che'i gter"  |

ここで取り扱う中国の文献資料は、全て経典ではない。『大智度論』は中村史氏が『三宝絵本生譚の原型と展開』において述べているように、龍樹作、鳩摩羅什訳の論書であり、『魔訶般若波羅蜜経』の注釈書<sup>25</sup>とされる。しかし本書は鳩摩羅什が経典を注釈するに当たり、さまざまな経典や説話が豊富に引用され、しかも5世紀に翻訳された資料であり、その資料的価値は経典に匹敵するものである。また『法苑珠林』も7世紀に成立し、さまざまな経典から膨大な引用がなされており、失われた漢訳経典を探ることもできるので、その資料的価値は高い。

また『賢愚経』の場合も、三谷氏が指摘している通り、「種々の因縁譚の集成」<sup>26</sup>とされる。

以下に、チベットとモンゴルの「鹿王」説話文献資料について以下に簡単に紹介する。

・モンゴル語資料の位置づけ

ここで、取り扱っているモンゴル語資料について、チベット経典を正確に翻訳しているため、モンゴルの文学における資料的価値を過小評価する意見もあるが、チベット仏典がモンゴル語に翻訳されたことで、モンゴル国民の中に広く仏教文化の影響を及ぼしたことは大きな意義があると考えられる。モンゴルでは、説話文献資料は、チベット仏典からの翻訳資料が主であるが、『金光明経』などの経典は各家の仏壇に捧められ、次世代に受け継がれており、また『賢愚経』の説話は読み物としてモンゴル人に親しまれてきた。モンゴ

<sup>25</sup> 中村史『三宝絵本生譚の原型と展開』汲古書院、2008、p.32

<sup>26</sup> 三谷真澄、「Mdzangs blun (『賢愚経』) 関する一考察」印度学仏教学研究第45巻第2号、1997年2月

ル人にとって仏教説話は身近な存在であるといえ、仏教説話によるモンゴル民族文化の変容も想定されるであろうし、仏教説話もモンゴル人の受容の過程で変容していたことが予想されるであろう。

・モンゴル語の Subashid について

13 世紀ごろチベットの学者、政治家 Sakya Pandita が作成した『サキヤ格言』の原典は、457 句の韻文で作成されているが、モンゴルの文学者 Ts.Damdinsuren 氏が、現在モンゴルに伝わっている Subashid について次のように述べている<sup>27</sup>。

Sakya Pandita の弟子の Renchin-bal が 1251 頃 457 句の韻文の解説として 457 の散文の物語を作り、当時 Sakya Pandita に見せていたという。

このモンゴル語 Subashid について Ts.Damdinsuren 氏が、

- 1) 13 世紀頃のチベットの詩人 Sakya Pandita が作成した Subashid はモンゴル語に数回翻訳され、国民の中で広く普及している。
- 2) Subashid は仏教文学ではなく、国民文学に当たる詩であり、民俗格言、諺の集成である。
- 3) Subashid の詩文に対する解説部分は説話集である。

と定義している<sup>28</sup>。

また、Subashid にはオイラト本が存在していた可能性がある。このことについて田中克彦氏<sup>29</sup>による興味深い指摘がある。

1880 年頃、一人のスコットランド人がモンゴル語 Subashid のおそらくは「注釈篇」を読んで、特に注意を引かれたことは記しておく価値がある。ヨーロッパでは、この作品はまず、チベット語版から知られて行った。ハンガリーの Choma deKörös は、1834 年の世界再発のヨーロッパ語によるチベット文法書の附録に 4 編を収めた。つづいて、Ph.Ed.Foucaux は 1858 年、この作品をフランス語に訳した。カルマク人もスバシドをもっているとは、リゲティが指摘しているところであるが、1867 年、Голстунский は、(たぶん) ペテログラード大学所蔵テキストのチベット文字とカルマク語彙から判断して、この写本がオイラト起源であること、Sakya

<sup>27</sup> Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав “Сажа Бандид Гунгаажалцаны зохиол “Erdeniin san Subhashid”, Улаанбаатар, 1990, p.16

<sup>28</sup> 同上、21p

<sup>29</sup> 田中克彦 1961

Pandita 以前にオイラトの中に広まっていたものをボルガ・カルマクが持ってきたことなどを肯定しているといわれる<sup>30</sup>。

・チベット語版の “Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo” (ザン・ルン) について

『賢愚経』のチベット語訳に当たる “Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo” (以降 Mdzangs blun と略称) の研究においては、三谷真澄氏の業績研究<sup>31</sup>を挙げて見るべきであり、三谷氏はチベット語訳經典のチベット語の問題と第 1 章の内容の特質について論じている。三谷氏は本經典のチベット語の問題について次のように指摘している。

法成の底本とした漢訳は、当時写本として柳父していた、増広を経ていない古層のそれではないだろうか。本経は種々の因縁譚の集成という性格上、その最初の成立以来、歴史的に増広、抄出、調卷を繰り返しながら、そのある時期での断面が漢訳として成立し、(それはさらに改編されていく可能性をもっていた)、またある時期に完成された漢訳 (おそらく現存三本の原初形態) から訳されたのが、『ザン・ルン』であると考えられる。

---

<sup>30</sup> Голтунский, К. Ф. “Критические замечания из изданий проф. Юльга: Die Märchen des Siddhik ū r.” приложение к 21 т. Записки академии наук, СПб 1867. (本書は後術ウラジミルツォフの著者から引いた) 【田中克彦 1961】

<sup>31</sup> 三谷真澄、「Mdzangs blun (『賢愚経』) 関する一考察」印度学仏教学研究第 45 卷第 2 号、1997 年 2 月

## 1.2-2. 「鹿王」説話の文献成立・翻訳年代表

本節で取り扱う「鹿王」説話が収録されている文献の成立年代と翻訳年代を先行研究の成果を基にして以下の（表 1-2b）で整理してみる。ここで各説話の原拠と伝承の関係を探る必要に応じて本研究で取り扱っている説話の全体的な一覧を作成しているが、説話の文献資料を地域別に、文学資料としての成立年代による順番で整理している。

表（1-2b）「鹿王」説話が収録されている文献の成立年代と翻訳年代表

| 文献資料                                  | 国    | 成立・翻訳年                          | 著訳者                  |
|---------------------------------------|------|---------------------------------|----------------------|
| “The Jātaka”                          | インド  | 1 世紀ごろ <sup>32</sup>            |                      |
| “The Jātaka-mālā”                     | インド  | 4 世紀後半～<br>6 世紀前半 <sup>33</sup> | Āryaśūra             |
| 『六度集経』                                | 中国   | 251-280 年 <sup>34</sup>         | 康僧絵訳                 |
| 『九色鹿経』                                | 中国   | 255 年頃 <sup>35</sup>            | 支謙訳                  |
| 『大智度論』                                | 中国   | 404-407 年 <sup>36</sup>         | 鳩摩羅什訳                |
| 『菩薩本縁経』                               | 中国   | 5 世紀頃 <sup>37</sup>             | 僧伽斯那訳                |
| 『賢愚経』                                 | 中国   | 445 年 <sup>38</sup>             | 釋曇覺等                 |
| 『法苑珠林』                                | 中国   | 688 年 <sup>39</sup>             | 道世訳                  |
| “legs par bshad pa rin po che'I gter” | チベット | 13 世紀 <sup>40</sup>             | Sakya Pandita        |
| “Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo”      | チベット | 859 年頃 <sup>41</sup>            | 'gos chos grub（呉法成）訳 |

<sup>32</sup> 岩野眞雄 1935、p.IV

<sup>33</sup> 干瀉龍祥・高原信一訳著『Jātaka・マーラー 本生談の花鬘』1990

ここに翻訳した『Jātaka・マーラー』の原典の作者アールヤシューラの生存時代については、ただインドのサンスクリット文学の最盛期、即ちグプタ朝時代（4 世紀後半～5 世紀～6 世紀前半）の人、という以上にはわからない。〔干瀉龍祥 1990、p.iii.〕

<sup>34</sup> 岩野眞雄 1932、p.116

<sup>35</sup> 鎌田茂雄他 1998、p.49

<sup>36</sup> 岩野眞雄 1935、p.III

<sup>37</sup> 鎌田茂雄他 1998、p.40

<sup>38</sup> 岩野眞雄 1997、p.62

<sup>39</sup> ブリタニカ国際大百科事典 2014

<sup>40</sup> Ц.Дамдинсүрэн,Ж.Дүгэржав 1990, p.5

<sup>41</sup> 三谷真澄「Mdzangs blun（『賢愚経』）関する一考察」1997

|   |      |                         |                                |
|---|------|-------------------------|--------------------------------|
| 『三宝絵』   | 日本   | 984年 <sup>42</sup>      | 源為憲著                           |
| 『今昔物語集』   | 日本   | 1120年代 <sup>43</sup>    | 編者不詳                           |
| 『宇治拾遺物語』  | 日本」  | 1221年代 <sup>44</sup>    | 編者不詳                           |
| “Üligiriin dalai” (Oirat version of Damamūko nāmasūtra) | モンゴル | 1655 <sup>45</sup>      | ZayaBandida<br>Namkhajamts 訳   |
| Mongolian Kanjur Vol.90, “Üligerün dalai sudur”         | モンゴル | 1714 <sup>46</sup>      | Shireet Guishi<br>Tsorj 訳      |
| “Erdeniin san Subhashid”                                | モンゴル | 1778-1779 <sup>47</sup> | Luvsantsultem 訳<br>(1740-1810) |

ここで、各文献を地域における文献と成立年代の順で並べ、文献資料の原典からの歴史的な伝承、ルートを確認することを目的とした。

<sup>42</sup> 今野達、小原弘校注『三宝絵』1997、p.490

<sup>43</sup> 今野達校注『今昔物語集』1、新日本古典文学大系 33、p.520

<sup>44</sup> 小内一明等校注、『古本説話集・宇治拾遺物語』新日本古典文学大系 42、p.551

<sup>45</sup> Oirat version of Damamūkonāmasūtra 1970, p. ix

<sup>46</sup> Д.Бүрнээ, Д.Энхтөр “Үлгэрийн далай” 2013

<sup>47</sup> Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав 1990, p.17

### 1.2-3. 仏教文献でみる「ルル鹿本生」説話の比較考察

さて、本研究で取り扱っている「ルル鹿本生」説話がどのような仏教経典や仏教文献に所収されているか、「ルル鹿本生」説話資料のリストを改めて作成してみよう。

- インドの説話資料

① 「ルル前世物語」(Jātaka、第 482 話)、中村元監修・補註『Jātaka 全集 6』春秋社、1989 年、(パーリ語の原典は、Rurujataka, “The Jātaka”, (ed by V.Fausboll) Vol IV, London 1963, pp.255-262)

② Rurujataka, “The Jātaka-mālā” (ed by H.Kern Havard Oriental Series) Masasachusetts 1943, pp.167-175

- 中国の説話資料

① 「鹿王本生」『六度集経』(T3 no.152,12b29-13a04)

② 「修凡鹿王本生」『六度集経』(T3 no.152,32c11-33b23)

③ 「鋸陀身施品」『賢愚経』(T4 no.202,366a17-367a18)

④ 『九色鹿経』(T3 no.181,452b27-453c29)

⑤ 「鹿品」『菩薩本縁経』(T3 no.153,66c02-68b25)

⑥ 『大智度論』(T25 no.1509,178b06-0178c20)

⑦ 『法苑珠林』(T53 no.2122,666b23-667a01)

以上中国の①と②、⑥のタイトルは『国訳一切経』の記述に従って便宜的に使用した。なお④の『九色鹿経』は『法苑珠林』巻 50 (大正新脩大蔵経、第 53 巻 p.666 中以降に引用されている)。

- 日本の説話資料

① 「鹿王」『三宝絵』、新日本古典文学大系 31、馬淵和夫、小泉弘・今野達、校注、岩波書店、1997、pp.35-38。(この資料は仏教経典ではないが、日本の仏教説話資料としてここで取り扱った。)

まず、この話の原文を以下に紹介する。

『三宝絵』上「鹿王」



昔シ<sup>むか</sup>広<sup>ひろ</sup>キ野<sup>の</sup>ニ林<sup>はやし</sup>有<sup>あり</sup>キ。ニツノ鹿<sup>しし</sup>ノ王<sup>わう</sup>有<sup>あり</sup>テ、各<sup>おのお</sup>ノ多<sup>おほ</sup>クノ師<sup>し</sup>ク<sup>さ</sup>ヲ随<sup>したが</sup>ヘタリキ。国<sup>くに</sup>ノ王<sup>いで</sup>出<sup>いで</sup>テ  
狩<sup>かり</sup>シ給<sup>たま</sup>フニ、鹿<sup>しし</sup>シ皆<sup>みな</sup>逃<sup>にが</sup>ゲ走<sup>はし</sup>レ。穴<sup>あな</sup>ニ落<sup>おち</sup>入<sup>い</sup>リ、岩<sup>いは</sup>ニ当<sup>あた</sup>テ、身<sup>み</sup>ヲ破<sup>やぶ</sup>リ命<sup>いのち</sup>ヲ失<sup>うしな</sup>フ。一<sup>ひと</sup>ツノ鹿<sup>しし</sup>ノ  
王<sup>わう</sup>此<sup>こゝ</sup>レヲ見<sup>み</sup>テ悲<sup>かな</sup>ビテ成<sup>な</sup>シテ、王<sup>わう</sup>ノ前<sup>まへ</sup>ニ行<sup>ゆ</sup>ク。其<sup>かた</sup>ノ形<sup>かたち</sup>高<sup>たか</sup>ク

大<sup>おほ</sup>キニシテ、其<sup>その</sup>ノ角<sup>つの</sup>五<sup>いつ</sup>ツノ色<sup>いろ</sup>也<sup>なり</sup>。人<sup>ひと</sup>皆<sup>みな</sup>驚<sup>おど</sup>キ寄<sup>あや</sup>ズ。鹿<sup>しし</sup>、跪<sup>ひざま</sup>ヅキテ王<sup>わう</sup>ニ申<sup>まう</sup>サク、

王<sup>わう</sup>ノ自<sup>みづか</sup>ラ狩<sup>か</sup>リ給<sup>たま</sup>フニモ、王<sup>わう</sup>ノ使<sup>つかひ</sup>ノ狩<sup>か</sup>ルニモ吾<sup>わが</sup>ガ輩<sup>ともが</sup>ラ多<sup>おほ</sup>ク死<sup>あ</sup>ヌ。或<sup>ある</sup>野<sup>の</sup>ハ母<sup>はは</sup>ト子<sup>こ</sup>ト乍<sup>いき</sup>生<sup>ま</sup>  
ナガラ相<sup>あ</sup>ヒ別<sup>わか</sup>ル、事<sup>こと</sup>深<sup>ふか</sup>ク悲<sup>かな</sup>シ。仮<sup>たと</sup>使<sup>し</sup>ヒ多<sup>おほ</sup>クノ鹿<sup>しし</sup>ヲ今<sup>け</sup>日<sup>ころ</sup>フ皆<sup>みな</sup>殺<sup>ころ</sup>セリトモ、一<sup>ひと</sup>日<sup>ひ</sup>ヒニクサ  
リ、捨<sup>す</sup>テ、日<sup>ひ</sup>ヒ次<sup>つ</sup>ギニ当<sup>あ</sup>ツル事<sup>こと</sup>小<sup>すく</sup>ナカリナム。王<sup>わう</sup>ノ厨<sup>くり</sup>ヤノ用<sup>よう</sup>スラム教<sup>か</sup>ヲ承<sup>うけたま</sup>テ、日<sup>ひ</sup>  
ヒ毎<sup>ごと</sup>ニ勸<sup>すす</sup>ミテ進<sup>た</sup>ツラム。王<sup>わう</sup>ハ常<sup>つね</sup>ニ鮮<sup>あざ</sup>ナルヲ用<sup>もち</sup>チキ、吾<sup>わが</sup>レ暫<sup>しば</sup>ク命<sup>いのち</sup>ヲ延<sup>の</sup>ベム。

ト申<sup>まう</sup>ス。王<sup>わう</sup>大<sup>おほ</sup>キニ寄<sup>あや</sup>ビテ云<sup>いは</sup>ク、

日<sup>ひ</sup>次<sup>つ</sup>ギニ用<sup>もち</sup>キル事<sup>こと</sup>ハ一<sup>ひと</sup>日<sup>ひ</sup>ニ一<sup>ひと</sup>ツニハ不<sup>す</sup>過<sup>ぎ</sup>ズ。不<sup>し</sup>知<sup>ら</sup>ザリツ、汝<sup>なむち</sup>ガ常<sup>つね</sup>ニ多<sup>おほ</sup>ク死<sup>あ</sup>ヌラム事<sup>こと</sup>  
ヲバ。今<sup>いま</sup>所<sup>いふ</sup>云<sup>い</sup>裁<sup>ことわり</sup>也<sup>なり</sup>。汝<sup>なむち</sup>ガ事<sup>こと</sup>ニ随<sup>したが</sup>ハム。

ト讚<sup>ほ</sup>メテ、不<sup>か</sup>らズシテ還<sup>かへ</sup>ヌ。

二<sup>ふた</sup>ツノ鹿<sup>しし</sup>ノ王<sup>わう</sup>日<sup>ひ</sup>ヒ交<sup>ま</sup>ゼニ互<sup>たが</sup>ヒニ進<sup>た</sup>ツル。此<sup>こゝ</sup>ノ王<sup>わう</sup>ノ奉<sup>た</sup>ルニハ次<sup>ついで</sup>デニ当<sup>あた</sup>レル鹿<sup>しし</sup>ニ涙<sup>なみ</sup>ダ  
ヲ垂<sup>た</sup>レテ誘<sup>い</sup>ラヘテ云<sup>い</sup>ク、

命<sup>いのち</sup>有<sup>あ</sup>ル物<sup>もの</sup>ハ皆<sup>みな</sup>死<sup>あ</sup>ヌ。誰<sup>たれ</sup>カ是<sup>これ</sup>ヲ免<sup>まぬ</sup>レム。道<sup>みち</sup>クニ一<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>ヲ念<sup>ねむ</sup>ゼヨ。恨<sup>うら</sup>ミノ心<sup>こゝろ</sup>ヲ成<sup>な</sup>シテ人<sup>ひと</sup>ニ向<sup>むか</sup>  
フナ。

ト教<sup>をし</sup>ヘテ遣<sup>や</sup>ル。

今<sup>いま</sup>一<sup>ひと</sup>村<sup>むら</sup>ノ中<sup>なか</sup>ニ孕<sup>しし</sup>メル鹿<sup>しし</sup>、次<sup>ついで</sup>デニ当<sup>あた</sup>レル日<sup>ひ</sup>己<sup>お</sup>ノガ王<sup>わう</sup>ニ愁<sup>うれ</sup>フ、

子<sup>こ</sup>生<sup>ま</sup>ム事<sup>こと</sup>不<sup>ひ</sup>久<sup>し</sup>ズ。願<sup>ねが</sup>ハ異<sup>い</sup>ト鹿<sup>か</sup>ヲ替<sup>か</sup>ヘテ、後<sup>のち</sup>ノ日<sup>ひ</sup>ニ吾<sup>わが</sup>レヲバ当<sup>あ</sup>テヨ。産<sup>む</sup>メラム子<sup>こ</sup>モ生<sup>ま</sup>  
ヒ立<sup>たち</sup>ナバ、後<sup>のち</sup>ノ為<sup>ため</sup>ニ宛<sup>あつ</sup>ルニ吉<sup>よ</sup>ルベシ。

ト云<sup>い</sup>フニ、鹿<sup>しし</sup>ノ王<sup>わう</sup>悲<sup>い</sup>テ、

何<sup>なに</sup>ニ依<sup>よ</sup>リテ心<sup>こゝろ</sup>ニ任<sup>まかせ</sup>テ濫<sup>みだ</sup>シク次<sup>ついで</sup>ヲバ可<sup>べ</sup>遁<sup>か</sup>。

ト云<sup>い</sup>フテ不<sup>ゆる</sup>免<sup>さず</sup>ズ成<sup>な</sup>リヌレバ、侘<sup>わ</sup>ビテ亦<sup>また</sup>側<sup>かた</sup>ノ王<sup>わう</sup>ニ愁<sup>うれ</sup>ニ聞<sup>き</sup>テ云<sup>い</sup>フ、

悲<sup>かな</sup>シ哉<sup>か</sup>ナ、母<sup>はは</sup>ノ心<sup>こゝろ</sup>。未<sup>い</sup>生<sup>ま</sup>レヌ子<sup>こ</sup>ヲサヘ悲<sup>かな</sup>ズ事<sup>こと</sup>。

ト悲<sup>かな</sup>ビテ、我<sup>わが</sup> EQ ¥\* jc2 ¥\* "Font:MS 明朝" ¥\*方<sup>かた</sup>ノ明<sup>あ</sup>日<sup>す</sup>ノ鹿<sup>しし</sup>ヲ呼<sup>よ</sup>ビテ、

今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>替<sup>か</sup>ハリテ行<sup>ゆ</sup>ケ。

ト語<sup>かた</sup>フニ、夫<sup>そ</sup>レ又<sup>また</sup>愁<sup>うれ</sup>テ云<sup>い</sup>ク、

誰<sup>たれ</sup>カ皆<sup>みな</sup>暫<sup>しば</sup>クノ命<sup>いのち</sup>ヲ不<sup>を</sup>惜<sup>しま</sup>ザラム。

ト。

明<sup>あ</sup>日<sup>す</sup>行<sup>ゆ</sup>カム事<sup>こと</sup>ハ次<sup>ついで</sup>デニ当<sup>あた</sup>レ、バ難<sup>のが</sup>遁<sup>れ</sup>シ。今<sup>こ</sup>夜<sup>よ</sup>ノ残<sup>のこ</sup>リノ命<sup>いのち</sup>ヲ捨<sup>す</sup>テ、今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>死<sup>し</sup>ナム事<sup>こと</sup>ハ愁<sup>うれ</sup>ヘ

トモ有。

ト云へバ、鹿ノ王ノ云ク、

此ノ愁モ可然シ。吾レ今日フ汝ニ替テ命ヲ捨テム。

ト云テ、自ヲ出デ、行キヌ。国ノ王驚キ迷ヒ給フ。

何ニ依テカ鹿ノ王ノ今日フ自ラ来レル。村ノ鹿ノ

失セニタルカ。

ト宣マへバ、鹿ノ王ノ云フ、

傍ノ村ニツノ孕メル鹿シ有リ。今日ノ次イデニ当レリ。孕メル子未ダ不生マズト愁フルヲ聞クニ、難忍ケレバ、吾レ替テ死ナムトスル也。

ト云へバ、国ノ王大キニ悲テ涙ヲ流シテ宣ハク、

吾レハ諸ノ命ヲ殺シテ己ガ身ヲ養フ。汝ハ物ノ命ヲ救ヒテ己ガ身ヲ捨タリ。悲シクモ有ル哉。

トテ、偈ヲ説テ云ク、

我ハ是実ノ畜生也。名付テ人ノ頭ラ也鹿ト可為シ。汝ハ是畜生ナリト雖モ、名付テ鹿ノ頭ラナル人ト可為シ。実ヲ持テ人ト為ス。形ヲ持テ人ト不為ズ。吾レ今日ヨリ始テ諸ノ鹿ヲ不食ハジ。

此誓ヒヲ成シテ国ノ内ニ勅ヲ下シテ、

狩リ為ム者ノヲバ罪ミ為ム。

ト誠メテ、即此ノ野ヲ以テ鹿ノ菌ト成テキ。鹿苑ト云フ名ハ是レヨリ流シ、ナリ。仏始テ爰ニ赴テ法ヲ説キ給フ。又昔ノ鹿王ハ、今ノ釈迦如来也。六度集経ニ見タリ。

- チベットの説話資料

- ① Gcan gzan kun tas lus sibyan pa byas pa'i se'u, "Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo" (呉法成訳), 1994, zi-liú, pp. 118-124

チベット語文献の場合は、現在手元にある、中国で出版されたものであり、資料リストで表記されているのは、再出版年代と、出版社である。

- モンゴルの説話資料

- ① Arātu gūnda beyēn ögligü ögöqsen bölöq, "Üligiriin dalai" (Oirat version of Damamūkonāmasūtra), Redigit B.Rincen (Corpus scriptorum mongolorum : Instituti

Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum publicae Populi Mongolici, Tomus. X  
VI, IIIYAX, 1970, bōlōq 4, 58b-61b

② Gūnda görōgesūn bey-e-ben öggūgsen-ü jūyil, Mongolian Kanjur Vol.90, “Üligerün dalai sudur”

以上、説話資料の紹介であるが、本節で扱っているパーリ語の *Jātaka* は、日本語訳のものを一次資料として扱っている。ここで、「ルル鹿本生」説話が収録されている文献の成立・翻訳年代については、本章の表 (1-3a) を参照にする。

まず、以下の比較対照表 (1-2c) において各地域における「ルル鹿本生」説話の主人公の比較対照を全体的にまとめてみる。(一部の文章には、主人公の名称、その体の特徴についての描写しているところに下線を引いている。)

表 (1-2c) 各地域における「ルル鹿本生」説話の主人公の比較対照

| 国   | 説話資料                          | 主人公  |
|-----|-------------------------------|--|
| インド | Ruruḷataka, “The Jātaka”      | その時、<偉大な人>は、ルルという種類の鹿として生まれていた。<br>(中村元、1989、p.250、(Jātaka.[p.256,6-15])   |
|     | Ruruḷataka, “The Jātaka-mālā” | nānāvidhapadmarāgendranīlamarakatavaiḍūryarucirava<br>rṇabinduvidyotitavicitragātraḥ<br>snigdhābhinīlavimalavipulanayano<br>manīmayairivāparuṣaprabhairviṣāṇakṣurapradeśaiḥ<br>paramadarśaniyarūpo ratnākara iva pādacārī <u>rurumrgo</u><br>babhūva   (種々のルビ色、紅蓮華色、青玉色、緑玉石色、猫目石色で、美しい色の水滴が輝くような美しい体をした、優しく光る無垢な美しい目をした、宝石でできたような柔和に光る角と蹄を持つ、この上なく美しい、歩く「宝山」のようなルルという種類の鹿 (※) がいた。) [p.167,10] |
| 中国  | 『六度集経』 六                      | 昔者菩薩。身為鹿王。名曰修凡。…體毛九色觀世希有。[33]  |
|     | 『六度集経』 III                    | 昔者菩薩身為鹿王。…身毛五色。[12]  |
|     | 『賢愚経』                         | 有一野獸。名曰鋸陀。…身毛金色。毛頭光明。[366]   |

|      |  |  |
|------|--|--|
|      | 『菩薩本縁経』  | 菩薩往世墮在畜生而爲鹿身。...兩脇金色脊似琉璃。[66]  |
|      | 『大智度論』   | 遊獵於野林中見二鹿群。群各有主。一主有五百群鹿。...一主身七寶色。是釋迦牟尼菩薩。[178]  |
|      | 『九色鹿経』   | 昔者菩薩身爲九色鹿。...其毛九種色。[452]   |
|      | 『法苑珠林』   | 昔者菩薩身爲九色鹿。...其毛九種色角白如雪。[666]   |
| 日本   | 「鹿王」『三宝絵』  | 昔シ広キ野ニ林有キ。ニツノ鹿ノ王有テ ...其ノ形高く大キニシテ、其ノ角五ツノ色也。[p.35]   |
|      | 「身の色九色の鹿、住山で河道助人語」<br>『今昔物語集』  | 其ノ山ノ中ニ、身ノ色ハ九色ニシテ角ノ色ハ白キ鹿住ケリ<br>[p.375]  |
| チベツト | Gcan gzan kun tas lus sibyan pa byas pa'i se'u, "Mzangs blun"        | <u>Gchan-gzan</u> kun-tas lus-şbyin pa byas-bhi lehuḥo [猛獣のクンタが体を布施するという節 p.118]<br>dehi-tshe na rgyal-po dehi-rmi lam-du gchan-gzan lus-kyi sbu gser-gyi mdog ltar ḥ dug-pa [その王が、夢の中でみるのは、野獣であり、その身の色は金のようなものである。 p.120]   |
|      | "legs par bshad"   | waranasihi ṅgas ştug po şkye bo phal cho bas bşgrod-par mi nus-pa zhiḡ-na byañ-chub şems-dpaḡ ru-ru zhes-bya pa dud-ḡgrohi lus-su gyur-kyañ [ワラナシの国で人足が届かないある森林の中に、菩薩が、ルルという名の獣の身に生まれ変わっていた。 pp.305-306]<br>De ḡi-tshe waranasi ḡi rgyal-po ḡi <u>ri-dwags</u> kyi gzugs su gzi-byin dañ mad-ñas kyi khyad-par ḡphags-pa ṛmad-du byuñ-ba zhiḡ señ-geḡi kkri la ḡdug-ste chos-smra bar [その時、ワラナシ国の王妃が不思議で堂々とした獣が獅子座に座り、法を説く夢をみた。 p.307] |
| モンゴル | Gūnda görögesün bey-e-ben öggügsen-ü jüyil,"Mongolian Kanjur Vol.90, | Tere tsag dor,tere hagan-u ḡjegüdün dor.....teii mü nigen <u>Gūngda görögesün</u> üjen ḡjegüdülbei. [ その時、あの王は、あるグンダという名のゴォロースンの夢を見た。 109p]<br>altan dor adali üsüt ü,üsün-ü üḡgür-ese altan genel   |

|  |  |
|--|--|
| <p>“Üligerün dalai sudur”</p>  | <p>badarahchi, jægün baragun etege-de-un hotala oroda-i altan öngge dor adili geigülügchi [毛が金のように、毛先が金のような光で輝く、その体の金の光で王宮を左右に照らす p.109]</p>   |
| <p>Arātu gūnda beyēn ögligü ögöqsen bölöq, Oirat “Üligiriin dalai”</p> | <p>Tere tsaq-ta ,tere ha-ana jüdün-da..... teimü negene <u>Arātu Gūndaag</u> üjen jüdülbei.[その時、あの王の夢には、・・・そんな素晴らしいグンダという名のアラトゥ（猛獣）を見た。]</p> <p>Tere altan-a adali üst-ë,üsün-ä üjü-ür-äs n altan gerel badarahchi, jü-ün baruun etege-de-in hot-la ordan-ä altan önge-air geigülügchi [毛が金のように、その体の金の光で王宮を左右に照らす]</p> |

以上の比較対照表（1-2c）にみえる、サンスクリット語、チベット語、モンゴル語のそれぞれの意味を調べてみる。

[mr̥go→mr̥ga] 森の獣、野獣、猟獣（ふつうの意味）； 鹿、かもしか； 漢訳 鹿、獣、野獣、猛獣[茂原曇来編、『梵和大辞典』、鈴木学術財団 1974,11, Mad—yav, 1056]

[gchan-gzan] carnivorous animal,beast of prey[ Sarat Chandra Das,A Tibetan-English dictionary, Motilal Banarsidass,1979, p.385]

この言葉は、[Д.Бүрнээ,Д.Энхтөр “Төвд-Монгол толь”, Улаанбаатар 2013, p.146]にも、gchan-gzan : (араатан) араатан とあって、「猛獣」の意味を指している。

[dud-ḥgro] a quadruped,beast,and sometimes used as a general name for all animals axcept man[ Sarat Chandra Das,A Tibetan-English dictionary,Motilal Banarsidass 1979, p.629]

この言葉は、[Д.Бүрнээ,Д.Энхтөр “Төвд-Монгол толь”, Улаанбаатар 2013, p.242]にも адгуус (adguus, 獣) となっている。

[ri-dwagṣ ruru] the species of deer that cries 「ruru」 [Sarat Chandra Das,A Tibetan-English dictionary, Motilal Banarsidass 1979, p.1174]

ところで、この言葉は、[Д.Бүрнээ,Д.Энхтөр “Төвд-Монгол толь” Улаанбаатар 2013, p.454]には、Гөрөөс (gөрөөс) となっている。

[gөрөгесүн (Гөрөөс)] 大型草食動物[Я.Цэвэл “Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь”

1966, p.154]とあり、一般のモンゴル人がイメージしているのはこの Гөрөөс (グォロースン) に当たる。

[Arātu] という言葉は、モンゴル語の araatan という言葉の異形かと思われる。

Я.Цэвэл “Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь” 1966 (ヤ。ツェヴェル『モンゴル語例解辞典』 p.47 では、(ariyatan) [獣、野獣] とある。つまり、モンゴル語の (араатан) araatan という意味を表すオイラト方言の言葉である。

以上の考察から、各説話の主人公である「鹿」の名称を表 (1-2d) においてまとめた。

表 (1-2d) 各説話の主人公「鹿」の名称のまとめ

|          |  |
|----------|--|
| サンスクリット語 | mṛgo   |
| 中国語      | 鹿 (『賢愚経』以外全て)  |
|          | 野獣 (『賢愚経』)   |
| 日本語      | 鹿 (カセギ <sup>48</sup> 、鹿 (シシ))                                |
| チベット語    | gchan-gzan (Mdzangs blun)                                    |
|          | dud-ḥgro (legs par bshad)                                    |
|          | ri-dwags (legs par bshad)                                    |
| モンゴル語    | Görögesün (“Üligerün dalai sudur”, “Erdeniin san Subhashid”) |
|          | Arātu (Oirat “Üligiriin dalai”)                              |

以上の、主人公を表す表現から、表 (1-2e) で次のことが推測できるように考えられる。

表 (1-2e)

サンスクリット語原典 の [mṛgo→mṛga] という言葉の複数の意味の中から、各地域に次のように伝わっていた可能性があると思われる。

【鹿】 → 『賢愚経』 以外の仏典 → 日本の 『三宝絵』、 『今昔物語集』、 『宇治拾遺物語』

【猛獣】 → 『賢愚経』 → チベットの Mdzangs blun → モンゴルの “Üligerün dalai sudur” と Oirat “Üligiriin dalai”

【獣】 → legs par bshad → モンゴルの “Erdeniin san Subhashid”

<sup>48</sup> [かせぎ] 鹿の古称。カセキとも。(三木紀人 1993, p.174)

#### 1.2-4. 日本とモンゴルにおける「鹿王」説話の比較考察

—日本の『今昔物語集』・『宇治集物語』とモンゴルの“Sain nomlolt Erdeniin san Subashidiin tailbar Chandmaniin tulhuur” の話を中心に—

「鹿王」説話の核となる共通のモチーフは、菩薩の前世である鹿は、川に溺れた男を救い出すが、恩知らずの男は鹿との約束を破り、欲望のために鹿の居場所を王に教えるという話である。

この説話の最古伝承にはパーリ語の“The Jātaka”（以降は Jātaka と略称する）がある。この Jātaka を原形にしてサンスクリット語の“The Jātaka-mālā”(Jātaka-mālā と略称する)、または漢訳の『六度集経』、『賢愚経』、『九色鹿経』、『法苑珠林』、『菩薩本縁経』、『大智度論』、『大莊嚴経論』等に所収されたのを日本系の説話が素材にしたとされる。また、仏教の展開と共に、サンスクリット語からチベット語と、モンゴル語に翻訳され、さらに経典の枠組みから民間説話まで展開して伝承されている。チベット語資料として“Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo”（以降 Mdzangs blun と略称）があり、または日本で『サキャ格言』として知られている Sakya Pandita の“legs par bshad pa rin po che'I gter”（以降 legs par bshad と略称する）の解説等があり、それぞれがモンゴル系の説話に展開している。

以下は本研究で取り扱っている日本とモンゴルの世俗説話集にみえる「鹿王」説話資料である。

##### ・日本の説話とその粗筋

1. 「身の色九色の鹿、住山で河道助人語」『今昔物語集』、新日本古典文学大系 33、巻第 5 本説話の出典は法苑珠林巻第 50、背恩編第 52、印度部第 2 所収の一説話（原拠は九色鹿経）<sup>49</sup> とされる。

まず、この話の本文を以下に紹介する。

今野達校注『今昔物語集』、新日本古典文学大系 33、巻第 5 の 18、「身の色九色の鹿、住山で河道助人語」

---

<sup>49</sup> 山田孝雄等 1963、p.375

今昔、天竺ニ一ノ山有り。其ノ山ノ中ニ、身ノ色ハ九色ニシテ、角ノ色ハ白キ鹿住ケリ。其ノ国ノ人、其ノ山ニ此ノ鹿有リト云事ヲ不知ズ。其山ノ麓ニ一ノ大キナル河有り。彼ノ山ニ一ノ鳥有り。此ノ鹿ト共ニ心ヲ一ニシテ年来世ヲ過ス。

而程ニ、此ノ河ヨリ一人ノ男渡ルニ、水ニ溺レテ流レテ没ミ浮ミ下ダル。既ニ死ナムトス。男木ノ枝ニ取り付テ流下テ呼テ云ク、「山神・樹神・諸天・龍神、何ゾ我レヲ不助ザルベキ」。音ヲ挙テ叫ブト云ヘドモ、其時ニ人無クシテ助クル事無シ。而ルニ此ノ山ニ住ム彼ノ鹿、其ノ時ニ河ノ辺ニ来レリ。此ノ音ヲ聞テ男ニ云ク、「汝ゾ恐ル、事無シ。我ガ背ニ乗テ二ノ角を捕ヘヨ。我レ汝ヲ負テ陸ニ付ム」トテ、水ヲ游テ此男ヲ助ケテ岸ニ上ツ。

男命ノ存シヌル事ヲ喜テ、鹿ニ向テ手摺テ泣タク云ク、「今日我ガ命ノ生ヌル事ハ、鹿ノ御徳也。何事ヲ以テカ此ノ恩ヲ可報申キヤ」ト。鹿ノ云ク、「汝ゾ何事ヲ以テカ我レニ恩ヲ報ゼム。只、我レ此ノ山ニ住ムト云フ事ヲ努々人ニ不可語ズ。我ガ身ノ色九色也。世ニ亦無シ。角ノ白キ事雪ノ如シ。人我レヲ知ナバ、毛・角ヲ用ゼムニ依テ、必ズ被殺レナムトス。此事を恐ル、ガ故ニ、深キ山ニ隠テ住所ヲ敢テ人ニ不知セズ。而ルニ汝ガ叫ブ音ヲ髣ニ聞テ、哀ミノ心口深クシテ出デ、助ケタル也」ト。男鹿ノ契ヲ聞テ泣タク不可語ザル由ヲ返々ス請ケテ別レ去ヌ。

男本郷ニ還テ月日ヲ送ルト云ヘドモ、此ノ事ヲ人ニ語ル事無シ。其ノ時ニ、其ノ国ノ后夢ニ見給フ様、大ナル鹿有り、身ノ色九色也。角ノ白シ。夢メ覺テ後、其ノ色ノ鹿ヲ得ムト思フニ依テ、后病ニ成テ臥シヌ。国王、「何ノ故ニ不起ザルゾ」ト宣フ。后、国王ニ申シ給、「我レ夢ニ然々ノ鹿ヲ見ツ。其ノ鹿定メテ世ニ有ラム。彼ヲ得テ、皮ヲ剥ギ角ヲ取ラムト思フ。大王必ズ彼ヲ尋取テ我ニ与ヘ給ヘ」ト。王即宣旨ヲ下シ給フ、「若シ然々ノ鹿ヲ尋ネテ奉ラム者ニハ、金銀等ノ宝ヲ給、申シ請コトヲ可給シ」ト宣旨ヲ被下ヌ。

其ノ時ニ、此ノ鹿ニ被助シ男、此ノ宣旨ノ状ヲ聞テ、貪欲ノ心ニ不堪ズシテ忽ニ鹿ノ恩ヲ忘レヌ。国王ニ申シテ云ク、「其ノ国其ノ山ニ、被求ル、所ノ九色ノ鹿有り。我レ其ノ所ヲ知レリ。速ニ軍ヲ給ハリテ取テ奉シ」ト。大王此ノ由ヲ聞キ給テ喜テ宣ハク、「我レ軍ヲ將テ彼ノ山ヘ可行向シ」ト。即チ多ノ軍ヲ引具シテ、彼ノ山ニ御行シ給フ。彼ノ男御輿ニ副ヒテ、道ノ指南ヲ申ス。既ニ其ノ山ニ入り給ヒヌ。九色ノ鹿、敢テ此ノ事ヲ知ル事無クシテ、彼ノ住ム峒ニ深ク寝入タリ。

其ノ時ニ、此ノ心ヲ通ズル鳥此ノ御行ヲ見テ、驚キ騒テ鹿ノ許ニ飛ビ行テ、音ヲ



高ク鳴テ驚カス。然レドモ鹿敢テ不驚ズ。鳥木ヨリ下テ寄テ、鹿ノ耳ヲ喰テ引ク時ニ鹿驚キヌ。鳥鹿ニ告テ云ク、「国ノ大王鹿ノ色ヲ用ジ給フニ依テ、多ノ軍ヲ引具シテ、此ン谷ヲ立チ囲マシメ給ヘリ。今ハ逃ゲ給ト云フトモ、命ヲ存シ可給キニ非ズ」ト告テ、鳴テ飛ビ去ヌ。鹿驚テ見ルニ、実ニ大王、多ノ軍ヲ引具シテ来リ給リ。更ニ可逃キ方無シ。然レバ、鹿大王ノ御輿ノ前ニ歩ビ寄ル。軍共、各矢ヲ番テ射トス。

其ノ時ニ大王宣ハク、「汝達、暫ク此ノ鹿ヲ射事無カレ。鹿ノ体ヲ見ルニ、只ノ鹿ニ非ズ。軍ニ恐ズシテ我ガ輿ノ前ニ来レリ。暫ク任セテ彼レガ為ム様ヲ可見シ」ト。其ノ時ニ軍共、矢ヲハズシテ見ル。鹿大王ノ御輿ノ前ニ跪テ申サク、「我レモノ色ヲ恐ルハ、ニ依テ、年来深キ山ニ隠レタリ。敢テ知レル人無シ。大王何ニシテ我ガ栖ヲ知り給ヘルゾヤ」ト。大王ノ宣ハク、「我レ年来鹿ノ栖ヲ不知ズ。而ルニ此ノ輿ノ藩ニ有ル、顔ニ疵有ル男ノ告ニ依テ来レル也」ト。鹿王の仰セヲ聞テ、御輿ノ藩ニ有ル男ヲ見遣ルニ、面ニ疵有リ、我ガ助ケシ人也。鹿彼ノ男ニ向テ、云ク、「汝ガ命を助ケシ時、其ノ恩ヲ喜ビテ、人ニ不可告ザル由ヲ返々ス契リシ者也。而ルニ其ン恩ヲ忘レテ、今大王ニ申シテ我レヲ殺サスル心何ニゾ。水ニ溺レテ死ナムト為シ時、我レ、命ヲ不顧ズシテ泳ギ出デ、陸ニ至ル事ヲ令得メテキ。其レニ、恩ヲ不知ザル事ハ、此レ無限キ恨ミ也」ト云テ、涙ヲ流シテ泣ク事無限シ。此ノ男、鹿ノ言ヲ聞テ、更ニ答ル方無シ。

其ノ時ニ大王宣ク、「今日ヨリ後、国ノ内ニ鹿ヲ殺ス事無カレ。若シ此ノ宣旨ヲ背テ鹿一ニテモ殺セル者有ラバ、其ノ者ヲ殺シ家ヲ可亡シ」ト宣ヒテ、軍を引テ宮ニ還リ給ヌ。鹿モ喜テ還ヌ。其ノ後、国ニ雨時ニ随テ降り、荒キ風不吹ズ、国ノ内ニ病ヒ無ク、五穀豊饒ニシテ、貧シキ者無カリケリ。

然レバ、恩ヲ忘ルハ、人ノ中ニ有リ。人ヲ助クルハ、獸ノ中ニ有リ。此レ今モ昔モ有ル事也。彼ノ九色鹿ハ、今ノ釈迦仏ニ在マス。心ヲ通ゼシ鳥ハ、阿難也。后ト云ハ、今ノ孫陀利也。水ニ溺レタリシ男ハ、今ノ提婆達多也トナム語り伝ヘタルトヤ。

以上の『今昔物語集』の説話の粗筋は以下の通りである。

今昔、天竺の山に九色の身、白い角を持った鹿が住んでいた。鳥の友達がいた。ある日山の麓の大きな川に一人の男が流されて「山神・樹神・諸天・龍神」に助けてもらおうように悲鳴をあげているのを聞いた鹿は、その男を助けてあげる。男は命を助けてくれた鹿にお礼を言って、鹿の居場所を他に教えないことを約束して帰る。

国のは「身の色が九色で、白い角の大きな鹿」を夢に見て「彼ヲ得テ皮ヲ剥ギ、角ヲ取ラム」と欲しがる。

命を助けられた男は貪欲の気持ちを持ち、鹿の居場所まで国王を連れて行く。国王たちが来ていることを友達の鳥が鹿に知らせるが、逃げられないことを知った鹿は、恩を忘れた男が、鹿との約束を破って鹿の居場所を国王に教えて案内して連れて来ていることを国王に涙を流しながら説明する。

それを聞いた国王が「今日より後国の内に鹿を殺すことなかれ。若し此の宣旨を違反した者を殺し、家を滅ぼす」と命令する。その後、国中に病がなくなり貧しい人もいなくなり、皆幸せになる。

彼の九色鹿は今の釋迦仏で、鳥は阿難で、后は今の孫陀利で、男は提婆達多である。

## 2. 「五色鹿事」、『宇治拾遺物語』新日本古典文学大系 42

まず、話の原文を紹介する。

三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注『宇治拾遺物語・古本説話集』新日本古典文学大系 42、巻7の1、「五色鹿事」

これも昔、天竺に、身の色は白き鹿一ありけり。深き山にのみ住て、人に知られず。その山のほとりに大なる川あり。その山に又鳥あり。此鹿を友として過す。或時、この川に男一人流れて、既死なんとす。「我を、助けよ」と叫ぶに、此鹿、この叫び声を聞きて、かなしみにたへずして、川を泳ぎ寄りて、此男を助けてけり。男、命の生きぬる事を悦て、手をすりて、鹿にむかひていはく、「何事をもちてか、この恩を報ひ奉るべき」といふ。鹿のいはく、「何事をもちてか恩をば報はん。たゞこの山に我ありといふ事を、夢く人に語るべからず。我身の色、五色なり。人知りなば、皮を取らんとて、必殺されなん、この事をおそるゝによりて、かゝ深山にかくれて、あへて人に知られず。然を、汝が叫ぶ声をかなしみて、身の行忽を忘れて、助けつるなり」といふ時に、男、「これ、誠にことわり也。さらにもらす事あるまじ」と、返く契て去りぬ。もとの里に帰りて月日を送れども、更に人に語らず。

かゝる程に、国のは、夢に見給やう、大なる鹿あり。身は五色にて角白し。夢覚て、大王に申給はく、「かゝる夢をなん見つる。この鹿、さだめて世にあるらん。大王、必

ず尋とりて、我に与へ給へ」と申給に、大王、宣旨を下して、「もし五色の鹿、尋て奉らん物には、金銀、珠寶等の宝、并に一國等をたぶべし」と仰ふれらるゝに、此助けられたる男、内裏に参て申やう、「尋らるゝ色の鹿は、その国の深山にさぶらふ。あり所を知れり。狩人を給て、取て参らすべし」申に、大王、大に悦給て、みづからおほくの狩人を具して、此男をしるべに召し具して、行幸なりぬ。

その深山に入給。此鹿、あへて知らず。

洞の内にふせり。かの友とする鳥、これを見て大におどろきて、声をあげてなき、耳をくひてひくに、鹿驚きぬ。鳥告て云く、「国の大王、おほくの狩人を具して、此山をとりまきて、既に殺さんとし給。いまは逃べき方なし。いかゞすべき」と云て、泣くく去りぬ。鹿、おどろきて、大王のお御輿のもとに歩寄るに、狩人ども、矢をはげて射んとす。大王の給やう、「鹿、おそるゝ事なくして来れり。さだめてやうあるらん。射事なかれ」と。その時、狩人ども矢をはづして見るに、御輿の前にひざまづきて申さく、「我毛の色をおそるゝによりて、此山に深く隠すめり。しかるに大王、いかにして我住所をば知り給へるぞや」と申に、大王の給、「此輿のそばにある、顔にあざのある男、告申たるによりて来れる也」。鹿見るに、顔にあざありて、御輿傍に居たり。我助けたりし男なり。

鹿、かれに向ていふやう、「命を助たりし時、此恩、何にても報じつくしがたきよしいひしかば、こゝに我あるよし、人に語るべからざるよし、返く契りし処也。然に今、其恩を忘れて殺させ奉らんとす。いかに汝、水におぼれて死なんとせし時、我命を顧ぎ泳ぎ寄りて助し時、汝かぎりなく悦し事はおぼえずや」と、深く恨たる気色にて、涙をたれて泣く。

其時に、大王同じく涙をながしてのたまはく、「汝は畜生なれども、慈悲をもて人を助く。彼男は欲ふけりて恩を忘れたり。畜生といふべし。恩を知るをもて人倫とす」とて、此男をとらへて、鹿の見る前にて、首を斬らせらる。又、のたまはく、「今より後、国の中に鹿を狩事なかれ。もし此宣旨をそむきて、鹿の頭にてても殺す事あらば、速に死罪に行はるべし」とて帰給ぬ。

其後より、天下安全に国土ゆたかなりけりとぞ。

以下、「五色鹿事」説話の粗筋を紹介したい。

天竺の深山に身の色が五色で、角の色が白い鹿と友達の鳥がいた。ある時、一人

の男が川に流されて「われを助けよ」と叫ぶのを聞いて、鹿は男を助けてあげる。命を助けてもらったお礼に鹿の居場所を誰にも教えないように約束をして男が家に帰る。

ある日、国の後は、五色の鹿を夢にみて、その鹿を手に入れたくなる。鹿に助けられたあの男が貪食の気持ちで、国王に鹿の居場所を教える。王たちが近づいてきていることを友達の鳥が鹿に告げる。鹿は、命を助けてあげた恩を忘れて鹿の居場所を教えている男について涙を流しながら国王に伝える。

大王は、「汝は畜生なれども慈悲を以て人を助ける。あの男は欲にふけて恩を忘れていたので畜生と言うべし」と言って男を殺す。そして「今より後、国の中で鹿を狩ることなかれ。若しこの宣旨に背き、鹿を殺した者は速やかに死罪にする」といって帰る。それより天下は安全になり国土も豊かになったとのことである。

・モンゴルの説話の粗筋

### 3. 182 dugaar badgiin tailbar, “Sain nomlolt Erdeniin san Subhashidiin tailbar

Chandmaniin tulhuur” (Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав “Сажа Бандид

Гунгаажалцаны зохиол “Erdeniin san Subhashid”, Улаанбаатар, 1990, pp.156-157)

この説話の出典は Sakya Pandita の弟子の Renchin-bal が 1251 年頃

Subhāṣitaratnanidhi (Kun dga' rgyal mtshan, “legs par bshad pa rin po che'I gter”, 1995, zi-liú, pp.305-310) の 457 句の韻文の解説として作った物語である<sup>50</sup>。この物語のモンゴル語訳について本節の 1.3-1 の「モンゴル語の Subashid について」において先行研究の概要としてまとめているのでここで省略する。

以下に説話の粗筋を日本語で紹介する。

ワラナシの国の密林にルルという名の菩薩グオロースン (görogesün<sup>51</sup>) が住んでいた。ある日川に落ちて、助けを呼んでいる人を助けてあげる。その人は命を助けたお礼に家に招待するが、ルルグオロースンが「私のことを他人に教えないください。そうすれば、それが私を尊敬しているということになります。」と言って森林に入った。

---

<sup>50</sup> Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав 1990, 16p

<sup>51</sup> 「görogesün」 大型草食動物 (cf. Я.Цэвэл “Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь” 1966, p.154 『モンゴル語例解辞典』)

その時、不思議で堂々としたグオロースンが獅子座に座り法を説く夢をみた王妃はそのグオロースンの居場所を教えた者に賞を与えるように告げる。

グオロースンに助けられた男は賞を欲しがり、国王をその居場所まで案内する。その男はルルグオロースンを教えようとして手を上げると、彼の手が手首から落ちる。王がルルを射ようとするが、ルルグオロースンは命を助けてあげた恩知らず者のせいで殺されることになっていることを告げる。

これを聞いた王が怒ってその男を射ようとするが、王は菩薩グオロースンの命令に従い、また王にルルを教えてくれた恩を意識してその男を許しておく。

王はルルを王宮に誘い、獅子座に座らせ、ルルに素晴らしい法を説いてもらう。

以上、日本とモンゴルの「鹿王」説話の粗筋であるが、両国の説話の粗筋から見える注目される以下のいくつかの点がある。

- ① 人跡の届かない山の森に身の色が魅力的で素晴らしい鹿が住んでいる。
- ② ある日川でおぼれて、流されている人を鹿が助けてあげる。
- ③ 助けられた人は、鹿の居場所を誰にも教えないと約束して帰る。
- ④ 国王（后）が堂々とした素晴らしい鹿を夢に見る。
- ⑤ 国王（后）が鹿を手に入れたくなる。
- ⑥ 助けられた人は、国王に鹿の居場所を教える。
- ⑦ 鹿は、命を助けた恩を忘れ、裏切った人について国王に告げる。
- ⑧ 恩知らずな人は罰が当たる。
- ⑨ 鹿王は鹿を褒め称えて、殺さないで帰る。

両国説話の共通点は②川で溺れた人を鹿が助けてあげる、③人間と鹿の約束、④夢の場面、⑥欲望に落ちた男は、命を助けてくれた恩を忘れて鹿の居場所を国王に教える、⑦鹿は恩知らずな男の裏切りについて国王に告げる⑨慈悲深い鹿は生き残るという点である。

三つの説話はこのような共通点をもっているが、次の相違点も注目される点である。

- ①の主人公の設定の相違点
- ⑤の鹿を欲しがる理由
- ⑧の恩知らずな男の行方
- ⑨国王の決定と鹿の行方

以上の要素を項目にして比較対照表でみてみたい。まず、①の主人公の設定の相違点を

表でみてみる。

表 (1-2f) ①の主人公の設定

| 国    | 説話資料  | 主人公 (鹿)                          | 身色                          | 角 |
|------|---|----------------------------------|-----------------------------|---|
| 日本   | 「身の色九色の鹿、住山で河道助人語」<br>『今昔物語集』                           | 鹿                                | 9色                          | 白 |
|      | 「五色鹿事」『宇治拾遺物語』  | 鹿 (かせぎ)                          | 5色                          | 白 |
| モンゴル | 182 dugaar bulgiin tailbar,<br>“Erdeniin san Subhashid” | ルルという<br>görögesün <sup>52</sup> | 不思議で堂々<br>とした <sup>53</sup> | × |

表 (1-2f) で、まず注目されるのは、主人公の動物は単なる「鹿」ではないことが見られる。「鹿・かせぎ・görögesün (göröös の書き言葉)」などと記されているこの動物は、各地域でそれぞれ違った姿でイメージされているのが確認できる。説話の書承の視点からみれば、原典の Jātaka から、中国を媒介して日本まで伝わった「鹿」は、中国の一部の文献である『賢愚経』において、「獣」<sup>54</sup>として姿を変え、そこからチベットに ri-dwags<sup>55</sup>、ruru<sup>56</sup>と変容し、最後にモンゴルでは、「göröös」に変容しているのは注目される。このように鹿の名称の変容には、翻訳の過程で訳者による言語的判断によるところが大きい、それぞれの地域的特色も少なからず影響を与えていると考えられる。

「鹿」と言えば、モンゴル人は「buga」という言葉を用い、それは「12本の角を持つ鹿」の姿を思い浮かべるのである。しかし「göröös」になると、『モンゴル語例解辞典』の通り、「大型草食動物」を意味し、鹿だけでなく、草食動物であるガゼルや、かも鹿、へら鹿等をも含む。すなわちモンゴル人にとっては、森に住んでいる鹿「buga」よりも草原に住んでいる他の「göröös」のほうが受け入れやすい存在になっていたと考えられる。この主人公の名称に関する詳しい考察は前節で検討している。

主人公である鹿の身の色描写にも相違がみえる。これは民俗的、文化的な影響というより、それぞれの説話が基づく原典資料の影響を受けていると考えられる。

<sup>52</sup> Rürü nert bodisad göröös baisan ajē. [Ц.Дамдинсүрэн,Ж.Дүгэржав 1990, p.156]

<sup>53</sup> gaikhamšig sūr javhlant negen göröös arslant širēn dēr sū-gād nom nomlov gej züüdeln-ē [Ц.Дамдинсүрэн,Ж.Дүгэржав 1990, p.156]

<sup>54</sup> 有一野獸。名曰鋸陀。[『賢愚経』、大正新脩大藏経卷第四卷、本縁部下、366頁下⑪]

<sup>55</sup> dehi-tshe waranasihī rgyal-pohi ri-dwags kyi gzugs su gzi-byin dañ mad-ñas kyi khyad-par hphags-pa rmad-du byuñ-ba zhiḡ señ-gehi kkri la ḡdug-ste chos-smra bar<sup>55</sup>[p.307]

<sup>56</sup> [the species of deer that cries“ruru”][Sarat Chandra Das, A Tibetan-English dictionary, Motilal Banarsidass 1979, p.1174]

以下の表（1-2g）において、⑤⑧⑨の要素を項目にして比較対照考察をしてみた。

表（1-2g）⑤⑧⑨の比較対照表

| 国    | 説話資料   | ⑤                  | ⑧         | ⑨   |
|------|--|--------------------|-----------|---|
| 日本   | 「身の色九色の鹿、住山で河道助人語」<br>『今昔物語集』                        | 彼ヲ得テ皮ヲ剥ギ角ヲ取ラムト思フ   | 行方不詳      | 今日ヨリ後、国ノ中ニ鹿ヲ殺ス事ナカレ。若シ此ノ宣旨ヲ背テ鹿一ニテモ殺セル者有ラバ、其ノ人ヲ殺シ家ヲ可亡シト宣ヒテ、軍ヲ引テ宮ニ還リ給ヒヌ。 |
|      | 「五色鹿事」<br>『宇治拾遺物語』                                   | 大王、かならず尋とりて、我に与へ給へ | 国王に首を切られる | 「今より後、国の中にかせきを狩事なかれ。もし此宣旨をそむきて、鹿の一头にても殺す物あらば、速に死罪に行はるべし」とて帰給ぬ。        |
| モンゴル | 182 dugaar bulgiin tailbar, “Erdeniin san Subhashid” | 法を説いてもらう           | 手は手首から落ちる | 王は、ルルを教えてくれた男にお礼として賞を与え、ルルを王宮に誘い、獅子座に座らせ、法を説いてもらう。                    |

表（1-2g）の項目を比較してみると、⑤の「鹿を欲しが理由」には大きな相違が見られ、これらの説話の重要なモチーフになっていると言える。

『今昔物語集』の「彼ヲ得テ皮ヲ剥ギ角ヲ取ラム」という理由を仏教経典所収の類話で探してみれば、インドの *Jātaka* と *Jātaka-mālā* には見えないが、中国の『法苑珠林』<sup>57</sup>と、『六度集経』<sup>58</sup>と『九色鹿経』<sup>59</sup>にそれぞれ共通して語られている。ならびに、『宇治拾遺物語』の「かならず尋とりて、我に与へ給へ」という表現と共通しているのはインドの *Jātaka-mālā* の説話である。ところが、モンゴルの説話の⑤の要素に一致するのはインドの *Jātaka* 全集と中国の『根本説一切有部毘奈耶破僧事』である。このように⑤の点で各説話はそれぞれ相違をみせている。

これらの点からいえば、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の説話は漢訳経典系の展開に位置付けられるが、一方、モンゴルの説話の場合にも「法を説いてもらう」として仏教供養の影響を受けて展開していることが見られる。

<sup>57</sup> 我思欲得其皮作座敷其角作拂柄。

<sup>58</sup> 欲以鹿之皮角爲衣爲珥。

<sup>59</sup> 我思得其皮作衣装其角作拂柄。

各説話の⑧の点であるが、『今昔物語集』の話では恩知らずな男の行方は語られないが、日本の『宇治拾遺物語』とモンゴルの“Erdeniin san Subhashid”の話では恩知らずな男は国王に殺されたり、手が手首から落ちたりして必ず罰が当たっているのが、大きな相違点になっている。

ここで、各説話の原典からの伝承の問題も問われるが、「欲望は身を亡ぼす」といった重要な意味づけが潜んでいると言える。

また、各説話の登場人物の中で国王という身分の高い人物の決定によって主人公の鹿の運命が左右される⑨の項目であるが、結局鹿は殺されないで済むというのが共通点である。しかし、ここで日本の話はいずれも「今後、国の中の誰でも鹿を殺すことを禁泊する」という国王の宣旨が出されるが、モンゴルの話の場合、ルルが王宮に誘われ、王と妃に法を説くことになっているところが異なる点である。

最後に、表（1-2h）で両国の説話の結末を比べてみたうえでそれぞれの説話における地域的、民俗的特徴、変容を確認することができると思われる。

表（1-2h）両国の説話の結末による比較対照表

| 国    | 資料   | 結末  |
|------|--|---|
| 日本   | 「身の色九色の鹿、住山で河道助人語」<br>『今昔物語集』                        | 其ノ後、国ニ雨、時ニ随テ降り、荒キ風不吹ズ。国ノ内ニ病ヒナク、五穀豊饒ニシテ、貧シキ人ナカリケリ。         |
|      | 「五色鹿事」<br>『宇治拾遺物語』                                   | その後より、天下安全に、国土ゆたかなりけりとぞ。                                  |
| モンゴル | 182 dugaar bulgiin tailbar, “Erdeniin san Subhashid” | ルルを王宮に誘い、獅子座に座らせ、ルルが素晴らしい法を詳しく説くと、王、王妃、大臣は皆歓喜し、幸せになったという。 |

各説話の結末に見える相違点から各説話の地域的な変容と説話の文学的な性格が明らかに見えると考えられる。ここで、日本の説話の場合は、国王の功德のおかげで五穀豊穡に



なり、国が豊かになったというが、モンゴルの説話の結末は、鹿に法を説いてもらうことで皆幸せになったという設定になっている。

このような説話の変容から、五穀が豊かに実ることを祈願する日本人の農耕民族的感性をうかがい知ることができるであろう。それに対してモンゴルの説話の結末は、当時のモンゴルにおける仏教の教えを聴聞することに価値を見出そうとしている点が対照的である。

## 1.2-5. まとめ

本章では、モンゴルと日本に共通して伝承されている「鹿王」説話の比較対照考察を行い、各説話の共通点と相違点を探り、それぞれの説話に及ぼした地域的特徴の影響について検討してみた。

各説話に共通する内容は、自らを犠牲にして他を救う鹿の話である。その主人公である鹿の名称について詳細に比較をしてみると、中国の漢訳仏典に所収される説話では『賢愚経』以外は全て「鹿」となっているが、その他の地域では微妙な相違を見せていた。たとえばインドの説話では「ルルという種類の鹿」といわれ、日本では「かせぎ」・「鹿(シシ)」・「鹿(しか)」といわれ、モンゴルでは「ルル・グロウスン」・「グンダ・グロウスン」・「アラトゥ・グンダ」など名付けられている。特にモンゴルでは鹿としてのイメージが消えてしまっているのが特徴的であった。

また、この「鹿王」説話ではモンゴル・チベットにおける『賢愚経』の存在が注目されるであろう。すなわち、次に考察する「猿の生き胆」説話にみるように、インド起源の説話のほとんどがインドからチベットを経由してモンゴルに入ってくるのに対し、漢訳『賢愚経』がチベット語訳され、モンゴルに伝承されているという点である。この『賢愚経』の影響によって、主人公が鹿ではなくチベットでは、*gchan-gzan,dud-hgro*という訳語が用いられており、いずれも「野獣」という意味である。ここに漢訳経典からチベット・モンゴルへの影響をうかがい知ることができる。

その意味でこの「鹿王説話」は、通常の仏典の伝播とは異なる状況の一端をみることができる貴重な意義を有するものだと思われる。

## 1.2-6. チベットとモンゴルの「鹿王」説話の日本語訳

・モンゴル語説話の日本語訳

① 182 dugaar bulgiin tailbar, “Erdeniin san Subhashid”(Subhāṣitaratnanidhi), ed. by Ts.Damdinsuren, Ulaanbaatar 1990, pp.156-157

### 第4章 182句

貪食で、恩知らずは  
いくら親友でも信用するな  
大人にも、遠くの宿敵より  
施しを受けた親近の者が加害することが多き。

この格言に意味合いの物語は：

ワラナシの国で人足が届かないある森林の中にルルという名の菩薩グォロースン<sup>60</sup>がいた。一人の男が大きな川に落ちて、流されて大いに苦しんで助けを呼んでいるのをあのグォロースンは見て水から助け出した。その人は喜んで「あなたは私に命を与えたので私の家にいらしてください。私が供養します」と言うとルルグォロースンが答えた。「人間の好意と我々グォロースンの好意とは相違ます。ただ、私のことを他人に教えないでください。そうすれば、それが私を尊敬していることになります。」と言って森林に入った。

その時、ワラナシ国の王妃が、不思議で堂々としたグォロースンが獅子座に座り法を説く夢をみた。王妃はその夢のことを国王に知らせた。国王は「このようなグォロースンを見た者に対して王は賞を与える」とお触れを出した。すると、例の人がグォロースンの恩を忘れて、賞を欲しがり国王のそばに着いて「そのようなグォロースンが森林にいるのを私は見たことあります」と言った。

さて、国王がたくさんの軍隊とその男と連れて森林に行った。大勢の人の騒音を聞いたルルが逃げ去ろうとしたが、すでに軍が包囲しているのを見て、留まった。その男はルルを見て国王に「王様、あなたが求めているグォロースンはあれです」と言ってグォロースンのほうに手を挙げて教えようとすると同時に、かれの手は手首から落

<sup>60</sup> 「görügesü-n」大型草食動物 (cf. Я.Цэвэл “Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь” 1966 (ヤ. ツェヴェル著『モンゴル語例解辞典』 p.154)

ちた。王がルルを射ようとする、ルルがこう言った。「人の主よ、しばらくお待ちください。私のことを一体誰があなたに知らせたのですか」と聞くと王は矢の鉄先でその男を指示して、「この人に聞いた」と言うとルルがその男を見てこう言った。

悪意の人間を助けるより

大河に流れた

片木を拾うほうがましであると言う

老大家の言葉が真実の言葉である

真の善心で救助した恩を

見るに、君はこのように返しているか、と。

これを聞いた王は「あなたが誰についてこのように言うのか」と鹿に尋ねると、鹿は前のことを詳しく話した。

王は、その男に「確かなのか」と聞くと、「確かです」と答えると王が怒ってその男を射ようとした。するとルルがその間に立って王に言った「この破滅した者を殺さないでください。私は王様の命令に従います。この人に何か望むものがあればそれを与えてください」と。王は菩薩グォロースンの命令に従い、また王にルルを教えてくれた恩を意識してその男に賞を与え、ルルを王宮に誘い、獅子座に座らせると、ルルは素晴らしい法を詳しく説き、王、王妃、大臣は皆歓喜し、案じて幸せになったという。

② Kanjur Vol.90, “Üligerün dalai sudur”, 内蒙古人民出版社 1986年、第4章第15話、Günda görögesün bey-e-ben öggügsen-ü jüyil (「グンダというグォロースンの施身したこと」)

このように私は聞きました。ある時、最勝最尊は王宮があるガンダリグダ山<sup>61</sup>に滞在していた時、最勝最尊の身が病気になると、医師は32種の薬を油に混ぜて、毎日32ラン<sup>62</sup>の薬を最勝最尊に捧げて、召し上がっていただいた。

その時、デーヴァダッタが「私は釈尊と同じ」と言って、釈尊と同じ数の薬を欲しがって医師にこう言った。「釈尊が飲んでいる薬は私にもください」と言うと、医師が毎日4ランの薬を出した。デーヴァダッタは、「医師よ、君は今、釈尊に一日に何ラ

<sup>61</sup> 「Gandarigud」 bya rgod phung po'i ri, 「ハゲワシが備えた山」という意味。釈尊が説法を説いたインドの山 (cf. Д.Бүрнээ, Д.Энхтөр 2003, p.109)

<sup>62</sup> 「Lang」《中》重さの単位。37,3 グラム

ンの薬を出しているのか」と尋ねると、医師は、「32 ランの薬を出している」と答えた。デーヴァダッタは、「それなら私にも毎日 32 ランの薬をください」と言うと医師は、「釈尊の体はあなたと違う。あなたに釈尊と同じ量の薬を飲ませば、体に染み込まないから病気になるよ」と言った。それを聞いてデーヴァダッタは、「釈尊と私には何の違いもないよ。彼があれ程の薬を消化できるのならば私にもできるはずです。毎日釈尊と同じ量の薬をください」と言った。医師が言われた通りに釈尊と同じ 32 ランの薬をデーヴァダッタに出してあげたら、薬が全ての管脈に拡散し、デーヴァダッタは大いに苦勞し、大きな声で苦しみ嘆いた。

最勝最尊は彼を哀れに思い、遠くから手を伸ばしてデーヴァダッタの頭を撫でると、直ちに薬が全部しみ込み、痛みと苦しみから逃れることができた。デーヴァダッタは釈尊の手が頭上にあるのがわかったので、こう言った。

「目的を達した王<sup>63</sup>は薬を学び、その薬が得意になったとしても、私には要らない」。これを聞いたアナンダは釈尊の前で跪いて、「釈尊よ、慈悲の心でデーヴァダッタの病気を治してくれたのに、このデーヴァダッタは釈尊の恩を返さず、悪口で（釈尊）に反抗していますが、その理由はなんですか」と尋ねた。釈尊は、「アナンダよ、デーヴァダッタが私に反抗したのは今だけではない。過去世においても私に悪心をもって加害したことがたくさんある」と言って、過去のことを話された。

アナンダよ、大昔の過去世にワラナサという国に罪悪で貪欲、憤怒で罪業を歓喜する王がいた。あの王は夢で、毛が金のように、その体の金の光で王宮を左右に照らす、そんな素晴らしいグンダという名のグオロースンを見た。目が覚めた王は、「夢で見たグオロースンはこの世にいるに違いない。狩人に、その皮を取りに行かせよう」と決心し、国の全ての狩人を呼び、こう命令した。「狩人たちよ、聞きなさい。私の夢に金色で、毛先が金の光で輝くグオロースンが出た。このグオロースンはどこかにいるはずだ。あなた達はそのグオロースンを探して、その皮を私のところに持って来い。持ってきた者を今からの 7 世代幸せにしてやる。もし出来なかったら、全員を滅ぼしてやる」。その命令を受けた狩人たちが悩んで、ある人跡まれなところで夜を過ごし、このように相談した。

「国王が夢で見たあのグオロースンについて聞いたことも、見たこともない。あのグオロースンを私たちはどこに行っても見つけられない。王様は私たちを殺すに違いな

---

<sup>63</sup> 「Siddhārtha」 釈尊の本名 (cf. Д.Бүрнээ, Д.Энхтөр 2003, p.110)

い」と苦しみ嘆いた。またこう嘆いた。「私たち皆、この大森林の大蛇、恐ろしい獣が一杯いる遠いところへ自分の命をかけて行くことができない。もし私たちの中には自分の命を犠牲にして行きたい誰かがいないかな」と言うと、或る一人が、「こんなに勇気を持っている者がいて、その危ないところに行って、持って来るとしたら、その人に全ての財産を与えよう。もし、途中で死んで、帰ってこなくても、その子孫に財産を与えよう」と言った。すると、その中の一人が、「この人達の代わりに私一人で死んでもいい」と思って、「あなたたちの代わりに私一人で死んでも惜しまない」と言って、食べ物を用意して行った。

遠いところまで行って、食べ物もなくなり、夏の暑さ、空腹や疲れで苦労していると陶土に眩まで入り込んでしまった。それであのひとが悲痛な叫び声をあげ、「あゝ、大慈悲の心の誰かがいるならば、このような可哀そうな私の命を助けてくれ」と大きな声で泣くと、その時、その山に全身の毛が金色で、毛先から金の光を出すグンダ・グォロースンがいた。

グンダ・グォロースンは遠くからその男の声を聞いて、大慈悲の心を持ち、冷たい水の中に入り、その男のそばに着いた。そしてその男を抱いてその体を少し冷やしてから、水の近くに連れていき、入浴させ、果物を食べさせると男は生きかえり、そのグォロースンを見てこう思った。「王様が夢で見たのはこのグォロースンだ。私が死にそうになっているところを、命を助けてくれた。この恩を少しでも返すことができないとしても、せめて加害をしないほうがいい。しかし、グォロースンに加害をしないとしたら、あのたくさんの狩人たちが家族皆滅ばされてしまう。どうすればいいか」と心配して悩みで顔を暗くして座っているのをグォロースンが見て、尋ねた。「あゝ、人間よ、なんの理由でこんなに悩んだ顔をしているのか」と。その男は涙を流しながら、ここまで来た理由を話したら、グンダ・グォロースンは、「あゝ人間よ。それなら悩むな。私のこの皮を取るのとは簡単なことだ。私は今考えるのに、前世では無限に死んだことがあるが、一度も功德をしたことがない。今、この身の皮をあなたに与えて、あなたの命を救おう。あなたは、私を殺さないで、皮だけ取りなさい。後悔の思いなしに与えよう。」と言った。

狩人がゆっくりと皮を剥くとグンダ・グォロースンが次のように詩を唱えた。

皮をあなたに与えてたくさんの人の命を助けたこの功德を  
衆生のための功德とし

最高の菩薩道と無上仏道を得

衆生を苦より助け

無類な安樂を得られることを求める

その時、三千大千の世界が六種で震動すると、あらゆる天の宮殿も震え、全ての天の主が驚いて見れば、菩薩が自分の皮を布施したことを見て、天から地上に降りてきた。そしてグンダ・グォロースンのいる所に下りてきて、天から花を降らせて供養し、彼らの涙が雨のように降った。

皮を剥いで持って行かれた後、その体の肉から血が流れ出ると、蚊や蟻など多数の生き物がその体に集まり、肉を食べると、それらが押されて死なないようにグォロースンはちっとも動かないで全身の肉を与え終わると、死んだ。菩薩の肉を食べた生き物はそこから生まれ変わり、上類の天に生まれた。

その狩人がグンダ・グォロースンの皮を王に捧げると、王は大喜びし、「柔らかくて、類のない物だ」と褒めて、敷物にして一生その上で寝た。

アナンダよ、そのときのグンダ・グォロースンは今の私である。その時の王はデーヴァダッタで、グンダ・グォロースンの肉を食べた八万数の虫は、今の八万の天の子である。デーヴァダッタはその時も私を殺したが、今までも罪意の心で加害をしている。

釈尊がこのようにおっしゃるとアナンダや多くの友が功德の法を供養した故に、皆仏道が得られたという。ある者はバラディガブダの功德の基礎を築いた。ある者は無上の仏道を得た。その師子たち皆釈尊の説法を賛美した。グンダ・グォロースンが捨身したという十五条は終わり。

③ Zaya Bandida Namhaijamts 訳 “Üligiriin dalai” (Oirat version of Damamūkonāmasūtra) Ulanbator 1970

第4章 第14話 Arātu gūnda beyēn ögligü ögöqsen bölöq (アラトゥ・グンダが捨身した章)

このように私は聞きました、ある時、最勝最尊は王宮があるガンダリグダ山に滞在していた時、最勝最尊の身が病気になる、医師が32種の薬を油に混ぜて、毎日32ランの薬を最勝最尊に捧げて、召し上がらせた。

その時、デーヴァダッタが「私は釈尊と同じ」と言って、釈尊と同じ数の薬を欲し

がって医師にこう言った。「釈尊が飲んでる薬を私にもください」と言ったら、医師は毎日4ランの薬を出した。デーヴァダッタは、「医師よ、君は今釈尊に一日に何ランの薬を出しているか」と聞く。医師は、「32ランの薬を出している」と答えた。デーヴァダッタは、「それなら私にも毎日32ランの薬をください」と言うと医師が、「釈尊の体はあなたと違う。あなたに釈尊と同じ量の薬を飲ませば、体に染み込まないから病気になるよ」と言った。それを聞いてデーヴァダッタは、「釈尊と私には何の違いもないよ。彼があれほどの薬を消化できるなら私もできるはず。毎日釈尊と同じ量の薬をください」と言った。

医師が言われた通りに釈尊と同じく32ランの薬をデーヴァダッタに出してあげたら、薬が全ての管脈に拡散し、大いに苦労し、大きな声で苦しみ嘆いた。最勝最尊は彼を哀れに思い、遠くから手を伸ばしてデーヴァダッタの頭を撫でると、直ちに薬が全部しみ込み、痛みと苦しみから逃れるとデーヴァダッタは釈尊の手が頭の上にあるのがわかって、こう言った。「目的を達した王は薬を学び、薬が得意になったとしても、私には要らない」。

これを聞いたアナンダが釈尊の前で跪いて、「釈尊よ、慈悲の心でデーヴァダッタの病気を治してくれたのに、このデーヴァダッタは釈尊の恩を返さず、悪口で（釈尊）に反抗する理由はなんですか」と聞いた。釈尊は、「アナンダよ、デーヴァダッタが私に反抗したのは今だけではない。過去世においても私に悪心をもって加害したことがたくさんある」と言って、過去のことを話された。

アナンダよ、大昔の過去世にワラナシという国に罪悪で貪欲、憤怒で罪業を歓喜する王がいた。その時、あの王の夢に、毛が金のように、その体の金の光で王宮を左右に照らすそんな素晴らしいグンダという名のアラトゥ<sup>64</sup>を見た。目が覚めた王は、「夢で見たアラトゥはこの世にいるに違いない。狩人に、その皮を取りに行かせよう」と決心し、国の全ての狩人を呼び、こう命令した。「狩人たちよ、聞きなさい。私の夢に金色で、毛先が金の光で輝くアラトゥをみた。このアラトゥはどこかにいるはずだ。あなたたちそのグォロースンを探して、その皮を私に持って来い。持ってきた者を今からの7世代に幸せにしてやる。もし出来なかったら、全員を滅ぼしてやる」と。

---

<sup>64</sup> 「arātu」はモンゴル語の ariyatan という言葉の異形かと思われる。Я.Цэвэл “Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь” 1966（ヤ.ツェヴェル著『モンゴル語例解辞典』p.47では、(ariyatan) [獸、猛禽]とある。



その命令を受けた狩人たちが悩んで、ある人跡まれな所で夜を過ごし、このように相談した。「国王が夢で見たあのアラトゥについて聞いたことも、見たこともない。そのアラトゥを私たちどこ行っても見つけれない。今さら王様は私たちを殺すに違いない」と苦しみ嘆いた。またこう嘆いた、「私たち皆、この大森林には大蛇、恐ろしい獣が一杯いる遠いところへ自分の命をかけて行くことができない。もし私たちの中には自分の命を犠牲にして行きたい誰かがいないかな」と言うと、或る一人が、「こんなに勇気を持っている人がいて、その危ない所に行って、持って来るとしたら、その人にたくさんの財産を与えよう。もし、途中で死んで、帰って来なくても、その子孫に財産を与えよう」と言った。すると、その中の一人が、「この人達の代わりに私一人で死んでもいい」と思って、「あなたたちの代わりに私一人で死んでも惜しまない」と言って、食べ物を用意して行った。

遠いところまで行って、食べ物も終わり、夏の暑さ、空腹や疲れで苦労しているところを陶土に肱まで入り込んでしまった。それでその人が悲痛な叫び声をあげ、「あゝ、大慈悲の心の誰かいれば、こんな可哀そうな私の命を助けてくれ」と大きな声で泣くと、その時、その山に全身の毛が金色で、毛先から金の光を出すグンダ・グォロースンがいた。

グンダ・グォロースンが遠くからその男の声を聞いて、大慈悲の心を持ち、冷たい水の中に入り、その男のそばに着いた。そしてその男を抱いてその体を少し冷やしてから、水の近くに連れていき、入浴させ、果物を食べさせるとその男が生きがえり、グォロースンを見てこう思った。「王様が夢で見たのはこのグォロースンだ。私が死にそうになっているところを、命を助けてくれた。この恩を少しでも返すことができないとしても、せめて加害をしないほうがいい。しかし、グォロースンに加害をしないとしたら、あのたくさんの狩人たちが家族皆滅ぼされてしまう。どうすればいいか」と心配して悩みで顔を暗くして座っているのをグォロースンが見て、尋ねた。「あゝ、人間よ、なんの理由でこんなに悩んだ顔をしているのか」。

その男は涙を流しながら、ここまで来た理由を話したら、アラトゥ・グンダは、「あゝ人間よ。それなら悩むな。私のこの皮を取るのとは簡単なことだ。私は今考えるのに、前世では無限に死んだことがあるが、一度も功德をしたことがない。今、この身の皮をあなたに与えて、あなたの命を救おう。あなたは、私を殺さないで、皮だけ取りなさい。後悔の思いなしに与えよう」と言った。

あの狩人がゆっくりと皮を剥くとアラトゥ・グンダが次のように説を唱えた。

皮をあなたに与えてたくさんの人の命を助けた

この功德を衆生のための功德とし

最高の菩薩道と無上仏道を得て

衆生を苦より助け

無類な安楽を得られることを求める

その時、三千大千の世界が六種で震動するとあらゆる天の宮殿も震え、全ての天の主が驚いて見れば、菩薩が自分の皮を布施したことを見て、天から地上に降りてきた。そしてアラトゥ・グンダのいる處に下りてきて、天から花を降らせて供養し、彼らの涙が雨のように降った。

皮を剥いで持って行かれた後、その体の肉から血が流れ出ると、バタガナ<sup>65</sup>や蟻など多数の生き物がその体に集まり、肉を食べると、それらが押されて死なないようにアラトゥはちっとも動かないで全身の肉を与え終わると、死んだ。菩薩の肉を食べた虫等はそこから上類の天に生まれ変わった。

その狩人がアラトゥ・グンダの皮を王に捧げると、王は大喜びし、「柔らかくて、類のない物だ」と褒めて、敷物にして一生その上で寝た。

アナンダよ、そのときのアラトゥ・グンダは今の私である。その時の王はデーヴァダッタで、アラトゥ・グンダの肉を食べた八万数の虫は、今の八万の天の子である。デーヴァダッタはその時も私を殺したが、今までも罪意の心で加害をしている。

釈尊がこのようにおっしゃるとアナンダや多くの友が功德の法を供養した故に、皆仏道が得られたという。ある者はバラデガブダの功德の基礎を築いた。ある者は無上の仏道を得た。その師子たち皆釈尊の説法を賛美した。アラトゥ・グンダが捨身したという十四章は終わり。

---

<sup>65</sup> 「batagan-a」はえの一種。(Я.Цэвэл “Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь” 1966 (ヤ.ツェヴェル著『モンゴル語例解辞典』p.79)

## 第2章 日本とモンゴルにおいて共通して伝わった動物説話の文献伝の展開と変容の特徴

—「猿の生き胆」説話を中心に—

日本とモンゴルに共通なモチーフで伝承されている説話の一例として「猿の生き胆」といわれる動物譚の説話を取り上げ、その比較考察をしていきたい。

梵語やパーリ語などのインド文化圏における説話資料が東アジアまたは中央アジアに伝承するためには口承という形態をとらない。

翻訳による文献資料が核となって、その後民間に流布し、さまざまなバリエーションをもって各地域に伝承していくものと考えられる。

そこで「猿の生き胆」の研究においては、まず文献資料を精査していく必要があると考えられる。

古代インドの *Jātaka* 本生話と *Pañcatantra* (5巻の書) の物語を基にしたこの話は日本とモンゴルで、説話文献と仏教経典、そして口承伝の昔話といった様々な形で伝承されている。

この話の原典に当たる話は、古代インドの *Viṣṇuśarman* 作の “*Pañcatantra*” の第4巻の主話で、世界昔話類型分類 AT91 (Aarne, A. & Thompson, S. 1961) に分類されている。

アジア、そしてアラビア、ヨーロッパまで広く伝わっているこの説話の大筋としては、利口な猿が馬鹿なワニもしくは亀・蛙をだまして自分の心臓（もしくは生き肝）を取られずに済んだという内容である。

しかしながら文化、習慣、社会制度が異なるそれぞれの国では動物に対するイメージなども異なるのであって、以下にその相違点を列挙する。

この話は国や地域によって登場する動物や自然環境の舞台等が違っている点がみられ、起源話だったり、仏教の本生話だったり、友情話だったりして様々な話型に展開して伝承されている。「猿の生き胆」としての重要なモチーフが相違なく共通して伝わってきているということが、説話の伝承を研究する際、比較対照研究を行いやすいという利点もある。

本章で、日本とモンゴルに文献で伝わった「猿の生き肝」説話を対象にして比較考察をする。文献におけるこの説話が口承伝の話とどのような伝播の特徴をもって伝承されて、展開してきたか、そしてその変容における影響の有無について確認してみたい。

インド起源の説話が、広い地域と長い期間にわたって日本とモンゴルに伝わり、その地

域の説話として定着するのにどのような変容を受けているかを検討することに研究重点をおいている。

## 第1節 「猿の生き胆」説話に関する先行研究の検討

### 2.1-1. 日本の「猿の生き胆」説話とその先行研究

日本で「猿の生き胆」として知られているこの説話の基になる文献としては、古代インドの *Jātaka* 本生譚とその漢訳仏典、または古代インドの寓話集 *Pañcatantra* の物語があり、長い歴史を超えて、広い地域に亘り日本まで伝承されている。

中世以降に日本の文献で見えるようになった「猿の生き胆」説話は、『注好選』巻下第13「猿は退きて海底の華謀ける」・『今昔物語集』巻第5「亀、為猿被謀語」・『沙石集』「猿の生き胆」・『沙石集』〔3〕「蚪と猿の生き胆」・『月庵醉醒記』〔100 - 37〕等の文献に収録されている。

口承伝の話として「くらげ骨なし」の昔話があり、この「猿の生き胆」の話は沖縄から日本本土にわたり北海道、アイヌ地方まで日本中に広く展開し、主人公が地域によって相当地に多様化されている。

以下に日本の口承伝の「くらげ骨なし」昔話の粗筋を立石展大『日中民間説話の比較研究』2013を参照にして紹介する。

思い病気にかかった竜宮の乙姫が、占者に猿の生き胆を食べれば病気が治ると言われる。陸上に行って猿の生き胆を取って来るように竜宮の王に命令された亀が、猿に竜宮を見せるとだまして連れて来る。すると、竜宮の門番のくらげが猿にその生き胆を取るために連れて来たことを告げてしまう。そこで猿が自分の生き胆を木に干したまま置いて来てしまったので、取りに戻るように亀に言う。猿の言葉を信じた亀がまた猿を背に乗せて戻ると猿が陸上に着いたら、素早く逃げてしまう。

事実を漏らして、猿を逃がしたくらげがその罰として骨が抜かれてしまう。

以上、日本で伝わった「猿の生き胆」の口承伝の代表として「くらげ骨なし」昔話の粗筋であるが、この話はくらげの骨が抜かれた由来話として日本中に語られている。また地域によってタコの骨が抜かれた由来（青森県、山形県上山市、山口県、沖縄、鹿児島県）、亀の甲羅にひびができた由来（宮城県、山形県、新潟県、島根県、沖縄県、長崎県）、カレイ（長崎県）とヒラメ（新潟県長岡市、鹿児島県）、または蟹（沖縄県）の体形の由来を説く話になっている。このように日本の口承伝の話は動物の体の形状由来について語る起源

話になっているのが特徴である<sup>66</sup>。

日本でこの「猿の生き胆」説話文献に関する研究や口承の「猿の生き胆」の研究、そして日本と中国の話の比較研究等がなされている。

立石展大氏が『日中民間説話の比較研究』2013において、中国から文献資料で入ってきた「猿の生き胆」の話が日本で伝承されていくうちに、現在の口承で採集される資料の形になったという従来の考え方がある。一方、今まで考えられていた文献による伝播とは別の口承による伝播に道筋があるとみて、その点を明らかにするために日本と中国の文献伝と口承伝の「猿の生き胆」の話の比較研究をしている。

以下に日本の各地に口承で伝わった「猿の生き肝」説話の分布を示す。

表 (2-1a) [立石展大『日中民間説話の比較研究』2013 を参照に]

| 県   | 地域           | 狙う動物 | 狙われる動物<br>・部位 | 欲しがる者<br>・取る理由 |
|-----|--------------|------|---------------|----------------|
| 北海道 | 石狩・旭川市近文     | トド   | 兎・心臓          | 海の神の娘・病気       |
|     | 宗谷・稚内市       | トド   | 兎・肝           | 海亀の妹・病気        |
|     | 日高・沙流郡門別町福満  | 鯪神の子 | 兎の大將・肝        | 海主の翁神様の娘・重病    |
|     | 沙流郡門別町       | トド   | 兎の大將・肉        | 海の神の娘・重病       |
|     | 日高・沙流郡平取町二風俗 | トド   | 兎・生き肝         | 海野神の娘・病気       |
| 青森  | 下北郡佐井村磯谷     | くらげ  | 猿・生き肝         | 海の竜宮・病気        |
|     | 三戸郡五戸町       | 鮭    | 猿・肝           | 海の竜宮           |
| 宮城  | 栗原郡高清水町小山田   | くらげ  | 猿・生き肝         | 竜宮の乙姫・具合が悪い    |
|     | 栗原郡若柳町川原     | 亀    | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・お産       |
|     | 仙台市富沢        | 亀    | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・病気       |
|     | 多賀城市東田中      | 亀    | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・安産       |
|     | 登米郡南方町青島     | 亀    | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・重病       |
| 山形  | 上山市          | たこ   | 猿・肝の黒焼き       | 龍宮の乙姫・病気       |

<sup>66</sup> 本節の表 (2-1a) を参照にした

|    |            |       |        |             |
|----|------------|-------|--------|-------------|
|    |            | ・いか   |        |             |
|    | 上山市檜下      | たこ・いか | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・癩     |
|    | 上山市檜下      | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・癩     |
|    | 南陽市小岩沢     | 亀     | 猿・生き肝  | 乙姫・病気       |
|    | 西置賜郡白鷹町折居  | 亀     | 猿・肝    | 亀の子・病気      |
| 福島 | 福島市        | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・病気    |
| 群馬 | 新田郡藪塚本町大久保 | くらげ   | 猿・生き肝  | 海の殿様の奥様・病気  |
| 千葉 | 安房郡白浜町原    | くらげ   | 猿・生き肝  | 龍宮の姫・病気     |
| 埼玉 | 川越市小仙波町    | 亀     | 山猿・生き肝 | 龍宮の乙姫・重病    |
|    | 比企郡吉見町     | 大亀    | 猿・肝    | 海底の宮殿の王女・病気 |
| 東京 | 大田区羽田      | くらげ   | 猿・肝    | 乙姫の娘・病気     |
| 新潟 | 東頸城郡松代町    | くらげ   | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・具合が悪い |
|    | 小千谷市朝日     | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 北蒲原郡豊浦町切梅  | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 北蒲原郡安田町    | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 古志郡山古志村虫亀  | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 新発田市竜谷     | くらげ   | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 栃尾市小向      | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 長岡市麻生田     | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 長岡市上除町     | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 長岡市成願寺町    | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 長岡市高見町     | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 長岡市竜谷      | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 長岡市豊島町     | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |
|    | 長岡市西蔵王町    | 亀     | 猿・生き肝  | 龍宮の乙姫・不明    |

|     |             |           |               |             |
|-----|-------------|-----------|---------------|-------------|
|     | 長岡市平島町      | 亀         | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・不明    |
|     | 中蒲原郡村松町上町   | 亀         | 猿・生き肝         | 不明          |
|     | 中蒲原郡村松南田中   | 亀         | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・不明    |
|     | 西蒲原郡吉田町下中野  | 亀         | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・不明    |
|     | 両津市水津       | 大だこ       | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・不明    |
| 富山  | 射水郡小杉町黒河    | 海月        | 猿・肝           | 龍の乙姫・病気     |
| 石川  | 小松市今江町      | 亀         | 猿・肝           | 乙姫・不明       |
| 福井  | 坂井郡三国町      | 雄蛇        | 猿・生き肝         | 雌蛇・難産       |
| 山梨  | 西八代郡石川大門町黒沢 | くらげ       | 猿・生き肝         | 乙姫・病気       |
| 長野  | 上伊那郡辰野町川島横川 | くらげ       | 猿・生き肝         | 海の王・病気      |
| 岐阜  | 大野郡丹生川村     | 河童        | 猿か申年に生まれた人・不明 | 乙姫・病気       |
| 京都  | 与謝郡伊根町成     | くらげ       | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・病気    |
| 三重  | 志摩郡志摩町      | 亀         | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・具合が悪い |
|     | 志摩郡志摩町      | 亀         | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・病気    |
| 大阪  | 高石市高石町      | くらげ       | 猿・肝           | 龍宮の乙姫・病気    |
|     | 高石市高石町      | くらげ       | 猿・肝           | 龍宮の乙姫・病気    |
| 和歌山 | 志摩郡志摩町      | 亀         | 猿・肝           | 乙姫・病気       |
|     | 伊都郡高野町杖ヶ藪   | くらげ       | 猿・肝           | 龍宮のお妃・病気    |
| 兵庫  | 美方郡村岡町味取    | わに        | 猿・生き肝         | わにの母・病気     |
|     | 津名郡淡路町岩屋    | 亀         | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・病気    |
|     | 美方郡村岡町市原    | 出入りの医者    | 猿・肝           | 村の一人息子・病気   |
| 鳥取  | 東伯郡関金明高     | 亀         | 猿・肝           | 龍宮の乙姫・病気    |
|     | 邑智郡川本町      | 亀         | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・病気    |
|     | 邑智郡川本町      | 鯛、鮪、鯉、くらげ | 猿・生き肝         | 龍宮の乙姫・病気    |



|    |           |      |       |             |
|----|-----------|------|-------|-------------|
|    | 邑智郡大和村    | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の乙姫・病気    |
|    | 隠岐郡知夫村多沢  | 亀    | 猿・生き肝 | 長者の妻・病気     |
|    | 隠岐郡       | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の乙姫・病気    |
|    | 能義郡広瀬町    | くらげ  | 猿・生き肝 | 志摩の殿様・病気    |
|    | 松江市       | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の乙姫・病気    |
| 岡山 | 阿哲郡哲西町八鳥  | くらげ  | 猿・生き肝 | 乙姫・病気       |
|    | 阿哲郡哲西町川南  | 家来   | 猿・生き肝 | 龍宮の乙姫・病気    |
|    | 阿哲郡哲西町畑木  | たこ   | 猿・生き肝 | 龍宮の乙姫・病     |
| 山口 | 大島郡東和町長崎  | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の乙姫・身体が悪い |
| 広島 | 甲奴郡上下町    | たこ   | 猿・肝   | 分限者の姫・病気    |
|    | 甲奴郡上下町    | 河童   | 猿・肝   | 分限者のお嬢様・病気  |
| 高知 | 高知市仁井田    | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の乙姫・目が悪い  |
| 沖縄 | 石垣市登野城    | たこ・亀 | 猿・生き肝 | 龍の王・病気      |
|    | 石垣市石垣     | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の神・病気     |
|    | 石垣市白保     | たこ・亀 | 猿・生き肝 | 龍宮の神・病気     |
|    | 石垣市白保     | 海亀   | 猿・生き肝 | 龍宮の王・病気     |
|    | 石垣市新川     | 亀    | 猿・肝   | 龍宮の神・病気     |
|    | 石垣市登野城    | 亀    | 猿・肝   | 竜宮の姫        |
|    | 石垣市宮良     | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の王・病気     |
|    | 国頭郡恩納村谷茶  | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮神の子・病気    |
|    | 中頭郡与那城村桃原 | 亀    | 猿・心臓  | 龍宮の神・病気     |
|    | 中頭郡読谷村伊良皆 | 亀    | 猿・生き肝 | 竜宮の姫・病気     |
|    | 那覇市宇栄原    | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の神・病気     |
|    | 那覇市松尾     | くらげ  | 猿・生き肝 | 海の中の神様・病気   |
|    | 那覇市寄宮     | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の王・病気     |
|    | 平良市池間     | 亀    | 猿・生き肝 | 龍宮の王・病気     |

|          |    |       |           |
|----------|----|-------|-----------|
| 平良市池間    | 亀  | 猿・生き肝 | 龍宮の王・病気   |
| 平良市池間島   | 亀  | 猿・生き肝 | 龍宮の王・病気   |
| 平良市前里    | 亀  | 猿・生き肝 | 龍宮の王・病気   |
| 宮古郡上原村大嶺 | たこ | 猿・生き肝 | 龍宮の神の娘・病気 |
| 宮古郡上原村豊原 | 亀  | 猿・生き肝 | 海の王様・病気   |
| 宮古郡城辺町   | 亀  | 猿・生き肝 | 龍宮の姫・病気   |
| 八重山郡竹富町  | 亀  | 猿・肝   | 海の王・病気    |
| 八重山郡竹富町  | 亀  | 猿・肝   | 海の神様・病気   |

立石展大氏は、日本の口承で伝わる「猿の生き胆」の 145 話について考察を加え、説話の中に竜宮や海の神などが登場するのは、145 話中 139 話であるとした。その上で、『今昔物語集』、『沙石集』に見られる「猿の生き胆」と同じ構造を持っている話は、表中では福井県坂井郡三国町の「猿と龍（蛇）話」と兵庫県美方郡村岡町味取の「ワニと猿の話」のわずか 2 話のみであることを指摘している。

さらに立石展大氏は次のように述べている。

つまり、わが国における口承の「猿の生き胆」は、文献に見られる話から離れ、舞台を竜宮などに移している。そして海に関係があり、ある程度特徴的な姿の動物の形状由来を説くことに重点を置くようになったといえる<sup>67</sup>。

日本の昔話の「くらげ骨なし」の伝承と特徴について徳田和夫氏の研究<sup>68</sup>があるので以下に引用する。

(前略) クラゲの形状の由来を説明するものである。江戸末期の赤本『猿のいきぎも』はこの展開に忠実なものとなっている。赤本の存在や滝沢馬琴が、『燕石雑誌』(文化 6 年・1809 序) 巻の 4 で「猿の生肝」と題して、次のように述べている。

童話 = 云く、竜王の女少病で、猿の肝の炙を嗜り。よりに亀を島山へ遣し、猿を謀て具闕へ誘引せしが、門卒なりける海蛇そと謀を漏せし程に、猿又偽りて、わが胆は乾して、島山なる林にあり。しばし放てかへらし給はゞ、携へ来てまゐらせんとて、脱去りしといふ本文は、祖庭事苑に見えたり。(日本随筆大成第 2 期 19)

<sup>67</sup> 立石展大『日中民間説話の比較研究』2013、p.28

<sup>68</sup> 徳田和夫「民間説話と古文獻」——『月菴醉醒記』の「猫と茶釜の蓋」「くらげ骨なし」を紹介しつつ、大林太良・他編『民間説話の研究』同朋舎 1987、pp.228 - 233

と考証する冒頭に、「童話」として明記していることや、遡って風流山人源内が戯作『根南志具佐』（宝暦13年・1763序）の巻5で、

昔も乙姫病氣の時、猿の生き胆の御用に付き、水母に押し仰せ付けられしを、いはれぬ口をしゃべりし故、龍神のいかりを請け、筋骨ぬかれてかたわらとなり、恥を残せしためしもあり。（日本古典文学大系『風来山人集』）

と簡略に引き合いにする例によれば、「くらげ骨なし」は江戸後期では普く知られるところのものといえよう<sup>69</sup>。

また続いて次のよう述べている。

中世文献には、「くらげ骨なし」との類話が見られないとしている。そのことについて、『今昔物語集』と『沙石集』の話は、昔話の記録というよりは、漢訳仏典の系列の翻訳、流伝のそれというべきものである。（中略）いずれにしても昔話でいう「くらげ骨なし」の叙述ではない<sup>70</sup>。

さらに『月庵醒醉記』について次のように述べている。

一竜宮の乙姫なやみ給ふに、猿の生き肝、薬なりとて、亀に仰ければ、山かけたる。汀に浮か出て、對猿申やう、竜宮浄土みたくは、我か甲にのりてみよといひければ、悦てのる。則、龍池に行ければ、海月か告て曰、汝かいききもとらむとのたばかりなりといふ。猿は是を聞きて對亀なやむこゝちしていふやう、樹上にきもをほしてをきたりしを忘れて爰にきたりて、しぬべくならぬ。あなかなしや、といひければ、亀おもふやう、生き肝の用なりしを、いかゝせむと思ひ、さらは又、我甲に乗て帰りて、肝を取てこよといふ。則、かへりて、高岸に飛上て、亀を大笑す。海月はほねを抜かるゝ。

古句云、猿駄乗<sub>レ</sub>鼈北<sub>ニ</sub>心肝掛<sub>レ</sub>樹上<sub>ニ</sub>

という説話の最後の5言の古句は『月庵醒醉記』より以前にあった文献の引用で、

民間説話が中世の古典説話として享受され、それ故の“昔話”としての中世説話にあたる面が説話集や物語書といった作品ではなく、こうしたナマの古文献の需要によっていよいよ明らかになってこよう。

<sup>69</sup> 徳田和夫「民間説話と古文献」——『月庵醒醉記』の「猫と茶釜の蓋」「くらげ骨なし」を紹介しつつ、大林太良・他編『民間説話の研究』同朋舎1987、p.229

<sup>70</sup> 同上、p.230

と述べ、「くらげ骨なし」を歴史的に長い伝承をもっているとみている<sup>71</sup>。

このように、日本における「猿の生き胆」説話の口承伝と文献伝承に関する研究が数多くなされている中、比較説話研究の面では、日中の「猿の生き胆」説話の比較もあるが、モンゴルと日本の「猿の生き胆」の比較研究がなされていない。

---

<sup>71</sup> 徳田和夫「民間説話と古文献」——『月菴醉醒記』の「猫と茶釜の蓋」「くらげ骨なし」を紹介しつつ、大林太良・他編『民間説話の研究』同朋舎 1987、p.231

## 2.1-2. モンゴルの「猿の生き肝」説話とその先行研究

「猿の生き胆」説話はモンゴル人民の中で *Melkhii sarmagchin hoyor* (*Yast melhii bich*<sup>72</sup> *hoyor* とも) (「蛙と猿」、あるいは「亀と猿」という題名で語られ、または説話文献でも知られている。

上述のように、日本で説話文献だけでなく、口承で数多く伝承されているこの「猿の生き胆」の話は、モンゴルでは、文献による伝承が多く、口承伝の話が少ないのである。

モンゴルの「猿の生き肝」説話に関する文献研究が、ロシアのモンゴル学者 *B.Ya.Vladimirtsov*、*A.V.Burdukov*、モンゴル人科学者 *Ts.Damdinsuren* 等によってなされているが、この「猿の生き胆」説話そのものに関する研究があまりなされていないのが事実である。

インドの *Pañcatantra* の最初のモンゴル語訳について *V.Ya.Vladimirtsov* が “*Монгольский сборник рассказов из Pañcatantra*” (*Mongolskii sbornik rasskazov iz Pañcatantra*) 1921 (『パンチャタントラからのモンゴルの物語』) において次のように述べている。

13世紀頃、*Pañcatantra* のペルシア語訳である *Ibn al-Muqaffa* の *Kitāb Kalila wa Dimna* (『カリーラとディムナ書』) をモンゴル語に訳し、*Munkh hagan* (ムンフ・ハーン) に読ませていたとされるが、その原本は残されていない<sup>73</sup>。

モンゴルに伝わった「猿の生き肝」として次の話がある。

・ “*Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg hemēgdeh orshvoi*”, *Adiltgaval yast melhii sarmagchnīg hūrsan met khemēsen ni*.

モンゴルの “*Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg hemēgdeh orshvoi*” という説話集の成立についてモンゴル科学者 *Ts.Damdinsuren* 氏が “*Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg*”, *Ulanbator* 1961 において次のように述べている。

1779年に *Tsahar Gevsh Luvsantsultem* (1740–1810)<sup>74</sup> がチベット語からモ

<sup>72</sup> 「bich(n)」 猿の異称

<sup>73</sup> Б.Я.Владимирцов “Монгольский сборник рассказов из Pañcatantra” 1921, p.80

<sup>74</sup> 1740年8月3日に *Tsahar* の遊牧民 *Tsegenjol* の長男として生れたモンゴルの作者、翻訳者。著書には、歴史や文学に関する理論書、または『*Bogd Zonkova* 伝記』がある。又、*Nāgārjuna* の “*Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdar*” (1779) と *Sakya pandita* の “*Esdeniin san Subashid*” とその解

ンゴル語に翻訳し、Tsagaan uulin sum で木版を出したとされるが、その原本が残されてない。この説話集の原本について Tsahar Gevsh Luvsantsuldem の伝記に、「古代インドの Nāgārjuna (龍樹) 作の “Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdar” (Nāgārjuna “Ni-tis 'astvajantupos an abindu na-ma” (『修身論生者養育滴』) をチベット語からモンゴル語に訳したときに、その解説として “Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg hemēgdeh orshvoi” という 37 話が入っている説話集を訳して出版した」と記されている。Nāgārjuna (龍樹) 作の “Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdar” をインドの Pandita Shilendra Bodhi とチベットの訳者 Yeshige 等がサンスクリット語からチベット語に翻訳したとされる<sup>75</sup>。

・ Б.Я.Владимирцов “Монгольский сборник рассказов из Раñcatantra”

Ert urid negen tsagtu menehei sarmagchin qoyar nōqōr bolugsan hemehu anu

ロシア人学者 V.Ya.Vladimirtsov がモンゴルに分布されている物語をモンゴル語とロシア語訳と共に Б.Я.Владимирцов “Монгольский сборник рассказов из Раñcatantra” 1921 において収録している。この本に収録されている物語の中に A.V.Burdukov 氏が西モンゴルのオイラト族を巡検し収集したときに、Lu gunii qoshuu の Gonchig van という人が語った 17 の物語を記したのが入っており、その一つは Ert urid negen tsagtu menehei sarmagchin qoyar nōqōr bolugsan hemehu anu (「昔、あるとき蛙と猿が友達であったということ」) という物語がある。V.Ya.Vladimirtsov 氏がこの Burdukov 氏テキストを原本のまま (字の間違いや方言等) 収録している。この Burdukov 氏の 17 の物語について V.Ya.Vladimirtsov 氏が “Монгольский сборник рассказов из Раñcatantra” において次のように述べている。

この物語はチベット語からの翻訳とされるが、Burdukov 氏の 17 の物語集の表現がモンゴルの口承伝の表現に近くて、(中略) 例えば、モンゴル語の「Та (あなた)」と「Чи (君)」の使い分けがしっかり決められてないことや方言の表現が多く使われていることから見れば、チベット語からの重訳とは考えられない。また、ここで登場する動物は草原や野原、そして洞穴に住んでいるように語られている。このよ

---

説(1799)、第5世 Dalai lam Luvsanjamts の “Suvdan erhi” (1787) 等をチベット語からモンゴル語に翻訳した。[Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав 1990, p.209]

<sup>75</sup> Ts.Damdinsuren emh “Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg”, Ulanbator 1961, p.37

うに他の定住民族の話をモンゴルの自然環境に相応しく変えているから、よりモンゴルの話になっている。例えば、Ert urid negen tsagtu menehei sarmagchin qoyar nōqōr bolugsan hemehu anu (「昔、あるとき蛙と猿が友達であったということ」) 話では、蛙が猿を、自分の家にお茶を飲みに来るように誘っているのが、他の国の類話にみえない<sup>76</sup> (後略)。

- “Erdeniin chimeg” Melhii bich hoyoriin nuhurlusun tuhai ulger (Ts.Damdinsuren “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai”)

現存の説話集を Ts.Damdinsuren 氏が、buriad (ブリヤート族) Delger Galzanjamba が編集した写本とチベット語原本を対照しながら編集したとしている。

- Д.Цэрэнсодном эмх “Монгол ардын үлгэр”, Улаанбаатар 1982

#### Мэлхий сармагчин хоёр

D.Tserensodnom 氏がこの『モンゴル民話』において、モンゴルの遊牧民の中に口承で伝わってきた昔話を編集している。ここで、収録されている「蛙と猿」の話について編集者が、「この話のモチーフは、古代インドの Pañcatantra の話に見える。このような話は、昔から我が国に口伝で広がり、モンゴル人の日常生活の影響を受けて、モンゴル独特な特徴を成している」<sup>77</sup>と述べている。

以上のように、モンゴルに伝わった「猿の生き胆」説話について関する先行研究があまり見えないが、その文献資料に関する先行研究の成果をまとめることで、本説話の伝承と特徴について確認したい。

<sup>76</sup> Б.Я.Владимирцов “Монгольский сборник рассказов из Pañcatantra” 1921, p.97

<sup>77</sup> Д.Цэрэнсодном эмх “Монгол ардын үлгэр” Улаанбаатар 2015, p.17

### 2.1-3. 本章で取り扱う各地域の「猿の生き胆」説話の資料について

そこで日本とモンゴルの資料とともにインド・チベットの資料をも列挙しよう。まずその概要は以下の通りである

・インドの説話資料

#### ① Kale,M.R. Pañcatantra of Viṣṇuśarman Delhi-Varanashi-Patna.2nd ed.1969

古代インドの Viṣṇuśarman が作った寓話集である Pañcatantra は、世界中に分布範囲率でキリスト教の聖書の次、2 番目になるとされる有名な作品である。Pañcatantra の成立年代が 1 世紀ごろ作られ、6 世紀頃にペルシア、アラビア、グREGにまで伝播された。原本が亡失したが、複数の伝本があり、570 年頃ペルシア語の Kalila wa Dimna (『カリラとディムナ書』) という題名で翻訳されて以来、ヨーロッパへ伝承され、現在世界の 70 ヶの言語で 200 か国に翻訳されている<sup>78</sup>。

ここで取り扱っている Kale,M.R. Pañcatantra of Viṣṇuśarman の第 4 巻の主話の粗筋を以下に紹介する。

昔、海の付近のジャンプ樹に「赤尻」という猿が住んでいたとき、「黒口」というワニが海の中から出てきて、二匹は義兄弟になった。二匹は、海岸で美味しい果物を食べながら、面白いお話をして、毎日を仲良く、楽しく過ごしていた。

猿がワニの奥さんに毎日おいしい果物をお土産に送っていると、ワニの妻が「こんな美味しい果物を毎日食べている猿の心臓がきっと美味しいはずだ」と思って、夫のワニに、「猿の心臓を持って来ないと断食して死んでしまう」と言う。

夫のワニが猿を「我が家に来てください」と誘って、背中に乗せて海の中に入る。途中でワニが猿の心臓を取りたいことを言ってしまう。猿が、海岸のジャンプ樹の穴の中に心臓を隠しているから、取りにもどるように言うとワニが猿にだまされて、海岸に戻る。

猿、陸上に着くと、ジャンプ樹の上に跳び上がって、裏切りのワニを二度と戻って来ないように追い払って、逃げて行く。

この話の日本とモンゴルにおける口承伝や文献伝播の比較考察を通して話の展開、伝播の特徴、流伝による話の変容について確認する。

<sup>78</sup> 関敬吾監修『アジアの民話 12 パンチャタントラ』大日本会画、1980、p.498



② 「猿王前生物語」、Jātaka 第 57 話 (『ジャータカ全集 1』)

インドの Jātaka は、1 世紀ごろ<sup>79</sup>成立された仏教本生話集である。

「猿の生き肝」説話がみられる一番古い文献で、これが漢訳仏典、さらに種々の説話集に伝わっている。

ここで、中村元監修・補注『ジャータカ全集 1』春秋社 1984 の「猿王前生物語」を取り扱っている。

以下、Jātaka の「猿王前生物語」の粗筋である。

昔、ボーディサッタは猿の胎内に生まれて、一人で川の岸に住んでいた。ボーディサッタは毎日、川の間にある小島でさまざまな種類の果物を食べて暮らしていた。またその川に住んでいるワニの妻が身ごもっているため、ボーディサッタの心臓の肉を食べたくなったので、夫のワニが夕方に小島から帰ってくるボーディサッタを捕まえようと思って水面より出ている岩の上で伏せていた。ボーディサッタは、いつもより高く見える岩を調べてみようと思って、三度も「岩くん」と呼ぶと、「きっと、別の日には、この岩は猿の王に返事をしていたのだ。今度はかれに返事をしよう」と考えて返事をしてしまう。ワニがボーディサッタの心臓を取るために来ているのを聞いたボーディサッタはワニをだまして、川の向こうの岸に渡ることができた。ワニは、賢いボーディサッタを褒め称えて、自分の住処へ帰った。

「そのときのワニは、デーヴァダッタであり、その妻は、バラモンの女チンチャー、そして猿の王は実にわたくしであった」と。

③ 「ワニ前生物語」、Jātaka 第 208 話 (『ジャータカ全集 3』)

説話の粗筋

むかし、ボーディサッタはヒマラヤ地方で猿の胎内に生まれ、ガンガ河が曲がっているあたりの森の中に住んでいた。

そのころ、ガンガ河には一匹のワニが住んでいた。そのワニの妻は身ごもっているために、ボーディサッタの身体を見て、その生の心臓の肉が食べたくなる。

夫のワニは、ボーディサッタを「ガンガ河のむこう岸に、マンゴーやらパンの木の实やら、おいしいくだものが沢山あるので、連れて行ってあげる」とだまして、猿を背中に乗せた。水中に入ったワニは、猿の心臓を取りたいと言う。猿は「私た

---

<sup>79</sup> 岩野眞雄 1935、p.IV

ちの心臓が一本のウドゥンバラの木にぶらさがっている。あそこへ連れて行ってくれば、心臓をおまえにあげよう」と言ったら、ワニがボーディサッタを背中に乗せて戻って行った。ウドゥンバラの木に着いたら、ボーディサッタが木に登って、「おまえの身体は大きいけれど、智慧はちっともないんだね、おまえはわたしたちにだまされた」と罵った。

ワニは千金を失ったかのように悲しみ、心も重く、意気消沈して、自分のすみかへ帰っていった。

・中国の説話資料

『六度集経』(T3 no.152,19b24-19c17)

戒如是昔者菩薩。無數劫時。兄弟資貨求利養親。之于異國。令弟以珠現其國王。王覩弟顏華欣然可之。以女許焉。求珠千萬。弟還告兄。兄追之王所。王又覩兄容貌堂堂。言輒聖典。雅相難齊。王重嘉焉。轉女許之。女情決豫兄心存曰。壻伯即父。叔妻即子。斯有父子之親。豈有嫁娶之道乎。斯王處人君之尊。而爲禽獸之行。即引弟退。女登臺望曰。吾爲蠱食兄肝可乎。展轉生死。兄爲獼猴。女與弟俱爲鼈。鼈妻有疾。思食獼猴肝。雄行求焉。覩獼猴下飲。鼈曰。爾嘗觀樂乎。答曰。未也。曰吾含有妙樂。爾欲觀乎。曰然。\*鼈曰。爾昇吾背。將爾觀矣。昇背隨焉半谿。\*鼈曰。吾妻思食爾肝。水中何樂之有乎獼猴心忪然曰。夫戒守善之常也。權濟難之大矣。曰爾不早云。吾以肝懸彼樹上。鼈信而還。獼猴上岸曰。死\*鼈蟲豈有腹中肝而當懸樹者乎。佛告諸比丘。兄者即吾身是也。常執貞淨。終不犯淫亂。畢宿餘殃墮獼猴中。弟及王女俱受鼈身。雄者調達是。雌者調達妻是。菩薩執志度無極行持戒如是

話の粗筋を以下に紹介する。

昔、菩薩が兄弟で異国へ行った時、異国の王が王女をその兄弟に与えようとしたのに兄は許さなかった。兄弟に恨んだ王女が、兄の肝を食べてやると言って呪った。

その後、兄弟が転生し、兄が獼猴に、弟と王女が鼈の夫婦に生まれ変わった。鼈の妻が薬として猿の肝を欲しがる。夫の鼈が妻の願いで獼猴の肝を取りに行く。鼈は猿に「楽を見せる」とだまして背中に乗せて水中に入るが、途中で夫の鼈が「猿の肝を取りたい」と事実を言う。「吾の肝は樹に懸けてあるから取りに戻ろう」と言う猿の言葉を信じた鼈が戻る。岸に着いたら、猿が逃げてしまう。

その時の雄の鼈は今の調達で、雌の調達は調達の妻である。菩薩は執志し、無極

を度し、持戒を行うこと是の如し。

・日本の説話資料

① 「猿は退きて海底の菓を嘲ける」、『注好選』巻下第 13 話

上・中・下の三巻からなるこの古事・説話集の成立について馬淵和夫氏が『日本の心 日本の説話一』1987において「著者未詳で、成立年次は確定得ないが、『今昔物語集』の一出典とみられることから12世紀初めに成立していると推定される。序及び内容から推すに、本来は童蒙教訓、特に貴族・官僚・寺家の子弟教育の資として編集されたもので、撰者も学僧または儒仏兼学の儒者であろう」と述べている。

『注好選』の成立年代についてであるが、『日本文学大年表』1986において「1152年、これ以前になる」<sup>80</sup>と示していることを参照にした。

この話の原拠は、『生経』巻1「鼈獼猴経」第10<sup>81</sup>であり、『六度集経』巻4の36話、『法苑珠林』にも類話が存在するという。

ここで、『注好選』巻下、第13話、「猿は退きて海底の菓を嘲ける」の本文を紹介する。

昔、海辺の山に一つの獼猴有り。木の実を喰ふ。即ち海底に二つの亀有り。夫婦なり。婦の云はく、「吾汝が子を懐めり。而るに、腹の病有りて産み難し。汝吾に吉き菓を食はせば、平かに身を存して汝が子を産まむ」と。時に夫の云はく、「何なる菓をか用ずべき」と。答へて云はく、「吾聞く、猿の肝は是腹の病の第一の菓なりと。吾之を得むと欲ふ」と。時に夫海岸に至りて、彼の去の辺に近づく。時に亀、問ひて云はく、「汝此に住みて、万の物に足れるや」と。猿の云はく、「一生乏し」と。亀の云はく、「吾が住む近き辺に、四季に菓絶えぬ広き林有り。去来、汝を将て行きて飽かしめむ」と。時に猿往を吟く。亀の云はく、「吾が背に乗れ。将て行かむ」と。即ち猿亀の背に乗りて、水に入りて海底に至る。亀猿に語りて云はく、「汝聞け、吾が婦は任める者なり。而るに腹の病有り。仍りて汝が肝を取りて菓に為む。敢へて海底に菓無し」と。即ち猿答へて云はく、「汝、甚だ口惜しきかな。隔つるの心有り。聞かずや見ずや。吾等が党は本より身の中に肝無し。只傍の木に懸け置く所なり。若し彼に於て然言はましかば、或いは吾が肝、及び他の肝を取り与へてまし」と。時に亀喜びて言はく、「汝は是実なる者なり。吾俱に返らむ。其の肝を

<sup>80</sup> 市古貞次編『日本文学大年表』桜楓社 1986、p.69

<sup>81</sup> 馬淵和夫他校注『三宝絵・注好選』新日本古典文学大系 31、1997、p.365

得しめよ」と。時に亀の背に乗りて本の如く山に返りて、高き木に登りて下ざまに向ひ見て云はく、「吾は墓無し。海中に菓有らむや。亀は墓無し。身を離れて肝有らむや」と。

此の例へは、即ち亀とは提婆達多なり。猿とは釋迦如来なり。昔、提婆達多仏を失ひ奉らむとす。然而れども仏の方便勝りたるが故に、遂に勝ちて、一切衆生の為に正覺を成じ、法を説きて衆生を度したまふと者。又外典に云はく、「『抱朴子』が云はく、「五百年の猿は化して老人と為る」と」と云々。

以上、「猿は退きて海底の菓を嘲ける」話の本文であるが、ここでこの話の粗筋を紹介する。

むかし、海の辺の山に一匹の猿がすんでいた。その海の底に夫婦の亀が住んでいた。亀の妻が懐妊し、お腹に病ができ、その病気を治して安産出来るのに猿の肝がお薬となると言われる。夫の亀が猿の所に行って「四季折々の木の実を食べさせよう」とだまして海の底に連れて来る。そして、「実は妻の病気を治す薬として猿の肝を取りたい」と言う。猿が、「私たちの身の中に肝がない。いつも傍らの木にかけて置くんだ。早く戻って、他の猿の肝も取ってあげよう」と言って、亀の背中に乗って元の山に戻ると、猿がすぐ木のとっぺんに登って、亀を見下ろして、罵る。とあって、話の最後に現世と過去世の連結で、釈迦如来の前世に結び付けられている。

## ② 「龜、為猿被謀語」、『今昔物語集』卷第5

成立年代 1120 年代<sup>82</sup>。編者不詳。

この話の出典は、『注好選』下 13 話。原拠は特定しがたいが、『生経』1「仏説鼈獼猴経」第 10、『六度集経』4 の 36 話がある<sup>83</sup>。

まず、『今昔物語集』卷第 5「龜、為猿被謀語」の本文を紹介する。

### 『今昔物語集』卷第五 第弐五「龜、為猿被謀語」

今昔、天竺ノ海邊ニ一ノ山有リ。一ノ猿有テ、菓ヲ食シテ、世ヲ過ス。其ノ海邊ノ海ニ二ノ亀有リ、夫妻也。妻ノ亀、夫ノ亀ニ語テ云ク、「我レ汝ガ子ヲ懐妊セリ。而ルニ我レ、腹ニ病有テ、定メテ難産カラム。汝ガ、我ニ薬ヲ食セバ、我ガ身平カニテ、汝ガ子

<sup>82</sup> 今野達校注『今昔物語集』1、新日本古典文学大系 33、p.520

<sup>83</sup> 今野達校注『今昔物語集』1、新日本古典文学大系 33、p.506

ヲ生ジテム」ト。夫答テ云ク、「何ヲ以テ薬トハ可為キゾ」ト。妻ノ云ク、「我レ聞ケバ、猿ノ肝ナム、腹ノ病ノ第一ノ薬ナル」ト云フニ、夫海ノ岸ニ行テ、彼ノ猿ニ値テ云フ様、「汝ガ栖ニハ万ノ物豊也ヤ否ヤ」ト。猿ル答テ云ク、「常ニハ乏シキ也」ト。亀ノ云ク、「我ガ栖ノ近辺ニコソ四季ノ菓・草ノ実不絶又広キ林ハ有レ。哀レ、汝ヲ其ノ時ニ將テ行テ飽マデ食セバヤ」ト。猿謀ルヲバ不知ズシテ喜テ、「イデ、我レ行カム」ト。云ヘバ、亀、「然ラバ、イザ給ヘ」ト云テ、亀ノ背ニ猿ヲ將行テ、亀ノ猿ニ云ク、「汝ヂ不知ズヤ、真ニハ我ガ妻懐妊セリ。而ルニ腹ニ病有ルニ依テ、「猿ノ肝ナム其ノ薬ナル」ト聞テ、汝ガ肝モヲ取ムガ為ニ謀テ将来レル也」ト。

猿ノ云ク、「汝ヂ、甚ダ口惜シ。我レヲ隔ル心有ケリ。未ダ不聞ズヤ、我等ガ党ハ本ヨリ身ノ中ニ肝無シ。只傍ノ木ニ懸置タル也。汝ヂカシコニテ云マシカバ、我ガ肝モ、亦他ノ猿ノ肝モ取テ進テマシ。譬ヒ自ヲ殺シ給ヒタリトモ、身ノ中ニ肝ノ有ラバコソ其ノ益ハ有ラメ。極テ不便ナル態カナ」ト云ヘバ、亀、猿ノ云フ事ヲ実ト信ジテ、「然ラバ、イザ將還ラム。肝ヲ取テ得サセ給ヘ」ト云ヘバ、猿、「其ハ糸安キ事也。有ツル所ヘダニ行着ナバ、事ニモ非ヌ事也」ト云ヘバ、亀前ノ如ク背ニ乗セテ本ノ所ニ至ヌ。

打下シタレバ、猿、下ルマヽニ、走テ木ノ末ニ遥ニ昇ヌ。見下シテ、猿、亀ニ向テ云ク、「龜、墓無シヤ。身ニ離タル肝ヤ有ル」ト云ヘバ、亀、「早く謀リツルニコソ有ケレ」ト思テ可為キ方無クテ、木ノ末ニ有ル猿ニ向テ、可云キ様无キママニ打チ見上テ云、「猿、墓無シヤ。何ナル大海ノ底ニカ菓ハ有ル」ト云テ、海ニ入ニケリ。

昔モ、獸ハカク墓無クゾ有ケル。人モ愚痴ナルハ此等ガ如シ。カクナム語り伝ヘタルトヤ。

以上の『今昔物語集』巻第五 第貳五「龜、為猿被謀語」の粗筋は次の通りである。

昔、天竺の海の辺の山に一匹の猿が住んでいた。その海に夫婦の亀が住んでいた。妻の亀が懐妊しているがそのお腹に病があるため、安産できない。その薬として猿の生き肝を食べれば治ると言った。夫は猿に会って「私の住処の近くに四季の菓、食べさせよう」とだまして猿を背中に乗せていく。途中で「妻の病気を治す薬としてあなたの肝を取りたい」と言う。猿が、「私たちの身の中に肝がない。いつも傍らの木にかけて置くんだ。早く戻って、他の猿の肝も取ってあげよう」と言って、亀の背中に乗って元の山に戻ると、猿がすぐ木のとっぺんに登って、亀を見下ろして、罵る。

③ 「蚪と猿の生き肝」、『沙石集』巻第5本8「学生なる蟻と蝻との問答のこと  
渡邊綱也校注『沙石集』日本古典文学大系 85、岩波書店 1969 の説話を取り扱っている。  
成立年代は1283年7月。著者は無住<sup>84</sup>。  
以下に、この話の本文を紹介する。

『沙石集』巻第5本8、「蚪と猿の生き肝」

また、海中に蚪と云ふ物あり。蛇に似て、角なき物と云へり。妻の孕みて、猿の生け肝を願ひければ、得難き物なれども、志の色も見えむとて、山の中へ行きて、海辺の山に猿多き処へ尋ね行きて、云はく、「海中に菓多き山あり。あはれ、おはしませかし。我が背に乗せて、具してこそ行かめ」と云ふ。「さらば、具して行け」とて、背に乗りぬ。海中遥かに行けども、山も見えず。「何かに、山じゃ何くぞ」といえば、「げには、海中に争でか山あるべき。我が妻、猿の生け肝を願へば、そのためぞ」と云ふ。猿、色を失ひて、せむ方なくていふやう、「さらば、山にて仰せられたらば、安き事なりけるを、我が生け肝は、ありつる山の木の上に置きたりつるを、俄かに来つるほどに忘れて」と云ふ。「さては、肝の料にてこそ具して来つれ」と思ひて、「さらば返りて、取りて給べ」と云ふ。「左右なし。安き事」と云ひけり。さて、返して山へ行きぬ。猿の木に登りて、「海の中に山無し。身を離れて肝無し」とて、山深く隠れぬ。蚪、ぬけぬけとして帰りぬ。これは、獣までも誑惑の心有ることを、経に出だせり。かかれば、虫の中に問せむことも、上代ならば不思議とも申さじ。さもありぬべし。

次は、以上紹介した『沙石集』巻第5本8、「蚪と猿の生き肝」の粗筋である。

海中に蚪という角がない動物がいる。その妻が懐妊して猿の生き肝を欲しがったので、猿が住んでいる海辺の山へ行って「海の中の山に菓が沢山あるので私の背中に乗せて連れて行こう」と言って、海へ連れて行く。途中で蚪は「猿の生き肝を欲しい」ことを話してしまう。猿は「私の生き肝を木の上に置いたまま忘れてきてしまった」と言って、生き肝を取りに引き返して山へ向かって着く。すると猿は木に登って「海の中に山がない。身体の外に肝がない」と言い捨てて山奥へ隠れてしまった。蚪は間抜けな様子で帰って行った。

<sup>84</sup> 市古貞次編『日本文学大年表』桜楓社 1986

④ 『月庵醉醒記』〔100-37〕

月庵とは、一色直朝（1510-1579）のことで、当時の歌人として、または武士として活躍していた。著書には『桂林集』歌集（1575）と『月庵醉醒記』（1573）がある。

「猿の生き肝」話について『月庵醉醒記』の補注には、「この『月庵醉醒記』の話は、「猿の生き肝」昔話の中で「くらげ骨なし」の形を取る文献上もっとも古いものか」<sup>85</sup>と示している。

以下、『月庵醉醒記』の話の原文を紹介する。

竜宮の乙姫、なやみ給ふに、猿の生肝を薬なりとて、亀に仰ければ、山かけたる汀に浮出て、対<sub>レ</sub>猿申やう、「竜宮浄土みたくは、我か甲<sup>われ</sup>にのりてみよ」といひければ、悦てのる。則龍池に行ければ、海月か告て曰、「汝かいけぎもとらむとのたばかりなり」といふ。猿は是を聞て、対<sub>レ</sub>亀、なやむこゝちしていふやう。「樹上にきもを引てをきたりしを忘れて、爰にきたりて、しぬべく成ぬ。あなかなしや」といひければ、亀おもふやう、「生肝の用なりしを、いかゞせむ」と思ひ、「さらば又我甲<sup>われ</sup>に乗て、歸りて、肝を取てこよ」といふ。則かへりて、高岸に飛上て、亀を大笑す。海月はほねを抜かるゝ。古句云、  
猿駄乗<sub>レ</sub>龜北、心肝掛<sub>二</sub>樹上<sub>一</sub>

・チベットの説話資料

① 「亀と猿の物語」、『チベットの民話』

ここで、W.F.O'Connor “Folk Tales From Tibet” London 1906 の日本語訳である金子民雄訳『チベットの民話』白水社 1999 を取り扱う。

「亀と猿の物語」話の粗筋は以下に紹介する。

昔、大きな湖水に、亀の家族が住んでいた。この湖水の縁の密林に猿の群れが住んでいた。

ある日、夫の亀が一匹の大きな猿と仲良しになり、日中密林をぶらつき、夜は洞穴で一緒に寝て、森に数日を過ごした。

その間、亀の奥さんは夫の留守が長くなるので、亀の妻は「あの人も、森の中で下品な猿なんかと遊んでいないで、妻や家族のいるところへ帰ってくるべきよ」と

<sup>85</sup> 服部幸造他編『月庵醉醒記』三弥井書店 2008、p.307

考えて、病気のふりをして、その「病気を治すたった一つの方法は猿の心臓しかない」という。夫の亀は、妻に必要な薬を手に入れるため、猿を、自分の家に来るように招待して、猿を背中に乗せて家へ泳いで行く。

帰る途中で亀は猿に、妻の病気を治す唯一の薬は猿の心臓であることを洩らしてしまう。すると猿は「奥さんの治療の効果を上げるには、少なくとも三匹か四匹の心臓が要るから、すぐ戻って数匹の猿を連れて来よう」と言うと亀は、猿を乗せて岸まで湖水を泳ぎ戻った。猿は地上に着いたら、大急ぎで目についた一番丈の高い木のでっぺんに登って、亀を罵り始める。

猿の言葉を聞いて怒った亀は、猿をやっつけるために、猿洞窟の一番暗い隅に潜んで待ったが、利口な猿が洞窟に声かけて試してみたところ、愚かな亀は、こだまの真似をして暗い隅から答えた。これを聞いた猿が森の別の場所へ去って行った。

・モンゴルの説話資料

① Adiltgaval yast melhii sarmaghnīg hūrsan met khemēsen ni

“Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg hemēgdeh orshvoi”

以上 2.1-2 で述べたように、Tsahar Gevsh Luvsantsultem (1779) 訳のこの説話集の原本は「古代インドの Nāgārjuna (龍樹) 作の “Ni-tis 'astvajantupos an abindu na-ma” (『修身論生者養育滴』) の解説として 37 話が入っている説話集とされる。

“Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg hemēgdeh orshvoi” 話の粗筋

昔、亀が山に行って、猿と知り合って、色々な果実や果物を食べて一緒に何日を楽しく過ごしてから家に帰って来た。雌亀、「彼は一匹の牝猿と付き合っていたに違いない」と思って、病気になったふりをして、「猿の心臓を食べればこの病気が治る」と言う。雄亀が猿に「沢山御馳走したお礼として我が家に来てください」と誘って、連れて帰るが、「妻の病気を治すために君の心臓を取りたい」とわけを言ってしまう。猿が、「心臓を唐松の木のでっぺんに置いてあるので取りに戻ろう」と言って、一緒に山に戻り、「心臓あげるから口をあけて」とだまして、亀の口に自分の糞をいっぱい入れてから、逃げる。

ブンブン怒った亀は、猿の洞穴の前に行き、猿が帰って来るのを待つが、賢い



猿の呼びかけに亀がだまされて声かけてしまう。洞穴がしゃべるといのは怪しいことだ。やっぱりこの洞穴を離れて行ったほうがよい」と言って、別の所へ行ってしまった。

② Ert urid negen tsagtu menehei sarmagchin qoyar nōqōr bolugsan hemehu anu

Б.Я.Владимирцов “Монгольский сборник рассказов из Рагсатантра”

この話は、A.V.Burdukov 氏が記した西モンゴルのオイラト族の話である。

V.Ya.Vladimirtsov 氏がこの Burdukov 氏テキストを原本のまま(字の間違いや方言等)収録している。

以下に、Ert urid negen tsagtu menehei sarmagchin qoyar nōqōr bolugsan hemehu anu 話の粗筋を紹介する。

海の中に仲のよい雄と雌の蛙が住んでいた。

ある日、雄蛙が餌を探しに野原に行ったが、暑い日に水が切れたので、喉が渴いて、倒れていた。そこに昔友達であった猿に逢って、水のある所まで蛙を背負って連れて行ってくれたので蛙が命を助けてくれた友達にお礼を言った。猿が蛙を自分の洞穴に連れて帰って、果実や果物を食べさせて、猿の家族と一緒に三日間楽しく過ごしてから帰った。すると牝蛙が、「あなたにそんな親友はいないはず。それは全部ウソでしょう。あなたはきっと別の牝と遊んでいたに違いない」と怒った。雄蛙が事実を何回も説明しても牝が信用せず、さらに二人が大喧嘩になり、最後に雌蛙が病気のふりをして倒れた雌蛙が、「猿の心臓を食べれば治る」と言う。雄蛙がそこから猿に会って、「沢山御馳走してくれた恩返しとして、我が家でお茶をしに来てください」と誘う。猿を背中に乗せて海の中に入ってから、妻の病気を治すために猿の心臓を取りたいことを明かす。猿が、「心臓を高い木のとっぺんに隠して置いてあるので、取りに戻ろう」と言って、一緒に戻る。猿が木に戻ったら、「口の中に心臓を入れてあげる」と言って、実は蛙の口に自分の糞を入れてから木を降りて家へ帰る。蛙が、猿の家の近くに行くと、「友達よ」と三日間も叫び続けたが、最後に猿が「これから私のところに二度と来ないでください」と言って追い払った。

③ Мэлхий сармагчин хоёр

Д.Цэрэнсодном эмх “Монгол ардын үлгэр”

この『モンゴル民話』において、モンゴルの遊牧民に口承で伝わってきた昔話を編集している中、「蛙と猿」のモチーフは、インドの Pañcatantara の話が一番近いが、昔から遊牧民の中に口伝で広がり、モンゴル人の日常生活の影響が染み込んで、独特なモンゴルの話になっているといえる。

以下に、『モンゴルの説話集』「亀と猿」の粗筋を紹介する。

昔、夫婦の亀が住んでいた。ある日、夫の亀は川の向こうの山に住んでいる猿と友達になるが、そのことにヤキモチをやいた妻の亀が猿をやっつけるために病気のふりをして「牝の猿の心臓を食べれば私が治る」と言う。夫が山に行って友達の猿をだまして家に誘って連れてくるが、猿の心臓を取るために連れて来たことを言う。

猿は「心臓は木の上にかけてあるので心臓を取って来よう」と言って、亀と共に山に戻る。山に着いたら、猿は木の上に登って、そこから自分のフンを投げおろして「この心臓をあの牝に食べさせてください」と言って、木の上から降りてこなかったという。

#### ④ Melhii bich hoyoriin nuhurlusun tuhai ulger

“Erdeniin chimeg” (Ts.Damdinsuren “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai”) (「猿と蛙が友達になったということ」Ts.Damdinsuren『モンゴル古典文学 100 選』“Erdeniin chimeg” の第 10 の話)

Ts.Damdinsuren 氏が 25 話が入っているこの説話集を “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai” に収録するために現存の “Erdeniin chimeg” 説話集の三つの写本を底本にして編集している。それは、

- 1) Б.Я.Владимирцов “Монгольский сборник рассказов из Pañcatantra”
- 2) モンゴル国立大学の D.Choijilsuren 教授が提供した “Torolhтони-g serge-h dusuli-n tailbar erdeniin chimeg heme-hu sudur”
- 3) モンゴル言語専門家 E.Vandui 氏が西モンゴルから収集してきた “Yosni- shashtari-n tailbar” である。

この “Erdeniin chimeg” 説話集はモンゴルで文献として出版されていないが、写本で広く流布している。

印度・中国・チベットから入ってきた話をこのように次から次へと書き写した過程で書き手によって付け加えられたり、読み手に分かりやすい表現で書き換えたりすることは

モンゴルの文学史上よくみえる現象である。

“Erdeniin chimeg” 説話集の成立と伝番の特徴について Ts.Damdinsuren 氏が「チベット語から直接訳した重訳か、間接的に伝番したものか、それとも他のモンゴル説話の類話かは、推測しがたい<sup>86</sup>」と指摘している。

この話の粗筋は次の通りである。

昔々海の中に仲のいい蛙の夫婦が住んでいた。ある日、夫の蛙は田舎へ餌を探しに出かけて行ったが、飲む水もなくしておなかも減って田舎で倒れてしまった。そこへかつての友達の猿がやってきて、蛙を背中に乗せて水のあるところまで連れて行って水を飲ませ、自分の洞穴の家に招待して色々な果実を食べさせてくれた。そのように三泊してから帰ったら、妻の蛙が、「あなたにそんな友達がいるはずがない。きっと他の蛙と付き合っていたらろう」と怒って、大喧嘩になる。最後に妻の蛙が病気のふりをして、その病気は「猿の心臓を食べれば治る」と言う。夫の蛙は猿に会って、命を助けてくれた恩返しとして家に誘って、猿を背中に乗せて帰る。

途中で蛙は猿の心臓を取りたいことを言ってしまうと猿は「私達の心臓は薬になる大事なものですから木の先に隠しておいてある。今すぐ心臓を取りに戻ろう」と言って戻ってくると猿は高い木の上に飛び上がってから、「この心臓を持って帰れ」と蛙の口の中に自分の糞を投げて、洞窟の家へ帰る。猿にだまされた蛙は、初めて会った田舎の山に行って三日間続けて友達の猿を呼び叫んでも、怒った猿が蛙をこれからこの辺に来ないように追い払った。

---

<sup>86</sup> МШУА “Монголын уран зохиолын тойм”1977, х.275

2.1-4. 「猿の生き胆」説話の比較対照表による考察

さて以上が「猿の生き胆説話」のアジア各国の資料である。このインド起源の説話がアジアの各国々にさまざまな形で流伝されていることがわかるが、文化、習慣、社会制度が異なるそれぞれの国では動物に対するイメージなども異なるので、以下にその相違点を列挙しよう。

(以降表 (2-1b)、(2-1c) の\*印で省略しているモンゴル説話資料の本題名)

\* Adiltgaval yast melhii sarmagchnīg hūrsan met khemēsen ni

“Ardīg tejēhui Rashiyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg  
hemēgdeh orshvoi”

\*\* Ert urid negen tsagtu menehei sarmagchin qoyar nōqōr bolugsan hemehu anu

“Монгольский сборник рассказов из Pañcatantra”

\*\*\* Melhii bich hoyoriin nuhurlusun tuhai ulger, ”Erdeniin chimeg”

「猿の生き胆」説話の比較対照表 (2-1b)

| 国   | 説話資料                                | A              | B               | C             |
|-----|-------------------------------------|----------------|-----------------|---------------|
|     |                                     | 使いの動物・住んでいるところ | 取られる動物・住んでいるところ | 欲しがる動物・取りたい部位 |
| インド | Pañcatantra of Viṣṇuśarman<br>第4巻主話 | ワニ・海           | 猿・海辺のジャンブ木      | ワニの妻・猿の心臓     |
|     | 「猿王前生物語」<br>『ジャータカ全集1』第57話          | ワニ・川           | 猿・川の岸           | ワニの妻・猿の心臓     |
|     | 「ワニ前生物語」<br>『ジャータカ全集3』第208話         | ワニ・ガンガ川        | 猿・森の中           | ワニの妻・猿の心臓     |
| 中国  | 『六度集経』<br>(T3 no.152,19b24-19c17)   | 鼈・不明           | 猿・不明            | 鼈の妻・猿の肝       |
| 日   | 「猿は退きて海底の菓を嘲ける」<br>『注好選』巻下          | 亀・海底           | 猿・海辺の山          | 亀の妻・猿の肝       |
|     | 「龜、為猿被謀語」                           | 亀・海            | 猿・海辺の山          | 亀の妻・          |

|                  |   |       |         |                 |
|------------------|---|-------|---------|-----------------|
| 本                | 『今昔物語集』巻第5  |       |         | 猿の肝             |
|                  | 「蚪と猿の生き肝」『沙石集』5                                   | 蚪・海   | 猿・海辺の山  | 蚪の妻・<br>猿の生き肝   |
|                  | 『月庵醉醒記』〔100-37〕                                   | 亀・不明  | 猿・不明    | 竜宮の乙姫・<br>猿の生き肝 |
| モン<br>ゴル         | *Chandmanīn chimeg の話                             | 亀・水   | 猿・岩穴    | 亀の妻・猿の心臓        |
|                  | **Монгол Рагцатантра の話                           | 蛙・海の中 | 猿・洞穴    | 蛙の妻・猿の心臓        |
|                  | Мэлхий сармагчин хоёр<br>“Монгол ардын үлгэр”     | 蛙・川   | 猿・山     | 蛙の妻・猿の心臓        |
|                  | ***“Erdeniin chimeg” の話                           | 蛙・海の中 | 猿・田舎の洞穴 | 蛙の妻・猿の心臓        |
| チ<br>ベ<br>ッ<br>ト | 「亀と猿の物語」『チベットの<br>民話』(“Folk Tales From<br>Tibet”) | 亀・湖水  | 猿・密林の洞窟 | 亀の妻・<br>猿の心臓    |

以上の比較対照表 (2-1b) で見る限り、次のような相違点がみえる。

① まず使いの動物はインドの場合はワニであるのに対して、日本とチベットの場合は亀や蚪 (ミヅチ) 等になっている。モンゴルの話には蛙が登場するのが特徴で、モンゴルに生息しないワニや亀の代わりにモンゴル人にわかりやすい存在として蛙に変えているのが特徴である。

そこで、ワニが亀に変わっているのは、中国の仏教経典『六度集経』に【展轉生死。兄爲獼猴。女與弟俱爲鼈】(大正大藏経第3巻19頁下)。とあって、この鼈 (スッポンという亀類の動物) が、日本の『注好選』、『今昔物語集』において亀として、日本の話に定着していることが確認できる。一方、モンゴルの話にも、亀が登場するが、この中国の『六度集経』等の仏教経典の影響を受けているとはいえない。それが、亀が登場するモンゴルの話では仏教本生譚の話が一切語られないことであり、亀が登場するモンゴルの Chandmanīn chimeg の話は上述のように、古代インドの Nāgārjuna (龍樹) 作の “Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdar” (Nāgārjuna “Ni-tis 'astvajantupos an abindu na-ma” (『修身論生者養育滴』) のチベット語からの翻訳とされており、チベットとモンゴルで伝わったこの龍樹系統の話が中国と日本の説話文献にみえない。の龍樹の “Ni-tis 'astvajantupos an abindu na-ma” のサンスクリット原本が現存していないとされるが、今手元にあるモンゴルとチ

ベットの説話資料から、モンゴルの話の【亀】がチベットの話からの伝承であるといえる。

② 次に話の舞台であるが、島国である日本の場合は、話の舞台が海になっているが、大陸の国であるモンゴルの場合は川が話の舞台になっている。チベットの話では湖水に変わっていることから、それぞれ民族の自然環境を反映したものだと言えるが、モンゴルの一部の話にも海が登場する。

③ 猿が住んでいる場所もそれぞれ特徴があり、インドと日本の説話に登場する猿と違って、モンゴルとチベットの猿は洞窟に住んでいる。モンゴルとチベット等の大陸の民族に住むところといえば、最初に想像されるのは森か木ではなく、山か洞窟になるのは当然であろう。

④ 欲しがらる対象は日本の説話だけが「生き胆」になっているのに対し、他の説話では心臓となっている。これは生き胆、心臓に対する民族的なイメージも関係するかもしれない。

次に、比較対照表（2-1c）で各地域の「猿の生き肝」の話の内容の展開でみえる相違点と共通点をみてみたい。

「猿の生き胆」説話の比較対照表（2-1c）

| 国   | 説話資料                              | D                               | E                   |
|-----|-----------------------------------|---------------------------------|---------------------|
|     |                                   | A と B の関係・B を捕まえる方法             | C の理由               |
| インド | Pañcatantra of Viṣṇuśarman 第4巻主話  | 友達・家に招待するとだまして連れて行く             | Aの妻がヤキモチのため（長生きしたい） |
|     | 「猿王前生物語」<br>『ジャータカ全集1』第57話        | 友情の関係なし・Bの帰る途中で捕まえようとする         | Aの妻が身ごもっているため       |
|     | 「ワニ前生物語」<br>『ジャータカ全集3』第208話       | 友情の関係なし・果物を食べさせようとだまして、背に乗せていく。 | Aの妻が身ごもっているため       |
| 中国  | 『六度集経』<br>(T3 no.152,19b24-19c17) | 友情の関係なし・薬を見せようとだまして、背に乗せていく。    | Aの妻が薬として食べるため       |

|      |   |                                  |   |
|------|---|----------------------------------|---|
| 日本   | 「猿は退きて海底の菓を嘲ける」『注好選』巻下                        | 友情の関係なし・四季折々の菓を食べさせるとだまして背に乗せて行く | A の懐妊している妻が腹の病を治すため                       |
|      | 「龜、為猿被謀語」<br>『今昔物語集』巻第 5                      | 友情の関係なし・四季折々の菓を食べさせるとだまして背に乗せて行く | A の懐妊している妻が腹の病を治すため                       |
|      | 「蚪と猿の生き肝」<br>『沙石集』5                           | 友情の関係なし・海中の山に菓があるとだまして連れて行く      | A の懐妊している妻の腹の病を治すために                      |
|      | 『月庵醉醒記』〔100-37〕                               | 友情の関係なし・竜宮浄土を見せるとだまして連れて行く       | 竜宮の乙姫の悩みを治すに菓として                          |
| モンゴル | *Chandmanīn chimeg の話                         | 友達・家に招待するとだまして連れて行く              | A の妻がヤキモチのため<br>(病気のふりをする)                |
|      | **Монгол Райцатантра の話                       | 友達・「家にお茶を飲みにきてください」とだまして連れて行く    | A の妻がヤキモチのため<br>(病気のふりをする)                |
|      | Мэлхий сармагчин хоёр<br>“Монгол ардын үлгэр” | 友達・家に招待するとだまして連れて行く              | A の妻がヤキモチのため<br>(病気のふりをする)                |
|      | ***“Erdeniin chimeg” の話                       | 友達・「家にお茶を飲みにきてください」とだまして連れて行く    | A の妻がヤキモチのため<br>(怪我 <sup>われ</sup> のふりをする) |
| チベット | 「龜と猿の物語」, 『チベットの民話』 (“Folk Tales From Tibet”) | 友達・自分の家に来て、数日泊ってくださいとだまして、連れて行く  | A の妻がヤキモチのため<br>(病気のふりをする)                |

⑤ 胆などを欲しがらる動物については、ワニもしくは亀の妻であるのに対し、日本の『月庵醉醒記』〔100-37〕には一部、竜宮の乙姫になっている場合もあり、注意される場所である。

- ⑥ 話の顛末としては、友情の関係が強調されているのはインドの *Pañcatantra* だけであるのに対し、モンゴルとチベットの話では友情関係が断絶している。
- ⑦ だます方法としては、日本の話もインドの話も果実を食べさせるという形になっているが、チベットとモンゴルの場合は、「お茶を飲みにくる」ように誘っている。これが、モンゴル族とチベット族はお客さんを家に招待したとき「お茶を飲みに来てください」と言う習慣がそのままこの説話にみられている。
- ⑧ モンゴルとチベットの説話では、亀（蛙）の妻がヤキモチで病気のふりをして、猿の心臓を欲しがるといふ共通の点が見られ、妻が心臓を欲しがるのは、猿と仲良くなった夫が自分のところに戻ってきてほしいという妻の願いからである。これに対してインドのジャータカと日本の説話では、ワニ（亀）の妻が懐妊もしくは病気によって猿の心臓（生き肝）を食べたがるといったところが見られるのが特徴である。
- ⑨ 日本の『月庵醉醒記』〔100-37〕では、第三者として海月が登場し、海月が骨を抜かれるという起源話「くらげ骨なし」の話の要素をもっているのが、他の文献説話資料で見えない特徴である。
- ⑩ モンゴルの“*Erdeniin chimeg*”の話では、猿は妻や子供たち家族をもっており、蛙も夫婦の喧嘩や親戚の蛙達の登場など、独特の構成がみられる。なお『チベットの民話』 (“*Folk Tales From Tibet*”) の「亀と猿の物語」には亀も、猿も子供と家族を持っていて、亀の息子も登場している特徴がみえる。
- ⑪ 猿の住んでいる洞窟に潜んでいた亀を騙して、洞窟でこだませる話は、付加部分の話で、『ジャータカ全集 I 』「猿王前生物語」と類似している。



## 2.1-5. まとめ

以上「猿の生き肝」説話の比較対照研究をしてきたが、これらを総合的に分析してみると、本話の原型であるインドの話では、ワニが猿を騙して心臓を取ろうとするも猿の気転によって無事に陸上に戻る話が原型であったが、ワニが亀に変わっているのは、インド以外の国々ではワニが生息しないためであったと考えられる。特にモンゴルでは亀もおらず蛙に変化している事例も見られ、日本でも『沙石集』に「蚪」という動物として紹介されており、これは本来のワニがそれぞれの地域に生息していないための混乱であると考えられる。

またインドや日本で猿の住みかが森林であったが、チベットやモンゴルでは森林がほとんど見られず、チベット・モンゴルの場合、洞窟に変化していたのもそのためであろう。

胆を必要とする者として日本の説話の中に竜宮の乙姫が挙げられているのも、日本の龍神信仰や竜宮城という存在がその背景にあるからであろう。

さて以上のように、どの説話でも基本的にはワニや亀が猿を騙して心臓をとろうとするも猿の気転によって無事に陸上に戻る話となっている。そこからアジア各地域の説話には、さまざまな話が付け加えられたということがうかがえる。

またインドの *Jātaka* 第 57 話「猿の王前生物語」には、猿に騙されたワニは利口な猿を褒め称えて、すみかへ帰っている。もう一つ、*Jātaka* 第 208 話の「ワニ前生物語」にも、猿とワニはたいした喧嘩にならないで、話が終わっている。

日本の『今昔物語集』所収の話の顛末としては、亀は猿に向かって「猿、馬鹿だね。大海の底に木の实があるわけがないよ」と言って海に帰って行く。また、日本の『月庵醉醒記』[100-37] では、海月が骨を抜かれるという話が加えられ、いわゆる「起源話」となっているのが特徴である。モンゴルの話の顛末としては、利口な猿は蛙（ワニ・カメに相当）の口に自分のフンを入れて罵っている意地悪な猿に代わっていて、一部は、友だちを見分けることができなかつた自分のことを後悔している猿の話も付け加えられている。

チベットとモンゴルの話の顛末としては、猿に騙された亀は洞窟に潜んで猿を捕まえようとするが、また猿の言葉だましによって騙されている亀の話も付け加えられているのが、インドの『ジャータカ全集 I』「猿の王前生物語」の要素がみえる。

最後に、説話の伝承過程と説話の内容の考察からみれば、モンゴルとチベットの説話がインドの *Pañcatantra* に近いことが指摘される。その典型的事例は、そもそもなぜ猿の心

臓を求めたのかという発端に見出すことができる。すなわちこの話の振り出しのポイントは、次の3点である。

- ① ワニ・亀・蛙が猿と友達であること
- ② 彼等の妻がヤキモチをもって病気のふりをする事
- ③ 猿の心臓を狙うこと

これらの3点はインドの Pañcatantara とチベット・モンゴルの話に共通に見られるが、一方、日本の『注好選』、『今昔物語集』『沙石集』の話では、次の2点がインドの Jātaka の話に通じている。

- ① 亀・蚪が猿と友情の関係がないこと
- ② 彼等の懐妊している妻がお腹に病があること

また日本の諸説話資料では狙われていた猿の心臓が生き肝に変わっているが、これは中国の仏教經典である『六度集經』からの影響であるといえよう。さらに、この生き肝を狙う理由は、日本の説話の場合は、亀の妻が懐妊しているからそのお腹の病を治すための、あるいは安産のための薬としている要素は『六度集經』をはじめとする漢訳經典には見られないのが興味深い点である。

なお、日本の「猿の生き肝」説話は、基本的には漢訳仏典を典拠にした『注好選』、『今昔物語集』『沙石集』が共通する要素が多いのに対し、『月庵醉醒記』〔100-37〕は独特の伝承を有している。たとえば先に見たように、『月庵醉醒記』以外の日本の説話では、【懐妊している亀の妻が安産のために猿の生き肝を欲しがらる】という要素が語られ、『六度集經』に「兄爲獼猴。女與弟俱爲鼈。鼈妻有疾。食獼猴肝。」(大正大藏經、第3卷19頁)とあって、日本の話の要素が語られてない。一方、インドの Jātaka の話で猿の心臓を狙う理由は【ワニの妻が身ごもっているため、猿の心臓を食べたい】とあって、日本の話と一致している。

ここから考えられるのは、日本の「猿の生き肝」の話の典拠になる説話文献は中国の漢訳仏典だけでなく、それ以外の別の文献を素材にしていた可能性があると考えられる。

モンゴルの「猿の生き肝」説話の場合、インドの Pañcatantra を基にしているチベット説話が原拠になるとされる。文字通り “Монгольский сборник рассказов из Pañcatantra” (『パンチャタントラからのモンゴルの物語』) とあるが、本説話集に収録されている「猿の生き肝」の話は、A.V.Burdukov 氏が西モンゴルのオイラトの Lu gunii qoshuu の Gonchig van という人が語った話をそのまま収録しているということから、Pañcatantra の話が口承でもモンゴルで普及されていたことが確認できる。

ここで、モンゴルにおける「猿の生き肝」の話の典拠になる文献は、インドの *Pañcatantra* と *Nāgārjuna* (龍樹) の “*Ni-tis 'astvajantupos an abindu na-ma*” (『修身論生者養育滴』) のチベット語訳の説話に当たるものである。

以上、比較対照考察の結果をおおよそにまとめてみれば、日本の『注好選』、『今昔物語集』、『沙石集』の話ではインドの *Jātaka* の説話を基にした中国の仏教経典『六度集経』の話が流伝されている傾向が見られ、一方モンゴルの場合は *Pañcatantra* から影響を受けたチベット系の説話がモンゴルに入ってきたと考えられる。

## 2.1-6. 「猿の生き胆」説話の日本語訳

・インドの説話の日本語訳

### ① Kale, M.R. Pañcatantra of Viṣṇuśarma Delhi-Varanashi-Patna. 2nd ed. 1969

猿の心臓を取りそこなったワニ

昔、海の付近のジャンプ樹に「赤尻」という猿が住んでいたとき、「黒口」というワニが海の中から出てきて、二匹は義兄弟になった。二匹は、海岸で美味しい果物を食べながら、面白いお話をして、毎日を仲良く、楽しく過ごしていた。猿は、ワニの奥さんに毎日おいしい果物をお土産に送っていると、ワニの妻が「こんな美味しい果物を毎日食べている猿の心臓がきっと美味しいはずだ」と思って、夫のワニに、「猿の心臓を持って来ないと断食して死んでしまう」と言う。

夫のワニが猿を「我が家に来てください」と誘って、背中に乗せて海の中に入る。途中でワニが猿の心臓を取りたいことを言ってしまふ。猿が、海岸のジャンプ樹の穴の中に心臓を隠しているから、取りにもどるように言うとワニが猿にだまされて、海岸に戻る。

猿が、陸上に着くと、ジャンプ樹の上に跳び上がって、裏切りのワニを二度と戻って来ないように追い払って、逃げて行く。

### ② 『Jātaka 全集 1』 第 57 話「猿王前生物語」

昔、バーラナシーの都でブラフマダッタ王が、国を治めていたときに、ボーディサッタは猿の胎内に生を享け、成長して、一人で川の岸に住んでいた。その川の間には、小島が一つあって、川のこちらの岸から飛び上がって、小島とこちらの岸との川の中に水面より出ている岩の上に飛び降り、そこから飛び上がって、この小島に降り、そこでさまざまな種類の果物を食べ終わると、夕方には同じ方法で自分のすみかに帰ってきて、次の日もまた同じようにするのであった。

ところで、そのとき一匹のワニが妻と一緒にその川に住んでいた。そのワニの妻は、身ごもっているためボーディサッタの心臓の肉を食べたくなくて、ワニに言ったところ、ワニは、「彼が夕方に小島から帰ってくるのを捕まえてやろう」と出かけて行き、水面より出ている岩の上で伏せていた。ボーディサッタは日中動き回った後、夕暮れ

どき小島に立って岩を眺め、「この岩は今日は、いつもより高く見えるが、どうしたわけだろう」と思った。

そこで、かれは、「まず、この岩を調べてみよう」と、そこに立ったまま、岩と一緒に話をしているように、「岩くん」と言ったが返事がなかったので、三度まで「岩くん」と呼んで、

「岩くん、どうして今日はわたしに返事をしてくれないのかね」と言った。ワニは、「きっと、別の日には、この岩は猿の王に返事をしていたのだ。今度はかれに返事をしてやろう」と考えて、「何だね、猿の王さん」と言った。

「あんたはだれなんだ」

「わたしはワニだよ」

「何のためにあんたはそこに伏せているのかね」

「あなたの心臓の肉をいただきたいんでね」

ボーディサッタは、「このワニを欺かねばならない」と考えた。ワニたちは、口を開いているときには、眼を閉じるのを知っていたので、かれにこう言った。

「なあワニさん、わたしは自分をあんたに差し上げよう。あんたは、口を開いて。わたしがあんたの前に近づいたとき捕まえなさい」と言ったら、ワニは口を開いて、眼を閉じ、伏せていた。ボーディサッタは、小島から飛び上がって行き、ワニの頭上を踏み、それから飛び上がって稲妻のように一閃して向こうの岸におり立った。ワニはその驚くべきやりかたを見て、ボーディサッタをほめたたえて、自分のすみかへ行った。

「そのときのワニは、デーヴァダッタであり、その妻は、バラモンの女チンチャー、そして猿の王は実にわたくしであった」と。

### ③ 『Jātaka』 第 208 話 「ワニ前生物語」

むかし、バーラナシーでブラフマダッタ王が国を治めていたとき、ボーディサッタはヒマラヤ地方で猿の胎内に生まれ、ガンガ河が曲がっているあたりの森の中に住んでいた。

そのころ、ガンガ河には一匹のワニが住んでいた。そのワニの妻はボーディサッタの身体を見て、身ごもっているために、その生の心臓の肉が食べたくなくて、

「もし、手に入られなければ、わたしは死んでしまいますわ」と夫のワニに言った。

ワニは、ガンガ河の岸边に座っていたボーディサッタに近づいてこう言った。  
「猿の王よ、ガンガ河のむこう岸には、マンゴーやらパンの木の实やら、おいしいくだものがいくらでもあるのに、なぜあちらへ行って、色々な果物を食べようとはなさらないのですか？もしあなたがいらっしゃるのでしたら、わたしがあなたを背中に乗せて連れて行ってあげましょう」と言った。ワニを信用した猿を少し乗せて行ってからワニは水中に沈めた。

ボーディサッタは、「おい、わたしを水中に沈めるとは、いったいこれはどういうことなんだい？」とたずねるとワニは「わたしは妻におまえの心臓を食べさせてやりたいのさ」と答える。猿は「わたしたちの心臓は一本のウドゥンバラの木にぶらさがっている。あそこへわたしを連れて行ってくれ。そうしたら、わたしは木にぶらさがっている心臓をおまえにあげよう」と言った。

ワニはボーディサッタを連れて、そこへ行った。ボーディサッタはワニの背中から飛び上がって、ウドゥンバラの木に腰かけ、「おまえの身体は大きいけれど、智慧はちっともないんだね、おまえはわたしたちにだまされた」と罵った。

ワニは千金を失ったかのように悲しみ、心も重く、意気消沈して、自分のすみかへ帰っていった。

・モンゴルの説話の日本語訳

① “Ardīg tejēhui dusal nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg hemēgdeh orshvoi”

Adiltgaval yast melhii sarmagchnīg hūrsan met khemēsen ni

(『修身論生者養育滴』の解説 Chandmanīn chimeg

「例えていえば、亀が猿をだましたことのごとく」)

昔、亀が山に行き、猿と知り合いになった。猿が亀を自分の住んでいる岩穴に連れて帰って、そこで色々な果実やくだものを食べさせて何日間か暮らした。

そこから、しばらくして亀が（住んでいる）水に帰ると奥さんが、  
「今までどこにいたのか」と聞くと亀が、  
「私は一匹の猿と知り合って、その猿の洞穴に住んでいた」と答えた。牝亀は、  
「彼は一匹の牝猿と付き合っていたに違いない」と思って、病気になったふりをして息を重くしていると雄亀が、

「君、病気にかかったのか？」と聞くと、  
「私は、病気になっている」と答えた。雄亀が、  
「君の病気を治すためにどうすればいいか？」と聞くと「猿の心臓を食べれば治る」と言った。雄亀が、  
「私はそれを見つけて来る」と言って、猿の所に行った。そして猿に、  
「私に沢山の果物や果実をくれて尊敬してくれたお礼としてあなたを招待し、尊敬しないとイケない」と言うと猿は、  
「私、水が苦手だよ」と言ったら亀が、  
「実の友達になっても、お互いの住んでいる所を紹介しないとこれからもいつも助け合うことができなくなるから、速やかに私の住んでいる所に行こう」と言って、連れて行った。そして、亀が猿を背中に背負って自分の家に着いたところ、  
「うちのこの妻が病気にかかってしまい、それが猿の心臓を食べれば治るとのことで、それで友達の猿の心臓を出さないと（取らないと）イケなくなっている」と言ったら猿が、  
「あゝ、君は悪いよ、そこに（猿の所）いたときに言ってくれれば、（心臓を）持って来れたのに！私たちの猿は皆、心臓をカラマツのてっぺんに置いてあるのを知ってないのか？」と言うと亀がその言葉を信じて、また猿を負んぶして、水を渡って、山に着くと猿がある大きなカラマツの木を指して、  
「その木のてっぺんに（心臓が）置いてある。君はその木の下で待っているおくれ。私は木の上から（心臓を）投げてあげるから」と言った。そして、猿が木のてっぺんまで登ってから三個の糞を出してそれを手に持って、  
「亀さん、口を大きく開けていてください、私はこれ（心臓）を投げてあげるから」と言った。そして、  
「あゝ、私は最高の雄だからこそ木のてっぺんまで登れた。君は、最悪の者だから木の下に残っている。君は、最悪の友達なのだ。悪案でだまして海の底まで連れて行ったんだ。あゝ、私はもし愚かな者であったら、大事な命をあなたに奪われることだった。明らかにあなたを脅かせたのは、私である。その返しとしてこの糞をあげるから、持って帰れ」と言って、亀の口に自分の糞をいっぱい入れてから、木から木へと跳び上がって、逃げて行った。

ブンブン怒った亀は、前に住んでいた洞穴の前に行って、猿（かえって来るの）を

待った。

夜になると猿が洞穴に帰ってきて、亀が来ているかないかを確認するため、洞穴の外から、

「岩のおばあさん!岩のおばあさん!」と呼んでから、去って行った。次の日、その次の日の夜、そのように数回も呼んだのに、亀は答えを言わなかった。それでも、猿が洞穴に入ろうとしなかった。また四日目に来てまた呼ぶと、亀が、

「この洞穴に声がする（口答えをする）者がいたに違いない」と思って、

「あゝ」と口答えすると、猿が言った。

「やる前に確認するのが賢い者だ。やってから文句を言うのが愚か者だ。洞穴がしゃべるといのは怪しいことだ。やっぱりこの洞穴にこれから住むのが危険なので、離れて行ったほうがよい」と言って、別の所へ行ってしまった。

それは、

「悪者の友達の言葉を信用してはいけない。どんなことをしても、する前によく考えて確認したほうがよい」という意味である。

## ② Б.Я.Владимирцов “Монгольский сборник рассказов из Рајсатантра”

Ert urid negen tsagtu menehei sarmagchin qoyar nōqōr bolugsan hemehu anu

(B.Ya.Vladimirtsov 『パンチャタントラからのモンゴルの物語』、「昔、あるとき蛙と猿が友達になったということ」)

海の中に雄と雌の蛙が住んでいた。ある日、二人は話していた。

「この世の中で、夫婦ほど恋愛深い恋人がいない。その中で、私たちは世界一の恋人たちだ」と話したら、牝蛙が、

「あなたを自分の心臓よりも大事にしている」と言うと雄蛙がそう答えた、

「私はどこにいても君のことだけを心の中に思って、全然忘れられない」と言う。牝蛙が、「あなた、本当に私のことが好きなら、一日以上永く家を離れて行かないで」と言ったら雄蛙もその通りにするように約束した。

ある日、雄蛙が牝蛙にこう言った。

「私はずっと君のそばを離れないでいると少し寂しくなってきた。野原に行つて、餌でも探しに行きたい」と。野原に行つたが、日差しが強くなり、暑さで水が切れたので、喉が渇き、ある乾燥したところで死にそうになって倒れていたところ、昔の知り合



いで友達であった猿がやってきた。蛙が猿に、

「友達よ、私は海を出て餌を探しに来たが、水が切れて、喉が渴き死ぬのも近くなっている。友達よ、命を助けてくれ」と言うと猿が、

「友よ、ここから遠くないところに水のある場所があるよ」と言って、その水のある所まで蛙を背負って連れて行って助けてくれた。蛙が、

「友よ、君に会えなかったら私はきっと死んでいた。命を助けてくれた恩をどうやって返せばいいか」とお礼を言った。猿が蛙を自分の洞穴に連れて帰って、おなか一杯になるまで色々な果実や果物を食べさせてくれた。明日になると蛙が家に帰ろうとしたが、猿が、「友よ、君が私の家に来たということを聞いた妻が君に御馳走するために、果物を探しに行っているよ」と言うから、蛙がまた一日猿の家で泊ることにした。その次の日になると蛙が帰りたがったが、猿に、

「君が私の家まで来てくれていることについて聞いた私の子供や孫たちが、また御馳走を用意しているので、ここでのんびりして楽しんで泊まってください」と言われた。

蛙は、妻とした約束を破ってはいけないが、命を助けてくれた友達にも嫌な思いをさせたくないなので、妻は怒っても仕方がないと思って、また一日を過ごした。

このようにして三日間経っても夫が帰って来ないので、蛙の妻が、

「彼は餌を探しに田舎の野原へ行ったその日の内に帰って来るはずなのに、三日間も帰って来ない」と心配していたところ、夫が帰って来たので、夫に起こってこう言った。

「あなたが帰って来ないので、(あなたが) 怪しいガルダ鳥に捕まえられたか、毒蛇に噛まれたかと思っていた。どうやって無事に帰ってきたのか」と言うと夫が、

「大好きな妻よ、よく聞いておくれ。私は聖なる無人の野原へ餌を探しに行ったら水が切れて、乾燥したところで喉が渴き、倒れてしまった。そこに昔友達であった猿が偶然に会って、その猿が私を水のあるところまで連れて行ってきて命が助かった。そして、彼(猿)が自宅に招待し、果物等を御馳走して、親切にしてくれて、そこで三日間泊まって来た」等と理由を詳しく説明した。すると牝蛙が、「あなたにそんな親友がいるはずがない。それは全部ウソでしょう。あなたはきっと別の牝と遊んでいたに違いない」と怒った。雄蛙が事実を何回も説明しても牝が信用せず、さらに二人が大喧嘩をした。このように二人が大喧嘩になると近所に住んでいる他の蛙達が集まって来て、仲直りするように言ったが、それもうまくいかなかくて、力持ちの雄蛙が牝

蛙を地面に押し倒して、殴った。すると牝蛙が死んだふりをして目を閉じて、身体を動かさなかった。それを見た他の蛙の夫婦や子供たちが大声で泣き出した。雄蛙の怒りがおさまり、

「どうすればいいか、何かいい方法がないか」と誤解して聞くと、他の蛙達が、「殺したのは君だから、自分で考えなさい」とか、「どこが悪いか、どこか怪我しているかはあなたが自分でみて調べなさい」等と答えた。この話を聞いていた牝蛙が生き返ったふりをして立ち上がって、弱そうな声でこう言った。

「私は身体外見には怪我がないが、心に病ができています。この病は、あの猿の心臓を食べれば治る。他に治す方法はない」と言ってから、再び死んだふりをして倒れた。そこで雄蛙が、

「私の真の言葉を信じてくれないから怒って、こんなことを起こしてしまった。今からどうやって、どのようにして猿の心臓を取ろうか」と言いながら出て行った。そこから猿に会って、

「友よ、君は私の命を助けてくれた。また食べ物や果物などで御馳走してくれた。その恩返しとして、今私の家でお茶をしに来てくれればと思ってきた」と言った。猿が、

「お家はどこにあるか」と聞くと、「私の家は西の大海の中にある」と蛙が答えた。猿が、「大陸の動物である猿の私たちは水に入ると溺れて死んでしまうから、行けない」と言うと蛙が、

「友が正確なことを言っている。でも、蛙の私たちは大陸でも水の中でも自由に移動できる。友の命に危険を犯さない小さな陸が海の中にある。そこに君のために住まいや御馳走、果物などを用意して妻が待っている。もし来てくれないと、水の動物たちに嘘ついたことになるから速やかに行こう。友の恩を忘れることはない」等と何回も誘ったので、猿が喜んでこう言った。

「友達の親切さには断ることができない。行こう」。そうすると蛙が猿を背中に乗せて海の中に入って、

「私の妻が病気になっている。医師が、猿の心臓を食べれば治ると言うので、君の心臓を取るためにだまして連れて来たよ」と言ったら猿がびっくりしたが、こう言った。

「友達よ、君がそんな必要があったら野原の家に行った時に何で言わなかったの？それなら私は自分の心臓を持って来るはずだったのに。今、どうすればよいかな」と。蛙が、

「君の心臓がどうなっているのか？」と聞くと猿が、

「猿の私たちは他の動物と違って、私たちの心臓が薬になるから身に付けてない。高い木のでっぺんに隠して置くのだ。君にその薬のことを話してくれた医師が教えてくれなかったのか？今すぐ戻って心臓を取りに行こう。心臓なしで、手ぶらで行っても意味がないから」と言った。蛙が、

「心臓のない君を連れて帰っても何の役にも立たないから、戻って君の心臓を取りに行こう」と賛成して海を出て、戻った。猿が木に戻ったらすぐ木の上に跳び上がって行った。蛙が木の下から猿に向かって、

「友達よ、心臓を取ったら私にください」と言うと猿が「有罪の君を信じて、連れて行かれて、金である命を奪われそうになった。最悪の君とこれから二度とも会いたくない」と言った。蛙が、

「あゝ、友よ、私の妻が病気で死にそうになっている。私に心臓をください」と言ったら猿が、

「それなら、目を閉じて口を開けて待ちなさい、君の口の中に（自分の心臓を）入れてあげる」と言った。蛙が猿の言った通りにすると、猿が蛙の口に自分の糞を入れて、

「取りたかった心臓はそれだよ！」と言ってから、木を降りて家へ帰った。

糞を口に入れられたことが分かった蛙が、病気で悩んでいる自分の妻のために、前に行ったことのあるあの猿の家近くに行き、

「友達よ」と三日間も叫び続けた。最後に猿が怒って、洞穴を出て来て、蛙の首に踏んでこう言った。

「蛙よ、最悪の斑色の蛙よ！君を殺すのは簡単なことだが、命を助けておこう。君はこれから罪悪なことを一切捨てて、遠くの海の所で寝ていなさい。これから私のところに二度と来ないでください」と言った。

「初めて会ったあのときに本音が知らなかった私が盲目である

すっかり裏切られた私が愚かである

物を好んで歩いた私の足が軽い

会ってすぐ仲良くなった君が惜しい

心の悪い君は、ここから離れて行け」と言ってから、森の中に入って行った。

このように、牝のせいで雄が親友と別れることをこの話で例えている。

③ Д.Цэрэнсодном эмх “Монгол ардын үлгэр” Улаанбаатар 1982

Мэлхий сармагчин хоёр

(D.Tserensodnom 編『モンゴル民話』、「蛙と猿」)

昔、夫婦の蛙が住んでいた。ある日、夫の蛙が川の向こうの山に住んでいる猿と友達になるが、牝亀は、

「この我が夫はよく遊んでいるね。きっと牝の猿と付き合っているに違いない」と思った。そして妻の蛙が病気のふりをして、

「私の体が痛くなった。牝の猿の心臓を食べればきっと治る」と言った。夫の蛙は、山に戻り、猿に会って、こう言った、

「わたしのうちに来てください。わたしは、お前においしいごちそうを用意してあるから」と言って、猿を背中に乗せて連れて帰った。

家へ帰ると亀は、

「我が妻が病気にかかっているが、この病気は友達の猿の心臓をたべると治るそうなので、おまえの心臓を取りたい」と言った。猿は、

「わたしたち猿の心臓は木の上にかけている。今から二人で急いで戻って、わたしの心臓を取って来よう」と言ったら、亀は猿を背中に乗せて戻って行った。山に着いたら、猿は木の上に登って、そこから自分のフンを投げ下して、

「この心臓をあの牝に食べさせてください」と言って、木の上から降りてこなかったという。

④ “Erdeniin chimeg” Melhii bich hoyoriin nuhurlusun tuhai ulger, (Ts.Damdinsuren “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai”)

(Ts.Damdinsuren 『モンゴル古典文学 100 選』) 『Erdeniin chimeg』の第 10 の話 「猿と蛙が友達になったということ」

昔々海の中に仲のいい蛙の夫婦が住んでいた。ある日、夫の蛙は田舎へ餌を探しに出かけて行ったが、飲む水もなくおなかも減って田舎で倒れていたところをかつての友達の猿がやってきて、蛙を背中に乗せて水のあるところまで連れて行った。蛙は水をたくさん飲んで生き返った。そこで、猿は蛙を自分の洞穴の家に招待して色々な果実を食べさせた。

翌日になると蛙は帰りたがったが、猿に、  
「私の妻と子供たちはあなたにお茶と食べ物をさし上げようとしているから今日もお体を休ませて一泊してくれ」といわれて、三泊してから帰ってきたら、  
「あなたが帰って来ないから心配していたよ」と妻が怒った。夫の蛙は友達の猿が助けてくれて、その友達の家でご馳走になり、三日間体を休ませて来たことをいくら説明しても妻の蛙は信用してくれなかった。  
「あなたにそんな友達がいるはずがない。きっと他の蛙と付き合いただろう」と妻が怒って、大喧嘩になり、隣の蛙達も集まってきて、それぞれ説明しても喧嘩は泊まらなくて最後に蛙夫は妻を倒して殴ったら、妻は病気のふりをして、弱々しい声で、  
「私は外見で傷がないが、心の中に傷がついた。あの猿の心臓を食べるときっと治る」と言うともた死んだふりをして倒れてしまった。  
夫の蛙は猿に会って、  
「友達よ、私の命を助けてくれた恩返しとして今度、私の家にお茶を飲みにきてください」と誘って、猿を背中に乗せて連れて行った。海の中に入ってから蛙は、  
「私の妻は重い病気にかかっている。医師は、猿の心臓がその薬になると言っているからあなたの心臓を取るためにだまして連れてきた」と言うともた猿はびくびくしたが、  
「私達猿は他の動物と違って、私達の心臓は薬になる大事なものですから木の先に隠しておいてある。私の心臓を薬になると言ったその先生が教えてくれなかったのかい。今すぐ戻って心臓を取りにいかないの意味がないよ」と言った。蛙も、  
「取りに戻ろう」と言って、海を出て行った。戻ってくると猿は高い木の上に飛び上がって降りてこなかった。蛙は、  
「私の妻は重い病気で死にそうになっているよ。その薬になる心臓をください」とお願いした。猿は、  
「それでは、目を閉じて口を開けてください。私は心臓をおまえの口の中に入れてよう」と言った。蛙は言ったとおりにするとその口に自分のフンを入れて、  
「この心臓を持って帰れ」と罵ってから木を降りて洞窟の家へ帰った。  
猿にだまされた蛙は、初めて会った田舎の山に行って三日間続けて友達の猿を呼び叫んだら怒った猿が蛙を、  
「これからこの辺に来ないでください」と追い払った。

・チベットの説話

① 金子民雄『チベットの民話』第二十話「亀と猿の物語」

昔、大きな湖水に、年老いた亀が妻と家族と一緒に住んでいました。この湖水の縁の密林に猿の群れが住んでいました。

ある日、この亀がたまたま湖水から出て、密林の一本の椰子の実をなんとかして手に入れたいと思いましたがどうしても登ることができませんでした。そのとき、一匹の大きな猿が亀に親切にしてあげようと考えて、一つ二つ椰子の実をもいで、投げてやると、亀はこれを喜んで食べました。

じきにこの二匹の動物はすっかり仲良しになり、日中密林をぶらつき、夜は洞穴で一緒に寝て、森に数日を過ごしました。

此の間、亀の奥さんは夫の留守が長くなるので、心配になって、子供の亀に、お父さんがどこで何をしているのか見届けてくるように言いました。若い亀は、森の中をしばらく捜したあげく、洞穴の近くで父親に出会って母さんのことばを伝えたら、

「わしは友達の猿の兄弟と森の中で楽しんでいる最中で、数日したら家に戻るから。」と亀が答えました。

そこで亀の奥さんは、

「あの人も、森の中で下品な猿なんかと遊んでいないで、妻や家族のいるところへ帰ってくるべきよ。」と考えて、もう一度息子に、

「母さんの亀はひどい病気にかかり、医者が言うには、病気を治すたった一つの方法は猿の心臓しかない」という伝言を持たせて、父親のところへやりました。

亀は、妻が病気だという知らせを聞いて、妻に必要な薬を手に入れるため、猿を、自分の家に来て、数日泊っていくように招待しました。そして亀は猿を背中に乗せて家へ泳いで行きました。

湖水を渡りながら亀は猿に、妻の病気を治す唯一の薬は猿の心臓であることを洩らしてしまいました。これを聞いた猿はすっかり仰天してしまい、さては一杯食わされたと思いました。

「……奥さんがよほど悪いようでは一匹ぐらいの猿の心臓では十分だとは思いませんね。治療の効果を上げるには、少なくとも三匹か四匹ではなくちゃいけないと思えますね。もし、お望みなら、すぐに仲間の中から、数匹の猿をあなたの家へ連れて行くようにしますよ。」

亀は、これがよい考えだと思い、猿を湖岸まで連れ戻そうとして、ぐるりと向きを変えると、岸まで湖水を泳ぎ戻り、湖の浜をよたよた歩きました。

猿は乾いた地面の上に着いたら大急ぎで亀の背中から飛び下り、目についた一番丈の高い木のでっぺんに達すると、猿は亀を罵り始め、

「おまえは本当にいい友だちだったよな。俺を殺し、俺の心臓をおまえの醜い妻の薬にしてしまうため、俺を家に招こうなんてするんだからな。おまえのために一生懸命心づくしをしてやって、それに密林中を見せてやった正当なお返しが、これなのかい。だがね、今度はおまえより俺のほうがずっと利口だったってわけよ。これからは長いこと、俺の心臓なしでやっていくんだな。俺が約束した他の猿の心臓は、せいぜい自分で捜して、待ってみることだよ」。

この言葉を聞いた亀は烈火のごとく怒り、猿をやっつけるために、夕方になると、猿と一緒に住んでいた洞窟にそっとしのび寄って、猿がやってくるまで、洞窟の一番暗い隅に潜んで待ちました。

ところが、猿のほうはずっと利口でしたから、いつもの眠る時刻が来ると、彼は洞窟の入り口まで来て、中をのぞき込み、大声で叫びました。

「おーい、大きい洞窟！大きい洞窟！」。しばらく黙ったあと、猿はもう一度叫びました。「おーい、大きい洞窟！大きい洞窟！」それでも亀はうずまったまま、じっと息を潜めていました。

「おかしいぞ！この洞窟はいつもこだまがするもんだが、今夜にかぎって全然こだまが聞こえない。何か悪いことがあるに違いない。」と聞こえるような声で言うと、愚かな亀は、こだまの真似をして暗い隅から答えた。これを聞くと、猿は亀の馬鹿さかげんにくすくす笑い、森の別の場所へ眠りに行ってしまいました。

### 第3章 日本とモンゴルに共通に伝わったインド起源の仏教経典所収説話について、その周囲の説話集への展開

—布施譚説話の比較研究— “The Jātaka-mālā” と “Suvarṇaprabhāsa-sūtra” から日本とモンゴルへの展開

モンゴルと日本に同じモチーフで伝承された類似の説話が数多く存在している中、釈尊の前世の功德譚で比較的有名なテーマである本生譚の話も少なくない。

本章では、モンゴルと日本に共通に伝承された説話の中で “The Jātaka” や “The Jātaka-mālā”、“Suvarṇaprabhāsottamasūtra” などのインド起源の説話に由来する説話が、大乘仏教の展開とともに両国の説話にどのような影響を与えたかについて考察していく。とりわけ Jātaka 文献では、①釈尊が前世において動物となった本生譚や、②人間にあってはたくさんの功德を積んでいることが説かれている本生譚が漢訳仏典とチベット語訳仏典をはじめ、さらに日本とモンゴルにまで伝わっている。これらの話、もしくは共通する説話について、インド・中国・チベットなどの地域に残されている類似の説話も併せて比較対照研究をすることにより、モンゴルと日本における本生譚の伝承の特徴、展開の状況について検討したい。むしろ、日本では今までの比較説話研究によって、インドで成立した説話がアジアや西洋に伝承され、変貌を遂げていった過程について明らかにされてきた。しかし、モンゴル伝承の説話も含めたより広い視野で検討されたことは少ないようである。

本章では、日本とモンゴルで共通に伝わっている仏教説話の本生譚の中から、仏が前世で人間であったケースで特に重要な説話である「捨身飼虎」説話を取り上げた。以下に比較考察をすることで、インド起源の仏教説話の日本とモンゴルへの流伝の特徴と展開、変容そして両国の説話集への影響について確認していきたい。

研究方法としては、以上述べたように日本とモンゴルの説話資料だけでなく、説話の原典であるインドの “The Jātaka-mālā”、“Suvarṇaprabhāsottamasūtra” やチベットと中国の文献の説話資料等との比較対照考察をすることで、日本とモンゴルにおける布施譚説話の説話としての伝承のありさまと変容の有無やその特徴、本説話が両国の説話文学にどのように位置づけられているかについて検討していく。



## 第1節 日本とモンゴルにおける布施譚説話と先行研究の概要

### 3.1-1. 日本における布施譚説話の先行研究の検討

日本では、仏教の捨身供養譚・布施譚説話に関する研究が数多くなされている。その主な成果としては次の諸論考である。

- ① 杉本卓州「施身聞偈の菩薩」1986
- ② 山折哲雄「捨身飼虎」の変容」1996
- ③ 石田尚富『聖徳太子と玉虫厨子』1998
- ④ 岡田真美子「捨身と生命倫理」2000
- ⑤ 平岡聡『ブツダ謎説く三世の物語、上―「ディヴィヤ・アヴァダーナ」全訳』2007
- ⑥ 中村史『三宝絵本生譚の原型と展開』2008
- ⑦ Matsumura Junko “The Vyāgrī-Jātaka Known to Sri Lankan Buddhists and its Relation to the Northern Buddhist Versions” 2010
- ⑧ Hino Eun “The Vyāgrī-Jātaka in the Extant Versions of the
- ⑨ Suvarṇaprabhāsottamasūtra” 2014
- ⑩ 石田勝世「『賢愚経』と『金光明最勝王経』の蔵訳者について：捨身飼虎本生話を中心として」2015

このうち⑩の石田氏の論考は『賢愚経』と『金光明最勝王経』を翻訳の側面からみた比較考察を行い、両経典の蔵訳者は本当に法成であるのか検討している。この論考では両経典の漢訳と蔵訳を利用し、その中の捨身飼虎説話の比較検討をしている。石田氏は、捨身飼虎本生話のテキスト分析を行った上で、「訳者が同一を否定する情報は見られなかった」ため、両者のチベット語訳は、法成 ('gos chos grub) による翻訳であるという結論を出されている。

さて、本章では、捨身説話を考察するに当たり、中村史氏が『三宝絵本生譚の原型と展開』（2008）において仏教説話の本生譚を「現在物語」・「過去物語」・「連結」の部分を取り上げて定義されていることに基づき、「現在物語・過去物語・連結」という三つの枠組みで比較考察をしていきたい。

中村氏は本生譚の構成について

『三宝絵』のシビ王本生譚では、「現在物語」当たるべき部分が「布施波羅蜜とは

何か」という定義のような記述、単に「序」とでも言う記述に変わっている。そののちいわゆる「過去物語」が続き、最後に「連結」その他の記述がやや雑然と置かれている。「過去物語」の後の記述を全てあわせて「結」としておこう。」<sup>87</sup>

と定義している。

さらに中村氏は、『三宝絵』と『今昔物語』天竺部の説話の本生譚としての性格について

『三宝絵』の本生譚、*Jātaka* 全 13 話である。それらの本生譚は「昔の誰々は今の釋迦如来なり」という「連結」（パーリ語 *Samodhāna*）に当たる一文をもつことによって、本生譚のおそらく最も本質的な性格を失っていない。」と指摘して、それに対して、『今昔物語集』天竺部は本生譚であった説話を多く収めるが、これらは、「現在物語」と「連結」枠組みを失い、「過去物語」のみが、新たな昔話調の枠組み、「今は昔」と「となむ語り伝へたるとや」に嵌めこまれ、単なる意図の説話になると同時に、本生譚の本質を失っている。」<sup>88</sup>

と述べている。

また中村氏は、仏教の本生譚説話の「過去物語」の部分について

「本生譚の過去物語の部分が本来、仏教外の説話であり、一般的な寓話・教訓話で等であったこと、かつ、仏教に取り入れられた当初は仏の前生物語・菩薩の物語でもなかったということである。」<sup>89</sup>

と述べている。以上のことから、本生譚の説話は単なる仏教経典といった枠組みで取扱うだけでなく、説話資料として取り扱い、その伝承と変容に関する比較対照をする必要を生み出していると考えられる。

---

<sup>87</sup> 中村史『三宝絵本生譚の原型と展開』2008、p.30

<sup>88</sup> 中村史『三宝絵本生譚の原型と展開』2008、p.16 - 17

<sup>89</sup> 中村史『三宝絵本生譚の原型と展開』2008、p.28

### 3.1-2. モンゴルの布施譚の説話について (“Üligerün dalai sudur” を中心に)

本章で取り扱う、仏の前世を語る本生譚の話である「捨身飼虎」をテーマにした話が、モンゴルでは“Qutug-tu degedu altan gerel-tu erhetu sudur nugūd-un hagan”（金光明経）と“Üligerün dalai sudur”（譬喩の大海経）に伝わっている。前者の“Qutug-tu degedu altan gerel-tu erhetu sudur nugūd-un hagan”は、モンゴル人には“Altan gerel sudur”という名前で知られており（以降、“Altan gerel sudur”と称する）、昔から全ての遊牧民の仏壇に収められ、信仰されてきた有名な経典である。

この“Altan gerel sudur”のサンスクリット語原典は“Suvarṇaprabhāsottamasūtra”で、チベット語訳を底本にして、サンスクリット本と漢訳を参照しながらモンゴル語に翻訳しているとされる。本経では如来の本生譚だけでなく、寿量説や三身説、如来蔵説、懺悔思想、空性説、菩薩十地説、陀羅尼、本生譚などの伝統的な仏教の要素のみならず、護国思想や王権思想などの政治思想も説いている。

以下、仏教の布施譚の説話を数多く語るモンゴルの“Üligerün dalai sudur”について紹介する。

#### 1. “Üligerün dalai sudur” について

モンゴルの仏教説話集の一つである“Üligerün dalai sudur”（Üligerün dalaiyin sudurともいう）は、日本では『賢愚経』という漢訳で知られている経典である。“Üligerün dalai sudur”の直訳の意味は、「譬喩の大海経」になるが、中には仏教の本生話、特に布施譚の話も所収されている。

本経は、チベットのmDzangs-blun（『ザンルン』）のモンゴル語訳とされる。このmDzangs-blunは、西暦445年に成立された漢訳『賢愚経』<sup>90</sup>のチベット語訳で、9世紀ごろに法成<sup>91</sup> 'gos chos grubによってチベット語に翻訳された<sup>92</sup>。

モンゴルでは古くから版本や写本で広く普及され、遊牧民の中で読まれてきた<sup>93</sup>“Üligerün dalai sudur”は、現在、以下の4種類のモンゴル語訳が知られている。

#### 1) Shireet Guishi Tsorj 訳（16世紀）、Šiluyun onultu kemegdekü sudur

<sup>90</sup> 三谷真澄『mDzangs-blun（『賢愚経』）に関する考察』1997年2月

<sup>91</sup> 『日本国語大辞典』

【法成】ほうじょう [ホフジャウ] は、780年頃～860年頃のチベットの中観瑜伽派の僧。]

<sup>92</sup> Burnee Dorjsuren “Damamukonamasutra In Mongolia” 2008

<sup>93</sup> Ed. by D. Burnee, D. EnkhTUR “Üligerün dalai sudur” 2013

- 2) Tsultemlodoi 訳 (16 世紀)、Sain muu uyliig uhuulahui nert sudur
- 3) オイラドの Zaya Bandida Namkhajamts (1599-1662) 訳、Medeetei Medeeguig yalgagch sudur
- 4) Toin Guishi 訳 (16 世紀)、Shuluun byaduun uye onohui nert sudur であり、Shireet Guishi Tsorj 訳 Šiluyun onultu とオイラドの Zaya Bandida Namkhajamts 訳 Medeetei Medeeguig yalgagch sudur は “Üligiriin dalai” という名で普及されている<sup>94</sup>。

現存の経典 Shireet Guishi Tsorj 訳の “Üligerün dalai sudur” は 12 巻 52 品で、Zaya Bandida Namkhajamts 訳 “Üligiriin dalai” (Oirat version of Damamūkonāmasūtra) は 12 巻 51 品から成り、1655 年ごろモンゴルのオイラド族の僧侶 Zaya Bandida Namkhajamts がチベット語からモンゴル語に翻訳し、自分が作ったトド文字<sup>95</sup>で作成している<sup>96</sup>。

本稿で、扱っているのは Shireet Guishi Tsorj の翻訳とされる “Üligerün dalai sudur” である。これは 1714 年と 1728 年に木版が作成されているが、1714 の木版を 2007 年に内蒙古人民出版社で編集したものである。

この “Üligerün dalai sudur” はフフホト<sup>97</sup>の Shireet Guishi Tsorj が 1600~1607 年頃にインド原典（ここに書かれているインド原典については、詳しい情報や研究は未だにない）とチベット語訳の mDzangs-blun（『ザンルン』）を基にしてモンゴル語に翻訳したもの<sup>98</sup>で、Ligden hutugt 王（1588-1634）時代、1629 年に Gungaa-Osor Bandida 等のモンゴルの翻訳者達によってモンゴル語版大蔵経 Kanjur の第 90 巻（179-430p）にも編集されているほか、単独でも出版されている<sup>99</sup>。

この “Üligerün dalai sudur” に 52 品が編集されている中、仏が前世において仏道を求める菩薩行として自らの身を布施するという自己犠牲を説く Jātaka タイプの話を取り出し、以下にまとめた。

他の漢訳、チベット語訳の仏教文献にも同種の説話が見られるが、それぞれ同種話の紹

<sup>94</sup> Burnee Dorjsuren “Damamukonamasutra In Mongolia” 2008

<sup>95</sup> CE.Damdinsürüng “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai” 1959

[トド文字 (Tod useg) は、1648 年にオイラドの高僧 Zaya Bandida Namkhajamts が、モンゴル文字を基に作った。]

<sup>96</sup> Redigit B.Rincen “Oirat version of Damamūkonāmasūtra” 1970, p. ix

<sup>97</sup> [Khuh Hot] は、現在内蒙古首都

<sup>98</sup> Ed.by Erkhembayar “Üligerün dalai sudur” 2007

<sup>99</sup> Redigit B.Rincen “Oirat version of Damamūkonāmasūtra” 1970, p. ix

介、相互関係について論じることができないが、本考察の視点としては、説話の翻訳をする際にモンゴル人にわかるように原典を変容させている点を見出すことである。これは、本経はチベットとインドの經典の翻訳とされていても、16世紀ごろにモンゴルに再普及された仏教の展開と共に仏教の思想、教訓をモンゴル高原に広く宣言するという編者の意図を探ることも可能であると考えられる。

本経は、上述のように、チベットの mDzangs-blun (『ザンルン』) のモンゴル語訳である。日本において、チベットの『ザンルン』に関する研究は、高橋盛孝氏<sup>100</sup>と三谷真澄氏<sup>101</sup>の研究が既になされている。また、モンゴルにおける“Üligiriin dalai” についての研究は、D.Burnee 氏<sup>102</sup>と、Ts.Damdinsuren 氏<sup>103</sup>の研究業績がある。

## 2. モンゴルの“Üligerün dalai sudur” における布施譚の説話について

以下に、モンゴルの“Üligerün dalai sudur” における布施・捨身行を説く共通のモチーフをもっている各説話のあらすじと構成を簡単に紹介する。

### 第1巻1章 「種々の物語を説示する章」

第1章の第1品では布施譚の5話が連続に語られている。

- 1) Ganashinabali王がLiuduchaという婆羅門より法を聞くために、婆羅門の求めに応じ自身をえぐって千灯供養する。  
目的は仏道を得るためであり、仏道を得られたら、その光明で無知の衆生を救済する。
- 2) Jilingarli王がLiuduchaという婆羅門より法を聞くために、婆羅門の求めに応じ身体の上に千の鉄釘を打つ。  
目的は仏道を得るため。
- 3) Eserun王のBogd王子は、帝釈天の化身なる婆羅門より法を聞くために10 tohoi<sup>104</sup>火坑を作り、熾火を満たして投身する。  
目的は仏道を得るため。
- 4) Udvalという仙人の師は、婆羅門より法を聞くために自らの皮を剥いて紙となし、骨で筆を作り、血を用いて墨に和し、法を書き写す。

<sup>100</sup> 高橋盛孝『藏漢対訳賢愚経』1970

<sup>101</sup> 三谷真澄『mDzangs-blun (『賢愚経』) に関する一考察』1997年3月

<sup>102</sup> Burnee Dorjsuren “Damamukonamasutra In Mongolia” 2008

<sup>103</sup> Redigit B.Rincen “Oirat version of Damamūkonāmasūtra” 1970

<sup>104</sup> Я.Цэвэл “Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь” 1966, p.547

[tohoi] 長さを測るモンゴル伝統的な単位系。1トホイ=肘から指先までの長さ(およそ40センチ位)

目的は仏道を得るため。

- 5) Shivsei王、鵠（毘首揭摩(Visvakarman)の化身) を助けるために、鷹(帝釈天の化身)の求めに応じ、自らの肉を切り取って鷹に与える。

以上の5話では、いわゆる善説の法を求め、そのために自分を犠牲にする釈尊前生の行為が説かれる。特に1-4話には菩薩が善説の法を求めるといういわゆる自発的な求めによる捨身行為が見られるが、第5話は他者を救うために自らを犠牲にするという特徴が見られる。

- 6) 第1巻2章、大者という王子が牝虎に身を施す事

マハサッター王子、2匹の仔を産んだ牝虎を飢えから救うために自ら身を施す。

- 7) 第2巻7章 Susadi 王子の品

7歳のSusadi王子は、自らの身の肉を父母に食べさせ、父母を飢えより救う。更に、貧乏人や虎、狼等の獣の化けした帝釈天にも自らの身の肉を施す。

目的は、功德を持って仏道を得る。

- 8) 第2巻13章 慈悲力王の布施する品

慈悲力王は、5つの夜叉の求めに応じて自らの血を施す。

目的は、功德を持って仏道を得る。

- 9) 第4巻15章 Gunda gorogusen (野獣)、身を施す品

Gunda gorogusen (野獣) は、梵摩達王の求めに応じて、自らの皮を施し、狩人を王の罰から救い、更に8万の諸虫に身の肉を施す。

目的は、無上仏道を求める。

- 10) 第6巻23章 Sarangerel haan (月光王)、頭を施すの品

Shimasana王は、月光王に嫉妬し、その頭を欲する。そのためにLiudacha婆羅門が月光王の国に来て、王の頭を求める。月光王は、求められた通り、頭を施す。

目的は、無上正真の道を求め、群生を救い、涅槃の樂に至らす。

- 11) 第7巻27章 Sudolagarni 王の品

Sudolagarni王は、干ばつや雪害で作物が獲れなくて飢えている国民を救うために魚に生まれ変わり、自らの身を施す。

- 12) 第10巻32章 怪目王子、目を施す品

Bugala国の王の勧めで、盲目の婆羅門が怪目王子の目を求めて来る。その求めに応じて怪目王子が婆羅門に目を施す。

目的は無上仏道を求める。

以上で紹介している捨身譚は、いくつかの注目されるところが見られる。

本経は、種々の比喻話から成っているが、その中で仏が前世において行った菩薩行を語る布施譚の説話を中心に考察した。この12話は、いずれも血生臭い身の布施と捨身行を語る共有的なモチーフを持っているのが特徴であり、主人公の自己犠牲の目的は「無上仏道を求める」ということが共通しているのは、本生経典と *Jātaka* 類は「転生して、最後に仏となる」という唯一の目的のために血生臭い捨身が行われるのであって、慈悲行も布施行も最終目的は「仏になる」というところで完結している。

本経について Ts.Damdinsuren 氏が「モンゴル大蔵経の中からモンゴルの遊牧民の中で一番広く普及されていたのは、この “Üligerün dalai sudur” で、モンゴルの遊牧民はみんな “Üligerün dalai sudur” を大事に保管し、愛読していた」<sup>105</sup>と示していることから、本経の役割はモンゴル遊牧民族の中に仏教の思想、教えを広げるためであったという位置づけを指摘することができる。

ここで、モンゴルの文化的な特徴を表す表現もみられる。例えば、第7巻27章 Sudolagarni 王の品で [Gan zudaas bolj urgats avch chadahguigees bolj ulsgulund nervegdsen irgediig avrah] (干ばつや雪害で作物が獲れなくて飢えている国民を救う)とあるが、漢訳の『賢愚経』の場合は [災] になっている相違点が見られる。また、第1巻1章の「Eserun 王の Bogd 王子」の話にもモンゴルの伝統的な長量を表す [Tohoi] (トホイ) という表現がみられる。これは、モンゴル人にわかりやすくするために、編者、あるいは訳者が付け加えたものである。このような説話におけるモンゴル文化の特徴が少なからず見られる。

仏典の翻訳は通常、サンスクリット→チベット→モンゴル・サンスクリット→中国→モンゴルという流れがあるが、この経典は、中国→チベット→モンゴルという特殊な流れをもった文献である。モンゴルの説話の場合、主人公をはじめ、登場人物の名前、また地名がサンスクリット語と、ソグド語の言葉で表現されている。この特徴は、“Üligerün dalai sudur” のモンゴル語訳について、「16世紀ごろインドとチベットの経典を基にモンゴル語に翻訳した」<sup>106</sup>という解説に関連して検討をすると、文献の原典について新たに指摘する必要があるかと思われる。

---

<sup>105</sup> CE.Damdinsürüng “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai” 1959

<sup>106</sup> Ed.by Erkhembayar “Üligerün dalai sudur” 2007, p.412

## 第2節 日本とモンゴルの布施譚説話の比較研究

—「捨身飼虎」と *Ölöqč̣in bars-tur beyeben öggügsen anu* 説話を中心に—

ここで検討していく、釈尊の前世の功德譚の中でも比較的有名な「捨身飼虎」説話は日本では、法隆寺の「玉虫厨子」の側面に描かれている「捨身飼虎図」でよく知られた話である。モンゴルでは“*Altan gerel sudur*” (“*Алтангэрэл судар*”) (金光明經)と“*Üligerün dalai sudur*” (譬喩の大海經)にも伝わっている。

この説話は、飢えた虎の母子に菩薩が自らの身体をささげることによって虎を救済する話であるが、インドの“*The Jātaka-mālā*” もしくは“*Suvarṇaprabhāsottamasūtra*” といった大乘仏典にその起源を認めることができる。これは仏教の利他行の精神をよく表すものとして重要な説話である。そして、この話がインド・チベット・中国・日本・モンゴルに広く流通していることは大乘仏教の歴史的展開を考えると、大きな意味を持っていると考えられる。

本節では、日本とモンゴルの「捨身飼虎」説話の比較考察をするために、インドのサンスクリット語原典と漢訳仏典、チベット語訳仏典の説話を併せて比較対照をすることで、両者の伝播の過程、話の変容の有無と、話における地域的、民俗的な特徴について確認する。



### 3.2-1. 日本とモンゴルに共通に伝承された「捨身飼虎」説話の比較対照研究で取り扱う説話資料について

「捨身飼虎」説話の原型の話としては、前述のように、インドのサンスクリット語 “The Jātaka-mālā” (Vyāghry-jātakam) と “Suvarṇaprabhāsottamasūtra” (Vyāghrī-parivartah) の 2 つの文献が存在する。

“The Jātaka-mālā” は一般的には Āryaśūra が編集したといわれるが、複数の編集者が知られており、岡野潔氏によると、Āryaśūra・Haribhatta・Gopadatta の 3 人の名が挙げられている。

後者は、インドの大乗仏教経典の中で重要な位置を占める “Suvarṇaprabhāsottamasūtra” (『金光明経』) という経典であり、日本では国分寺(金光明四天王護国之寺の略)の所依経典であり、最勝会・金光明懺法放生会などの根拠となっている。この『金光明経』はサンスクリット本が現存し、様々な言語に翻訳されている。

ちなみに、ロシアの学者 S.E.Malovy 氏は、“Suvarṇaprabhāsa-sūtra (Сутра золотого блеска Текст уйгурской редакции”, 1913-1917 において次のように述べている。

Suvarṇaprabhāsa-sūtra のウイグル語題名は《Алгун ярук》で、そのほかにチベット語訳、中国語訳、東トルコ語訳、モンゴル語訳、カルマック語(オイラド語)訳もある。

S.E.Malovy 氏はドイツのベルリンとロシアのペテルブルグに保管されている

Suvarṇaprabhāsa-sūtra のウイグル語訳写本テキストの比較研究し、ベルリンの Turfan kollektion (トルファンコレクション) の中に保管されている Suvarṇaprabhāsa-sūtra のウイグル語訳は 8 世紀～9 世紀ごろの書籍で、ロシアのペテルブルグに保管されているのは 13 世紀～14 世紀に作成されているとみている。1902 年から 1904 年に東トルキスタンのトルファンでドイツの科学探検隊によって発掘された『金光明経』のウイグル語訳の写本は、ドイツの Berlin Brandenburgische Akademie der Wissenschaften (ベルリン-ブランデンブルク人文科学アカデミー。旧プロシア科学アカデミー) の図書館の Turfan kollektion (トルファンコレクション) の中にて保管されている。

このように中央アジアのさまざまな言語に翻訳されているが、モンゴル語への翻訳状況について、Ts.Damdinsuren 氏は “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai”, Улаанбаатар 1959 において次のように述べている。

他の仏教の経典はチベット語の名前でモンゴルに伝承されているが、「金の光りス

ートラ」だけがモンゴル語言葉の“Altan gerel sudur”（『金の光スートラ』）という名前で普及されている。モンゴルでは14世紀にB.Sharavsengeによってチベット語とウイグル語からモンゴル語に翻訳されているモンゴル仏教經典の“Altan gerel sudur”（『金の光スートラ』）と16世紀ごろZaya Bandida Namhaijamstが翻訳したオイラド語訳もある。1659年に作られた木版の經典は現代モンゴル国立図書館に保管されている。またロシアのサンクトペテルブルグのロシア科学アカデミーに金字で書かれた「金の光りスートラ」が保管されている。

この「金の光スートラ」をモンゴルの仏教哲学寺院の院層Sodnom Gantomor氏が2009年に現代モンゴル語のキリル文字に翻訳した。

“Suvarnaprabhāsottamasūtra”のチベット語訳は次の3本があるとされている<sup>107</sup>。

- ① Jinamitra, Śilendrabodhi, Ye-ses-sde 所訳 10巻 29品本
- ② Chos-grub（法成）訳 10巻 31品本（義浄重訳）
- ③ Mūlaśoka, Jñānakumāra 所訳の5巻 21品本（義浄重訳）

「現代モンゴル語に翻訳されているのは、サンスクリット原典に基づいた翻訳とされるJinamitra, Śilendrabodhi, Ye-ses-sde 所訳である」と經典の現代モンゴル語翻訳者のSodnom Gantomor氏が述べている。

以下、本節で取り扱っている「捨身飼虎」説話資料を本研究で扱う略称を含めて（表3-2a）で紹介する。

表（3-2a）「捨身飼虎」説話資料一覧と本研究で扱う略称

| 国    | 説話資料   | 略称       |
|------|--|----------|
| 日本   | 「薩埵王子」『三宝絵』新日本古典文学大系 1997  | 『三宝絵』    |
| モンゴル | Bar-dor bey-ben öggügsen neretu horin jiragu-dugar<br>bölöq, “Qutug-tu degedu altan gerel-tu erhetu sudur nugūd-un<br>hagan”(ed.by Lokesh Chandra and Raghu Vira, Mongolian<br>Kanjur 1973-1979) | Suv.Mong |
|      | Yeke amitan neretu qan köbegün ölöqçin bars-tur beyeben<br>öggügsen jüyil anu, Mongolian Kanjur Vol.90, “Üligerün dalai  | UDS      |

<sup>107</sup> 金光秀友『金光明經の研究』1980

|      |  |                 |
|------|--|-----------------|
|      | sudur”   |                 |
|      | Eke amitan ölöqčün bars-tu beye ögön üyiledüqsen<br>bölöq,“Üligiriin dalai ”(Oirat version of<br>Damamūkonāmasūtra)  | Oirat.UD        |
| インド  | Vyāghrī-jātakam, ”The Jātaka-mālā” (ed by H.Kern,Havard<br>Oriental Series,Masachusetts 1943,pp167-175)  | JM.S            |
|      | Vyāghrī-parivarta,“Suvarṇaprabhāsottamasūtra”<br>Ch.18,pp.201-240  | Suv.S           |
| 中国   | 『金光明経』 T16 no.663,353c22-356c21  | Suv.C           |
|      | 『賢愚経』 T4 no.202,352b19-353b16  | T4-202          |
|      | 『菩薩本生鬘論』 T3 no.160,332b23-333b9  | T3-160          |
| チベット | Stag-mo la lus yoṅs-su btan-ba,<br>“ 'phags-pa gser 'od dam-pa mdo-sde'i dbang po'i rgyal-po'i<br>shes-bya-ba theg-pa chen-po'i mdo” (ed.by Daisetz<br>T.Suzuki,The Tibetan Tripitaka,Otani univ.1956) | Suv.Tib         |
|      | Sem's can chen bo's stag-mo-la lus s'byin ba'i leuyo,<br>“Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo”  | Mdzangs<br>blun |

### 3.2-2. 「捨身飼虎」説話の文献成立・翻訳年代表

まず、本研究で取り扱う「捨身飼虎」説話が収録されている文献の成立年代と翻訳年代を先行研究の成果に基づいて以下の（表 3-2b）で整理していく。

表（3-2b）「捨身飼虎」説話の文献成立・翻訳年代表

| 文献資料  | 国    | 成立・翻訳年                   | 著訳者  |
|---|------|--------------------------|--|
| “The Jātaka-mālā”   | インド  | 4 世紀後半-<br>6 世紀前半<br>108 | Āryaśūra                                     |
| “Suvarṇaprabhāsottamasūtra”   | インド  | 412-421 年 <sup>109</sup> |  |
| 『金光明経』  | 中国   | 5 世紀 <sup>110</sup>      | 曇無讖訳   |
| 『賢愚経』   | 中国   | 445 年 <sup>111</sup>     | 釋曇覺等   |
| 『菩薩本生鬘論』  | 中国   | 9-10 世紀 <sup>112</sup>   | 多数人訳   |
| “ 'phags-pa gser 'od dam-pa<br>mdo-sde'i dbang po'i rgyal-po'i<br>shes-bya-ba theg-pa chen-po'i<br>mdo” | チベット | 836 年頃 <sup>113</sup>    | Jinamitra,<br>Śilendrabodhi,<br>Ye-ses-sde 訳 |
| “Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo”  | チベット | 859 年頃 <sup>114</sup>    | gos chos grub（呉法成）訳                          |
| 『三宝絵』   | 日本   | 984 年 <sup>115</sup>     | 源為憲  |

<sup>108</sup> 干潟龍祥・高原信一訳著『Jātaka・マーラー本生談の花鬘』1990、p.iii

【ここに翻訳した『Jātaka・マーラー』の原典の作者アールヤシューラの生存時代については、ただインドのサンスクリット文学の最盛期、即ちグプタ朝時代（4 世紀後半～5 世紀～6 世紀前半）の人、という以上にはわからない。】

<sup>109</sup> 泉芳環譚『新譚金光明経』1933、序 p. ii

<sup>110</sup> 金光秀友『金光明経の研究』1980

<sup>111</sup> 岩野眞雄『国訳一切経印度撰述部 本縁部 7』1997、p.62

<sup>112</sup> 岩野眞雄編『菩薩本生鬘論』1929

【漢譯者紹徳・慧綯は床朝（960～1127 年）の出世にして譚出年代等は詳ではないが、少なくとも 4 人以上の譯者より成りしこと。】

<sup>113</sup> 金光秀友『金光明経の研究』1980

【gser 'od dam pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po'i mdo（『金光明経』のチベット語訳）の Jinamitra, Silendrabodhi, Ye-ses-sde 所訳十卷二十九品本の成立年代は 836 年よりくだるわけがない。】

<sup>114</sup> 三谷眞澄「Mdzangs blun（『賢愚経』）関する一考察」1997

|  |      |                             |   |
|--|------|-----------------------------|---|
| “Qutug-tu degedu altan gerel-tu erhetu sudur nugūd-un hagan” | モンゴル | 14 世紀頃 <sup>116</sup>       | B.Sharavsenge 訳   |
| Kanjur Vol.90,“Üligerün dalai sudur”                         | モンゴル | 1600~1607 年頃 <sup>117</sup> | Shireet Guishi Tsorj 訳<br>(16-17 世紀)                      |
| “Üligiriin dalai” (Oirat version of Damamūkonāmasūtra)       | モンゴル | 1655 <sup>118</sup>         | Zaya Bandida<br>Namkhajamts<br>(1599-1662) <sup>119</sup> |

以上が、「捨身飼虎」説話の文献成立と翻訳年代をまとめた表 (3-2b) であるが、各地域における文献を成立年代順によって並べた。

この表により、4 世紀頃インドで成立されたこの説話は、5 世紀頃に中国で漢訳によって普及されるが、そこから 3 世紀も後になると、チベットに伝播され、984 年に『三宝絵』によって日本に伝わったことが分かる。最終的な伝播として 14 世紀頃にモンゴルで伝承されていることが明らかである。4 世紀に成立したこの説話が数百年にわたってアジアの地域に伝承され、本来のモチーフを保ちながら最終伝播地域のモンゴルに至るまでの伝承の過程、展開、そこからみえる各地域の仏教説話としての受け入れ方の特徴、変容について本節で検討していきたい。

<sup>115</sup> 今野達、小原弘校注『三宝絵』1997、p.490

<sup>116</sup> С.Гангөмөр орч “Алтангэрэл судар” 2009

<sup>117</sup> 金岡秀郎「モンゴル語訳『賢愚経』について——その成立に関する基礎的研究」1987

<sup>118</sup> Redigit B.Rincen “Oirat version of Damamūkonāmasūtra” 1970, p. ix

<sup>119</sup> Burnee Dorjsuren “Damamukonamasutra In Mongolia” 2008

### 3.2-3. 「捨身飼虎」説話の比較対照

日本とモンゴルにおける「捨身飼虎」説話の流れと構成による比較

「捨身飼虎」説話は仏が前世において人間として生まれ、飢えた虎の母子を救うために自分を犠牲にし、身を施した功德の果報によって現世では仏となったという仏教の本生話である。

以下に、インド・中国・チベット・日本・モンゴルに伝わった「捨身飼虎」説話のおおよその粗筋を紹介する。

昔、国王がいた。その王には天子に比べるべき三人の王子がいて、その三番目の王子は最上の慈悲の心をもっていた。

ある日、王様が楽園を旅したとき、三人の王子も共に行った。王子達は、父王を離れ、美しい花が咲いている大森林に入って行った。

三人の王子はその森林の中で、生まれたばかりの仔虎たちに囲まれ、極めて体力が衰えている牝虎を見つけた。飢えや疲れに迫られているその牝虎が、今にも自分の仔虎を食べようとしている様子をみた三人の王子は、その牝虎を救うために、誰かが自分の身を投じ、食べさせるしかないという話をする。

最上慈悲の心を持った三番目の王子（菩薩）は、自らの身を投じ、虎の母子を飢えから救う。菩薩の捨身行と同時に、王妃が最愛子との別れる予感の夢を見る。大地が6度に震動し、太陽が光を失い、天から花が降る。

国王と王妃、王宮の皆が仏塔を造り、菩薩の遺骨を納めて、供養する。

その時の王子は、今の釋迦如来である。

この話の主人公であるサッタ王子は、インドのサンスクリット本の“*The Jātaka-mālā*”では、婆羅門の子になっている。この設定は、他の説話と異なる点であり、説話の登場人物や話の展開も当然異なっているが、釋迦如来が前世において人間として生まれ、飢えた虎の母子を救うために自らの身を投じるといった「捨身飼虎」のモチーフが共通しているのである。

以上のことから、「捨身飼虎」説話の粗筋であるが、仏教經典におけるこのような本生譚の話は、構造的には、次のような三部分から成っているとされる。中村史氏が『三宝絵本生譚の原型と展開』2008において、本生譚の話を構造的には次の三つの部分から成っていると述べていることを本研究の比較考察にも採用したい。

- (一) 現在物語 (paccuppnavatthu) —いかなる機会にブッダが僧たちにこの物語を語ったかを記す部分
- (二) 過去物語 (atītavatthu) —ブッダの前世物語で Jātaka の本質的部分
- (三) 連結 (samodhāna) —過去物語の人物と現在物語の人物とを結びつける部分

120

まず、対照表 (3-2c) によって日本とモンゴルの「捨身飼虎」説話の流れ、構成に関する比較考察を上述の現在物語・過去物語・連結といった部分に注目して検討していく。

ここで、モンゴルの Mong.U.D と Oirat.U.D 中の「捨身飼虎」は内容と構成的には大分一致しているので、以下に合わせてまとめていくことにした。

(以降表 (3-2c) ~ (3-2h) において\*印で省略しているモンゴルの説話資料の本題名)

\* Bar-dor bey-ben öggügsen neretu horin jiragu-dugar bölöq, “Qutug-tu degedu altan gerel-tu erhetu sudur nugūd-un hagan”(ed.by Lokesh Chandra and Raghu Vira, Mongolian Kanjur 1973-1979)

\*\* Yeke amitan neretu qan köbegün ölöqčün bars-tur beyeben öggügsen jüyil anu, Mongolian Kanjur Vol.90, “Üligerün dalai sudur”

\*\*\* Eke amitan ölöqčün bars-tu beye ögön üyiledügsen bölöq, “Üligiriin dalai”(Oirat version of Damamūkonāmasūtra)

表 (3-2c) 日本とモンゴルにおける「捨身飼虎」説話の構成と流れによる比較対照表

| 国    | 『三宝絵』                | *Suv.Mong                   | **UDS                                    | ***Oirat.UD |
|------|----------------------|-----------------------------|--|-------------|
| 現在物語 | ×                    | 仏が聖地に行く・菩薩の舍利供養する・捨身飼虎の話始める | 仏が城へ乞食に行く・そこで物盗みの二人兄弟を王の殺処より救う・捨身飼虎の話始める |             |
| 過去物語 | 三人の王子が森へ遊びに行く        | 三人王子が森へ遊びに行く                | 三人王子が森へ遊びに行く                             |             |
|      | ×                    | 二人兄が悪予感を感じる                 | ×  |             |
|      | 7匹の仔を産んだばかりの飢えた牝虎に遭う | 5匹の仔を産んだばかりの飢えた牝虎に遭う        | 2匹の仔を産んだばかりの飢えた牝虎に遭う                     |             |

120 中村史氏は『三宝絵本生譚の原型と展開』2008、p.26

|    |                       |  |  |
|----|-----------------------|--|--|
|    | 菩薩が飢えた虎の母子を救うために身を投じる | 菩薩が飢えた虎の母子を救うために身を投じる  | 菩薩が飢えた虎の母子を救うために身を投じる  |
|    | 王妃が悪予感の夢を見る・王子等を捜す    | 王妃が悪予感の夢を見る・王子等を捜す   | 王妃が悪予感の夢を見る・王子等を捜す   |
|    | 親が悲しむ・王子の舍利を納める       | 親が悲しむ・王子の舍利を納める  | 親が悲しむ・天に生まれた王子が親を慰める・王子の舍利を納める   |
| 連結 | 昔の薩埵王子は、今の釈迦如来也。      | 釋迦牟尼如来の私は、そのときの <b>Maharada</b> 王の子、 <b>Mahasattva</b> 王子となって、身を捨てて牝虎を安穩にしてあげた。最上帝王なる <b>Shuddodana</b> は、その時の大王 <b>Maharada</b> であった。その時の王妃は、今の摩耶夫人である。第一の王子 <b>Mahapranada</b> は、今の <b>Maitreya</b> (彌勒) である。第二の王子 <b>Mahadeva</b> は、今の文殊師利である。その時の牝虎は、今の <b>Mahaprajyati</b> (摩訶波闍波提) である。その虎の五仔は、今の五比丘である。 | その時の大王、 <b>Maharadana</b> とは異人ではなく、今の我父の王 <b>Sudadana</b> である。その時の王夫人は私の母 <b>Mahamaya</b> になった。その時の <b>Mahanada</b> とは、今の彌勒で、第二の太子 <b>Mahadeva</b> とは、今の婆修蜜多羅である。その時の太子 <b>Mahasattva</b> とは異人ではなく、この我身である。その時の虎の母は、今のこの老母で、その時の二人の子は今の二人これになる。我、遠い昔においてもこのように危機より他の命を救ってあげた。それで、今成仏となって、又彼らの命を救い、永く生死の大苦を離れしめた。 |

以上、比較対照表 (3-2c) で見る限り、説話の核となる捨身飼虎のモチーフは共通に語られているが、現在物語の部分は日本の『三宝絵』の話には全く語られてない。また過去物語では、日本の話の場合は「昔の薩埵王子は、今の釈迦如来なり」とあるが、モンゴルの全ての説話では登場人物全員の過去生と現世の関係を詳しく語っている。

このように、両国の「捨身飼虎」説話に相違点がみられるのは、それぞれの地域の説話の原典と文学的性格によるものである。以下に本説話の原型が収録されているインドのサ



ンスクリット本の “The Jātaka-mālā” と “Suvarṇaprabhāsottamasūtra” とその漢訳文献、そしてチベット語訳文献の比較対照をすることで、本説話の原型と展開、伝承の特徴をそれぞれの共通点と相違点から確認していきたい。

まず、「捨身飼虎」説話文献の原典に当たるインド系は “The Jātaka-mālā” と “Suvarṇaprabhāsottamasūtra” の 2 書があるが、以下にそれぞれの粗筋を紹介する。

#### ① Vyāghrī-jātakam, “The Jātaka-mālā”

(『ジャータカ・マーラー』「牝虎本生」)

昔、世尊は菩薩として、ある偉大なるバラモンの家に生まれました。

あるとき彼は、弟子を連れて、修行に行ったとき、山の森の中で分娩の苦しみや飢えのため自分の子達さえも食べようとしている一頭の牝虎を見つけた。

菩薩はその牝の虎を見て、彼女の飢えの苦しみを癒すもとなる食糧を探して持って来るように弟子を指示して行かせた。

そのうち菩薩は、「自分の身体全部が在る場合に、他の誰から私は肉を求めるのか。生命を捨てた身体によって、私は牝虎が子達を殺すことから守ろう」と決心し、利他の生就のために自らの身体を捨てた。

肉を手に入れずに戻って来た彼の弟子は、生命の無くなった菩薩の身体を牝虎が食べつつあるのを見て、その行為に驚いた顔の彼の弟子たちを並びに楽神・夜叉・龍及び 33 天の主たち皆、菩薩の舎利の宝を納め、その大地は、華髪・衣・瓔珞・梅壇香末の雨に蔽われた。

このように世尊は諸々の前世においても一切衆生に対して無縁の最高の慈愛を自性とし、あらゆる存在を自己と同視したので、世尊には最高の敬信と最高の敬愛を生じ、敬重して聞法すべきであり、このように自性卓越の人には他人を撰取する活動の源となる慈悲が生就されている、と。

#### ② Vyāghrī-parivarta, “Suvarṇaprabhāsottamasūtra”

(『金光明経』「捨身品」)

昔、世尊が、百千の比丘に囲まれ、ある林に入る。その林の聖地で、仏塔の中の金銀宝石の箱に入っている骨身を神通力で取り出す。世尊はその偉大最上の功德を生ずる、尊敬すべき菩薩の骨身を比丘たちの前に置いて、過去のことについて語る。

昔、過去世に大車という王がいて、王には大響、大天、大有情という名の三人の王子がいた。ある日、王と王子等が 12 の森に遊びに行った。三人の王子が森の中で、5 匹の仔を産んで、疲労や飢えで衰えて死にそうになった牝虎を見つけた。三人兄弟は、哀れみの心を持って、「恐ろしいこの動物は、飢えのために自分の仔を食べようとしているが、誰も自分の身を餌として与える者がいない」と話して離れて行く。

すると、小子の大有情王子が、二人の兄を先に帰らせて、一人で森に戻って、彼は有情の利のために最上の大慈悲の心を以て、「私は恐るべき諸有の海より三界の衆生を調度せよ」と決定し、牝虎に自分の身を投じる。

菩薩が身を投じると同時に大地は六種に震動し、日光は輝かず、天から香粉の華雨が降った。その時に、ある天は菩薩を賛美し、偈を称えた。

大地と太陽がこのように変動するとともに、母の王妃が自分の子を失う予感の夢をみて、大王に告げて、早速王子等を捜すように頼む。

兄達、そして従人皆が、王子を探し出し、とうとう、大有情が牝虎に身を布施しているのを見つける。

この恐ろしい情景を見た大王と大夫が涙を流して悲しみ、悶絶して、しばらくしてまた生きかえる。

大王と大夫人とは種種悲歎して一切の装飾を解き、大衆と共に子の骨身供養をし、七つ宝石でできた塔を造り、大有情の骨身を入れて、牝虎のために大有情が自身を捨てたその場所に置いた。

その時の大車王の子となる最上大有情は、今の釋迦如来の私である。彼によって牝虎は安穩になった。

その時の大車王は、私の父、最上帝王なる淨飯である。また摩耶夫人はその夫人であった。又彌勒は第一王子の大響であった。文殊師利は王子大天であった。摩訶波闍波堤は牝虎で、その五比丘は牝虎の五仔であった。

この “The Jātaka-mālā” と “Suvarṇaprabhāsottamasūtra” の「捨身飼虎」説話を比較してみると、かなりの相違点が見られる。たとえば、“The Jātaka-mālā” では、釈迦の前世はバラモンとして生まれ、最高の修行者として森に入り、虎の母子に出会うということになっているが、“Suvarṇaprabhāsottamasūtra” の方では、王族として生まれ、三人の王子のうちの三番目に配当されている。このように捨身する存在の位置づけに相違点が見

られる。

このように各説話は共通のモチーフを有しながらも、細部にわたって異なっているため、以下において各説話の対照表を作成して検討していくことにした。

・各地域における「捨身飼虎」説話の流れと構成による比較

(以降表 (3-2d) ～ (3-2h) において※印で省略しているチベットの説話資料の本題名)

※Stag-mo la lus yoñs-su btan-ba, “'phags-pa gser 'od dam-pa mdo-sde'i dbang po'i rgyal-po'i shes-bya-ba theg-pa chen-po'i mdo” (ed.by Daisetz T.Suzuki, The Tibetan Tripitaka, Otani univ.1956)

※※Sem's can chen bo's stag-mo-la lus s'byin ba'i leuyo, “Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo”

表 (3-2d) 各地域における「捨身飼虎」説話の構成と流れ、その比較対照表

| 国    | 説話資料                         | 現在物語の部分 | 過去物語の部分 |         |         |         | 連結の部分 |
|------|------------------------------|---------|---------|---------|---------|---------|-------|
|      |                              |         | の話の納め   | 三人王子の予感 | 捨身飼虎の過程 | 王妃の夢、予感 |       |
| インド  | “The Jātaka-mālā”            | ×       | ×       | ○       | ×       | ○       | ○     |
|      | “Suvarṇaprabhāsotta masūtra” | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○     |
| 中国   | 『金光明経』                       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○     |
|      | 『賢愚経』                        | ×       | ×       | ○       | ○       | ○       | ○     |
|      | 『菩薩本生鬘論』                     | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○     |
| チベット | ※Suv.Tib                     | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○     |
|      | ※※mDzangs-blun               | ×       | ×       | ○       | ○       | ○       | ○     |
| 日本   | 『三宝絵』                        | ×       | ×       | ○       | ○       | ○       | ○     |
| モンゴル | *Suv.Mong.                   | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○     |
|      | **UDS                        | ×       | ×       | ○       | ○       | ○       | ○     |
|      | ***Oirat.UD                  | ×       | ×       | ○       | ○       | ○       | ○     |

各地域の捨身飼虎の説話は、説話の流れとして共通している点がいくつかあるのが見られる。たとえば、捨身飼虎の過程、菩薩、あるいは王子の遺骨／舎利の供養と収め、登場人物とその後世との関係の話などである。このような、話の核となる捨身飼虎のモチーフは共通しているが、話の相違点として、説話の最初のシーンである仏様の話、仏様の舎利への供養、舎利が入っている塔、聖地の話、または説話の最後に語られる仏の詩、教えの話が『金光明経』系以外の文献の説話には登場しないことがある。

ここで、捨身飼虎のモチーフを中心に仏教の利他行を説得するこの話の前半と後半には新しい登場人物や場面が付け加えられ、もっと文学性に富んだ仏教説話になっているのが、『金光明経』と『賢愚経』にみえる。

以下に、本説話を地域別に比較考察をしていく。

まず、インドの“The Jātaka-mālā”と“Suvarṇaprabhāsottamasūtra”の登場人物である。ここで、あくまでも捨身するのは、菩薩であるものの、前者は菩薩とアジタという弟子の比丘だけであるが、後者は菩薩の兄弟や両親などが登場して、より具体的な説話となっている。また虎の仔が、前者は特に何匹の仔がいるか不明であるが、後者のほうである“Suvarṇaprabhāsottamasūtra”は五匹といった違いが見られる。

捨身の場面では“The Jātaka-mālā”は、アジタが虎のための食糧を探している間に、菩薩自らが捨身するのに対し、“Suvarṇaprabhāsottamasūtra”は二人の兄を他に行かせて捨身している。

前世で菩薩あるいは王子として生まれたお釈迦様が、その身を衰弱した虎の親子に与えた目的は自らの身体を捧げ、慈悲の徳により滅罪祈念するための行為であり、これは釈迦如来の前世である菩薩としてが一番苦しい修行法だと思われる。

またその捨身した場所は、その遺骨（舎利）が収められ、僧侶たちの修行地として礼拝されてきた聖地になっていると考えられる。このことから説話で捨身飼虎の状況、その描写を比較の対照項目として以下に取り上げた。

両者に共通するモチーフは森の中に飢えた虎の母子がいて母親の虎が子供の虎を飢えのために食べようとするのを菩薩が自らの身体を施すという点である。しかし捨身する状況に違いが見られる。“The Jātaka-mālā”では高いところから飛び込んで自らの命をさげようとしているのに対し、“Suvarṇaprabhāsottamasūtra”では虎の傍らに身をよこたえ、さらに竹幹で自らの身体に突き立てるといった行為がなされている。

次は、中国の『菩薩本生鬘論』と『金光明経』、加えて『賢愚経』における「捨身飼虎」説話の比較考察である。

まず、取り扱う話の粗筋を紹介する。

①『金光明経』「捨身品第十七」

昔、世尊が弟子たちを連れて、ある林に入る。その林の聖地で、舍利が入っている七宝の仏塔が浮き出した。世尊は、その中に入っている骨身を供養し、礼拝してから、その偉大最上の功德が生ずる、尊敬すべき、菩薩の骨身を比丘たちの前に置いて、過去のことについて語る。

過去の世に摩訶羅陀という名の王がいて、王には三人の王子がいた。第一の王子は名摩訶波那羅と、次子は摩訶提婆、小子は摩訶薩埵という名前であった。

ある日、王子達と父王が皆、園林にある一大竹林に遊びに行った。父王より離れて、前に進んで行く王子達が、七匹の仔を産んでから7日も経ってない、牝虎を見つけた。出産や飢えで体が衰えた牝虎を見た三人王子は「この虎、誰かが餌として自分の身を与えないと、飢えのため自分の仔を食べてしまいそう。しかし、自分の命を与える者はいない」などと話し合い、哀れみの目で見ながらその場を去って行く。

すると、第三王子の摩訶薩埵は、この可哀そうな親子に我が身を与えて、飢えから助けてあげようと決心する。そして、兄達を先に帰らせて、一人で牝虎のところに戻って来た。摩訶薩埵は、有情の利のために最上の大慈悲の心を以て、「私は恐るべき諸有の海より三界の衆生を調度せよ」と決定し、牝虎に自分の身を投じる。

菩薩が身を投じると同時に大地は六種に震動し、日光は輝かず、天から香粉の華雨が降った。その時に、ある天は菩薩を賛美し、偈を称えた。

大地と太陽が変動するそのとき、王宮いた母の王妃が自分の子を失う予感の夢を見た。そのことを大王に告げて、早速王子等を捜すように頼む。

兄達だけでなく従人皆が、王子を探し始め、とうとう、摩訶薩埵が牝虎に身を布施しているのを見つける。

この恐ろしい情景を見た大王と大夫が涙を流して悲しみ、悶絶して、しばらくしてまた生きかえる。

大王と大夫人は種種悲歎して一切の装飾を解き、大衆と共に子の骨身供養をし、

七つ宝石でできた塔を造り、大有情の骨身を入れて、牝虎のために大有情が自身を捨てたその場所に収めた。

その時の王子は、今の釋迦如来の私である。時の大王摩訶羅陀は今の父王 輸頭檀であり、その時の王妃は今の摩耶である。第一の王子は今の彌勒であり、第二の王子は 今の調達である。またその時の牝虎は今の瞿夷であり、虎の七仔は今の五比丘 及び舍利弗と目犍連である。

## ②『賢愚経』

ある日、最勝最尊は乞食で町内へ行った。そこに、一人の老母に物盗みの二人の息子がいた。そのとき、二人が在主に捕まえられ、王の平事律を案じ、処刑されることになった。その二人を老母の祈願に応じて世尊が厄より脱してあげた。仏の恩を感謝した二人に仏が説法を説き、穢れを祓うと、それぞれ阿羅漢道を得た。その母も仏の法を聞き、阿那含を得た。

このことに関して、世尊は「この三人は、我によって助けを得ているのは、今日だけのことではない。遠い昔、私が恩を蒙って、命を救われたことある」と言っ  
て、過去のことを語った。

昔、此の閻浮提に摩訶羅檀那という大国王がいた。王には摩訶富那寧と摩訶提婆と摩訶薩埵という三人の王子がいた。

ある時、大王は諸の群臣、夫人、王子達共に森林へ遊びに行った。そのとき、王の三子は林の中に二匹の仔を連れた一匹の牝虎が飢餓で自分の仔を食べようとしているのを見た。

哀れみや慈悲深い心の第3の王子が、「私はこの親子を飢えから救うために我が身を与えよう」と決心し、兄達と道を別れて、一人で牝虎の所に戻って来て、飢えた虎の母子に自らの身を投じ与えた。

その時、王の夫人が、自分の子と別れる予感の夢を見た。目が覚めると夫人が、この夢は「我が愛する末っ子に不祥があったのではないか」と言い、王子等に早速探してくれるように国王へ懇願した。

父母は、摩訶薩埵が自分の身を牝虎に与えたことを知り、悲しみに号泣し、地に倒れ、悶絶した。身を布施した後、兜率天に生れた摩訶薩埵は、父母が悲しみ悼むのを見て、地上に下りてきて、父母を慰める。

落ち着いた父母が、少し惶悟を得、七宝の箱を作り、骨を中に置き、葬埋し塔を建てた。天の子が兜率天に帰り、親と大衆も宮に帰った。

その時の大王は今の我父王の閼頭檀であり、その時の王夫人は私の母摩訶摩耶であった。その時の摩訶富那寧とは今の彌勒であり、第二の太子摩訶提婆とは、今の婆修蜜多羅である。その時の太子摩訶薩埵とは他の人ではなく、この私のことである。その時の虎の母は、今のこの老母で、その時の二人の子は今の二人兄弟である。

### ③『菩薩本生鬘論』巻の第一「投身飼虎縁起第一」

昔、世尊は諸の大衆を連れて、一林中に行った。そこには七つの宝石で飾られた都塔があり、その中の箱に、ある骨身を比丘たちに見せて、過去のことを次のように語る。

昔、三人の王子をもっている国王がいた。王子等の名前は、摩訶波羅、摩訶提婆、摩訶薩埵という。ある日、国王は三人の王子と共に山谷にある大竹林に行って、憩息しているとき、三人の王子が前に進んでいくと七匹の仔を産んだばかりの牝虎を見つけた。牝虎は疲労で体が衰え、飢えのため自分の仔たちを食べようとしていた。

三人の王子はこの可哀そうな牝虎をみて、去って行った。ところが、最小の王子摩訶薩埵は、二人の兄と別れて、牝虎のところに戻ってきて、「無上究竟の涅槃を求め、永く憂悲無常の苦惱を離れ、百福莊嚴にして一切智を成じ、諸の衆生に無量の法樂を成す」と決心し、牝虎に身を与えた。

その頃、二人の兄は魔訶薩埵を捜して、竹林に戻り、牝虎のいる処に行ったが、そこで摩訶薩埵が既に牝虎に自分の身を布施しているのを見た。

その時、王の夫人は自分の子と別れる予感の夢を見て、国王に告げ、自分の王子等を早速探すように命じた。国王は大臣人民を集め、共に城を出て、王子等を探しに行った。

摩訶薩埵が牝虎に自分の身を捨て上げたことを知った国王と王妃、兄達、衆の皆は大いに悲しみ、菩薩が身を捨てたところに来て、国王と王妃が特に深い悲しみのあまりに悶絶し、血に倒れた。しばらくして、生きかえり、その場所で宝石の塔を建て、その中に宝石の箱を造り、その中に菩薩の骨を入れて供養し、置いた。

その昔の王子摩訶薩埵は今の釋迦如来私である。昔の国王は今の淨飯父王で、王

妃は摩耶夫人である。昔の長子は彌勒であり、そのときの次子は文殊である。あの牝虎は今の姨母であり、7匹の虎子は大目乾連・舍利弗・五比丘である。

『菩薩本生鬘論』と『金光明經』は説話の流れと構成が殆ど同じであることがわかる。強いて言えば、『菩薩本生鬘論』の説話には竹林の中の三人の王子の予感の話が語られてないのが相違点である。各捨身飼虎説話は一般に、仏の修行地、あるいは菩薩の舍利が収められている聖地の話が始点になっているが、ここで取り上げている『賢愚経』の説話の始点は違っている。『賢愚経』の捨身飼虎説話の場合は、仏が一人の老母とその二人の息子を国王の死刑により救っている話から始まっている。言い換えれば、この息子と母が過去にも仏によって救われていた虎の母子であるというのは『賢愚経』だけのモチーフだと言える。もう一つの大きな特徴といえ、飢えた虎を救った薩埵王子は天から降りて来て、その死去を悲しんでいる自分の父母に会って、その心を諫め諭しているシーンである。これは、ほかの捨身飼虎説話には見られない。

次の比較対照として各説話の登場人物、それらの後世との関係について考察したのは以下の通りである。

・各説話の登場人物、それらの後世との関係の多様化からみえる説話における本生譚としての性格と文献典拠

表 (3-2e) 各説話の登場人物の現在世と過去世との連結に関する比較対照表

| 国   | 説話資料                                | 捨身者<br>(イ) | 父王<br>(ロ) | 第1王子<br>(ハ) | 第2王子<br>(ニ) | 母后<br>(ホ) | 牝虎<br>(ヘ)  | 虎の仔<br>(ト) |
|-----|-------------------------------------|------------|-----------|-------------|-------------|-----------|------------|------------|
| インド | “Jātaka-mā<br>lā”                   | 釋迦如来       | ×         | ×           | ×           | ×         | ×          | ×          |
|     | “Suvarṇap<br>rabhāsotta<br>masūtra” | 釋迦如来       | 淨飯王       | 彌勒          | 文殊師利        | 摩耶        | 摩訶波<br>闍波堤 | 五比丘        |



|      |                        |          |     |    |           |    |            |                      |
|------|------------------------|----------|-----|----|-----------|----|------------|----------------------|
| 中国   | 『金光明経』                 | 釋迦如来     | 淨飯王 | 彌勒 | 調達        | 摩耶 | 瞿夷         | 五比丘及び<br>舍利弗と<br>目犍連 |
|      | 『賢愚経』                  | 釋迦如来     | 淨飯王 | 彌勒 | 婆修蜜<br>多羅 | 摩耶 | 老母         | 二人兄弟                 |
|      | 『菩薩本生<br>鬘論』           | 釋迦如来     | 淨飯王 | 彌勒 | 文殊師利      | 摩耶 | 姨母         | 五比丘及び<br>舍利弗と<br>目犍連 |
| チベット | ※Suv.Tib               | 釋迦如来     | 淨飯王 | 彌勒 | 文殊師利      | 摩耶 | 摩訶波<br>闍波堤 | 五比丘                  |
|      | ※※<br>mDzangs<br>-blun | 釋迦如来     | 淨飯王 | 彌勒 | 婆修蜜<br>多羅 | 摩耶 | ×          | 二人兄弟                 |
| 日本   | 『三宝絵』                  | 釋迦<br>如来 | ×   | ×  | ×         | ×  | ×          | ×                    |
| モンゴル | *Suv.<br>Mong          | 釋迦如来     | 淨飯王 | 彌勒 | 文殊師利      | 摩耶 | 摩訶波<br>闍波堤 | 五比丘                  |
|      | **UDS                  | 釋迦如来     | 淨飯王 | 彌勒 | 婆修蜜<br>多羅 | 摩耶 | ×          | 二人兄弟                 |
|      | ***<br>Oirat.UD        | 釋迦如来     | 淨飯王 | 彌勒 | 婆修蜜<br>多羅 | 摩耶 | ×          | 二人兄弟                 |

本表で、各説話の登場人物に「イロハ」の記号をつけた。

以上表 (3-2e) の連結の部分は各文献のテキストで以下のように記載されているのを、各説話の原文から引用して、表 (3-2f) にまとめた。話の中で、連結に当てはまる部分に下線を引き、表 (3-2e) と共通に「イロハ」の記号をつけた。

表 (3-2f) 各説話の登場人物の過去世と現在世の関係を示す連結、その比較対照表

| 国   | 説話資料              | (イ) 捨身者・ (ロ) 父王・ (ハ) 第一王子・ (ニ) 第二王子<br>(ホ) 王妃・ (ヘ) 牝虎・ (ト) 仔虎  |
|-----|-------------------|--|
| インド | “The Jātaka-mālā” | <p><u>tadevam sarvasattvesvakāranaparamavatsalasvabhāvah</u><br/> <u>sarvabhūtātmbhūtah pūrvajanmasvapi sa bhagavāniti buddhe bhagavati</u><br/> <u>parah prasādah kāryah   jātprasādaiśca buddhe bhagavati parā</u><br/> <u>prītirutpādayitavyā   evamāyatanagato naḥ prasāda</u><br/> <u>ityevamapyunneyam  </u></p> <p>“Suvarṇaprabhāsottamasūtra”</p> <p><u>aham ca sa śākyamuni <sup>(イ)</sup> stathāgatah</u><br/> <u>pūrvam mahāsattvavaro babbhūva   </u><br/> <u>putraśca rājño hi mahārathasya</u><br/> <u>yenaiva vyāghrī sukhitā kṛtāsīt    72   </u><br/> <u>śuddhodano <sup>(ロ)</sup> hi varapārthivendro</u><br/> <u>mahāratho nāma babbhūva rājā  </u><br/> <u>mahiṣi ca āsīdvaramāyadevī <sup>(ホ)</sup></u><br/> <u>mahāpranādistatha maitriyo'bhūt <sup>(ハ)</sup>    73   </u><br/> <u>mahādevī āsīdatha rājaputro</u><br/> <u>mañjuśrīra <sup>(ニ)</sup> bhūdvīrakumārabhūtah  </u><br/> <u>vyāghrī abhūttatra mahāprajāpatī <sup>(ヘ)</sup></u><br/> <u>vyāghrīsutā pañcaka amī hi bhiksavaḥ <sup>(ト)</sup>    74   </u></p> |
| 中国  | 『金光明経』            | <p>佛告樹神汝今當知爾時王子摩訶薩埵捨身飼虎今我身<sup>(イ)</sup>是。爾時大王摩訶羅陀於今父王輸頭檀<sup>(ロ)</sup>是。爾時王妃今摩耶<sup>(ホ)</sup>是。第一王子今彌勒<sup>(ハ)</sup>是。第二王子今調達<sup>121 (ニ)</sup>是。爾時虎者今瞿夷<sup>(ヘ)</sup>是。時虎七子今五比丘及舍利弗目犍連<sup>(ト)</sup>是。(T16 no.663,356c05-T16 no.663,356c19)</p>  |

<sup>121</sup> 調達とは、Devadatta のことを指す。

|      |                    |   |
|------|--------------------|---|
|      | 『賢愚經』              | <p>佛告阿難。爾時大王。摩訶羅檀那者。豈異人乎。今我父王闍頭檀<sup>(□)</sup>是。時王夫人。我母摩訶摩耶<sup>(ホ)</sup>是。爾時摩訶富那寧者。今彌勒<sup>(ハ)</sup>是。第二太子摩訶提婆者。今婆修蜜多羅<sup>(ニ)</sup>是。爾時太子摩訶薩埵。豈異人乎。我身<sup>(イ)</sup>是也。豈異人爾時虎母今此老母<sup>(ヘ)</sup>是。爾時二子。今二人<sup>(ト)</sup>是。我於爾時久遠。濟其急厄危頓之命。令得安全。吾今阿難一切衆會。聞佛所說。歡喜奉行</p> <p>(T4 no.202,353b08-T4 no.202,353b16)</p>   |
|      | 『菩薩本生鬘論』           | <p>佛告阿難。往昔王子摩訶薩埵。豈異人乎。今此會中我身<sup>(イ)</sup>是也。昔國王者今淨飯<sup>(□)</sup>父王是也。昔后妃者摩耶夫人<sup>(ホ)</sup>是也。昔長子者彌勒<sup>(ハ)</sup>是也。昔次子者文殊<sup>(ニ)</sup>是也。昔彼虎者今姨母<sup>(ヘ)</sup>是也。七虎子者大目乾連舍利弗五比丘<sup>(ト)</sup>是也。爾時世尊說是往昔因緣之時。無量阿僧祇人天大衆。皆悉悲喜。同發阿耨多羅三藐三菩提心。先所涌出七寶妙塔。佛攝神力忽然不現</p> <p>(T3 no160,333b02- T3 no160,333b09)</p>   |
| チベット | ※<br>Suv.Tib       | <p>De yis skyen par la gor myur du yang,,btzun mo la ni rang gi bu rnams bstan,,<u>sh'akya thub pa<sup>(イ)</sup> de bzhin gshegs pa dang,,sngon gyi rgyal po shing rta chen po yi ;ibu de sems can chen po mchog gyur cing,,gang gis stag mo bde bar byas pa yin,,rgyal po 'i dbang po dam pa zas gtzang<sup>(□)</sup> ni,, shing rta che zhes bya ba'i rgyal por gyur btzun mo'ang btzun mo dam pa<sup>(ホ)</sup>sgyu mar gyur,,sgra chen po ni byams par<sup>(ハ)</sup> gyur pa yin,,rgyal bu lha chen po yang de bzhin du,,de ni'jam dpal gzhon nur<sup>(ニ)</sup> gyur pa yin,,stag mor gyur pa skye dgu'i bdag mo<sup>(ヘ)</sup> 122che,,stag phrug rnams ni dge slong lnga por<sup>(ト)</sup> gyur,,</u></p> |
|      | ※※<br>mDzangs-blun | <p>de'i tshe de'i dus na rgyal po shing rta chen po de su yin snyam du sems,,de ni da ltar nga'i yab rgayl po zas gtsang<sup>(□)</sup> ma yin no,,de'i tshe de'i dus na rgyal po de'i btsun mo de ni da ltar nga'i yum sgyu ma lha mdzes<sup>(ホ)</sup> yin no,,de'i dus na sras rab sgra chen po de ni byamspa<sup>(ハ)</sup> yin no,,sras 'bring pol ha chen po de ni ba su mi tra<sup>(ニ)</sup> yin no,,de'i tshe de'i dus na rgyal bu tha chungs sems can chen po ni de gzhan du ma sems shig,,da ltar nga yin<sup>(イ)</sup> no,, de'i dus kyi stag phrug ni mi 'de gnyis<sup>(ト)</sup> yin te,,</p>  |
|      | 『三宝絵』              | <p>昔の薩埵王子は、今の釋迦如来<sup>(イ)</sup>なり。</p>  |

<sup>122</sup> Bdag mo (私の母) という意味の言葉で、仏の継母 Mahāprajāpati のことを指している。

|          |                                   |   |
|----------|-----------------------------------|---|
| モン<br>ゴル | *Suv.<br>Mong                     | <u>Tegunchilen zalarsan Shakyamuni <sup>(イ)</sup> bi ber</u><br><u>Ter tsag-iyin Maharata hagan-u Mahasatva huu bolju</u><br>Alin ber em bar-ug amirligulan uildegsen yum.<br><u>Erh-tu deged-u hagan Shuddodana <sup>(ロ)</sup> ter-anu</u><br><u>Maharata hemege-hu hagan baig-san</u><br><u>Hatan-anu chi dege-du hatan Maya <sup>(ホ)</sup> baig-san yum.</u><br><u>Mahapranada anu Maitreya <sup>(ハ)</sup> baig-san yum.</u><br><u>Mahadeva ner-tu ter-hu han hobegun-inu</u><br><u>Ene tsag-un Manjushiri <sup>(ニ)</sup> mun yum</u><br><u>Em bars-anu Mahaprajati <sup>(ヘ)</sup></u><br><u>Enhrii zulgaga-nuguud anu tavan gelen <sup>(ト)</sup> yum.</u>   |
|          | **UDS<br>と<br>***<br>Oirat.<br>UD | Ila-ju tegus nögchigsön burhan Ananda dor iin heme-n zarlig bolru-n:<br>Anand aa,chi tedен-i yagu heme-gen setgemui. <u>Ter-e tsag ter-e uchir dahi Ih</u><br><u>tereg ner-tu hagan anu eduge deh etseg minu Sudadana hagan <sup>(ロ)</sup> bulg-e.</u><br>Ter-e tsag ter-e uchir dahi <u>hatan anu Mahamaiya hatan <sup>(ホ)</sup> bulg-e.</u> Ter-e tsag<br>ter-e uchir dahi <u>ih höbegün Mahanada heme-besu Maidar <sup>(ハ)</sup> buyu.</u> Ter-e<br>tsag ter-e uchir dahi <u>dund höbegün Mahadeva anu heme-besu Vasumitra</u><br><u><sup>(ニ)</sup> buyu.</u><br>Ter-e tsag ter-e uchir dahi <u>otgon höbegün Mahasattva anu höbegün busu</u><br><u>negen ahu heme-gen ul-e setgeh-tun.</u> Ter-e eduge bi <sup>(イ)</sup> buyu. Ter-e tsag ter-e<br>uchir dahi <u>barsu-iin zulgaga anu ene hoyor humun <sup>(ト)</sup> bui-za.</u> |

各説話の登場人物、それらの後世との関係についての連結部分の比較からみれば、捨身する主人公（イ）のほうでは殆どの説話では王子であるが、“The Jātaka-mālā”の捨身する菩薩はバラモンの息子である。この“*The Jātaka-mālā*”には、登場人物としては菩薩とアジタという弟子の比丘だけであるが、それ以外の地域の説話は菩薩あるいは王子の兄弟や両親などが登場して、より具体的な説話となっている。また、中国の『賢愚経』とチベットの※mDzangs-blun、モンゴルの\*UDSの説話での登場人物はもっと多様化しており、老母と二人の息子が登場するのは大きな相違点である。過去世ではこのような相違点がみえるが、現在世では結局釋迦如来に生まれたことが本説話の本生活としての核となる共通の設定である。

(二) の第二王子の連結の話では、第二王子は現在世で『金光明経』系の文献では〈文殊師利〉であり、『賢愚経』系の文献では〈婆修蜜多羅〉になっているに対して中国の『金光明経』だけが〈調達 (Devadatta)〉になっているのが大きな相違点である。

もう一つの相違点は、仔虎の数である。ここで取扱っている「捨身飼虎」説話には、虎のが〈七匹・五匹・二匹・数が不明〉といった、いくつかのケースがあるのを以下にまとめた。

七匹の仔虎→“Suvarṇaprabhāsottamasūtra”・ ※Suv.Tib・\*Suv.Mong

五匹の仔虎→『金光明経』・『菩薩本生鬘論』・『三宝絵』

二匹の仔虎→『賢愚経』・ ※※mDzangs-blun・\*\*UDS と\*\*\*Oirat.UD

仔虎の数が不明→“The Jātaka-mālā”

ここで、『賢愚経』系の説話である中国とチベット、モンゴルの「捨身飼虎」説話はいずれも二匹の仔虎が登場するという共通点がある。しかし、説話の原型とされる

“Suvarṇaprabhāsottamasūtra” において五匹で登場する仔虎が中国と日本で七匹、モンゴルで五匹になって伝わっていることが注目される。

また、※※mDzangs-blun と\*UDS の連結部分では牝虎の現在世が語られてないが、説話の過去物語の部分から、(へ) が老母であることを把握することができる。

各説話に登場する人物以外に語られているのは、王妃の夢に登場する鳥である。多くは鳩であるが、チベットとモンゴルの説話だけカッコウになっている。

表 (3-2g) 王妃の夢に現れる鳥、その異同に関する比較対照表

| 国   | 説話資料                        | 王妃の夢   |
|-----|-----------------------------|--|
| インド | “Suvarṇaprabhāsottamasūtra” | tasmimśca samaye devī śayanatalagatā<br>priyaviprayogasūcakaṃ svapnaṃ dadarśa  <br>tadyathā stanau chidyamānau dantotpātaṇaṃ ca<br>kriyamāṇaṃ trayah <sup>(ハトヒヨコ)</sup> kapotaśāvakāḥ<br>pratilambhamānāste bhītā eva<br>śyenenācchidyamānāḥ |
| 中   | 『金光明経』                      | 爾時王妃於睡眠中。夢乳被割牙齒墮落。得三 <sup>(ハトヒヨコ)</sup> 鴿雛一  |

|      |                        |   |
|------|------------------------|---|
| 国    |                        | 爲鷹食。  |
|      | 『賢愚経』                  | 夫人眠睡夢有三 <small>（ハト）</small> 鷓。共戯林野。鷹卒捉得其小者食。  |
|      | 『菩薩本生鬘論』               | 時王夫人寢高樓上。忽於夢中見不祥事。兩乳被割牙齒墮落。得三 <small>（ハトヒナ）</small> 鷓一爲鷹奪。  |
| チベット | ※Suv.Tib               | De'i tse btzun mo mal na nyal ba'i rmi lam na sdug pa dang rbal bar rmis pa, 'di lta ste, nu ma gnyis bcad pa dang, so phyung ba dang, <u>thi ba'i phru gu</u> skrag gsum zhig rnyed pa las gcig khrag khyer bar mthong ngo,,                         |
|      | ※※mDzangs-blun         | De'i tse na btzun mo yun mnas ba'i rmi lam du <u>phur</u> <u>ron</u> gsum zhig kun tu 'phur zhing rtshe ba las,,  |
| 日本   | 『三宝絵』                  | 是の時に、母后、宮に留りて、高き楼の上に寝たり。三の夢を見る。二の乳房割けて血流れ出づ、一の牙葉闕け落ちぬ、三の <small>（ハト）</small> 鷓有るを一鷹に奪ひ取られぬ。   |
| モンゴル | *Suv.Mong              | Ter-e tsag dor hatan orondu-gan noirso-hu zeguden-degen hairtai hobegun-ese hagatsahu-i zegudelu-bei. Hoyaru hohu tasrahu, shi-du unahu <u>höhe-ge</u> nii ohogordomu gurban anggahai olugsan chu nigege-ige anu hartsaga abu-la hemegen zegudeljehu. |
|      | **UDS と<br>***Oirat.UD | Ter-e tsag dor eh-e hatan iin zegudelu-run: gurban <u>kögurzen-e</u> hotul naga-dun nisen yabutalu nigege-nu öcheguken-i anu hartsaga barigsan-u zegudelju.   |

表 (3-2g) から分かるように、王妃の夢で現れる小鳥はほとんどの説話で〈ハト〉であるのに対して、モンゴルの\*Suv.Mong だけが〈カッコウ〉になっている。このように、モンゴル語訳\*Suvの底本であるチベット經典にも〈ハト〉であるのに、モンゴル語訳だけが異なっている点について更に調べていく必要があると思われる。

比較対照表で確認していないもう一つの相違点は、捨身飼虎の行為に感動し、捨身者を賛美している「天」の登場、その多様性である。例えば、捨身する菩薩（王子）の慈悲さ

を讃美している天の存在であるが、“Suvarṇaprabhāsottamasūtra” の場合は「ある天」である。“The Jātaka-mālā” には「楽神・夜叉・龍及び 33 天の主たち」、更に中国の『金光明經』には「虚空の中の諸餘の天」、『菩薩本生鬘論』には「虚空の諸天」が登場するが、チベットとモンゴルの『金光明經』の場合は「一人の天の主」が登場する。

さらに、一般の捨身飼虎説話では、救っている方も、救われる虎の母子も後世に釈迦如来、神々になっているが、中国の『賢愚経』とチベットの ※※mDzangs-blun そしてモンゴルの\*UDS の場合は救われている虎の母子は後世に三人の人間の母子に生まれ変わり、またお釈迦如来によって救われていることが非常に興味深い点である。ここで見られるのは、過去に釈迦如来の前世である摩訶薩埵王子が動物を救っていることと、現世で釈迦如来が人間を救っているケースが同時に語られていることである。過去世の登場人物が現世にはみんな神々に生まれ変わる他の捨身飼虎の説話と違い、『賢愚経』系の説話は、人間の存在、神様との関わりをより詳しく語っており、この説話の変容性と展開の特徴を極立たせているといえる。

インドの “The Jātaka-mālā” と日本の『三宝絵』においては、主人公だけの過去世と現世の連結が語られている点が他の「捨身飼虎」説話とは異なっている。この点は、“Suvarṇaprabhāsottamasūtra” と『金光明經』系の翻訳仏典そして『賢愚経』系の翻訳仏典と異なる性格をみせている。

最後に各説話の内容、モチーフにおける共通点と相違点を探るために、説話の一番重要な展開である、各説話の捨身供養に関する比較考察を対照表 (3-2h) でまとめた。

表 (3-2h) 各説話の捨身供養の比較対照表

「捨身飼虎」説話の過去物語でみる比較考察

| 国   | 説話資料              | 犠牲する者・方法                      | 救われる動物・状況             | 捨身(犠牲)の目的                        | 場所/舍利(遺骨)の納め方   |
|-----|-------------------|-------------------------------|-----------------------|----------------------------------|---|
| インド | “The Jātaka-mālā” | 修行している菩薩・高い所から飛び込み、自らの身を捨て与える | 虎・飢えて、自分の子供を食べようとしている | 虎の子達を彼女自身が殺さないうちに、彼女の飢えの苦しみを癒すため | 山の森/菩薩の弟子たち並びに楽神・夜叉・龍及び 33 天の主たちによって、彼の舎利の宝を納めた大地は、華髪・衣・瓔珞・梅壇 |

|                  |   |   |                                  |                                  |  |
|------------------|---|---|----------------------------------|----------------------------------|--|
|                  |   |   |                                  |                                  | 香末の雨に蔽われる  |
|                  | “Suvarṇ<br>aprabhā<br>sottamas<br>ūtra” | 12の森林に遊びに出ている大有情王子・百歳の竹幹で自己の喉に突き立て、牝虎の側に投じる | 虎・五匹の子を産んで、飢えにより、自分の子達を食べようとしている | 虎の子達を彼女自身が殺さないうちに、彼女の飢えの苦しみを癒すため | 12の森林／夫人とは種種悲歎して泣き、彼等の装飾を解き、衆人と共に子の骨身供養をなし、その地方において黄金所成の塔中にその骨身を安置する |
|                  | 『金光明<br>経』                              | 竹林に遊びに出ている摩訶薩埵王子・乾竹で頸に刺して血を出し、高山の上より身を虎前に投ず | 虎・七匹の子を産んで、飢えや疲れで死にそうになっている      | 虎の子達を彼女自身が殺さないうちに、彼女の飢えの苦しみを癒すため | 竹林／摩訶羅陀及び、其の妃后悲號涕泣して悉く皆身の御服瓔珞を脱し諸の大衆と與に竹林中に往き其の舍利を収めて即ち此の處に於て七宝塔を起つ  |
| 中<br>国           | 『賢愚経』                                   | 竹林に遊びに出ている摩訶薩埵王子・乾竹で頸を刺して血を出し、高山の上より身を虎前に投ず | 虎・二匹の子を産んで、飢えや疲れで死にそうになっている      | 虎の子達を彼女自身が殺さないうちに、彼女の飢えの苦しみを癒すため | 竹林／父母は、七宝の函を作り、骨を盛りて中に著き、葬埋し畢訖り、上に於いて塔を起す                            |
|                  | 『菩薩本<br>生鬘論』                            | 林中を遊びに行く摩訶薩埵王子・乾竹で自分の頸に刺し血を出す               | 虎・七匹の子を産んで、飢えや疲れで死にそうになっている      | 虎の子達を彼女自身が殺さないうちに、彼女の飢えの苦しみを癒すため | 大竹林／王の二子も悲哀號哭し、共に菩薩遺身の舍利を収め、爲に供養を作し宝塔の中に置けり                          |
| チ<br>ベ<br>ッ<br>ト | ※Suv.Tib                                | 12の森林に遊びに出ている大有情王子・百歳の光る木の幹を取り、自分           | 虎・五匹の子を産んで、飢えや疲れで死にそうになっ         | 虎の子達を彼女自身が殺さないうちに、彼女の飢えの苦しみを     | 森／大王と大夫人は種種悲歎して一切の装飾を解き、大衆と共に子の骨身に供養をし、その場に大有情                       |



|                  |                               |   |   |  |  |
|------------------|-------------------------------|---|---|--|--|
|                  |                               | の首に刺し込み牝<br>虎の側に投じる   | ている   | 癒すため   | の骨身を置き、この塔を建<br>てた。これは大有情が牝虎<br>のために自身は捨てられ<br>た悲愍によって作された。                    |
|                  | ※※<br>mDzang<br>s-blun        | 竹林に遊びに出て<br>いる摩訶薩埵王<br>子・乾竹を首に刺し<br>て血を出し、高山の<br>上より身を虎前に<br>投ず | 虎・二匹の子<br>を産んで、飢<br>えや疲れで死<br>にそうになっ<br>ている | 虎の子達を彼女<br>自身が殺さない<br>うちに、彼女の<br>飢えの苦しみを<br>癒すため | 竹林／父母は、七宝の函を<br>作り、骨を盛りて中に著<br>き、葬埋し畢訖り、上に於<br>いて塔を起す                          |
| 日<br>本           | 『三宝絵』                         | 山林に遊びに出て<br>いる摩訶薩埵王<br>子・*枯れた竹を<br>首に刺して血を出<br>す                | 虎・七匹の子<br>を産んで、飢<br>えや疲れで死<br>にそうになっ<br>ている | 虎の子達を彼女<br>自身が殺さない<br>うちに、彼女の<br>飢えの苦しみを<br>癒すため | 竹林／其の残りの骨を取<br>りて率都婆の中に置き<br>き。  |
| モ<br>ン<br>ゴ<br>ル | *Suv.Mong                     | 楽園の12の林に<br>遊びに出ている王<br>子・木の枝を自分<br>の首に刺して血を<br>出す              | 虎・五匹の子<br>を産んで、飢<br>えや疲れで死<br>にそうになっ<br>ている | 虎の子達を彼女<br>自身が殺さない<br>うちに、彼女の<br>飢えの苦しみを<br>癒すため | 楽園の林／大王と后が絶<br>叫で泣きながら、二人の<br>王子や伴する皆と共に菩<br>薩遺身の舍利を収め、供<br>養を行い、舍利をこの所<br>に置く |
|                  | **UDS<br>と<br>***Oirat.<br>UD | 竹林に遊びに出て<br>いる摩訶薩埵王<br>子・乾竹を首に刺<br>して血を出し、高<br>山の上より身を虎<br>前に投ず | 虎・二匹の子<br>を産んで、飢<br>えや疲れで死<br>にそうになっ<br>ている | 虎の子達を彼女<br>自身が殺さない<br>うちに、彼女の<br>飢えの苦しみを<br>癒すため | 竹林／父母は、七宝の函を<br>作り、骨を盛りて中に著<br>き、葬埋し畢訖り、上に於<br>いて塔を起す                          |

各説話に共通するモチーフは森の中に飢えた虎の母子がいて母親の虎が子供の虎を飢えのために食べようとするのを摩訶薩埵王子が自らの身体を施すという点である。

しかし捨身する状況に違いを見せる。『金光明經』では乾竹を首に刺して血を出し、高い

ところから飛び込んで自らの命をささげようとしているのに対し、『菩薩本生鬘論』では乾竹を頸を刺して血を出し、虎の傍らに身をよこたえ、さらに竹幹を自らの身体に突き立てるという行為がなされている。不思議なことに“*The Jātaka-mālā*”の原典に投身のシーンが見え、『金光明経』のサンスクリットの原典とチベット語モンゴル語典にはそれが見られなかったが、漢訳『金光明経』では“*The Jātaka-mālā*”の投身説が見られた。

このように捨身の目的と過程、救われる動物等には殆どの共通点が見られるが、対照表によれば、微妙な相違点も見られる。例えば、中国の説話における捨身飼虎の過程であるが、『賢愚経』の場合は「利木を取り身に刺して血を出す」、『菩薩本生鬘論』と『金光明経』では各説話と同じように、「枯れた竹を首を刺して血を出す」となっている。

ここで、チベットとモンゴルの「捨身飼虎」説話を比較対照してみると、細部にわたって一致していることがわかる。前出の対照表の項目をみても、ほとんど同じ文脈で語られていることが確認できる。

「捨身飼虎」説話はサンスクリット本の段階でもいくつかの相違点が見られるが、モンゴルでの「捨身飼虎」の話は“*Suvarṇaprabhāsottamasūtra*”と『賢愚経』の内容で伝承されており、どちらもチベット語訳仏典を底本にして翻訳されたものである。日本の『三宝絵』所収の「捨身飼虎」説話でも“*Suvarṇaprabhāsottamasūtra*”の影響が顕著であった。

なお各説話の舞台となったのは、サンスクリットの“*Suvarṇaprabhāsottamasūtra*”と※*Suv.Tib*、そして\**Suv.mong*の説話では「楽園の12の森」であるが、中国と日本の説話では「竹林」になっている。このようにはっきりと違いがあることは、それぞれの地域の自然環境も影響していると考えられる。これは、前述した王妃の夢に登場する鳥（鴉あるいはカッコウ）も同様である。

この説話には、各地域の自然環境の影響以外にも、それらの民族性の影響も見られる。例えば、愛子を失って悲しんでいる王妃の泣き声をチベットとモンゴルの説話では「仔を失った牝ラクダのように」と語っているのは他の説話とは微妙に違っている点である。

以上に述べたように、「捨身飼虎」説話では地域それぞれによる相違点が多く見られるが、各説話に一般に取り込まれている共通点も見られる。もちろん、説話の主なモチーフを成している捨身飼虎の話は第一の共通点であるが、もう一つの共通点は、「生」と「死」に対する人間と神々の考え方、価値観の違いをはっきりと表していることだと考えられる。

### 3.2-4. まとめ

本節では、モンゴルと日本にそれぞれ伝承され、色々な地域、部族に広く普及し、それぞれの文化、民族性の影響を受けており、本生譚としてとくに有名な「捨身飼虎」の説話を取り上げた。これは説話として各国に伝承されているが、流伝のルート、期間、伝播の方法、形がそれぞれ特徴を持ち、あらゆる影響を受けて展開してきている。本研究の現時点での段階における結論を①流伝・②民族性の影響・③普及状況の3つの視点からまとめていく。

まず説話の流伝についてであるが、どの国へも仏教とともに伝承されてきているのが共通点である。それぞれの伝承されたルートを検証すると、一言で説明できない微妙で複雑な問題点が存在する。しかし日本への流伝とモンゴルへの流伝のルートについて大凡の傾向として指摘できるのは、

(1)インド→中国→日本

(2)インド→チベット→モンゴル

といった二つの流れである。例えば、「捨身飼虎」説話の場合でみると、日本の『三宝絵』の説話には“Suvarnaprabhāsottamasūtra”にあった舎利の供養が見られないものの、「最勝王経に見えたり」と明記しているように、『金光明経』の影響を受けていることが確認できる。虎の子の数も七匹であり、中国の『金光明経』と『菩薩本生鬘論』の影響も受けていることがわかる。しかし、このような影響や変容がチベット語訳※Suv.Tibには見られず、当然のことだが、モンゴルの\*Suv.Mongの「捨身飼虎」説話にそのまま伝承されている。虎の仔も以上の三つの説話だけ五匹になっている。

しかし説話の流伝についてもっと明らかにするためには、更に説話の原典の文献研究と翻訳の研究を行う必要があるだろう。

自然環境と地域による説話への影響と説話の変容の視点からみると、「捨身飼虎」説話では、インド・チベット・モンゴルでは森林となっているが、日本・中国では竹林になっているという点と、王妃の夢で現れる小鳥がモンゴルの\*Suv.Mongだけに〈カッコウ〉である点、そして子供を失った母親の悲しみを例える動物の変容などが指摘されるものの、全体としては民族性の影響は少ないといえる。

以上、比較考察によってみえる各地域における「捨身飼虎」説話の伝承と展開、変容などから、説話の普及状況について最後に論じてみると、「捨身飼虎」説話は、あくまで菩薩

の利他行の実践を説くことが主眼となっており、その自らの体を獣に供養しようとする自己犠牲的行為は仏教という枠組みの中に閉ざされた話題であるといえる。一方、子供たちへ語る昔話として、利他性を強調する「ライオンと鳥」、「狼と鳥」などの動物譚の説話、寓話がアジアの国々に普及されていることからみても、動物譚は一般の民間には年齢、文化、習慣を問わず一番受け入れやすいものだと思われる。

本研究で、「捨身飼虎」説話の①流伝・②民族性の影響・③普及状況の三つの視点から比較考察をした。更に先行研究の成果を踏まえて説話文献遍歴史の研究や説話の一次資料を扱った翻訳史の研究をしていくことが必要であろう。

### 3.2-5. 「捨身飼虎」説話資料とその日本語訳

・チベットの説話の日本語訳

① གཤེན་འོད་དམ་པ་མཛོ་ལྷེ་འོད་དབང་པོ་ལྷན་པོ་རྒྱལ་པོ་འོད་མོ་ (gser 'od dam pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po'i mdo)

善家女神よ、また菩薩は他を救うために自身を一切与えてきたという。その理由は何でしょうか。

無垢で広博な、種々の功德ある、天において無碍知見の力で勇進した最勝最尊は、千人の比丘に囲まれ、yul lnga len（五種の眼を得られる山）という所に行き、ある園林に入った。

最勝最尊は、青くて柔軟ないい香りが満ち、色とりどりに咲いている草花に飾られている所を見た。そして長老阿難陀に、

「阿難陀よ、ここは美しく、法話の印がある場所ですから、ここで今私の座を設けてください」と命令された。

阿難陀は最勝最尊が命令された通りに高座を設けた。設け終って彼は世尊にこう言った。

「常に人々の利のために賚賜を与え、輪廻から解脱させてくれる最長者、最勝者の世尊よ、座を設け終わったので、お座りになって衆生の苦より離れ渡る薬となる、最上の教えや説法を説かれてください」と。

そこで最勝最尊はその座に着き、比丘等に告げて言った。

「比丘等よ、汝等は作甚難作者なる菩薩等の骨身を見てほしいか?」。

そのように命令されてから、最勝最尊に比丘等がこのように申した。

「最勝なる悟りを開かれた仙人よ、最上有情の本質なる、忍辱と努力者で、勤勉で穩なる最慈悲者の精神、感情、無量功德者の骨身を我等見る機会訪れたなら、それが最高のことだ」。

その時、最勝最尊は千輻輪の足面と、ka ma la 花のような柔軟なる手で地面を押した瞬間に、地は六種に震動し、宝石と金銀でできている塔が出てきた。

そして最勝最尊は長老阿難陀に、

「阿難陀よ、この塔を開け」と言った。

長老阿難陀は最勝最尊に命令された通りに塔を開けると、その中に黄金で光ってい

る宝石と真珠で飾られた金の箱が見えた。みて最勝最尊に、

「最勝最尊よ、ここに黄金の箱がある」と申した。

最勝最尊が、

「宝の箱は七個ある。一切その箱を開けなさい」と命令した。

彼はその通りに箱を開けると、そこに雪（白）の蓮華のような骨身があるのを見た。

見て最勝最尊に、

「最勝最尊よ、骨身は見られる」と申した。最勝最尊は、

「阿難陀よ、大士の骨身を持って来い」と命令した。

長老阿難陀はその骨身を最勝最尊に捧げると最勝最尊は衆の前で骨身を手に持って語った。

「これらの骨身は偉大最上の功德を生ずる、普ねく調御、禅定、忍辱を行ずる、頑固、忍耐、名誉を成就している上、常に菩提の慧を備えた不動慧者に尊信と最上の功德になるため、歡喜しなさい」。

こうして最勝最尊は比丘等に告げた。

「比丘等よ、戒徳に優れている菩薩の骨身は最も会い難く、見難く、福田のようなこの骨身を頂礼しなさい」。

彼等比丘達は合掌し、心恭敬して彼の骨身を頂礼した。

そのとき、長老阿難陀は合掌して最勝最尊に聞いた。

「最勝最尊は過去未来現在の一切世界を超出し、一切有情の敬礼する所なのに、なぜこれらの骨身を敬礼するのか」。

そこで最勝最尊は長老阿難陀に告げた。

「阿難陀よ、私はこれらの骨身のおかげでこのように速やかに最上の悟りを開いた生き仏に至ることができた。

阿難陀よ。過去無量世の時、**Shing rta chen po**（大車）という名の、車乗や勢力をもって無碍勇邁な国王がいた。王に、若き天子のような三人の王子がいて、名前は **Sgra chen po**（大声）と、**Lha chen po**（大天）と、**Sems can chen po**（大有情）という。

ある日、大王が樂園の林に遊びに出かけたとき、三人の王子もお連れした。王子達は園林の景色さを楽しみ、花から花へと遊行しながら、十二の大園林の奥まで入り込んでしまった。

王子達の従者等も、王子達を探して、名前を呼びながら、十二の大園林の奥に入っ

て来た。

その時、Sgra chen po 王子が弟たちに、

「私の心は恐怖を感じている。私たちが猛獣に攫われるかもしれない。今すぐ帰ろう」と言った。Lha chen po 王子は、

「恐怖はないが、妻や愛する者と別離する予感がする」と言った。Sems can chen po 王子は、

「聖者の賛美したこの園林では、我は恐怖もまた憂患もない。最勝広博の大義を得られるように、私の心に大喜びが生じている」と言った。

このように話合いながら王子達は十二の園林の中に入り込んだ。

すると、出産して六日か七日も経ってない牝虎は、五匹の仔に囲まれて、飢えで疲れて、体が衰えているのを見た。それを見た Sgra chen po 王子は、

「恐ろしきこの野獣は、出産して六日か七日しか経ってないが、食べるものが見つからないと、自分の子を食べるか、飢えで死ぬしかない」と言った。Sems can chen po 王子は、

「恐ろしきこの野獣の餌は何ですか」と聞いた。Sgra chen po 王子は、

「もし、ここに新鮮なお肉や血肉さえあれば、それが虎や熊、ライオンの餌になる」と答えた。Lha chen po 王子は、

「恐ろしきこの野獣は飢えや疲れで体力がなくなり、生き残る命が少ししか残ってない。非常に飢えて疲れたこの動物はこの森林で餌を探せなくなっているのです、その命を救うために誰かが自身を布施するものぞ」と言った。Sgra chen po 王子は、

「一切に自分の身は、捨て難いものだ」というと、

Sems can chen po 王子は、

「我々のように、自分の身命に執着する者には、この方便はし難いことである。しかし、我々と違って、他の利のために身を布施する最上正士にとっては、身命を捨てることは難しいことではない。有情と大慈悲の菩提たちは、この地や天上に至るとして、他の命を救うためなら歓喜の心を持って、惜しむことなくここで種々に救っていた」と言った。

若い王子は大いに感動し、去って行くまでその牝虎から目を離せなかった。

その時 Sems can chen po 王子は、

「今こそ、この身を捨てる時が来た。その理由といえば、無常で最後に破壊する、常

に汚穢で不清なこの身体を、食物や寝台、乗り物等の沢山の方便をもって長く世話しても、以前からの因縁によって、いつかこの身を捨て放れるしかない。それ故に、不清になるから、このように生きる意味がない。ですから、私はこの身を大善業のために投げ捨てよう。我が身は、老死の大海を超出する船のようになる。無益の、水の沫のようで、無量の虫で満ちている。一切破壊する、百生の苦を荷負する、糞尿に充滿している不清なこの身を捨てることで、憂悲なき、裏切りなき、恥なくて、無垢で禅定智慧等の功德に満ちた、沢山の功德に満ちた清浄法身を得て、憂悲無常の苦を離れよう」と。このように、最上慈悲の心で決心した。そして、二人の兄に向って、「兄達よ、私は十二の園林に入る自己の事ができた」と言って兄たちを先に帰城させた。

そして若き王子 **Sems can chen po** は一人で牝虎のいる所に戻って、虎に近づいて行き、木の枝に服をかけてから、次の誓願を言った。

「私は、有情の利のために、無類の安樂を得ようとして、他の捨て難い我が身を、一切の慈悲の心をもって与えたい。私は、菩薩たちが希望してきた無罪の安樂を素早く得られるように。私は恐るべき諸有の海より三界の衆生を超度してあげよう」。

そして **Sems can chen po** 王子は牝虎の前に身を投じるが、牝虎はこの大慈悲者の菩薩に対して悪いこと何もしなかった。菩薩、「あゝ、この動物は、疲れすぎて食べる力もなくなっている」と考え、慈悲の心をもって刀を探したが、見つからなかった。百歳の光る木の固い枝を一本取り、自分の喉に突き立て牝虎の前に投じた。

菩薩が捨身すると同時に、湖の中に浮く船を風が吹き走らせるように、大地が六種に震動した。太陽も日食のように輝きを失い、天から香粉が混じった花の雨も降った。

その時、ある天は驚嘆した心で次のように賛美した。

「大悲のあなたは、そのように有情で諸々の生き物に思いやりをもって、人間として歓喜して自分の身を一切捨て与えたことで、老死の苦より解放され、安樂最勝の存在である安樂に至り、清浄なあなたはここで、容易に極樂を得られる」。

そこで、菩薩の身より血が流れ出るのを見た牝虎は、さっそくお肉や血を食べて、残したのは、骨だけであった。

その時、大地が震動すると **Sgra chen po** 王子が弟の **Lha chen po** に次ぎの事を言った。

「十方向の海の向こうまで、この大地が震動し、太陽も光を失った。華の雨が降り、



私の心も混乱する。今日、私たちの弟が自分の身を捨て与えたかもしれない」と言う  
と、Lha chen po が、

「彼はそのときどんなに思いやりの言葉を言ったことや飢えのために危難をし、体力  
が衰えたあまりに自分の仔を食べようとしている牝虎を見て私にはこの予感がした」  
と言った。

二人の王子は大いに怖がり、目が涙で満ち、牝虎の所に戻って来ると、Sems can  
chen po 王子の衣が木の枝にかけられ、全骨が散らかり、血が地面に塗られ、髪の毛  
が風で飛ばされてあっちこっちに飛ばされているのを見た。それを見た兄たちが二人  
とも記憶を失い、骨の上に倒れた。

しばらくしてから生き返って、両手を上げて悲惨の歌を歌った。

「あゝ、美しき我が弟よ、所愛の息子を可愛がる父王、母后にどうやって通知できる  
か。私たち今、花のようなまつ毛の、我が美しき息子がどこかい、と母がきくと聞く  
んだ。あゝ、私たち二人ともこの場で死んだ方がいいだろう、生きて行けない。Sems  
can chen po、君がいなくなると、親が私たちを愛してくれないよ」と呼び泣いた。

王子達の従者達も探してきて、

「若者たちよ、何が起きたかい」と尋ねた。

その時、母の王妃が宮殿にいて、夢の中で所愛の息子より別れる夢をみた。二つの  
乳房が割落ちる、牙齒が抜け落ちる、鴿の三羽のひなを見つけるが一羽を鷹に奪われ  
るという夢だった。

目がさめると同時に、大地が震動し、王妃が不安な予感がして、

「大地が何の故にこのように震動するのか。太陽が光を失ったことで私の心が悲惨に  
落ちた。体が震え、目のまぶたがしびれて、自分の乳房が割れ落ちたという夢を見た。  
我が子達は樂園で遊びに出かけているが、何か不幸なことがないかな」等と心配した。  
すると、侍女が走りに来て、

「王妃殿よ、王子達の共の人々は今王子達を探している。王子達が行方不明になっ  
ている」と申した。それを聞いた王妃の心臓が振え、涙を流しながら、大王の所に行き、

「大王様、我が子が不幸に合ったと聞いた」と言うと大王も驚いて、

「あゝ、私は所愛の子を失ったかい」と考えたが、王妃に向かって、

「今すぐ王子達を捜しに出るから、心配しないでください」と言った。

王子達を捜しに皆が出かけたが、しばらくして王子達が現れて来るのを大王がみて、

「我が子達帰って来ているが、全員ではない。あゝ、所愛の子を失った」と悲嘆して、次の言葉を言った、

「あゝ、我が子を失うのはどんなに悲しきことかな、子供を産んでみんな大喜びになるが、その子を失ったり、死なせたりしたのは幸せになれるか？ずっと一緒に暮らしているのは幸せになれるか？」。

王妃は苦難で悲しみ、牝ラクダが泣くように悲惨の大声を響かせた。

「我が三人の子、従者たちを連れ、花で満ちた林中を遊びに行ったが、最小なる愛子、帰って来なかった。心臓のような大事な、最小なる愛子はどこだろう」と。

二人の兄の王子が帰って来ると、

「弟はどこかい」と父王が尋ねた。

王子達は悲しみで涙を流し、口、歯全てが乾き、何も答えられなかった。王妃は、

「我が最小なる愛子はどこかい？私の心臓が悲しみで割れそうになっている。心身とも苦難で死にそうで、意識も失いそうなので、速く答えてくれ！」と言った。

王子達は、弟が身を牝虎に捨て与えたことを知らせた。その話を聞いた大王と王妃は、意識を失い倒れた。しばらくして二人とも生き返り、涙を流しながら、菩薩が身を捨てたあの所へ行った。

大王と王妃は、お肉も血もない遺骨や飛び散らかれた髪の毛を見て、風に吹かれた木のように、また意識を失い、地に倒れた。お使いや従者等が水を注いだり、香木から作った薬を塗ったりしたら、いよいよ大王が生き返り、次の言葉を泣き語った、

「あゝ、所愛の、かわいらしき我が子、何の縁因で死の主の所に急いで行き去ったの？死の主は、なんで先に私を取りに来なかったのか？私には、これ以上の苦難はない」と。

王妃も生き返って、髪の毛を手でひっぱり抜き、両手で胸をたたき、魚が陸に出されたように、子を失った牛や、子を失った牝ラクダのように大声で苦しみ泣きながら、

「あゝ、花のような所愛の我が子を誰がこうしてばらばらにしてしまったのか？心の優しい、見る目に親しい、満月のような美しい我が子を、私の敵となる誰が今日、ここで殺してしまったのか？」などと大王と王妃が絶叫で泣きながら、二人の王子や従者の皆と共に、菩薩遺身の舍利を収め、供養を行い、若い王子の舍利をこの所に置いた。

「阿難陀よ、その時の *Sems can chen po* 王子は、異人ではなく、今の我身である。

阿難陀よ、貪瞋痴を捨て去ってないときも地獄等の苦より世間を救い、今はこのように一切の過ちを離れた無常正覚者になった。このように、一々の有情のために地獄に生じ、生死より解脱させた。有情のために、多くの種々の難事を行うことで世間を撰取した。」と最勝最尊が言って、続けて次の偈を説いて語られた。

最高の菩提を求めつづけ、私は大昔から今まで無量生にかけて身を捨て、国王及び王子となって、常に捨て難き身を捨てた。過去生の宿命を覚えているに、Shing rta chen po という大王がいて、その王子に大施の性格がある。その王子を Sems can chen po という。彼には二人の兄がいて、Sgra chen po と、Lha chen po という。

三人兄弟は一緒に山へ遊びに行くと、飢えで苦しんでいる新産の牝虎を見る。その時に最上有情に悲哀の心が生じ、

「この虎、飢餓に迫られたため、もしくは自分の仔を食べる恐れあり。ですから私、<sup>われ</sup>我が身を捨てあげるべき」と思った。

Shing rta chen po の子 Sems can chen po が、飢餓に迫られた牝虎をみて、虎仔の生命を救うための大悲心で、高山に上がり、そこから自ら牝虎の前に身を捨てる。

その時に大地及び諸々の大山皆震動して、種々の鳥群が多く現れ、獣の群が恐怖し、この世界暗くなると、彼の兄の Sgra chen po と、Lha chen po が大森でいくら探しても Sems can chen po が見つからない。悲惨で心が痛み、森の中で探し、叫び呼びながら林中を走り回って、Sgra chen po と、Lha chen po 王子が力なく牝虎の所に近づいてみると、虎と仔虎の口が血で染められ、骸骨と髪の毛のみが所々に舞い散り、その血が地面に染み込んでいるのを見る。国王の王子達その血を見て、心が更に悶絶して、記憶を失い地上に倒れた。全身が土で汚され、正念を失い、心は正気を離れた。王子殿の従人たちも、大いに悲惨し泣いた王子等に水をかけ注ぎ、天に向いて悲泣した。

王子たちが倒れるそのとき、彼等の母の王妃がたくさんの侍女に囲まれ、王宮の中で休んでいるところ、夫人の 両乳房より血と乳が混じり出て、一切の肢節が針で刺されたように痛み、心に悲しみ生じ、愛子を離れる予感がした。

それで王妃が大王のところに行き、Shing rta chen po 王に向かって悲泣して言った。「人間の大王よ、私の言葉を聞けよ、憂愁の盛火に我身が焼ける。我が両乳房より悪質な血が乳のように流れ出て、針で刺されたように全身が痛み、心臓も破裂しそうになっている。所愛の王子たちを見れないかという不祥な予感がする。速やかに人を遣わして、愛所の我が子を探してくれよ。

今日はまた夢にみた。可愛い三羽の鴿のひなを見つけるが、我が心に可適う最小の者を鷹が奪い取ってしまう。最悪のこの夢は心に悲惨を生じた。愁怖で苦勞した私、恐らくは死んでしまうだろう。速やかに人を遣わして我が子を探してくれ」と。

この言葉を説き終って母の王妃は、その場で悶絶して倒れた。夫人が悶絶し地上で倒れるのを見た大王も、我が子を離れる憂悲に落ちて、大臣や従者等は王子らを捜しに出た。

町内の民衆が皆家を出て、目に涙しながら王子を捜し出しに行った。

「生きているかそれとも死んでいるか？ Sems can chen po 王子はどこにいるか？」と互いに尋ねた。

Shing rta chen po 王が憂悲号泣しながら、王妃が倒れているのを、自ら水をかけ注ぎ、王妃が気が生きがえるまで水をかけた。

「我が子は死んでいるか、生きているか」と心悲しめる彼女は国王に尋ねていた。

国王 Shing rta chen po が王妃に、

「大臣や従者等が彼等を捜しに行った。賢者よ、心を痛めないで、憂悲を離れておくれ」と哀れの大王が王妃を慰めてから、諸大臣に囲まれ王宮を出て行った。Shing rta chen po 王が憂悲号泣して、心配で体調が崩れた。諸民衆も目に涙しながら彼等と共に行った王子を捜すために都城を出て行く国王を見て王の後をついて皆行った。

Shing rta chen po 王が大都会を出てすぐ、愛所の子を見つけるために、鋭い目で諸方を見回した。すると、頭をかぶって、疲れ果て、全身がほこりだらけになり、顔に涙して号泣しながらだれかが来るのを見て、Shing rta chen po 王の心が混乱し、目に涙が満ち、両手を上げて号泣した。

そのとき、彼の一人の大臣が急いできて、Shing rta chen po 王に次のように申した。

「王よ、心配して心を混乱しないでください。王子等は元気になっている。しばらくして王のところに自分たちが来る」と。

しばらくすると国王の二番目の大臣が来た。衣服がほこりに覆われ顔に涙を流して、王にこのように伝えた、

「大王よ、一人の王子がいなくて、二人の王子が憂悲している。Sems can chen po 王子が亡くなられた。仔を産んだばかりの牝虎が、自らの仔を食べようとするのを見て、若き大士彼が深く悲心を生じ、大誓願を起こし、常に衆生を渡し、未来世に菩提

の悟りを得ようとして、最上の大有情が高い崖より身を牝虎前に投じた。飢えに迫られた牝虎が、忽ちすべてを食べ、血肉がなくなり、骸骨だけ残っている」と。

恐ろしきこの言葉を聞いて **Shing rta chen po** 王が悶絶し、地上に倒れて心が憂悲の火に焼かれた。諸大臣従者は憂悲し、水を王注ぎ、両手を天に挙げて号泣した。

また三番目の大臣が来て王に言った。

「我は今日、若き二人の王子が林中で、大いに憂悲し地上に倒れ、悶絶しているのを見た。

我等は水を注ぐと正念を得て、四方を見回してからまた地上に倒れるのを見た。彼等は絶えず両手を挙げて弟を賛美していた」。

王の心が動乱し、子の別離に心悲しみ号泣した。そして王はこのように考えた。

「我が最愛の最小なる子は衆生の利のために命を絶えた。我が他の二人の子彼等も憂悲の火に焼かれて命を落とすかも。今から早速森林に行って、愛すべき彼等の二人の子を見よう。快速の乗り物に乗って、彼等を連れて王宮に帰ろう。彼等の母親の胸が憂悲によって破裂しそうになっている。最愛の二子を見て その心が平安になり、母も命が保たれるだろう」と。

その時に、大王が大象に乗り、諸の従者と共に我が子達を見に森林に行った途中で、二人の王子が悲心で号泣し、弟の名を呼びながら来るのを見た。そして王、二人の王子を連れて、号泣しながら王宮に帰り、急ぎに急いで王妃と我が子達を会わせた。

釋迦牟尼如来の私は、そのときの **Shing rta chen po** 王の子、**Sems can chen po** 王子となって、身を捨てて牝虎を安穩にしてあげた。最上帝王は、その時の大王 **Shing rta chen po** であった。その時の王妃は、今の摩耶夫人である。第一の王子 **Sgra chen po** は、今の **Maitreya** (彌勒) である。第二の王子 **Lha chen po** は、今の文殊師利である。その時の牝虎は、今の摩訶波闍波提である。その虎の五仔は、今の五比丘である。

その時に、大王 **Shing rta chen po** と王妃が種々悲心して一切の装飾を解き、大衆と共に子の舎利供養を行い、その場所に大有情の骨身を置き、七宝塔を建てた。

その時に、王子 **Sems can chen po** が牝虎のために身を捨てて、「身を捨てたことにより未来世において数量超過の間、一切大有情の仏法を見せる」と経説を説いた。

この経説を説く時、天及び人を含める無量の衆生に無上正等慧の心が生じた。塔をここでこのように出して見せた理由はこの因縁によるものである。この七塔は仏の神力の故に、この地下に隠没されている。

② モンゴルの Bar-dor bey-ben öggügsen neretu horin jiragu-dugar bölöq, “Qutug-tu degedu altan gerel-tu erhetu sudur nugūd-un hagan” (『金の光ストラ』第10部の第26「牝虎に身を捨て施したこと」)

善家女神よ、また菩薩は他を救うために自身を一切与えてきたという。その理由は何でしょうか。

無垢で広博な、種々の功德ある、天において無碍知見の力で勇進した最勝最尊は、千人の比丘に囲まれ、Panchalas (五種の眼を得られる山) という所に行き、ある園林に入った。

彼(最勝最尊)は、青くて柔軟ないい香りが満ち、色とりどりに咲いている草花に飾られている所を見た。そして長老阿難陀に、

「阿難陀よ、ここは美しく、法話の印がある場所ですから、ここで今私の座を設けてください」と命令された。

彼(阿難陀)は最勝最尊が命令された通りに高座を設けた。設け終って彼は世尊にこう言った。

「常に人々の利のために賚賜を与え、輪廻から解脱させてくれる最長者、最勝者の世尊よ、座を設け終わったので、お座りになって衆生の苦より離れ渡る薬となる、最上の教えや説法を説かれてください」。

そこで最勝最尊はその座に着き、比丘等に告げて言った。

「比丘等よ、汝等は作甚難作者なる菩薩等の骨身を見てほしいか?」。

そのように命令されてから、最勝最尊に比丘等がこのように申した。

「最勝なる悟りを開かれた仙人よ、最上有情の本質なる、忍辱と努力者で、勤勉で穏やかなる最慈悲者の精神、感情、無量功德者の骨身を我等見る機会訪れたなら、それが最高のことだ」。

その時、最勝最尊は千輻輪の足面と、gamala 花のような柔軟なる手で地面を押し込んだ瞬間に、地は六種に震動し、宝石と金銀でできている塔が出てきた。

そして最勝最尊は長老阿難陀に、

「阿難陀よ、この塔を開け」と言った。

長老阿難陀は最勝最尊に命令された通りに塔を開けると、その中に黄金で光っている宝石と真珠で飾られた金の箱が見えた。みて最勝最尊に、

「最勝最尊よ、ここに黄金の箱がある」と申した。

最勝最尊が、

「宝の箱は七個ある。一切その箱を開けなさい」と命令した。

彼はその通りに箱を開けると、そこに雪（白）の蓮華のような骨身があるのを見た。

見て最勝最尊に、

「最勝最尊よ、骨身は見られる」と申した。最勝最尊は、

「阿難陀よ、大士の骨身を持って来い」と命令した。

長老阿難陀はその骨身を最勝最尊に捧げると最勝最尊は衆の前で骨身を手に持って語った。

「これらの骨身は偉大最上の功德を生ずる、普ねく調御、禅定、忍辱を行ずる、頑固、忍耐、名誉を成就している上、常に菩提の慧を備えた不動慧者に尊信と最上の功德になるため、歡喜しなさい」。

こうして最勝最尊は比丘等に告げた。

「比丘等よ、戒徳に優れている菩薩の骨身は最も会い難く、見難く、福田のようなこの骨身を頂礼しなさい。」

彼等比丘達は合掌し、心恭敬して彼の骨身を頂礼した。

そのとき、長老阿難陀は合掌して最勝最尊に聞いた。

「最勝最尊は過去未来現在の一切世界を超出し、一切有情の敬礼する所なのに、なぜこれらの骨身を敬礼するのか。」

そこで最勝最尊は長老阿難陀に告げた。

「阿難陀よ、私はこれらの骨身のおかげでこのように速やかに最上の悟りを開いた生き仏に至ることができた。

阿難陀よ。過去無量世の時、Maharata（大道を作り手）という名の、車乗や勢力をもって無碍勇邁な国王がいた。王に、若き天子のような三人の王子がいて、名前はMahapranada（大声）と、Mahadeva（大天）と、Mahasattva（大有情）という。

ある日、大王が楽園の林に遊びに出かけたとき、三人の王子もお連れした。王子達は園林の景色さを楽しみ、花から花へと遊行しながら、十二の大園林の奥まで入り込んでしまった。

王子達の従者等も、王子達を探して呼びながら、十二の大園林の奥に入って来た。その時、Mahapranada 王子が弟たちに、

「私の心は恐怖を感じている。私たちが猛獣に攫われるかもしれない。今すぐ帰ろう」と言った。Mahadeva 王子は、

「恐怖はないが、妻や愛する者と別離する予感がする」と言った。Mahasattva 王子は、

「聖者の賛美したこの園林では  
我は恐怖もまた憂患もない  
最勝広博の大義を得られるように  
私の心に大喜びが生じている」と言った。

このように話合いながら王子達は十二の園林の中に入り込んだ。

すると、出産して六日か七日も経ってない牝虎は、五匹の仔に囲まれて、飢えで疲れて、体が衰えているのを見た。それを見た Mahapranada 王子は、

「恐ろしきこの野獣は、出産して六日か七日しか経ってないが、食べるものが見つからないと、自分の子を食べるか、飢えで死ぬしかない」と言った。Mahasattva 王子は、

「恐ろしきこの野獣の餌は何ですか」と聞いた。Mahapranada 王子は、

「もし、ここに新鮮なお肉や血肉さえあれば、それが虎や熊、ライオンの餌になる」と答えた。Mahadeva 王子は、

「恐ろしきこの野獣は飢えや疲れで体力がなくなり、生き残る命が少ししか残ってない。非常に飢えて疲れたこの動物はこの森林で餌を探せなくなっているの、その命を救うために誰かが自身を布施するものぞ」と言うと Mahapranada 王子は、

「一切に自分の身は、捨て難いものだ」と言った。Mahasattva 王子は、

「我々のように、自分の身命に執着する者には、この方便はし難いことである。しかし、我々と違って、他の利のために身を布施する最上正士にとっては、身命を捨てることは難しいことではない」と言って次の偈を言った。

「有情と大慈悲の菩提たちは  
この地や天上に至るとして  
他の命を救うためなら歓喜の心を持って  
惜しむことなくここで種々に救っていた」と。

若い王子は大いに感動し、去って行くまでその牝虎から目を離せなかった。

その時 Mahasattva 王子は、



「今こそ、この身を捨てる時が来た。その理由といえば、  
無常で最後に破壊する、常に汚穢で不清なこの身体を  
食物、寝台、乗り物等の沢山の方便をもって長く世話しても  
以前からの因縁によって、いつかこの身を捨て放れるしかない。  
それ故に、不清になるから、このように生きる意味がない。  
ですから、私はこの身を大善業のために投げ捨てよう。  
我が身は、老死の大海を超出する船のようになる。  
無益の、水の沫のようで、無量の虫で満ちている  
一切破壊する、百生の苦を荷負する  
糞尿に充滿している不清なこの身を捨てることで、  
憂悲なき、裏切りなき、恥なくて、無垢で禅定智慧等の功德に満ちた  
沢山の功德に満ちた清浄法身を得て、憂悲無常の苦を離れよう」と。このように、最  
上慈悲の心で決心した。それから、二人の兄達に向かって、  
「兄達よ、私は十二の園林に入る自己の事ができた」と言って兄たちを先に帰城させ  
た。

そして若き王子 Mahasattva は一人で牝虎のいる所に戻って、虎に近づいて行き、  
木の枝に服をかけてから、次の誓願を言った。

「私は、有情の利のために、無類の安樂を得ようとして  
他の捨て難い我が身を、一切の慈悲の心をもって与えたい  
私は、菩薩たちが希望してきた無罪の安樂を素早く得られるように  
私は恐るべき諸有の海より三界の衆生を超度してあげよう」。

そしてマハサットワ王子は牝虎の前に身を投じるが、牝虎はこの大慈悲者の菩薩に  
対して悪いこと何もしなかった。菩薩は、

「あゝ、この動物は、疲れすぎて食べる力もなくなっている」と考え、慈悲の心をも  
って刀を探したが、みつからなかった。百歳の光る木の固い枝を一本取り、自分の喉  
に突き立て牝虎の前に投じた。

菩薩が捨身すると同時に、湖の中に浮く船を風が吹き走らせるように、大地が六種  
に震動した。太陽も日食のように輝きを失い、天から香粉が混じった花の雨も降った。

その時、ある天は驚嘆した心で次のように賛美した。

「大悲のあなたは、そのような有情ので諸々の生き物に思いやりをもって

人間として歓喜して自分の身を一切捨て与えたことで

老死の苦より解放され、安楽最勝の存在である

安楽に至り、清浄なあなたはここで、容易に極楽を得られる」。

そこで、菩薩の身より血が流れ出るのを見た牝虎は、さっそくお肉や血を食べて、残したのは、骨だけであった。

その時、大地が震動すると Mahapranada 王子が弟の Mahadeva に次ぎの事を言った。

「十方向の海の向こうまで

この大地が震動し、太陽も光を失った

華の雨が降り、私の心も混乱する

今日、私たちの弟が自分の身を捨て与えたかもしれない」と言う Mahadeva が、

「彼はそのときどんなに思いやりの言葉を言ったことや飢えのために危難をし、体力が衰えたあまりに自分の仔を食べようとしている牝虎を見て私にはこの予感がした」と言った。

二人の王子は大いに怖がり、目が涙で満ち、牝虎の所に戻って来ると、Mahasattva 王子の衣が木の枝にかけられ、全骨が散らかり、血が地面に塗られ、髪の毛が風で飛ばされてあっちこちに飛ばされているのを見た。それを見た兄たちが二人とも記憶を失い、骨の上に倒れた。しばらくしてから生き返って、両手を上げて悲惨の歌を歌った。

「あゝ、美しき我が弟よ

所愛の息子を可愛がる

父王、母后にどうやって通知できるか、私たち

今、花のようなまつ毛の

我が美しき息子がどこかい、と

母がきつと聞くよ

あゝ、私たち二人ともこの場で

死んだ方がいいだろう、生きて行けない

マハサッタ、君がいなくなると

親が私たちを愛してくれないよ」と呼び泣いた。

王子達の従者達も探してきて、

「若者たちよ、何が起きたかい」と尋ねた。

その時、母の王妃が宮殿にいて、夢の中で所愛の息子より別れる夢をみた。二つの乳房が割落ちる、牙齒が抜け落ちる、カッコウの三羽のひなを見つけるが一羽を鷹に奪われるという夢だった。

目がさめると同時に、大地が震動し、王妃が不安な予感がして、

「大地が何の故にこのように震動するのか

太陽が光を失ったことで私の心が悲慘に落ちた。

体が震え、目のまぶたがしびれて

自分の乳房が割れ落ちたという夢を見た。

我が子達は樂園で遊びに出かけているが、

何か不幸なことがないかな」等と心配した。

すると、侍女が走りに来て、

「王妃殿よ、王子達の共の人々は今王子達を探している。王子達が行方不明になっている」と申した。それを聞いた王妃の心臓が振え、涙を流しながら、大王の所に行き、

「大王様、我が子が不幸に合ったと聞いた」と言うと大王も驚いて、

「あゝ、私は所愛の子を失ったかい」と考えたが、王妃に向かって、

「今すぐ王子達を捜しに出るから、心配しないでください」と言った。

王子達を捜しに皆が出かけたが、しばらくして王子達が現れて来るのを大王がみて、  
「我が子達帰って来ているが、全員ではない。あゝ、所愛の子を失った」と悲嘆して、  
次の言葉を言った、

「あゝ、我が子を失うのはどんなに悲しきことかな

子供を産んでみんな大喜びになるが

その子を失ったり、死なせたりしたのは幸せになれるか？

ずっと一緒に暮らしているのは幸せになれるか？」

王妃は苦難で悲しみ、牝ラクダが泣くように悲慘の大声を響かせた。

「我が三人の子、従者等を連れ

花で満ちた林中を遊びに行ったが

最小なる愛子、帰って来なかった

心臓のような大事な、最小なる愛子はどこだろう」と。

二人の兄の王子が帰って来ると、

「弟はどこかい」と父王が尋ねた。王子達は悲しみに涙を流し、口、歯全てが乾き、何も答えられなかった。王妃は、

「我が最小なる愛子はどこかい？私の心臓が悲しみに割れそうになっている。心身とも苦難で死にそうで、意識も失いそうなので、速く答えてくれ！」と言った。

王子達は、弟が身を牝虎に捨て与えたことを知らせた。その話を聞いた大王と王妃は、意識を失い倒れた。しばらくして二人とも生き返り、涙を流しながら、菩薩が身を捨てたあの所へ行った。

大王と王妃は、お肉も血もない遺骨や飛び散らかれた髪の毛を見て、風に吹かれた木のように、また意識を失い、地に倒れた。お使いや従者等が水を注いだり、香木から作った薬を塗ったりしたら、いよいよ大王が生き返り、次の言葉を泣き語った、

「あゝ、所愛の、かわいらしき我が子  
何の縁因で死の主の所に急いで行き去ったの？

死の主は、なんで先に私を取りに来なかったのか？

私には、これ以上の苦難はない」と。

王妃も生き返って、髪の毛を手でひっぱり抜き、両手で胸をたたき、魚が陸に出されたように、子を失った牛や、子ラクダを失った牝ラクダのように大声で苦しみ泣きながら、

「あゝ、花のような所愛の我が子を  
誰がこうしてばらばらにしてしまったのか

心の優しい、見る目に親しい、満月のような美しい我が子を

私の敵となる誰が今日、ここで殺してしまったのか？」などと大王と王妃が絶叫で泣きながら、二人の王子や従者の皆と共に、菩薩遺身の舍利を収め、供養を行い、若い王子の舍利をこの所に置いた。

「阿難陀よ、その時の Mahasattva 王子は、異人ではなく、今の我身である。阿難陀よ、貪瞋痴を捨て去ってないときも地獄等の苦より世間を救い、今はこのように一切の過ちを離れた無常正覚者になった。このように、一々の有情のために地獄に生じ、生死より解脱させた。有情のために、多くの種々の難事を行うことで世間を攝取した」と最勝最尊が言って、続けて次の偈を説いて語られた。

「最高の菩提を求めつづけ  
私は大昔から今まで無量生にかけて身を捨て

国王、及び王子となって  
常に捨て難き身を捨てた  
過去生の宿命を覚えているに  
Maharada という大王がいて  
その王子に大施の性格がある  
その王子を Mahasattva という  
彼には二人の兄がいて  
Mahapranada と、Mahadeva という  
三人兄弟は一緒に山へ遊びに行くと  
飢えで苦しんでいる新産の牝虎を見る  
その時に最上有情に悲哀の心が生じ  
この虎、飢餓に迫られたため  
もしくは、自分の仔を食べる恐れあり  
ですから私、我が身を捨てあげるべき  
Maharada の子 Mahasattva が  
飢餓に迫られた牝虎をみて  
虎仔の生命を救うための大悲心で  
高山に上がり、そこから自ら牝虎の前に身を捨てる  
その時に大地及び諸の大山皆震動して  
種々の鳥群が多く現れ、獣の群が恐怖し  
この世界暗くなると  
彼の兄の Mahapranada と、MAhadeva が  
大森でいくら探しても Mahasattva が見つからなくて  
悲惨で心が痛み、森の中で探し  
叫び呼びながら林中を走り回って  
Mahapranada と、Mahadeva 王子が  
力なく牝虎の所に近づいてみると  
虎と仔虎の口が血で染められ  
骸骨と髪の毛のみが所々に舞い散り  
その血が地面に染み込んでいるのを見る

国王の王子達その血を見て  
心が更に悶絶して 記憶を失い地上に倒れた  
全身が土で汚され、正念を失い、心は正気を離れた  
王子殿の従人たちも、大いに悲惨し泣いた  
王子等に水をかけ注ぎ、天に向いて悲泣した

王子たちが倒れるそのとき  
彼等の母の王妃は  
たくさんの侍女に囲まれ  
王宮の中で休んでいるところ  
夫人の 両乳房より血と乳が混じり出て  
一切の肢節が針で刺されたように痛み、  
心に悲しみ生じ、愛子を離れる予感がし

それで王妃が大王のところに行き  
**Maharada** 王に向かって悲泣して言った  
「人間の大王よ、私の言葉を聞けよ  
憂愁の盛火に我身が焼ける  
我が両乳房より悪質な血が乳のように流れ出て  
針で刺されたように全身が痛み  
心臓も破裂しそうになっている  
所愛の王子たちを見れないかという  
不祥な予感がする  
速やかに人を遣わして  
愛所の我が子を探してくれ  
今日はまた夢にみた  
可愛い三羽のカッコウのひなを見つけるが  
我が心に可適う最小の者を  
鷹が奪い取ってしまう  
最悪のこの夢は心に悲惨を生じた  
愁怖で苦勞した私、恐らくは死んでしまうだろう  
速やかに人を遣わして我が子を探してくれ」

この言葉を説き終って母の王妃は  
その場で悶絶して倒れた  
夫人が悶絶し地上で倒れるのを見た大王も  
我が子を離れる憂悲に落ちて  
大臣や従者等は王子らを捜しに出た。

町内の民衆が皆家を出て  
目に涙しながら  
王子を捜し出しに行った  
生きているかそれとも死んでいるか

**Mahasattva** 王子はどこにいるかと互いに尋ねた

**Maharada** 王が憂悲号泣しながら  
王妃が倒れているのを、自ら水をかけ注ぎ、  
王妃が気が生きかえるまで水をかけた

「我が子は死んでいるか、生きているか」と  
心悲しめる彼女は国王に尋ねていた  
国王 **Maharada** が王妃にこう答えた

「大臣や従者等が彼等を捜しに行った  
賢者よ、心を痛めないで、憂悲を離れておくれ」と  
哀れの大王が王妃を慰めてから  
諸大臣に囲まれ王宮を出て行った  
憂悲号泣して、心配で体調が崩れた。

諸民衆も目に涙しながら彼等と共にいった

王子を捜すために都城を出て行く国王を見て  
王の後をついて皆行った。

マハラータ王が大都会を出てすぐ  
愛所の子を見つけるために  
鋭い目で諸方を見回した。

すると、頭をかぶって、疲れ果てた  
全身がほこりだらけになった  
顔に涙して号泣しながら

だれかが来るのを見て

**Maharada** 王の心が混乱し、目に涙が満ち  
両手を上げて号泣した。

そのとき、彼の一人の大臣が急いできて

**Maharada** 王に次のように申した

「王よ、心配して心を混乱しないでください

王子等は元気になっている

しばらくして王のところに自分たちが来」

しばらくすると国王の二番目の大臣が来た

衣服がほこりに覆われ顔に涙を流して

王にこのように伝えた

「大王よ、一人の王子がいなくて

二人の王子が憂悲している

**Mahasattva** 王子が亡くなられた

仔を産んだばかりの牝虎が

自らの仔を食べようとするのを見て

若き大士彼が深く悲心を生じ、大誓願を起こし

常に衆生を渡し、未来世に菩提の悟りを得ようとして

最上の大有情が高い崖より身を牝虎前に投じた

飢えに迫られた牝虎が、忽ちすべてを食べ

血肉がなくなり、骸骨だけ残っている」と。

恐ろしきこの言葉を聞いて **Maharada** 王が悶絶し

地上に倒れて心が憂悲の火に焼かれた。

諸大臣従者は憂悲し、水を王注ぎ

両手を天に挙げて号泣した。

また三番目の大臣が来て王に言った

「我は今日、若き二人の王子が

林中で、大いに憂悲し

地上に倒れ、悶絶しているのを見た

我等は水を注ぐと正念を得て



四方を見回してからまた地上に倒れるのを見た  
彼等は絶えず両手を挙げて弟を賛美していた」。  
王の心が動乱し、子の別離に心悲しみ号泣した。  
そして王はこのように考えた

「我が最愛の最小なる子は衆生の利のために命を絶えた。  
我が他の二人の子彼等も憂悲の火に焼かれて命を落とすかも  
今から早速森林に行って、愛すべき彼等の二人の子を見よう  
快速の乗り物に乗って  
彼等を連れて王宮に帰ろう  
彼等の母親の胸が  
憂悲によって破裂しそうになっている  
最愛の二子を見て その心が平安になり  
母も命が保たれるだろう」と。

その時に、大王が大象に乗り、諸の従者と共に  
我が子達を見に森林に行った途中で  
二人の王子が悲心で号泣しながら  
弟の名を呼びながら来るの見た  
時に王、二人の王子を連れて  
号泣しながら王宮に帰り  
急ぎに急いで王妃と我が子達を会わせた。

釋迦牟尼如来の私は、そのときの Maharada 王の子、Mahasattva 王子となって、  
身を捨てて牝虎を安穩にしてあげた。最上帝王なる Shuddodana は、その時の大王  
Maharada であった。その時の王妃は、今の摩耶夫人である。第一の王子  
Mahapranada は、今の Maitreya (彌勒) である。第二の王子 Mahadeva は、今の  
文殊師利である。その時の牝虎は、今の Mahaprajyati (摩訶波闍波提) である。そ  
の虎の五仔は、今の五比丘である。

その時に、大王 Maharada と王妃が種々悲心して一切の装飾を解き、大衆と共に子  
の舍利供養を行い、その場所に大有情の骨身を置き、七宝塔を建てた。

その時に、王子 Mahasattva が牝虎のために身を捨てて、「身を捨てたことにより  
未来世において数量超過の間、一切大有情の仏法を見せる」と経説を説いた。

この経説を説く時、天及び人を含める無量の衆生に無上正等慧の心が生じた。塔をここでこのように出して見せた理由はこの因縁によるものである。この七塔は仏の神力の故に、この地下に隠没されている。

以上、『金の光スートラ』第10部の第26「牝虎に身を捨て施したこと」

③ Yeke amitan neretu qan köbegün ölöqçin bars-tur beyeben öggügsen jüyil anu,  
Kanjur Vol.90,“Üligerün dalai sudur”

このように我は聞いた。ある時、最勝最尊が Shiravasun 城にある祇樹給独園にお住まいになっていた。

その時、最勝最尊、乞食の時になり、衣を著け、鉢を持ち、Ananda と共に城に入り乞食に行った。その時に Shiravasun 城に老母と物盗みの二人の息子がいた。ある日、財主が二人を捕えて王に届けた。平事律を案じ、処刑されることになった。母が遠くから世尊を見て仏に向い、頭を叩きながら哀みを求めた。

「天尊よ、わが子の命を救いたまへ」と誠心をもって祈り願った。仏は慈みの心でそれらの命を救うために Ananda に、「Ananda よ、王のところに行って、二人の命を救うように頼んでおくれ」と言って、Ananda を王に遣わし、二人の命を助けるように告げてもらう。王は仏の教を聞き、二人を放ち、厄より脱してあげた。仏の恩を感謝した二人は、仏の所に参り、足に頭面し、合掌してこう言った。

「最勝最尊の慈恩を蒙り、命が救われた。あゝ、最勝最尊よ、我等を慈愍し、道次になることを許してください」と願った。仏は、「善きかな、善きかな。比丘よ」と賛美したとたん、二人の髪の毛やひげが自ら落ち、衣服も朱色となった。仏、説法を説き、穢れを祓うと、それぞれ阿羅漢道を得た。その母も仏の法を聞き、阿那含を得た。

そのとき、Ananda はこの事を見て、如来の偉大な徳行を讃説した。また、「この母子三人は、何の良いことがあって、このように世尊に出会い、重罪を免かれ、涅槃の安を得ているのか。一身の中、特に「どうしてこの快活を得られたのか」と思っているのを、仏が知って、Ananda にこのように告げた。「この三人は、我によって助けを得ているのは、今日だけのことではない。遠い昔、私が恩を蒙って、命を救われたことある」と。Ananda は、佛に、「不審なり世尊よ、過去世の中に三人を救ってくださったことは、何のことであつたのでしょうか。」と聞いた。

仏は Ananda に次のように告げた。「遙か昔のとき、この Zambutiv に大国王がいた。名を Ikh tereg (大車) という。およそ五千の国民がいて、王には三人の子があった。その第一は Mahanada と名づけられ、次は Mahadeva と名づけられ、次は Mahasattva と名づけられた。この Mahasattva は小さな子に対しては慈を行い、一切のものを哀れむことは、あたかも赤ん坊をいつくしむが如くであった。

ある時、大王は諸の群臣、夫人、太子と共に外に遊びに出た。途中で王が疲れて、少し泊まり、休息することになった。王の三子は共に林中に遊びに行った。林の中に二匹の仔を連れた一匹の牝虎がいた、食べ物がなくて飢餓で自分の仔を食べそうになっているのを見た。王の息子二人のうちの兄に、「今、この虎は、飢えてもう少しで仔虎を食べようとしている」と言いと、二人の兄が答えた。「その通りだ」と。弟は、「この虎、今何を食うべきか」と聞いた。二人の兄は、「もし、殺したての熱き血肉があれば、それが食事になる」と答えた。

弟は、「今、誰が自分の肉や血でこの虎の命を救えるか」と聞くと、二人の兄は、「そんな難事までして、この虎を救う者はいないだろう」と答えた。王の小子は、心の中に自ら思った。「私は久遠生死の中において身をだめに生きてきた。或は貪欲のため、或は瞋恚のため、或は愚痴のため命を捨ててきたが、法のために捨てることがなかった。今こそ、この法のために命をささげる時期がきた」と。

このように決定してから二人の兄に、「兄等よ、しばらく先に帰っていてくれ、私には用事あるので戻って、後から追いついて来るから」と言って先に行かせた。

このあと、元の道から離れて、牝虎の所に戻り、身を虎の前に投じた。飢えて衰えた虎は、口付けも出来ない。その時、太子、自ら枯れ木の枝を取り身に刺して血を出した。牝虎がこれを舐めて、口も開けられ即ちに身肉を食べた。

二人の兄は弟が帰って来ないので、「我が弟は何の故に帰って来ないか。」と思って、森に戻って探しに行った。そして、「弟はきっとあの飢えた牝虎に身を投じに行ったのではないか」と思い、牝虎のところに戻って来ると、王子を虎が食べて、骨だけが残っているのを見た。それをみた二人が悶絶し、地面に倒れた。しばらくすると、また生きがえり大声で号泣し、また悶絶した。

その時、王の夫人が眠睡して夢に三つの鴿をみて、共に林野に飛び遊んでいるところ、その一番小なひなが鷹に奪われ、食べられる夢をみた。目が覚め、恐怖で心が痛んで、王に向かって、「大王よ、鴿は子孫と同じ者になりという諺を聞いたことがある。

私は、夢の中に三つの鴿をみて、共に林野に飛び遊んでいるところ、その小な者が鷹に奪われ、食べられる夢をみた。我が愛する末っ子に不祥があったのではないかと、王が即ち王子等を捜しに、大臣や従人等を遣わした。

しばらくして二人の兄が帰って来るが、小子はいないので、「Mahasattva はどこにいる？」と父母が問うと、二人が答えも出来ずしばらくしてから、「牝虎に食べられた」と答えた。

父母は、これを聞き地に倒れ悶絶した。しばらくして蘇り、二人の兄、夫人、従人と共に急いで、彼の亡くなった所に向かった。その時、牝虎が Mahasattva の肉を食べ尽くし、血が地面に付き、骸骨のみが残っていた。母がその頭を捉え、父がその手を捉え、号泣し悶絶した。しばらくしてまた蘇った。

Mahasattva は命を落とした後、兜率天に生れた。天の子になった Mahasattva は、「我は、何の徳の由によってこの報を受けたか」と思い、天眼徹視で、普く五趣を觀たら、前の自分の遺体が山間に在り、父母が悲しみ悼むのをみた。

私の親はこのように悲しんで号泣し過ぎること、身命を失うことをあると憐れみ、「我は、今親の心を慰めるべき」と思い、即ち天より下り、空中に現れた。そして種々の言葉で父母を解諫した。すると父母は天に向いて、「あなたは、何の神になるか、我々に告示してよ」と問うと天の子は、「我は、Mahasattva 王子である。我は自ら捨身して牝虎を飢えから救った由に、兜率天に生まれた。大王よ、法有れば無に帰し、生有れば必ず終わり有り。悪は地獄に落ち、善をすれば天に生まれるのは、生死常の道であるので、我一人の死を悲しむことなし。我は今このように天に生まれたので、親も自ら悟り衆善を勤め修めてください」と言った。父母は、「君、我等を捨てて、大慈を行い哀れみを持って身を牝虎に一切施し、終りを取った。我等は君の死を苦しむのが計難しが、君は、何のために我等を捨てて大慈を修しむのか」と聞いた。天人また、種々の妙善き偈句で父母に報謝した。父母が、それを聞き、少し惺悟を得、七宝の箱を作り、骨を中に置き、葬埋し終わり、上に塔を建てた。天の子が兜率天に帰り、親と大衆も宮に帰った。

私は Ananda に告げたのは、「その時の大王、Maharadana とは異人ではなく、今の我父の王 Sudadana である。その時の王夫人は私の母 Mahamaya であった。その時の Mahanada とは、今の彌勒であり、第二の太子 Mahadeva とは、今の婆修蜜多羅である。その時の太子 Mahasattva とは他の人ではなく、この私のことである。そ

の時の虎の母は、今のこの老母で、その時の二人の子は今の二人兄弟である。私は、遠い昔においても、このように危機より他の命を救ってあげた。それで、今成仏として、又彼らの命を救い、永く生死の大苦を離れることができたのだと。

その時、Ananda と一切の大衆が仏の説法を聞き、歓喜し奉行した。

## 第4章 日本とモンゴルの継母説話の比較対照研究

—日本の「手無し娘」とモンゴルの *Gargui huuhen* を中心に—

### 第1節 継母説話とその先行研究の概要

継母をテーマにした話は、昔から世界中でそれぞれの国や地域の文化的、社会的・時代的な特徴を背景にしながら伝承されてきたと思われる。

継母譚はシンデレラをはじめとして世界中で広く分布されているが、モンゴルと日本で、「手無し娘」の話が全く同じ内容で共通に伝わり、それが口承で語られてきたことは注目に値する。

#### 4.1-1. 日本の継母説話とその先行研究の検討

日本では継母譚の説話研究が数多くなされている。その一つとして国文学研究者廣田收氏の『入門説話比較の方法論』、2014より第2章2節「昔話「継子虐め」の日韓比較」があげられる。

本節にて廣田收氏は、文学の伝播について「様々な国の物語や説話、小説や芸能等の基層に、それぞれの国に共有されている話型が存在する。よく似た伝承が全く違う地域に残るのは、物語、説話、昔話そのものが伝播したものではなくて、結果的には話型が伝播され、共有されたからである」と論じている。こうした考え方から、比較対象に「継子虐め」昔話の日本・韓国・中国に共有する話型を取り上げ、日韓・韓中の比較研究をした上で比較文学研究の方法、その可能性について定義している。著者はこの比較文学研究における研究方法論、その可能性を昔話の本文の構成的事項と、表現の次元の差異から見出している本節は次の考察からなっている。比較考察資料として韓国の昔話「コンジ・パッジ」と日本昔話「栗拾い」を取り上げ、説話を本文からみた比較考察と表現からみる昔話の差異についての問題に関する比較研究をしている。

##### 日本における継母説話について

日本では、継母に関する昔話、物語等の口承文学と継母説話文学研究も多数なされてきた。継子物語に関する研究として代表的な研究は、池田恭子「継子物語研究：継子物語の誕生に関する一仮説」(『日本文学』、東京女子大学、1973年11月30日、号40、pp1-15)がある。また、説話文学に記録されている継母譚に関する代表的な研究として、渡邊竹二郎氏の「説話文学の継母譚について」がある。

渡邊氏は説話文学に記録された継母譚主要説話集より、13種の継母譚を取りあげ、それらの主人公である継母は善悪いずれかの型であったかという観点から、説話文学的世界を悪型と善型に分けている。それらの中で善型説話は4)であるが、11)の説話は善悪不明であり、それ以外の11)の説話は悪型の継母の世界として、

その悪型性格の説話を、以下国別に分析し、

天竺的 1)・2)・3)・9)・10)

中国的 5)・6)・12)

日本的 7)・8)・13) であると分析している<sup>123</sup>。

渡邊氏が、以上の悪型継母説話の継母から継子への虐待の姦策の比較からうかがわれる三国差を「天竺は残酷、中国は複雑、日本は単純となろう」と言って、「天竺の残酷は仏教的因果観念を説くためから、中国の複雑は大家族制の地盤から、日本の単純はこの当時まだ封建的な意味での家族制が固定化しなかったから」<sup>124</sup>という説明でまとめている。

『今昔物語集』巻 19 第 29 話に関する研究は多数なされているが、継母説話としての先行研究といえば、星田公一氏の「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」<sup>125</sup>がある。

星田氏は「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」では、『今昔』における本話の位置・継子譚の要素・亀報恩課の要素・本話の形成過程について研究している。

更に、星田氏は、『今昔』における本話の位置付けについて、『今昔物語集』巻第 19 第 29 話を中心にして、その前後の一連の話を見ることで、前に父母への孝養を説く四つの話があり、後に報恩を説く 5 つの話<sup>126</sup>があり、本話がこれらの前後のグループのつながりの役割りを果しているわけで、父母への孝養を説く前者の要素と、報恩を説く後者の要素との両方を合わせ持っている。

本話の継母の性格について「本話では実子がないにもかかわらず、継子いじめをする非人間的な継母として描かれている」とし、「本話の発端部に継子の要素を採り入れたのは、なぜ如無が海に落ちなければならなかったのかといういわれを説明するためであり、そこから本話の説話性を示す最も重要な点である」。と論じている。

---

<sup>123</sup> 渡邊竹二郎「説話文学の継母譚について」、『国文学研究』9-10号、1954年3月、p.375

<sup>124</sup> 同上、p.377

<sup>125</sup> 星田公一「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」、『同志社国文学』、同志社大学、9号、1974年2月、pp.67-79

<sup>126</sup> 星田公一「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」、『同志社国文学』、同志社大学、9号、1974年2月、p.70



#### 4.1-2. モンゴルにおける継母説話、その先行研究の検討

モンゴル科学アカデミー編『モンゴル文学概念』（1977）に収録されている、D.Sandag 氏の研究成果によると、モンゴルには、継母をテーマにした以下の 9 物語があるとされている。

Unchin ohin（「孤児の娘」）

Nomiin Baysgalan, Erdmiin Baysgalan（「本のバヤスガランと智慧のバヤスガラン」）

Haanii tsetsen（「王の賢者」）

Bayan Baldan（「金持ちのバルダン」）

Hoid ehiin gart orson unchin ohin（「継母の手に入った孤児の娘」）

Zes ust ohin（「銅の髪の毛をもった娘」）

Van chigchii haan（「ワンチグチー王」）

Gargui huuhun（「手無し娘」）

Tavan baatar（「5 人の英雄」）<sup>127</sup>などの物語が口伝で語られてきている」という。

説話として記述されているのは **Enduurel haanii tuuj**（「エンドウール王説話」）が代表的なものであるが、この説話の類話としては西モンゴルのオイラト族とハリマグ族の **Uneheer turulht sain haanii tuuj**（「最善王説話」）がある。

この **Enduurel haanii tuuj** の竹筆書きの原典は現在、モンゴルの **Nomun gerel** という仏教書籍保護センターの図書館に保管されているが、文学学者 **Ts.Damdinsuren** 氏が『モンゴル古典文学 100 選』（1959）<sup>128</sup> に収録したキリル文字の現代モンゴル語の説話を本考察で取り扱っている。本説話の成立年代については、説話の著者 **Zarligiin erht Dalai**<sup>129</sup> は説話の後記に、「**Avtai sain** 王の孫、**Ereehii mergen** 王の息子 **Duurgegch noyon Tsevdendorj** 太子の命令で、1662 年に作成した」<sup>130</sup> と記している。この説話の成立についてモンゴルの文学者 **Ts.Damdinsuren** 氏は、“**Монголын уран зохиолын тойм**”1977 において、「インドやチベットの”**Shidet huuriin ulger**”の 5 話には **Narangerel ba Sarangereliin ulger** があるが、**Enduurel haanii tuuj** はこの物語の翻訳ではなくて、この話を基に、新しく作られた話である」と説明している。

<sup>127</sup> МШУА “Монголын уран зохиолын тойм” 1977, x.51（『モンゴル文学概念』1977）

<sup>128</sup> СЕ.Damdinsürüng “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai” 1959

<sup>129</sup> 生没不明

<sup>130</sup> МШУА “Монголын уран зохиолын тойм” 1977, x.50（『モンゴル文学概念』1977）

## 第2節 日本の「手無し娘」とモンゴルの Gargui huuhen 説話の比較対照研究

本節で、日本の話「手無し娘」とモンゴルの話“Gargui huuhen”を取り上げる。それらの比較考察を通して、日本人とモンゴル人の考え方や文化の特徴がこの話にどのように詰め込まれているかを探り出すことで日本とモンゴルの文化の違いと宗教性の共通性、日本人とモンゴル人の心の在り方について考えてみたい。

この話は日本とモンゴルでは継母譚に分類されているが、ヨーロッパのグリムメルヘン昔話<sup>131</sup>にも同じ名の話があり、AT 世界昔話類型の「AT706」に分類されている。

この昔話類型について、稲田浩二『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス』(1988)において、「この AT 世界昔話類型とは、ヨーロッパ諸民族のタイプ・インデックスとしては充足したものであるから、少なくとも AT によってヨーロッパの民間説話を理解し、これとそれ以外の伝承圏の民間説話を比較することは妥当性が強いであろう」<sup>132</sup>と指摘している。

---

<sup>131</sup> Grimm's fairy tales, The Maiden without hands, 1812

<sup>132</sup> 稲田浩二『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス』同朋舎、1988、p.10

#### 4.2-1. 先行研究の検討

日本で流布されている「手無し娘」の話を関敬吾氏は『日本昔話大成』（1978）において「てっきり姉さま」（「手無し娘」）を代表に日本の各地域に分布されている37の話を編集して紹介している。

「手無し娘」の日本での伝承について関敬吾氏は、「我が国で文献の存在は詳しく知らないが、明治2年の筆写になる「高野山女人堂由来記」（旅と伝説 2・5）がある。この話は古くは宗教伝説であった（中略）」<sup>133</sup>と述べている。

以下にこの「手無し娘」話の骨子を紹介する。

美しく賢い継子は継母に虐められ、両手を切られ、山奥（海辺）に捨てられるが、身分の高い若者に会い結婚する。若い旦那が留守の間、手無し娘は可愛い子を産むが、旦那との通知の手紙を継母が途中ですり替えたせいで、再び子供と共に家を追い出される。幼い子供連れの手無し娘は、川（海）で水を飲もうとするところ、不思議に両手が生える。用事が終わって家に帰ってきた旦那が、手紙がすり替えられ、妻子が家を追い出されたことを聞き、妻子を探し出す。最後に無事に再会し、親子3人で幸せに暮らす。

千野美和子氏は「日本昔話にみる精神性」<sup>134</sup>において日本の「手無し娘」の話（関敬吾『こぶとり爺さん・かちかち山—日本の昔話1』）とグリムメルヘンの話との比較考察をし、西洋人と日本人の信仰のあり方の違いについて論じている。千野氏は、西洋人は神様への強い信仰心を持っているに対して、日本人は生きとして生ける物への思いやり、感謝の心をもっていて、これは既存の神への信仰心ではなく、日本人の心に宿っている神への宗教性であると説明している。

物語の主人公の中で手無し娘だけを比較の対象にした千野氏の比較考察と違って、今回本章では、両者の話を①全体的な構成の比較対照②宗教的な要素③主人公の人物像といった視点から考察をし、両者の共通点と相違点・両者にみえる宗教的な、信仰的な共通点・日本人とモンゴル人の心のありかた、文化の特徴が本話にどのように影響を与えているかについて探っていくことを目的とした。

---

<sup>133</sup> 関敬吾、1978、p.173

#### 4.2-2. 日本の「手無し娘」とモンゴルの Gargui huuhén 説話の比較考察

比較考察の対象資料として日本の『日本昔話大成』第5巻に収録されている「てっきり姉さま」（手無し娘）<sup>135</sup>とモンゴルの“Монгол ардын үлгэр”（『モンゴル民族物語集』）に収録されている Gargui huuhén（「手無し娘」）<sup>136</sup>を取り扱う。

まず、関敬吾『日本昔話大成』巻5 本格昔話4に収録されている、青森県三戸郡のはなしである、「てっきり姉さま（手無し娘）」を以下に紹介する。

##### てっきり姉さま（手無し娘）

昔、大阪のようなところに大金持ちがあった。美しい一人娘がいて母がなく後妻が来たが心がけの悪い人であった。あるとき、父親は殿様の役のために江戸へ上った。その留守中に継母は継子が憎くていつも殺したいと思っていたが、さかしい娘をどうすることもできない。そこで家来どもに命じて、娘を山奥へ連れて行かせ殺すようにといいつけた。家来どもはしかたなく行ったが、よい人であったから、殺すに忍びないので皆泣きながら姉様の両手を切って捨ててきた。手無しになった娘は泣きながらあてなく歩いているうちに、京都のような大きな町へ出た。ある家の傍を通ると堀越しに蜜柑が沢山なっている。咽喉も乾くから取って食べたいと思ったが、手無しではしかたもなく、ようよう口で取って食べた。それから前に回ってみれば暖簾に日野屋と書いてあった。娘はそれを見て「ここア京の日野屋だなア、へば（そんなら）この若旦那と私とは許嫁だが、こんなになつてはどうすることもできない」と独り言をいって口説いていた。日野屋の召使の若者はそれを聞いて不思議に思い、若主人のところに行って話した。「それアほんとうだ。手が切れていても吾アおがだ（女房）になるやつだ、呼ばってこい」といった。若者は手切り姉様を連れてきた。そして姉様から継母の話聞いて、罪つくり（かわいそう）だと思っておかだにしておいた。

あるとき、若旦那は西国の方に用事があって旅立ってしばらく留守になった。姉様はその留守中にお産をして、玉のような子供を産した。両親の喜びは大変であった。早速息子の若旦那に通知しようとして若者に手紙を持たせて旅先までやった。手紙に

<sup>135</sup> 関敬吾、1978、pp.156-159

<sup>136</sup> Д.Цэрэнсодном 2015, pp.197-199

は「お前の留守中に、嫁は玉のような男の子を産<sup>な</sup>して、皆喜んでいる。早く用事を済まして、お帰りを待っている」と書いてある。若者は途中よせばよいのに、気を利かして大阪の嫁の里へ寄って、姉様が赤坊産<sup>おぼこな</sup>して丈夫な話を知らせた。それを聞いた継母は内心憎くてたまらない。その若者にうんと酒を飲ませて、ぐでんぐでんに酔わせて眠らせ、懐中から手紙を取り出して見て優しい文面にまたまた憎くなった。それで今度は自分で書いた贋手紙と取り換えた。それには「猿だか、鬼だかわからないおぼこが生まれ出しけア、投げべか、(捨ててようか)」としてあった。それを若者はそのまま、神戸の滞在中の若旦那に渡した。その返事には「鬼でも、猿でもよい、おれの子だから帰るまで大事にして、どこへも出してはならぬ」といってよこした。若者はまたしても継母のところに寄って酒を飲ませられて、またも手紙を替えられた。それには「鬼や猿の子は、おれの子ではないから親もろとも投げてしまれ(しまえ)」と、あったので両親はどうしたことだべと、なもかもくやしかったども(大変悲しく思ったけれども)息子からの手紙でしかたなく、嫁を孫もろとも出してしまった。

手切り姉様は子供を背負って泣く泣くその家を出て、あてなく行くうちにあるところに出た。そこにはお堂があった。姉様はくやしくて(かなしくて)その神様を拜んで、切られてなくなった手の出るように祈った。そこからまた行くうちに六部に会った。道をたずねて行くうちにまたも六部に会った。その六部は「どつたらどごさ出はても、かもなエで(かまわずに)行げば、とてもどうでん(びっくり)するときがある。そのときにお前の切られた手<sup>お</sup>生<sup>お</sup>いるアねエ」と教えた。姉様はよろこんで行くと、右にも左にも行かれないような岩がんくらへ出た。岩の下には川が流れている。おぼこも乳を欲しがると、自分も咽喉が乾くので静かに川へ下りて、水を飲もうとした。その拍子に子供が背中から抜けて川へ落ちべとした。姉様はびくたがておぼこを取ちゃべとした(とりおさえようとした)。精いっぱい力が両腕にこもったそのはずみに、双方の手がびょうっと出た。姉様は神の助けと喜んでまた行くうちに六部に会った。六部はもう少し行けばお寺がある。そこへ行って世話になれと教えてくれた。お寺に行き和尚様に頼んで母子二人世話になっていた。いつか月日もたって子供は四つばかりになった。

大阪の日野屋では若旦那が用事も済んで久しぶりで家に帰った。妻子に会って楽しく話しようと思うてきてみれば、両親が泣きながら、御前の手紙のためにしかたなくめごい孫を出したというので、若旦那は大いに驚いた。そして使いに出した若者を

調べてみると、みな継母の悪事とわかった。そこですぐに若旦那は妻子をたずねることになって旅立ちの用意をして、あてもなく方々を回って歩いたが、それらしい者も見当たらない。

そのうち、二、三年の時が過ぎた。ある日、道々母子らしい者の様子を聞きながら歩いているうちに六部に出会った。どこそこのお寺へ行ってみるようにと言われて訪ねていったら、寺の境内で四つばかりの男の子が遊んでいた。もしやわが子ではなからうかと思ってみれば、母にもよく似ている。近寄っていくと子供は急いで奥に行き母親に「お母様お母様、お父様来たえ」といった。母親は「そんなはずがない。御前のお父様は、おれの子ではない、投げてしまれというた方だ。人違いするな」といったが、聞かずに駆けていき取りついた。若旦那は和尚から子細の話をきいた、妻子の無事を喜び、厚く礼をして二人を引き取り、親子三人無事に家に帰り、両親始め家じゅうの者の喜びを受けた。近所振舞もりっぱにしてめでたく栄えて暮らした。継母は悪いことばかりしたから、しまいには、盲目になった。それだから悪い心がけ持ってはならない。どっとはらい。

次に、紹介するのはモンゴルの **Gargui huuhén** 話の日本語訳である。

Д.Цэрэнсодном “Монгол ардын үлгэр”, Улаанбаатар, 2015

Gargui huuhén

(D.Tserensodnom 『モンゴル民族物語集』、ウランバートル、2015

「手無し娘」)

昔、海の北側にある国王が住んでいた。その王には 15 歳の姫がいた。姫は、太陽の光や風に当たらないガラスの家で何も不自由なく住んでいた。

その海の南側にもう一つの王国があった。その国の王には 15 歳の王子がいた。その王子は海の島の園地の中の自分の家で本を読んで、学問を習っていた。

ある日、北の国の王が 3 年間の役に行くことになった。行く前に王妃に、「私は 3 年後に帰って来るので、それまで私の娘をよく見守っていてください」と頼んだ。

実はその王妃は、姫様の継母であった。それで、彼女は姫が大嫌いで、いつも殺したいと思っていた。

ある日、国王の家がお米を収穫しているところ、米の中から大きなネズミが出てき

たのを家来たちが王妃に持ってきて見せた。王妃はそのネズミを殺して、その前歯を取っておいた。

それから3年間が経って、国王が役から帰って来て王妃に、「私の娘が元気だったかい？」と聞くと、王妃が取っておいたネズミの歯を見せて、「元気というか！こんな歯の化け物を生んだよ」と言った。

国王が恥と怒りで爆発しそうになって、姫を呼んで、牛車に乗せて二人の人に引っ張ってもらって、自分で刀を持って後ろに歩いて、海岸まで行った。そこで、姫を殺そうとすると、姫が泣きながら命を助けてくれるように父王に願うから、父王が姫の両手を切っておいた。

両手を切られた姫が、悲しくて海に溺れて死のうと思って海に飛び込んだが、溺れないで、海の水面を浮いて、流れて行った。

ある日、南の国の王子が、園地を散歩しているところ、誰か海に流れているのを見て、助けてあげて見ると、両手が肩から切られている女であった。

「君、誰ですか？」と聞くと、

「私の父が私を殺そうとしたが、命だけ残してと頼んだら、両手を切ってしまった。それで、私が死にたいと思って、海に飛び込んだが、溺れなくて、このように流れている」と答えた。王子が娘を自分の家に入れて、切られた手の傷に治療して、娘と結婚した。

ある日、大王の右手大臣（首相に当たる大臣の位）が亡くなったので、すべての王子たちの中から主王の右手大臣を選ぶ試験があって、王子が選ばれた。王子が大王の右手大臣として行くとき、手無し娘が妊娠中であった。

手無し娘の子どもが生まれてから3年間経ったときに王子が数か月間家へ帰ることになったので、王子が、家にこんな手紙を送った。

「私は、何月何日に家に帰る」と書いた手紙を一人の使者に持たせて実家に送った。その手紙を届けている人が途中で、ある家に寄った。その家に中国人のご主人とその奥さんがいた。夫婦が、使者にお酒を飲ませて眠らせてから、持っている手紙を読んでみたら、主王の右手大臣から手無しの妻に描いた手紙であった。するとその家の妻が、手無し娘の継母であったので、

「えっ？この手無し娘は、きっと、手を切られたあの継子に違いない。それなら、この手紙を書き換えよう」と思って、手紙を「手無し娘を私が帰るまでに追い出してく

ださい」という手紙に取り替えた。

その手紙を読んだ南の国の父王が怒って、  
「どんな時に命を助けて、どんな時になったら遠くまで追い出すのか？とりあえず、手無し娘とその子供をザヤタイお寺で連れて行ってあげよう。王子が帰って来たら、何かよい方法を考えよう」と決定して、親子をザヤタイお寺まで連れて行って残しておいた。

手無し娘が、「私たちをここで残しておいて、後で殺しに来るかもしれない」と恐れて、子供を背負って逃げて行った。

王子が役から家に帰って来た。自分の妻子を「追い出せ」と手紙を送った王子に怒った父王が王子を殺そうとしたが、話し合っただけで事実が判明した。王子が手紙を届けた使者を呼んで来て聞いたら、途中で泊まった夫婦のことを話した。そこから、継母と中国人の夫を呼んで来て聞いたら、仕方なく自分たちが手紙を取り変えたことを明かした。その罰として中国人の夫を水のない砂漠に追い払って、継母の首を切り取った。

それから、ザヤタイというお寺へ妻子を迎えに行ったが、もう居なくなっていた。妻子との再会をあきらめた王子が「なくなった妻子のために乞人に布施しよう」と決めて、国中にお知らせを出した。

その知らせを聞いた手無し娘が、「そこへ行きたいが、私のことがすぐ分かってしまうから危ない」と思って子どもを背負って海岸を沿って歩いていた。

ある日、手無し娘の咽喉が乾いたので水を飲もうとしたが、低い海岸が近くで見えなかった。それで、仕方ないから、子供を安全な所に座らせておいて、自分が高い岸から水を飲みに行ったら、あっという間に水の中に倒れてしまった。すると、倒れた側の手が生えてきた。大喜びした娘がまた片方から倒れたら、また片方の手が生えてきた。

両手が生えてきたので喜んだ娘が「今なら、私を見ても分からないだろう」と思って子供を背負って、王子の布施地に行った。

父王のところに来ると、王子の母が庭の門の前で立って、金と銀を皆に配っていた。娘が、そこに近づいて行ったら、子供が王子の母の裾を引っ張って、

「お母さん！」と呼んだので、母がびっくりして見ると、手無し娘がいるのに、両手があるので、迷った母が王子と国王を呼んだ。二人が来て、手無し娘の両手が生えて、元気になっているのを見て、大喜びして、家族皆そろって、お祝いをした。



王子が子どもと妻を連れて主王の役に行き、幸せに暮らした。

以下の表（4-2a）で日本とモンゴルの「手無し娘」話の粗筋を紹介する。

表（4-2a） 日本とモンゴルの「手無し娘」話の粗筋

|    | 「手無し娘」（日本）  | Gargui huuhun（モンゴル）   |
|----|---|---|
| 1  | 大金持ちが美しい娘と後妻と暮らしている。  | 王が美しい娘と後妻と暮らしている。   |
| 2  | 父は殿様の役に行く。  | 父王は3年の役に行く。   |
| 3  | ×   | 父王が帰って来ると継母は「娘はこんな歯を持った化け物を産んだよ」と言<br>って、ネズミの前歯を見せる。                |
| 4  | 継母は家来に娘を殺すように命じるが、家来<br>は両手を切って娘を山の奥で捨てる。                                   | 父王が怒って、娘の手を切って海岸で<br>捨てる。   |
| 5  | 娘は、大都会に出て、偶然に許婚の長者の庭<br>の蜜柑を盗んで食べる。そこで、若い長者に<br>見つかかり、結婚する。                 | 娘は海に飛び込んで死のうとするが、<br>海に流されて、南の王国に着く。そこ<br>で王子が娘を妃にする。               |
| 6  | 若旦那が用事で西国に旅する間、娘が男の子<br>を産む。親は、若旦那に子供が生まれたとい<br>う手紙を送るが、途中で継母が手紙を取り換<br>える。 | 王子は3年間国王の役に行っている<br>間、娘は子を産む。王子は帰る通知を<br>実家に送るが、継母が途中で手紙を取<br>り換える。 |
| 7  | 娘は子供と共に家を追い出される。  | 娘は子供と共に家を追い出される。  |
| 8  | 娘は、川で水を飲もうとするところ、不思議<br>に両手が生える。  | 娘は海で水を飲もうとするところ、不<br>思議に両手が生える。                                     |
| 9  | ×   | 王子が手紙を取り換えた継母を罰す<br>る。  |
| 10 | 若旦那が妻子を探す。  | 王子が妻子を探す。   |
| 11 | 若旦那と妻子が無事に再会し、幸せに暮ら<br>す。   | 王子が妻子に無事に再会し、幸せに暮<br>らす。  |
| 12 | 継母が罰せられる。   | ×   |

### ① 両者の構成による比較考察

以上の表（4-2a）で、1-12の項目で話の粗筋を紹介したが、ここでそれぞれの話の構成の比較をすることができる。両者の3、9、12以外の項目の内容は一致しているのがみられ、話の基本的な展開は大体に共通している。

ここで注目されるのは、「娘が変な生き物を産んだ」という知らせのことである。継子の運命を変える理由である「化け物を産んだよ」というこの知らせは、日本とモンゴルの話だけでなく、グリムメルヘンの話にも語られ、話の展開には非常に重要な役割を果たしている部分と言えるが、日本とモンゴルの話の中では、詳細にわたって以下のような相違点がみえる。

モンゴルの話の場合：

- a. 話の頭部（表（4-2a）の3）に語られる
- b. 娘の父親に継母が直接言い伝える。（「変な生き物を産んだ」と言い、その証拠としてネズミの前歯を見せる）
- c. 娘が父王に手を切られる

日本の話の場合：

- a. 話の中部（表（4-2a）の6）に語られる
- b. 娘の旦那への手紙に書き替える（「嫁は玉のような可愛い子を産んだ」という手紙を「猿だだか、鬼だだかわからないおぼこが生まれた」という手紙ですり替える）
- c. 娘が子供と共に家を追い出される

ここで語られる「化け物」も地域によって異なり、モンゴルの場合はネズミ（このような化け物）に当たるが<sup>137</sup>、日本の話の場合は、「猿、鬼」になっているのが「化け物」に関する地域的な意識、考え方の特徴を表すところで、非常に興味深い点である。

継母が罰されるという話が、表（4-2a）の9（モンゴル）と、表（4-2a）の12（日本）にそれぞれ登場するが、継母の罰される方法、継母の行方も両者にはそれぞれ違いを見せている。

また、表（4-2a）の6に共通に語られる、継母の悪案の一つである「手紙をすり替える」エピソードにも大きな相違点がみえる。この表（4-2a）の6の部分を以下表（4-2b）で詳しくみてみたい。

---

<sup>137</sup> 「Чиний охиноос ийм шүдтэй юм гарсан шүү дээ гэж өнөөх оготны шүдийг гаргаж хаанд үзүүлжээ。」（Д.Цэрэнсодном “Монгол ардын үлгэр”，Улаанбаатар，2015，p.197）

表 (4-2b) 手紙の内容とすり替えの回数の比較対照

| 手紙の回数 | 「手無し娘」(日本)  |  | Gargui huuhен (モンゴル) |                                     |
|-------|---|--|----------------------|-------------------------------------|
| 1 回目  | 親から若旦那へ手紙送る   |  | 王子から親へ手紙を送る          |                                     |
|       | 「嫁は玉のよう<br>な男の子を産ん<br>で、皆喜んでい<br>る。早く用事を済<br>まして、御帰りを<br>待っている」 | 「猿だか、鬼<br>だかわからな<br>いおぼこが生ま<br>れた。捨てよう<br>か」 | 「私は・月・日に<br>家に帰る」    | 「私が帰るまで<br>に手無し娘を遠<br>い所まで追い出<br>せ」 |
| 2 回目  | 若旦那から親へ手紙を送る  |  | ×                    |                                     |
|       | 「鬼でも、猿で<br>もよい。俺の子<br>だから帰るまで<br>大事にして、ど<br>こへも出しては<br>ならぬ」     | 「鬼や猿の子<br>は、俺の子でな<br>いから親もろと<br>も投げてしま<br>え」 |                      |                                     |

ここで、日本の話では親から息子へ、息子から親へとした2回の手紙があり、2回とも継母にすり替えられるのが、世界中に広まったグリムメルヘンの話にも共通にみられる。

しかし、モンゴルの話の場合は、王子からの1回だけの手紙があり、それが継母によつてすり替えられるという設定になっている。

手紙による便りのやり取りの特徴も地域によって、生活形式によって違っていたという事実は、この話にもこのように異なりをみせているのではないかと考えられる。

モンゴル国立中央アーカイブ・情報研究センターにおける書簡資料によると、モンゴルでは昔から文書による便りを「захидал」(zahidal 手紙)、口頭で伝える手紙の事を「аман захиа」(aman zahia、口頭の便り)と言いつけていた。モンゴルの手紙に関する歴史的習慣について検討してみると、戦争や混乱の多い昔は、秘密を守るために、書いた手紙より、口頭の手紙「аман захиа」をよく使い、「使者が裏切らない限り秘密が保護される」という言い方ができた。このよう便りのことを、「дуу бариулах」、「хэл хүргүүлэх」<sup>138</sup>と

<sup>138</sup> Монгол улсын төв архивын Лавлагаа, мэдээлэл, судалгааны төв Захидал бичгийн сан хөмрөг

名付け、手紙を有意な言葉、韻文で言い伝える習慣があった。モンゴルの「手無し娘」話には手紙を一回しか送られていないのが、このような手紙に関する民族意識の影響があるといえる。

## ② 宗教性と信仰心の特徴

以上表（4-2a）で簡単に紹介した2話の粗筋から両者の展開における共通点があるが、その中で日本とモンゴルの継子の行為と事実への反応等にも共通点と相違点がみえる。

両者の宗教性の共通点と主人公の信仰心の特徴について表（4-2c）で検討してみる。

表（4-2c）娘の行為と事実への反応

|   | 「手無し娘」（日本）   | Gargui huuhun（モンゴル）  |
|---|--|--|
| 1 | 娘は、生きるために大都会まで出て、蜜柑を盗んで食べる。  | 娘は、悔しくて海に飛び込んで死のうとする。  |
| 2 | 娘は子供と共に家を追い出され、お堂に行き、神様を拜んで、手が生えるようにお祈りする。<br>途中で六部に逢い、予言をもらう。   | 娘は子供と共に家を追い出され、Zayatai というお寺に着くが、後から殺しに来るのを恐れて、逃げていく。                            |
| 3 | 娘は、川で水を飲もうとすると、背負っていた子供が川に落ちてくる。子供を助けようとして両腕を出すと、両手が生える。<br>神様の助けに感謝する。<br>また、六部に逢い、「お寺へ行ってお世話になれ」と教えてもらう。 | 娘は海岸で子供を座らせておいて、海の水を飲もうとすると、自分が海に落ちる。びっくりして立ち上がると両手が生える。                         |
| 4 | 娘がお世話になっているお寺まで若旦那が探してきて、再会し、親子3人幸せになる。  | 妻子を探しても見つからないので、あきらめた王子が国民に食べ物を与える。娘も子を連れて王子のところに行き、王子の母親に見つかり、王子と再会し、親子3人幸せになる。 |

ここで、主人公の娘は子供を連れて家を追い出されるが、先に行ったところは、日本の場合「お堂」、モンゴルの場合「お寺」になっている。また、子供連れの女の救われるとこ

ろは「お堂」、「お寺」とした場所になっているのは、仏様によって困難から救われるといった宗教性を共通にもっているのがみられる。

しかし、この信仰心には違いがみえる。娘が、両手が生えるように神様を拜んでお祈りする場面と途中で逢う六部の登場、両手が生えたのは神様の助けだと感謝している日本人の娘の神信仰心は、お寺に行っても後から殺されるのを恐れて逃げていくモンゴル人の娘には一切みえないのが大きな相違点に考えられる。

### ③ モンゴルの話における「海」の存在について

モンゴルにない「海」(далай)がこの話に登場するが、「海」(далай)についてモンゴルの昔話、神話、叙事詩などで昔からよく語られてきた。15世紀ごろ西モンゴルのオイラド族の中で成立された英雄叙事詩である“Жангар” (『ジャンガル』) において主人公のジャンガル英雄の故郷について

Өргөн Шартаг гэдэг далай нь  
Өрүү, сөрүү хоёр урсгалтай  
Өнгөтэй бадмын гэрэл гаргаад байдаг гэнэ<sup>139</sup>

とあって、日本語の意味は

広きシャルタグという海が  
順類と逆類に流れ  
鮮やかなハスの花の光を出している

である。また口承伝の神話や昔話の始まりには、「昔々」のことを以下のような韻文で表している。

例えば、「冬と夏の訪れる理由」というモンゴル神話では、

Сүн далайг шалбааг байхад  
Сүмбэр уулыг дов байхад<sup>140</sup>  
(乳の海が泥であったとき  
スンベル山が丘であったとき)

と始まるが、ここで言う Сүн далай について“Монгол хэлний их тайлбар толь” (『モン

<sup>139</sup> Шинжлэх Ухааны Академийн Хэл Зохиолын Хүрээлэн “Монгол Жангарын тууж”,

Улаанбаатар 2008, p.13

<sup>140</sup> Д.Цэрэнсодном эмх “Монгол ардын үлгэр”, Улаанбаатар, 2015, p.39

ゴル語例解大辞典』)において、「仏教では、スンベル山が七つ(塩・酒・水・乳・ヨーグルト・油・蜜)の海で囲まれている。その一つである「乳の海」は、Сүн далай である。」という説明がある。モンゴルには「海」がないが、このように物語、神話の中で想像の「海」が登場するのが多くみえる。

しかし、この「手無し娘」の話での「海」は、モンゴル民話で語られる想像の海というより実際の海に近い登場であるのは、モンゴルらしくない舞台になっているのが注目される。

#### ④ 主人公の人物像からみえる心のありかたの違い

日本の話の娘は、両手を切られても、生きていくために一生懸命に努力して、山奥から大都会まで歩き、長者の庭の果物を口で取って食べたり、切られた手が生えるように神に祈願したりしている。これに対して、モンゴルの話の娘は、手を切られて悔しくて、自殺しようとして海に飛び込む。王子との出会いも、ただ海に流されていたところを王子に見つけられ結婚することになる。

また、両手で子供を救い上げるために手を出して両手が生える日本の娘と違って、モンゴルの話では、「自分が水のなかに落ちたら落ちた側の手が生える、びっくりしてもう反対側で水に落ちたらその手も生える」とある。微妙な描き方の差異であるが、子供救済の視点がある日本の描き方が注目される。しかし、結果的には両方も身分の高い男性に結婚し、子供を産んで幸せに暮らすという運命が共通している。

一方、継母のほうでは両者で話の最後の結末以外は、相違点として見える点がないといえる。しかし、モンゴルの他の継母説話の主人公は大抵の場合鬼か悪魔が人間に化け、継母として登場するに対し、この **Gargui huuhén** の継母は最初から最後まで人間であることが特徴的である。

#### 4.2-3. まとめ

以上日本とモンゴルにおける「手無し娘」話の比較考察を通して、両者の相違点と共通点からみえる話の特徴、地域による話の変容について以下にまとめたい。

この話で継母の運命と行方が、それぞれの地域によって違っている。モンゴルの話の場合、継母は必ず罰され、亡くなるという結末になっているが、日本の話の場合継母は、盲目になっているという結末があり、ここで日本の話の継母は、最後に生き残る。

モンゴルの話の場合は、あくまでも話の始点から終点まで継母は最悪な役を果たし、最後に殺されるという、人間としてさらに生きていけなくなっている。しかし、日本の場合は悪心の継母でも、最後に人間として生き続けるという設定になっている。

では、なぜモンゴルの話の継母は、結局殺されるのかは、注目される。つまり、モンゴル人にとっては、継母の存在はなくなるまで話が終わらない。ここで、継母と継子は必ず縁が切られる。日本の場合は、いくら虐められ、継母に殺されそうになっていた過去があっても、結局継母は生き残る。モンゴルの昔話では、継母が最後に罰せられ、殺されるという設定が多くみえ、それは、継母のことを敵、非人間的な者として扱い、その敵を打ち倒すことで幸せが戻ってくるという遊牧民の意識に関わっているのではないかと思われる。

このような相違点をみせて日本とモンゴルに伝承されている「手無し娘」の話は、それぞれの地域の影響を受けて変容しているのが見えるが、モンゴルの話の場合は、上述のように話の舞台である海の登場と継母の人物像からみれば、モンゴルの的ではないところも見られるのが注目される。

## 結章

説話は文献と口承といった伝播の形があり、同じモチーフの話がこの二つの流れで広い地域と長い期間を渡って流布していくが、必ずしも原典の話そのままの形で写されていくわけではない。

本論文で、日本とモンゴルに共通するモチーフで伝承された説話を取り上げ、両者の比較対照を通して、それぞれの説話の文献伝における伝播の展開と流布の特徴、各説話における変容の有無と両国の説話文学における位置づけについて検討したのをここでまとめておく。

まず、日本とモンゴルで仏教の本生譚としての「ルル鹿本生」と、世俗説話としての「鹿王」説話をとりあげ、それぞれの説話の構成と流れ、表現からみた比較考察を試みた。

ここでまず、表現における相違点が注目される。各地域の説話の主人公の名前、名称の表現による比較考察の結果をまとめて言えば、仏教経典の「ルル鹿本生」説話の主人公は、日本では【鹿王】、モンゴルでは【クンダ獣】といった二つの形が見られる。こうした形は、日本とモンゴルに伝わっている仏教経典の説話の原典がそれぞれ違うことを示している。つまり、表現上の比較から言えるのは、インドで誕生した仏教説話は、仏伝の北端とされるモンゴル地域まで伝承していくにはインド→チベット→モンゴルといったルートがあると一般にみられているが、この「ルル鹿本生」説話の表現を比較してみると、インド→中国→チベット→モンゴルといったルートもあることが見える。

また、この話の原典は、仏教の本生譚の話であるが、日本とモンゴルには仏教文献と世俗説話集にそれぞれ違う構成や内容で展開してきたのが注目される。この話は両国において次の内容で展開していることがみえる。

- ①川に流された男を救う鹿と命を助けてくれた鹿を貪食のため国王に教える恩知らずな男の話
- ②2頭の鹿王があり、その一頭の鹿王は懐妊している牝鹿を救うために自分を犠牲にしようとする話
- ③鹿の皮を持って来ないと子孫、家族を亡ぼすと国王に命令された狩人を救うために自分を犠牲にし、皮を布施する鹿の話



ここから、両国の世俗説話集においては①の内容で伝わっていることが確認できる。一方、日本の『三宝絵』においては②の内容で伝わり、モンゴルの“Üligerün dalai sudur”系の仏教文献において③の内容で伝わっていることが確認できる。すなわち、両国の世俗説話集においてはこの話が「貪食は身を亡ぼす」という教訓を強調しているといえる。一方、仏教説話としては、他を救うために自分を犠牲にして身を布施するという仏教の本生譚の布施行の話になっているのである。ここで注目されるのは、話の原典であるインドの Jātaka 文献の「川に流された男を救う鹿」の姿が、両国の仏教文献に「牝鹿・狩人を救う鹿」に変わっている点である。これは、モンゴルの話の場合は、中国の『賢愚経』とチベット語の伝承の影響を直接受けていると考えられる。

次の考察は、第2章における日本とモンゴルの説話文献で共通にみえる動物説話である「猿の生き肝」の比較対照である。

日本の「猿の生き肝」では、説話文献上の一番古いものとされるのは『注好選』であり、その話を『今昔物語集』が典拠にしているとされているという先行研究の結果がある。

これらの共通点と相違点について総合的に分析してみるならば、本話の原型であるインドの話では、ワニが猿を騙して心臓を取ろうとするが、猿の機転によって無事に陸上に戻るといった話である。

両国の文献説話では話の主人公である猿の登場は共通しているが、原典のインドの話のワニは日本の話では亀、『沙石集』には「虯」、『月庵醉醒記』においてくらげに変わり、モンゴルの一部の話で蛙になっているのは、インド以外の国々ではワニが生息しないためであったと考えられる。

また、日本の話には龍神信仰や竜宮の乙姫の登場が見られる一方、インドと日本の猿は森林に住んでいるが、チベットやモンゴルの猿の住処は洞窟に変化しているという、地域による特徴もみえる。

この「猿の生き肝」の話の顛末からみれば、地域によってさまざまな話が付け加えられたということがうかがえる。例えば、

- ①海月が骨を抜かれるという話が加えられ、いわゆる「起源話」となっている日本の『月庵醉醒記』の特徴
- ②利口な猿が蛙（ワニ・カメに相当）の口に自分のフンを入れて罵っている意地悪な猿に代わっているモンゴルの話
- ③猿に騙された亀は洞窟に潜んで猿を捕まえようとするが、また猿の言葉だましに

よって騙されているチベットとモンゴルの亀の話

などがあるが、ここでモンゴルとチベットの話の③にはインドの *Jātaka* の「猿の王前世物語」の要素がみえる。

また、原典のインドの話では、猿の心臓が狙われているのはチベットとモンゴルの話にそのまま伝わっているに対して、中国の仏教経典である『六度集経』においては生き肝に変わり、その影響で日本の話にも生き肝になっていると考えられるが、この生き肝を狙う理由は、日本の場合は、亀の妻が懐妊しているからそのお腹の病を治すため、あるいは安産のためとしているが、その要素は中国の『六度集経』の話にみえないのが興味深い点である。

以上、比較対照考察の結果から、日本の『月庵醉醒記』を除く説話文献の「猿の生き肝」は、インドの *Jātaka* の説話を基にした中国の仏教経典『六度集経』の話が流伝している傾向が見られ、一方モンゴルにおける「猿の生き肝」の話の典拠になる文献は、インドの *Pañcatantra* と *Nāgārjuna* (龍樹) の“*Ni-tis 'astvajantupos an abindu na-ma*” (『修身論生者養育滴』) のチベット語訳の説話に当たるものであるといえる。

続けて、第3章では、モンゴルと日本に共通して伝わっている仏教説話の本生譚として特に有名な「捨身飼虎」の説話を①流伝、②民族性の影響、③普及状況の3つの視点からみた比較考察をした。

本説話は日本へ「インド→中国→日本」、モンゴルへ「インド→チベット→モンゴル」といった流れで伝わっている。自然環境と地域による相違点としてインド・チベット・モンゴルでは森林となっているが、日本・中国では竹林になっているという点、王妃の夢に現れる小鳥がモンゴルの金光明経“*Алтангэрэл судар*”だけに〈カッコウ〉であること、子供を失った母親の悲しみを例える動物の変容などが指摘されるが、全体として民族性の影響は少ない。このような菩薩の利他行の実践を説く仏教の枠組みの中に閉ざされた話題である血生臭い捨身供養の話は、一方子供たちへ語る昔話として、利他性を強調する「ライオンと鳥」、「狼と鳥」などの動物譚の説話、寓話がアジアの国々に普及されている。

最後に、第4章では、日本とモンゴルにおける「手無し娘」話の比較考察を通して、両者の相違点と共通点からみえる宗教性、信仰心の特徴、民族文化、生活習慣による話の変容について検討した。

特に、両者において細部にわたっていくつかの相違点が見えるが、継母が罰せられ、日本の話の場合は盲目になり、モンゴルの話の継母は殺される点が注目される。

モンゴルでは継母をテーマにする昔話、物語が多くあるが、本話の継母は人間に化けている鬼・悪魔・悪天であり、話の最後に継子によって殺されることで、継子が幸せになるという設定が一般的である。しかし、この **Gargui huuhēn** には、こうした悪魔のような非人間的な継母が登場しないことと、モンゴルの一般の昔話で語られる想像の海ではなく、実際の海の話などモンゴルのではない舞台と人物像が見えるのが特徴的である。

以上、本論文では日本とモンゴルの仏教の布施譚の説話・世俗説話の動物説話・継母説話として共通のモチーフで伝承されている説話の中から一話ずつの話を取り上げて、比較対照考察を行なった。

取り扱った説話の原典となるのはインドの仏教の本生話や寓話集の **Pañcatantra** であるが、日本の説話の場合は漢訳仏典を、モンゴルの場合はチベットの仏典を通してそれぞれの説話文学に受け入れているのがわかる。しかし、より詳細に見ると、原典の話が伝承のルートである中国やチベットの影響を受けながら、終点である日本とモンゴルに定着する過程で多少の変容を見せながら伝わってきたことがわかった。

これまでインドのジャータカ等に溯源する説話の研究では、インド・中国・日本の三国の資料による比較研究がもっぱらであったが、チベット・モンゴルの説話資料をも射程に入れて研究することは、より多角的視点をもたらすものであり、このことは日本の比較説話研究において大きな意義を有するものと思われる。また将来、日本での研究成果をモンゴルにおいて発表・報告する機会をもちたいと考えるが、モンゴルの説話研究においても新たな視点からの研究として学会に寄与することができると考える。

さらに、それぞれの説話の翻訳上の比較研究と説話文献史に関する比較考察をこれからの研究課題にしたい。

## 謝辞

本論文を完成させるにあたり、数多くの方々のご指導、ご協力をいただいている。

特に、私を弟子として暖かく迎えてくださり、仏教文学・日本中世文学の読解、注釈、翻刻から研究者としての姿勢や研究方法、学術的な分析の仕方までご指導していただいた恩師・指導教官柴佳世乃先生には感謝を言いきれないほどお世話になった。また、全体研究発表会から論文審査発表まで私の研究状況をみていただき、貴重なアドバイスとご指導をくださってきた副指導教官の中川裕先生、兼岡理恵先生、大原祐治先生にも心より感謝を申し上げたい。

また、修士課程から現在に至るまで、仏教説話に関する基礎知識やチベット語およびサンスクリット語の入門から読解、翻訳まで教示していただき、仏教説話資料の位置付けや研究方法等について文学学者としての貴重な助言と示唆をくださった恩師、駒沢女子大学の教授、安藤嘉則先生にはいくら感謝しても足りないように思う。この先生方のご指導とご教示がなくしては、本論文の作成はできなかったであろう。

また、説話資料収集の件で、特にモンゴル大蔵經の説話資料収集に協力してくださった、モンゴル国立中央図書館の Ch.Gansukh さん、モンゴル中央 Gandan tegchinlen 寺の僧 L.Tsendkhorol さんとモンゴル歴史学者 J.Tsetsegmaa さんにも謝辞を送りたい。

それから、モンゴル研究会の学会で発表をする貴重な機会を与えてくださった千葉大学の児玉先生、そこで説話文学研究方法とモンゴルの説話資料について貴重なアドバイスと情報をくださった中国の北京大学の Sarangerel 先生と 内蒙古大学の Taya 先生、Bayarmend 先生にも厚く感謝したい。

在学中にいつも支えと励ましをくださった千葉大学院生の先輩と後輩の皆様にも心より感謝を申し上げたい。

最後に、いつも支えてくれる家族に心から感謝したい。

2018年6月25日

ツェデウ ヒシゲジャルガル

## 参考文献一覧

### 序章

・日本語文献

1. 名著普及会編 ”The introduction to the biblioteca buddhica”『仏教文庫文献解題』仏教学術研究所、1978
2. 伊藤清司『東アジア民間説話の比較研究』桜楓社、1978
3. 国文学研究資料館参考室編『日本の説話：ハナシの世界』国文学研究資料館、1980
4. 関敬吾『日本昔話大成』第5巻、角川書店、1984
5. 石波洋『説話と説話文学』近代文芸社、1991
6. 西沢正史編『日本古典文学研究史大辞典』勉誠社、1997
7. 小峯和明『説話の言説——中世の表現と歴史叙述』森話社、2002
8. 繁原央『日中説話の比較研究』汲古書院、2004
9. 説話と説話文学の会編『説話集論』第18集、清文堂、2010
10. 山口周子『〈仏の物語〉の伝承と変容——草原の国と日出ずる国へ』京都大学学術、2出版会、2013
11. 説話文学会『説話から世界をどう解き明かすのか』笠間書院、2013
12. 立石展大『日中民間説話の比較研究』汲古書院、2013
13. 廣田收『入門説話比較の方法論』勉誠出版、2014
14. 田中克彦「Subhasitaratnanidhi のモンゴル訳について：モンゴル文献史におけるその位置」、『一橋論叢』45巻6号、1961年6月
15. 『国文学 解釈と鑑賞——説話文学の視界——』11号、至文堂、1984年9月
16. 金岡秀郎「モンゴル語訳『賢愚経』について——その成立に関する基礎的研究」『モンゴル研究』18号、1979 - 1988年3月
17. 浅見和彦「説話文学研究の動向」、『今昔物語集宇治拾遺物語必携』33号、1988年1月
18. 日向一雅、渡浩一、神鷹徳治「仏教説話の比較研究——日本、韓国、中国を中心に——」、『明治大学人文科学研究紀要』59号、2006年3月

・モンゴル語文献

19. CE.Damdinsürüng “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai”,

Улаанбаатар, 1959

20. Б.Ширэндэв, Ш.Нацагдорж “БНМАУын түүх”, Улаанбаатар, 1966
  21. Ц.Дамдинсүрэн, Д.Цэнд “Монголын уран зохиолын тойм”, Улаанбаатар, 1976
  22. МШУА “Монголын уран зохиолын тойм II”, Улаанбаатар, 1977
  23. Д.Цэрэнсодном “Монголын уран зохиол 13-20 зуун”, Улаанбаатар, 1987
  24. Д.Цэрэнсодном “Монгол ардын домог үлгэр”, Улаанбаатар, 1989
  25. Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав “Сажа Бандид Гунгаажалцаны зохиол “Erdeniin san Subhashid”, Улаанбаатар, 1990
  26. Д.Цэрэнсодном “Монголын бурханы шашны уран зохиол”, Улаанбаатар, 2007
  27. Ж.Цэцэгмаа “Монгол оронд Жамсрангийн Цэвээний өрнүүлсэн эрдэм шинжилгээ, соён гэгээрүүлэлт нийгэм улс төрийн үйл ажиллагаа 1911-1931”, Улаанбаатар, 2008
  28. С.Даваабаяр “Хамба номун хан Агваанхайдавын зохиолын эмхтгэл”, Улаанбаатар, 2009
- ・ロシア語文献
29. Г.Я.Рамстедт “О Монгольских былинах, ТТКОНРГО”, Иркутск, 1902
  30. Российская академия наук “Классики отечественного востоковедения”, Москва, 2001
  31. Б.Я.Владимирцов “Работы по литературе монгольских народов”, Восточная литература, Москва, 2003

## 第1章

・日本語文献

32. 岩野眞雄編『国訳一切経釋経 本縁部 6』大東出版社、1932
33. 岩野眞雄編『国訳一切経 釋経論部 1』大東出版社、1935
34. 三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注『宇治遺物語 古本説話集』新日本古典文学大系 42、岩波書店、1990
35. 瀧龍祥、高原信一訳『Jātaka・マーラー〈本生談の花鬘〉』講談社、1990
36. 三木紀人『今昔物語集宇治拾遺物語必携』学灯社、1993
37. 馬淵和夫・小泉弘・今野達校注『三宝絵』新日本古典文学大系 31、岩波書店、1997

38. 岩野眞雄編『国訳一切経印度撰述部 本縁部 7』大東出版社、1997
39. 今野達校注『今昔物語集』新日本古典文学大系 33、岩波書店、1999
40. 篠田知和基『世界動物神話』八坂書房、2008
41. 『国文学 解釈と教材の研究——古典文学動物誌——』第 39 卷第 12 号、1956 年 10 月
42. 田中克彦「Subhasitaratnanidhi のモンゴル訳について：モンゴル文献史におけるその位置」、『一橋論叢』45 卷 6 号、1961 年 6 月
43. 三谷真澄、「Mdzangs blun (『賢愚経』) 関する一考察」印度学仏教学研究第 45 卷 2 号、1997 年 2 月
44. 三谷真澄「Mdzangs blun (『賢愚経』) に関する考察」、『印度学仏教学研究』45 卷 2 号、1997 年 2 月
45. 馬淵和夫・小泉弘・今野達校注『三宝絵』新日本古典文学大系 31、岩波書店、1997  
・モンゴル語文献
46. Ts.Damdinsuren emh “Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg”, Ulanbator 1961
47. Redigit B.Rincen “Oirat version of Damamūkonāmasūtra” (Corpus scriptorum mongolorum : Instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum publicae Populi Mongolici, Tomus. X VI, ШУАХ 1970
48. Д.Цэрэнсодном “Монгол ардын домог үлгэр”, Улаанбаатар, 1989
49. Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав “Сажа Бандид Гунгаажалцаны зохиол “Erdeniin san Subhashid”, Улаанбаатар, 1990
50. D.Burnee, D.Enkhtur “Ulger-un dalai”, Ulaanbaatar, 2013

## 第 2 章

・日本語文献

51. 伊藤清司『東アジア民間説話の比較研究』桜楓社、1978
52. 関敬吾監修『アジアの民話 12 パンチャタントラ』大日本会画、1980
53. 市古貞次編『日本文学大年表』桜楓社、1986
54. 大林太良・他編『民間説話の研究』同朋舎、1987
55. 下川博訳『パンチャタントラ物語』筑摩書房、1996
56. 馬淵和夫他校注『三宝絵・注好選』新日本古典文学大系 31、1997

57. 金子民雄訳『チベットの民話』白水社、1999 (W.F.O'Connor “Folk Tales From Tibet”, London, 1906)
58. 小峰和明『説話の言説——中世の表現と歴史叙述』森話社、2002
59. 服部幸造他編『月庵酔醒記』三弥井書店、2008
60. 立石展大『日中民間説話の比較研究』汲古書院、2013
- ・モンゴル語文献
61. Ts.Damdinsuren emh “Ardīg tejēhui Rashīyan-u dusul nert shashdarīn tailbar Chandmanīn chimeg”, Ulanbator, 1961
62. МШУА “Монголын уран зохиолын тойм II”, Улаанбаатар, 1977
63. Д.Цэрэнсодном эмх “Монгол ардын үлгэр”, Улаанбаатар, 2015
- ・ロシア語文献
64. Б.Я.Владимирцов “Монгольский сборник рассказов из Rañcatantra”, Москва, 1921

### 第3章

・日本語文献

65. 岩野眞雄編『菩薩本生鬘論』大東出版社、1929
66. 泉芳環譚『新譚金光明經』大雄閣、1933
67. 金光秀友『金光明經の研究』大東出版社、1980
68. 瀧龍祥、高原信一訳『Jātaka・マーラー〈本生談の花鬘〉』講談社、1990
69. 岩野眞雄編『国訳一切経印度撰述部 本縁部 7』大東出版社、1997
70. 今野達、小原弘校注『三宝絵』岩波書店、1997
71. 中村史『三宝絵本生譚の原型と展開』汲古書院、2008
72. 星田公一「今昔物語集の山蔭中納言説語の形成と影響」、『同志社国文学』、同志社大学、9号、1974年2月
73. 金岡秀郎「モンゴル語訳『賢愚経』について——その成立に関する基礎的研究」『モンゴル研究』18号、1979 - 1988年3月
74. 三谷真澄「Mdzangs blun (『賢愚経』) に関する考察」、『印度学仏教学研究』45巻2号、1997年2月

・モンゴル語文献



75. CE.Damdinsürüng “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai”  
Ulaanbaatar, 1959
76. Redigit B.Rincen “Oirat version of Damamūkonāmasūtra” (Corpus scriptorum  
mongolorum : Instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum publicae  
Populi Mongolici, Tomus. X VI, ШУАХ, 1970
77. МШУА “Монголын уран зохиолын тойм II”, Улаанбаатар, 1977
78. Ed.by Erkhembayar “Üligerün dalai sudur”, Öbör Monggöl-un Arad-un Keblel-un  
Qoriy-a, 2007
79. Burnee Dorjsuren “Damamukonamasutra In Mongolia”, Taipei, 2008
80. С.Гантөмөр орч “Алтангэрэл судар”, Улаанбаатар, 2009
81. D.Burnee, D.Enkhtur “Ulger-un dalai”, Ulaanbaatar, 2013

#### 第4章

・日本語文献

82. 関敬吾『こぶとり爺さん・かちかち山』岩波書店、1956
83. 関敬吾『日本昔話大成』第5巻、角川書店、1978
84. 国文学研究資料館参考室編『日本の説話：ハナシの世界』国文学研究資料館、1980
85. 稲田浩二『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス』同朋舎、1988
86. 池上洵一『今昔物語集の研究』和泉書院、2008
87. 立石展大『日中民間説話の比較研究』汲古書院、2013
88. 渡邊竹二郎「説話文学の継母談について」、『国文学研究』9-10号、1954年3月
89. 池田恭子「継子物語研究：継子物語の誕生に関する一仮説」、『日本文学』40号、1973  
年11月
90. 星田公一「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」、『同志社国文学』9号、1974  
年2月
91. 星田公一「山蔭中納言説話の成立：『長谷寺観音験記』の場合」、『同志社国文学』11  
号、1976年2月
92. 千野美和子「日本昔話にみる精神性」、『仁愛大学研究紀要』6号、2007

・モンゴル語文献

93. МШУА “Монголын уран зохиолын тойм II”, Улаанбаатар, 1977

94. Д.Цэрэнсодном “Монгол ардын домог үлгэр”, Улаанбаатар, 1989
95. Шинжлэх Ухааны Академийн Хэл Зохиолын Хүрээлэн “Монгол Жангарын тууж”, Улаанбаатар 2008
96. Д.Цэрэнсодном эмх “Монгол ардын үлгэр” Улаанбаатар 2015
97. А.Мөнхцэцэг “Оюу чихт хан хөвгүүний тууж оршив” зохиолын бичвэрийн судалгаа, 3162, Улаанбаатар, 2015,10

### 辞書類

1. Б.В.Семичов, и др “Краткий тибетско-русский словарь”, Москва, 1963
2. Я.Цэвэл “Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь”, Улаанбаатар, 1966
3. 長野嘗一編『説話文学辞典』東京堂出版、1969
4. 茂原曇来編『梵和大辞典』鈴木学術財団、1974
5. Sarat Chandra Das “A Tibetan-English dictionary”, Motilal Banarsidass, 1979
6. 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店、1985
7. Sir Monier Monier-William “A Sanskrit-English dictionary”, Motilal Banarsidass, 1986
8. 石田瑞磨『例文仏教語大辞典』小学館、1997
9. 西沢正史編『日本古典文学研究史大辞典』勉誠社、1997
10. 鎌田茂雄・河村孝照編『大蔵経全解説大辞典』雄山閣出版、1998
11. 大曾根章介ほか『日本古典文学大事典』明治書院、1998
12. 中村元『広説仏教語大辞典』東京書籍、2001
13. Д.Бүрнээ, Д.Энхтөр “Төвд-Монгол толь”, Улаанбаатар, 2013
14. Шинжлэх Ухааны Академийн Хэл Зохиолын Хүрээлэн “Монгол хэлний их тайлбар толь”, Улаанбаатар, 2015
15. 末木文美士監訳『オックスフォード仏教辞典』朝倉誠造、2016

## 一次資料一覧

### 日本とモンゴルに共通に伝わった「鹿王」説話の一次資料

#### 日本

1. 「鹿王」  
馬淵和夫・小泉弘・今野達校注『三宝絵』新日本古典文学大系 31、岩波書店 1997、  
上巻 9
2. 「身の色九色の鹿、山に住み河の辺りに出でて人を助けたる語」  
今野達校注『今昔物語集』新日本古典文学大系 33、岩波書店 1999、巻第 5 の第  
18
3. 「五色鹿事」  
三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注『宇治拾遺物語 古本説話集』新  
日本古典文学大系 42、岩波書店 1990、上 92

#### モンゴル

4. Gūnda görögesün bey-e-ben öggügsen-ü jüyil  
ed.by Lokesh Chandra and Raghu Vira, Mongolian Kanjur 1973-1979,  
Vol.90,“Üligerün dalai sudur”
5. Arātu gūnda beyēn ögligü ögöqsen bölöq  
Redigit B.Rincen “Oirat version of Damamūkonāmasūtra” (Corpus scriptorum  
mongolorum : Instituti Linguae et Litterarum Akademiae Scientiarum  
publicae Populi Mongolici, Tomus. X VI, ШУАХ 1970, bölöq 4, 58b-61b
6. 182 dugaar bulgiin tailbar  
Ц.Дамдинсүрэн, Ж.Дүгэржав “Сажа Бандид Гунгаажалцаны зохиол  
“Erdeniin san Subhashid”, Улаанбаатар, 1990, p.156—157

#### インド

7. Rurujataka  
ed by V.Fausboll “The Jātaka” Vol IV, London 1963, pp.255-262
8. Rurujataka  
ed by H.Kern “The Jātaka-mālā” Harvard Oriental Series, Massachusetts  
1943, pp.167-175

## 中国

9. 『六度集経』 (T3 no.152,12b29-13a04)
10. 『六度集経』 (T3 no.152,32c11-33b23)
11. 『賢愚経』 (T4 no.202,366a17-367a18)
12. 『九色鹿経』 (T3 no.181,452b27-453c29)
13. 『菩薩本縁経』 (T3 no.153,66c02-68b25)
14. 『法苑珠林』 (T53 no.2122,666b23-667a01)
15. 『大智度論』 (T25 no.1509,178b06-0178c20)

## チベット

16. Gcan gzan kun tas lus sibyan pa byas pa'i se'u  
“Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo” zi ling,2007
17. “legs par bshad pa rin po che'i gter”

## 日本とモンゴルに共通に伝わった「猿の生き胆」説話の一次資料

### 日本

1. 「猿は退きて海底の菓を嘲ける」  
『注好選』巻下第13話 (馬淵和夫・小泉弘・今野達校注『三宝絵 注好選』新  
日本古典文学大系 31、岩波書店 1997)
2. 「龜、為猿被謀語」  
今野達校注『今昔物語集』新日本古典文学大系 33、岩波書店 1999、巻第5の第  
25話
3. 「蚪と猿の生き肝」  
渡邊綱也校注『沙石集』日本古典文学大系 85、岩波書店 1969、巻第5の本8
4. 『月庵醉醒記』〔100-37〕  
服部幸造他編『月庵醉醒記』三弥井書店 2008、p.307

### モンゴル

5. Adiltgaval yast melhii sarmagchnīg hūrsan met khemēsen ni  
Ts.Damdinsuren emh “Ardīg tejēhui Rashiyan-u dusul nert shashdarīn  
tailbar Chandmanīn chimeg”, Ulanbator 1961
6. Ert urid negen tsagtu menehei sarmagchin qoyar nōqōr bolugsan hemehu anu  
Б.Я.Владимирцов “Монгольский сборник рассказов из Rañcatantra” 1921

7. Мэлхий сармагчин хоёр

Д.Цэрэнсодном эмх “Монгол ардын үлгэр”, Улаанбаатар, 2015

8. Melhii bich hoyoriin nuhurlusun tuhai ulger

“Erdeniin chimeg” (Ts.Damdinsuren “Mongol uran jokiyal\_un degeji jagun bilig orusibai” Улаанбаатар, 1959)

インド

9. 第4巻主話

Kale,M.R. Pañcatantra of Viṣṇuśarman Delhi-Varanashi-Patna.2nd ed.1969

10. 「猿の王前世物語」

中村元監修・補注『Jātaka 全集 1』春秋社 1984

11. 「ワニ前世物語」

中村元監修・補注『Jātaka 全集 3』春秋社 2008

日本とモンゴルに共通に伝わった「捨身飼虎」説話の一次資料

日本

1. 「薩埵王子」

馬淵和夫・小泉弘・今野達校注『三宝絵』新日本古典文学大系 31、岩波書店 1997

モンゴル

2. Bar-dor bey-ben öggügsen neretu horin jiragu-dugar bölöq

“Qutug-tu degedu altan gerel-tu erhetu sudur nugūd-un hagan”(ed.by Lokesh Chandra and Raghu Vira, Mongolian Kanjur 1973-1979)

3. Yeke amitan neretu qan köbegün ölöqčün bars-tur beyeben öggügsen jüyil anu

ed.by Lokesh Chandra and Raghu Vira, Mongolian Kanjur 1973-1979, Vol.90,“Üligerün dalai sudur”

4. Eke amitan ölöqčün bars-tu beye ögön üyiledügsen bölöq

Redigit B.Rincen “Oirat version of Damamūkonāmasūtra” (Corpus scriptorum mongolorum : Instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum publicae Populi Mongolici, Tomus. X VI, IIIYAX 1970

インド

5. Vyāghrī-jātakam

”The Jātaka-mālā” (ed by H.Kern,Havard Oriental Series,Masachusetts  
1943,pp167-175)

6. Vyāghrī-parivarta

“Suvarṇaprabhāsottamasūtra” Ch.18,pp.201-240

中国

7. 『金光明経』 T16 no.663,353c22-356c21

8. 『菩薩本生鬘論』 T3.no.160,332b23-333b9

9. 『賢愚経』 T4 no.202,352b19-353b16

チベット

10. Stag-mo la lus yoṅs-su btan-ba

“'phags-pa gser 'od dam-pa mdo-sde'i dbang po'i rgyal-po'i shes-bya-ba  
theg-pa chen-po'i mdo” (ed.by Daisetz T.Suzuki,The Tibetan Tripitaka,Otani  
univ.1956)

11. Sem's can chen bo's stag-mo-la lus s'byin ba'i leuyo

“Mdzangs blun zhes bya ba'i mdo”

日本とモンゴルに共通に伝わった「手無し娘」説話の一次資料

日本

1. 「てっきり姉さま」(手無し娘)

関敬吾『日本昔話大成』第5巻、角川書店、1978

モンゴル

2. Gargui huuhēn

Д.Цэрэнсодном “Монгол ардын үлгэр”, Улаанбаатар, 2015